



Title	「武漢ロックダウン」における社会関係の形成と変容 —近隣住民間の互助行為に注目して—
Author(s)	Chen, Ziyun
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105982
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博 士 論 文

「武漢ロックダウン」における社会関係の 形成と変容

—近隣住民間の互助行為に注目して—

2026 年 3 月

大阪大学大学院人間科学研究科

未来共生学講座共生社会論分野

(CHEN ZIYUN)

「武漢ロックダウン」における社会関係の形成と変容

—近隣住民間の互助行為に注目して—

CHEN ZIYUN

Social Relationship Formation and Transformation under the Wuhan Lockdown Insights from Neighbor-to-Neighbor Mutual Aid

CHEN ZIYUN

論文要旨

本研究は、2020年1月23日から4月8日まで実施された「武漢ロックダウン」を対象に、近隣住民間の互助行為を通じた社会関係の形成と変容プロセスを明らかにすることを目的とする。リサーチ・クエスションは、(1) ロックダウン下で住民間の互助行為はいかなる契機・メカニズムによって発生し、どのように展開したのか、(2) その互助行為が既存の社会関係や地域ネットワークの再編にどのような影響を及ぼしたのか、という二点である。分析枠組みとして、災害社会学の議論を踏まえつつ、社会的交換理論とソーシャル・キャピタル理論を相互補完的に用いた。

方法としては、武漢市の住民36名を対象とする二回の半構造化インタビュー調査(2021年・2023~2024年)と文献調査を行い、互助行為の具体的な実践と語りを質的に分析した。その結果、ロックダウン期には、公的支援の不足と都市機能の停止を背景として、微信(WeChat)の小区グループなどオンライン空間を媒介に、物質的交換(普通物資・特殊物資の團購、呼びかけ型の贈与、物々交換箱など)と非物質的交換(感染情報や購買ルートの共有、精神的サポート、災害弱者への配慮)が多様な形で展開していたことが明らかになった。これらの多くは、直接的な返礼を求めない遅延的互酬性にもとづく「一般交換」として機能し、明確な対等交換である「交渉的交換」や一対一の「相互交換」は相対的に限定的であった。

社会的交換理論の視点からは、とりわけ住民が共同で資源を出し合う「生産的交換」と、一般交換としての物質的・非物質的なやりとりが、喜び・安堵・感謝・誇りといったポジティブな情動を生み出し、その蓄積がグループへのコミットメントと「集団的信頼」を強めていく過程が確認された。また、感染症への恐怖や将来不安の共有を通じて、互いの状況に「共感」することに基づく関係(共感縁)が形成され、これが互助への再参加を促す要因として働いていた。

さらに、ソーシャル・キャピタルの視点からは、こうした反復的な交換実践の中で、「困っている人を優先する」「不当な値上げをしない」といった創発的規範が形成され、チャットのルールや團購の運営方針として可視化されることで、「ソフトな制度」として機能し始めていたことが示された。団長やボランティア、社区職員、販売者といったゲートキーパーが、住民と行政・市場とのあいだを橋渡しすることで、多層的なネットワークが組み上がり、結束型・橋渡し型・連結型ソーシャル・キャピタルが短期間に生成されていった。

ロックダウン解除後には、多くの関係が希薄化・消滅する一方で、慢性疾患や子育て、ペット飼育など「属性」の共有を通じて形成された関係や、團購が小売店へと転換した事例のように、互助が新たな機能を獲得した関係は持続しやすいことが確認された。これは、危機下で一時的に増大したソーシャル・キャピタルがどのような条件のもとで選別され、日常の地域社会に組み込まれていくのかを示す知見である。

以上の分析から、本研究は、第一に、互助行為を「交換モード」の違いに着目して整理することで、危機状況における住民の自発的実践を社会的交換として捉え直した。第二に、ミクロな交換過程から、メゾレベルの中間的構造(集団的信頼・創発的規範・多層的ネットワーク)を経て、マクロなソーシャル・キャピタルへと至る連関を描き出し、従来しばしば分断的に論じられてきたSET理論とSC理論を統合的に位置づけた。第三に、情報共有や精神的サポート、災害弱者への配慮といった非物質的な交換を、物資配布の付随現象ではなく、信頼と連帯を生み出す中核的なプロセスとして位置づけた点に理論的意義がある。また、デジタル・デバйдやプライバシーのリスクといった負の側面も踏まえつつ、行政による自発的互助の支援と位置づけ方について、災害レジリエンス政策への実践的示唆を提示する。

キーワード ロックダウン、ソーシャル・キャピタル、社会的交換

Abstract

This dissertation investigates how social relationships were formed and transformed through neighbor-to-neighbor mutual aid during the Wuhan lockdown from 23 January to 8 April 2020. It addresses two main research questions: (1) through what triggers and mechanisms did mutual aid among residents emerge and develop under the lockdown, and (2) how did these practices reshape existing social relationships and local networks. Drawing on disaster sociology, the study integrates social exchange theory and social capital theory as a complementary analytical framework.

Empirically, the research is based on two rounds of semi-structured interviews and documentary analysis. In total, 36 residents of Wuhan with diverse ages, residential locations, and social positions were interviewed in 2021 and 2023–2024. Qualitative analysis of their narratives reveals that, against the backdrop of insufficient public support and the suspension of urban functions, online spaces such as community WeChat groups became central arenas for mutual aid. Various forms of material exchange (group purchases of ordinary and special goods, ad hoc donations in response to calls for help, “barter boxes”) and non-material exchange (sharing infection information and purchasing routes, emotional support, and care for vulnerable or digitally excluded residents) proliferated. Most of these practices took the form of generalized exchange with delayed reciprocity rather than direct, dyadic reciprocity or explicit negotiated exchange.

From the perspective of social exchange theory, the analysis shows that productive exchanges—where residents jointly contributed resources—and generalized exchanges of both material and non-material resources generated positive emotions such as relief, gratitude, and pride. The accumulation of these emotions strengthened commitment to the group and fostered “collective trust.” At the same time, the shared experience of fear of infection and uncertainty about the future led to the emergence of empathic ties among residents, which in turn encouraged repeated participation in mutual aid.

From the perspective of social capital, the repeated practice of exchange gave rise to emergent norms such as prioritizing those in greater need and refraining from price gouging. Once verbalized in chat rules and group guidelines, these norms began to function as “soft institutions” regulating behavior in the community. Group leaders, volunteers, neighborhood committee staff, and vendors acted as gatekeepers linking residents to administrative and market actors, thereby constructing multi-layered networks. Through these processes, bonding, bridging, and linking social capital were rapidly generated at the meso level.

After the lockdown was lifted, many ties weakened or disappeared. However, relationships rooted in shared attributes—such as chronic illness, childrearing, or pet ownership—and those in which mutual aid evolved into new functions, exemplified by the transformation of a group-purchase initiative into a small retail shop, were more likely to persist. These findings illuminate how the large amount of social capital produced during a crisis is selectively retained and incorporated into the everyday life of local communities.

In theoretical terms, the study first reconceptualizes residents’ spontaneous practices under extreme conditions as social exchanges by differentiating modes of exchange (productive, generalized, negotiated, and reciprocal). Second, it traces the linkage from micro-level exchange processes to meso-level intermediate structures—collective trust, emergent norms, and multi-layered networks—and further to macro-level social capital, thereby providing an integrated perspective that bridges social exchange theory and social capital theory. Third, it highlights non-material exchanges—information sharing, emotional support, and care for disaster-vulnerable groups—not as peripheral phenomena but as central mechanisms for generating trust and solidarity. Practically, while acknowledging issues such as the digital divide and privacy risks in online mutual aid, the study offers policy implications for how public authorities might support residents’ self-organized initiatives as a complement to formal assistance and enhance community resilience in future crises.

Keywords: Lockdown, Social capital, Social exchange .

目録

第一章：はじめに	8
1 研究背景	8
2 研究動機	8
3 課題設定と論文構成	9
第二章：先行研究と理論的枠組み	10
1.新型コロナウイルス感染症によるパンデミック	10
1.1 新型コロナウイルス感染症とは	10
1.2 パンデミック災害の特性	10
1.2.1 災害の分類と都市機能制限	10
1.2.2 パンデミックにおける社会関係	11
1.2.3 CBRNE 災害がもたらす影響	11
1.3 ロックダウンの概要	12
1.3.1 ロックダウンとは	12
1.3.2 中国におけるロックダウン	13
1.3.3 ロックダウンの有効性	14
1.4 ロックダウンの諸課題	14
1.4.1 日常生活への影響	14
1.4.2 メンタルヘルスへの影響	15
1.4.3 小括	16
2 大規模災害時における社会関係	16
2.1 リスク社会の視点から見るパンデミック	16
2.1.1 再帰的近代にける災害	16
2.1.2 専門的知識を要する CBRNE 災害	16
2.1.3 リスクの個人化	17
2.2 災害社会学の視点	17
2.2.1 災害ユートピア	17
2.2.2 創発規範と災害下位文化	19
2.2.3 支援主体における創発	20
2.2.4 住民による創発的支援	21
2.2.5 公共性と連帯の再生	21
2.3 小括：災害社会学における本研究の位置づけ	22
3.互助行為に関する理論的視点	23
3.1 社会的交換理論の源流と発展	24
3.1.1 功利主義経済学	24
3.1.2 機能主義人類学	25
3.1.3 行動主義心理学	25
3.1.4 ミクロ視点からマクロ視点へ	26
3.2 SET 理論の主要展開	27
3.2.1 互酬性	27
3.2.2 限定交換と一般交換	28
3.2.3 社会的関係へ及ぼす影響	28
3.3 SET 理論の限界と新しい視点	29
3.3.1 SET 理論の限界	29
3.3.2 新しい視点：Lawler の交換モード	29
3.3.3 情動の社会的交換理論	30
3.4 ソーシャル・キャピタル理論の起源と発展	31

3.4.1 概念の提起：ブルデューとコールマン	31
3.4.2 第一の立場：コールマンとパットナム	32
3.4.3 第二の立場：グラノベッターとリン	33
3.3.4 第三の立場：オストロム	34
3.4.5 小括	35
3.5SC の災害時の効果	35
4.本研究の理論的枠組み	37
4.1SET 理論と SC 理論の相互補完性	37
4.1.1SC 理論の強みと限界	37
4.1.2SET 理論の補足	37
4.1.3 信頼という概念の接続	38
4.2 相互強化の循環モデル	38
4.3 操作的定義	39
4.4 小括	40
第三章：調査の詳細	41
1. 調査の背景	41
1.1 武漢市の概要	41
1.2 中国都市部の事情	42
1.2.1 中国都市部の行政組織と居住構造	42
1.2.2 グリッド・マネジメント	43
1.2.3 物理的な壁：「小区」という閉鎖空間	43
1.3 武漢におけるロックダウン施策のまとめ	43
1.3.1 第3ステージ（医療資源の拡充）	46
1.3.2 第4ステージ（社区封控の徹底）	47
1.3.3 第5ステージ（収束への兆し）	47
1.3.4 第6ステージ（ロックダウン解除）	47
1.3.5 ロックダウンと社区封鎖の有効性について	47
1.4 ロックダウン下の支援供給構造：公的支援と民間共助	48
1.4.1 公的支援	48
1.4.2 公助の限界と「民間共助」の役割	49
2 調査の概要	50
2.1 第1回調査：災害弱者の実態と互助の萌芽（2021年）	50
2.1.1 調査の目的と位置づけ	50
2.1.2 調査対象と方法	50
2.1.3 データの扱い	51
2.2 第1回調査から第2回調査へ	51
2.3 第2回調査：社会交換と関係変容の解明（2023年～2024年）	52
2.3.1 調査目的と位置づけ	52
2.3.2 調査対象の拡大と属性	52
2.3.3 分析手法	53
3 倫理的配慮	54
第四章 調査結果：住民が直面した困難と公的支援の不足	55
1 住民が直面した困難	57
1.1 感染リスクによるストレス	57
1.2 都市機能および移動の制限による影響	58
1.2.1 都市機能の制限による影響	58
1.2.2 移動の自由への制限による影響	59
1.3 マスメディアに関わる影響	60

1.3.1 情報の非対称性と認知的コスト	60
1.3.2 不確実性とマスメディア依存	61
1.3.3 代理トラウマと感情的消耗	62
2 公的支援の機能不全と「制度的空白」	62
2.1 公的支援の限界と資源配分の遅滞	62
2.2 支援の不均衡と「不公平感」の発生	62
2.3 「民間互助（共助）」への転換：制度的空白を埋める実践	63
3. 小括：社会的交換の「駆動場」としてのロックダウン	63
第五章 調査結果：互助行為の実態	65
1 「武漢ロックダウン」における物資の保障	66
1.1 事前備蓄	66
1.2 團購	67
1.2.1 萌芽的な團購：M2 さんの事例	67
1.2.2 小区内における制度化：J3 さんの事例	67
1.2.3 團購の問題点	68
2 ロックダウンの時期区分	69
2.1 初期（1 月 23 日～2 月上旬）	69
2.2 中期（2 月上旬～3 月中旬）	70
2.3 後期（3 月中旬～4 月 8 日）	70
3 物質的交換の展開	71
3.1 初期：家族内支援	71
3.2 中期：近隣住民間物資の贈与の活発	71
3.2.1 物々交換箱	72
3.2.2 呼びかけ型	72
3.3 後期：特殊物資の交換	73
3.4 小括	74
4 非物質的交換	75
4.1 情報共有：感染情報や購買ルートの情報交換	76
4.2 精神的サポート	76
4.2.1 個人間の支え	76
4.2.2 グループの支え	77
4.3 災害弱者への配慮	79
4.3.1 デジタル弱者の対応	79
4.3.2 資源の優先配分とサポート	80
4.4 小括	81
5 総合的な事例	81
5.1 「團購」から「小売店」へ：J3 さんの事例	81
5.1.1 團購の成立	82
5.1.2 コミュニティ・スペースとしての小売店	83
5.1.3 習慣の定着と経済的合理性	83
5.2 ペット救助グループの形成：A3 さんと E2 さんの事例	84
5.2.1 購買から救助へ	84
5.2.2 「留守宅」への介入とケアの実践	85
5.2.3 封鎖解除後の展開と持続性	86
第六章 考察：社会的交換としての互助行為	87
1 互助行為における報酬とコスト	87
1.1 初期における物質的交換の抑制	88
1.2 中期からの物質的交換の活発化	88

2 互助行為の交換のモード	89
2.1 「生産的交換」としての團購	90
2.2 「一般交換」としての物質的資源的交換	90
2.2.1 SNS 上の呼びかけ型交換と遅延的互酬性	91
2.2.2 公共財としての「物々交換箱」とリレー性	92
2.3 「一般交換」としての非物質的資源の交換	93
2.3.1 情報の共有と物資の保証	93
2.3.2 「感情」資源の共有と連帯の醸成	94
2.4 「交渉的交換」としての売買行為	94
2.4.1 利己的な「交渉的交換」	95
2.4.2 利他的な「交渉的交換」	95
2.4.3 災害時におけるお金の意味の変容	96
2.5 「相互交換」とその限定性	97
2.5.1 具体的な事例：近隣関係の深化	97
2.5.2 相互交換が抑制された要因：機能主義的解釈と遅延的互酬性	98
2.6 小括：連帯の萌芽	98
3 交換の成立	98
3.1 駆動場の構造	98
3.1.1 公助の限界という「プッシュ要因」	99
3.1.2 オンライン空間という「プル要因」	99
3.2 交換の持続メカニズム：情動によるコミットメントの強化	100
3.2.1 ポジティブ情動の生成	100
3.2.2 情動から凝集性へ	101
3.2.3 凝集性からコミットメントへ	101
3.3 不安の共有と共感による「共感縁」	102
第七章 考察：SC の生成と社会関係の再編メカニズム	103
1 ミクロ・メゾ・マクロと「中間的構造」	103
1.1 本章の課題	103
1.2 分析の視点：階層別アプローチの必要性	104
1.3 「中間的構造」の二重性：SC の生成プロセスと構造化理論	104
2 ミクロな互助行為からメゾレベルの中間的構造へ	105
2.1 集団的信頼	105
2.1.1 成功経験による集団的信頼の形成	106
2.1.2 集団的信頼による再参加の誘発	106
2.2 創発的規範	107
2.2.1 創発的規範の生成	108
2.2.2 規範の可視化による再参加の誘発	109
2.3 多層的結合	109
2.3.1 ゲートキーパーと多層的ネットワーク：包摂と橋渡し	110
2.3.2 ネットワークによる互助行為の再駆動	110
3 メゾレベルの中間的構造からマクロな SC へ	111
3.1 集団的信頼の一般化	112
3.2 創発的規範の固定化とソフトな制度	113
3.3 ネットワークの持続・拡張と SC の醸成	113
3.3.1 橋渡し型 SC	114
3.3.2 連結型 SC	114
3.3.3 結束型 SC	114
3.4 小括	115

4 社会関係の持続と解消	115
4.1 「普通物資」の代替可能性と匿名性の維持	115
4.2 持続への転換点：「特殊物資」による属性の開示	116
4.3 機能転換と定着	117
第八章 おわりに	119
1 まとめ	119
1.1 各章の整理	119
1.2 結論	119
2 本研究の理論的意義	120
3 新たな知見	121
4 残された課題	122
5 今後の展望	123
参考文献	125
日本語：	125
翻訳著：	126
中国語：	127
英語：	127
ウェブサイト：	129
謝辞	131
致谢	132

第一章：はじめに

1 研究背景

21 世紀に入って以来、地球規模でさまざまな社会的リスクが頻発し、その影響は経済・政治・生活のあらゆる領域に及んでいる。ベック（Beck 1986=1998）が指摘したように、現代社会はまさに「リスク社会」の時代へと突入したと言える。そのような中で、2019 年に発生したコロナウイルスの世界的な流行は新たな社会的リスクを我々に突き付けた。発端となったのは、2019 年 11 月 22 日、中国湖北省武漢市の華南海鮮卸売市場の従業員および周辺住民の間で、原因不明のウイルス性肺炎の発症が確認されたことである。それから、感染は武漢市から急速に拡大し、中国大陆のほぼ全域、さらには海外へも波及し、世界的な公衆衛生危機へと発展した。

このような急速な拡散状況下で、初期段階では有効なワクチンや治療薬がなかった状況を踏まえ、各国は相次いでロックダウン措置の導入に踏み切った。アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、中米・カリブ、南米、オセアニアといった各地域で実施例が続き、代表例としては中国、インド、ニュージーランドなどが挙げられる。なかでも中国におけるロックダウンは、行政命令に違反した場合に罰則が科されるなど、他国に比べて強い強制力を伴う点に特徴があった。こうした特徴をもつ「中国式ロックダウン」を、中国は武漢を皮切りに複数箇所で行ったことで、世界各国とは対照的に、（中国国内の）爆発的感染を抑止できたと考えられる（小川 2021）。

具体的な施策として、2020 年 1 月 23 日、武漢市当局は市全域を対象とするロックダウンを開始した。午前 10 時以降、市内への出入りが全面的に制限され、空港・鉄道駅・フェリー・長距離バス・地下鉄などの公共交通機関はすべて運行を停止した。また、住民の自家用車による外出も禁止され、市全体が事実上の封鎖状態に置かれた。さらに、同年 1 月 25 日にはこの措置が湖北省全域に拡大され、工場の操業停止や交通手段の厳格な制限が命じられた。人口約 1100 万人を擁し、中国内外を結ぶ経済・交通の要衝である武漢市全体を封鎖するという決断は、公衆衛生史上かつて例のない試みであった。この未曾有の非常事態のもとで、住民は強い緊張と不安の中、物理的・社会的距離の確保を強いられる「新しい生活様式」に順応せざるを得なかった。

このような感染拡大とそれに伴う統制措置は、近代社会が内包する制度的リスクの再帰的性格を端的に示している。すなわち、科学技術・行政・医療といった近代的システムがリスクの生産者となり、その影響が個人の日常生活にまで浸透するという点において、ベック（Beck 1986）が指摘した「再帰的近代化」の特徴を体現している。同時に、このような状況は、従来の社会的信頼や連帯のあり方を問い直す契機ともなった。ロックダウンは感染抑制という目的を超えて、人々の社会関係や社会的構造を再編する「社会的実験場」としての性格を有していたとも言える。

2 研究動機

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴うロックダウンは、現代社会におけるリスクの可視化をもたらすと同時に、社会的弱者の脆弱性を鮮明に浮かび上がらせた。筆者の母親は基礎疾患を有しながら、2020 年初頭の武漢ロックダウン期には自宅で一人きりの生活を余儀なくされた。外出の制限、医療機関の逼迫、生活物資の不足など、複合的な制約が重なる中で、慢性疾患を抱える者にとって生命の維持そのものが危うくなる状況が生じていた。筆者は日本に滞在していたため、直接的な支援を行うことができず、遠隔的な連絡を通じて母の健康状態を見守るほかなかった。この経験は、災害や危機状況における「災害弱者」がどのように社会的支援から取り残されるのかという問題への関心を喚起し、研究上の問いへと転化された。

そのため、筆者の修士論文（Ziyun, C. 2024）は、「武漢ロックダウン」が災害弱者に与えた影響を明らかにすることを目的とし、妊婦・高齢者・基礎疾患患者など 13 名を対象に半構造化インタビューを実施した。当時のリサーチ・クエスションは、ロックダウンという極限状況が「災害弱者」にいかなる影響を及ぼしたのかという一点に絞られており、分析の焦点も個々人の被影響の実態に置かれていた。

その結果、「不健康によるスティグマ」「医療資源の不足」「健康不安」「家族への負担感」「関心や理解への希求」という五点が見出され、災害支援においてプライバシー保護や心理的支援、地域ケアの充実が不可欠であることが示唆された。

しかしながら、調査の過程で筆者は、「災害弱者」がこうした困難に直面する一方で、住民間の自発的な互助行

為が支援に重要な役割を果たしていた事実気づいた。物資や情報の交換が住民関係を変化させ、助け合いが人々の距離を縮める可能性も語りの中から見出された。特に、WeChat グループ¹を介した情報共有や物資の融通は、見知らぬ住民同士の間信頼や協力を生み出し、結果として一時的ながらも共同体的関係を再編する契機となっていたのである。

もっとも、この知見は当時の研究関心の射程をやや超えていたため、修士論文では今後の課題として簡潔に触れるにとどめた。

この限界を踏まえ、博士課程における本研究では、調査対象を災害弱者に限定せず、ロックダウンを経験したより広範な住民層へと拡大した。すなわち、住民がロックダウン期にいかに関与に参加したのか、その契機・形態・過程を明らかにするとともに、互助が社会関係の形成および変容にどのような影響を与えたのかを考察することを目的とする。

このようにして、修士段階で得られた知見を基盤としつつ、ロックダウンという極限状況における「社会関係の変容」を中心的な分析対象として位置づける点に、本論文の理論的関心の出発点がある。

3 課題設定と論文構成

本研究のリサーチ・クエスチョンは次の二点である。

(1) 武漢ロックダウン下において、住民間の互助行為はいかなる契機・メカニズムによって発生し、どのように展開したのか。(2) その互助行為は、既存の社会関係や地域のネットワークの再編・再構築にどのような影響を及ぼしたのか。よって本研究の目的は、住民間の自発的な互助を中心とした分析を通じて、危機状況下での社会関係再編のメカニズムを解明することにある。

この目的のもと、互助行為そのものを分析対象として、ロックダウン下における社会関係の形成と変容を包括的に明らかにすることを目指す。

本論文は、以下の構成で論じる。第二章では、新型コロナウイルス感染症およびロックダウンの特性を整理し、災害および社会関係に関する先行研究を検討することで理論的枠組みを確立する。第三章では、本研究の調査設計、調査方法、分析手法を明示する。第四章では、ロックダウン下における住民の生活状況を描写し、その特徴を明らかにする。第五章では、住民間の互助行為の発生・展開を具体的事例に基づいて分析する。第六章では、理論枠組みに基づき、互助行為が社会関係の形成・変容に及ぼした影響を考察する。第七章では、第五章・第六章の分析を踏まえ、互助行為を通じた SC の生成メカニズムと持続性を考察する。第八章では、研究結果を総括し、理論的・実践的意義および今後の課題を示す。

¹ WeChat は中国のインスタントメッセージング・ソーシャル・ネットワーキング・サービスである。グループチャット機能を搭載し、情報交換など、様々な目的で利用できる。WeChat のグループチャットは最大 500 人のメンバーを追加することができ、数百人規模のグループチャットを形成して様々なトピックスの情報交換が行われている。

第二章：先行研究と理論的枠組み

本章では、武漢ロックダウン下における住民間の互助行為と社会関係の変容を分析するための理論的枠組みを構築する。まず、第1節では、新型コロナウイルス感染症というパンデミックの特性とロックダウンがもたらした影響を整理する。

そしてロックダウンという現象は、感染症対策としての行政的措置であると同時に、人々の生活構造・社会関係・価値体系を包括的に変容させる社会的現象でもある。そのため、単なる公衆衛生学的観点からではなく、社会学的観点から「人と人との関係の再構築」という側面を捉える必要がある。したがって、第2節では、大規模災害時における社会関係について、既存の社会規範が一時的に機能不全に陥る状況において、人々がどのように即興的な行為を通じて新しい社会的秩序や関係性を形成するのかについて、先行研究を整理する。特に、(1) 災害という環境の特殊性、(2) 即興的行為の創発性、(3) 公共性と連帯の再生、という三つの視点から考察を行う。

これらの知見を踏まえ、第3節では社会的交換理論とソーシャル・キャピタル理論を用いて、ロックダウン下の住民互助行為と社会関係の変容を分析する理論的枠組みを提示する。

1.新型コロナウイルス感染症によるパンデミック

1.1 新型コロナウイルス感染症とは

新型コロナウイルス感染症（Coronavirus Disease 2019：COVID-19）は、2019年12月に中国湖北省武漢市で最初に確認された。原因ウイルスは、既知のSARS-CoV（重症急性呼吸器症候群コロナウイルス）やMERS-CoV（中東呼吸器症候群コロナウイルス）と同系統のベータコロナウイルス属に分類されるSARS-CoV-2であり、RNAウイルスとして高い変異率を有する。臨床的特徴としては、発熱、倦怠感、咳、呼吸困難などの呼吸器症状に加え、嗅覚・味覚障害や多臓器への影響が見られる点に特徴がある。このウイルスは主に飛沫感染・接触感染・エアロゾル感染によって伝播し、潜伏期間はおおむね2～14日、平均約5日とされている（WHO 2020）。感染者の一部は無症状であるが、特に高齢者や基礎疾患を有する者においては、重症化や致死に至るリスクが高いことが報告されている（WHO 2020）。

2020年3月11日、世界保健機関（WHO）は本感染症をパンデミックと公式に宣言した。以降、200以上の国と地域で感染が報告され、2022年時点で全世界の累計感染者数は6億人、死者数は600万人を超える規模に達した（WHO 2023）。このパンデミックは、21世紀における最初の地球規模の社会的危機として、多方面にわたる影響を及ぼした。

1.2 パンデミック災害の特性

1.2.1 災害の分類と都市機能制限

国連防災機関（United Nations Office for Disaster Risk Reduction：UNDRR）による災害の定義には流行性疾患も含まれ、地震や津波などの自然災害と同等の対応が求められている（UNDRR 2020）。したがって、新型コロナウイルス感染症の大流行は流行性疾患（世界的な大流行の場合はパンデミックになる）の一種で、災害と捉えることができる。大津山ほか（2020）は、日本国内で発生しうる自然・人為的災害を、ハザードの種類や被災範囲、発災期間などの観点から整理している（表2-1参照）。

表 2-1 災害の分類と都市機能制限

分類	ハザード	被災中心地と被災範囲	発災期間	人工構造物の破壊	都市機能の停止	都市機能や居住の意図的制限	復旧/復興までの期間
急性	地震	震源地を中心とした同心円状に分布	数回の本震と数ヶ月に渡る余震	激甚の場合壊滅的	総合的喪失	建築制限	数年～十数年
	津波	震源地を中心とした沿岸・河川部	数日～1週間	激甚の場合壊滅的	総合的喪失	危険区域の指定	数年～十数年

	土砂災害	急傾斜地	数日～1週間	土砂のみ	限定的	危険区域の指定	数年～数十年
	原子力災害	被災原発地と放射線ブルーム範囲	複合災害の場合有	複合災害の場合有	総合的喪失	数年～数十年の居住禁止	数年～数十年
	火災	出火元から分布	数日～1週間程度	延焼範囲のみ	炎症範囲の喪失	防火・準防火地域指定	数年
	テロ・破壊行為	不特定	不特定	局地的にあり	局地的に喪失	局地的封鎖措置	収束後
慢性	パンデミック	ヒト・ヒト感染によるクラスターが点在	不特定	なし	人の接触低減を意図した停止	接触低減を意図した都市封鎖	収束後
	海面上昇	地球規模の沿岸部	不特定	浸食による沿岸	限定的	沿岸浸食部からの撤退	回復よりも適応
	干ばつ	気象条件によって主に西日本で発生	不特定	なし	給水等関連設備の停止	なし	不明

出典：大津山（2020）を参考に筆者作成

この表からも明らかなように、災害は発生速度と影響の持続性という観点から急性災害と慢性災害に大別される。土砂災害や川の氾濫のように、危険が差し迫っている場合は、人々はためらわずに安全な場所や避難所に自ずと避難していく。それに対し、パンデミックは発生から収束までの期間が不特定であり、被災範囲の予測が極めて困難であるという点で慢性型災害に分類される。今回の新型コロナウイルス感染症は、その発災期間並びに回復までの期間は不特定であり、さらに無症状感染の存在が、感染経路の追跡を著しく困難にしたため、被災範囲の予測が不可能である。そして、津波や洪水など地理的限定性のある災害とは異なり、被災範囲の拡大防止も実施しにくい。また、人の移動と共に被害が拡大する、伝播性のあるハザードである。そのため、一般的な災害は復旧・復興段階において都市機能や居住の意図的制限を実施するが、流行性疾患、特にパンデミック（世界的大流行）においてはロックダウンがその直接的な対策として適用されている。

そのため、パンデミックは物理的損壊ではなく、感染拡大を防止するために意図的・制度的に都市機能が制限される点に特徴がある。

1.2.2 パンデミックにおける社会関係

さらに、被害の拡大が地理的条件ではなく人の移動と接触によって生じるため、社会的交流そのものがリスク要因となり、結果として人々の行動変容を誘発する。特にロックダウンは、都市機能や居住活動を一時的に封鎖する政策的措置であり、被害の拡大を防ぐと同時に、住民の生活圏を限定し、社会的交流の様式を根本的に変化させる。

内閣府（2020）の調査によれば、感染症拡大前と比較して「家族の重要性をより意識するようになった」と回答した者は49.1%、「社会とのつながりの重要性を意識するようになった」者は39.1%にのぼる一方、「生活の楽しさ」や「社会的つながりへの満足度」は顕著に低下している。感染防止のための接触制限が、社会的安全と人間的交流という二つの価値のあいだに緊張を生じさせたのである。また、同調査によれば38.8%が「オンライン交流や発信に新たに取り組んだ」と回答しており、ICTを介した社会的関係の再構築が進んだことも明らかとなった。

このように、パンデミックは他の自然災害とは異なり、社会的接触の制限を主要な対策とする「社会関係型災害」として位置づけられる。津波や地震においては、避難行動や救援活動が人々の相互扶助を促す契機となるのに対し、感染症災害ではむしろ人との距離の確保が求められ、共同行為が抑制される。その結果、従来の地域的連帯や共助ネットワークが一時的に機能不全に陥り、しかしながら、代わりにオンライン上の関係構築の試みが生じる可能性が高いと考えられる。

このように、パンデミックは「空間的制約」と「社会的制約」の双方を通じて都市の運営構造と人間関係の基盤を変化させる複合的災害である。そのため、従来の自然災害論や復旧論だけでは把握しきれない側面を持つ。

1.2.3 CBRNE 災害がもたらす影響

新型コロナウイルス感染症は新規感染症であるが、パンデミックという現象自体は古来より繰り返し生じてきた。こうした感染症の大流行は、従来の自然災害とは異なり、長期化・不可視化・社会的制約を伴う慢性的災害として

の性格を有する。このような特質を理解する手がかりとして、CBRNE²（chemical, biological, radiological, nuclear, high-yield explosives 化学・生物・放射線物質・核・高性能爆発物）災害の枠組みが有効である。

特に「B」にあたる生物学的危機（biohazard）は、人為的なものに限定されず、感染症のパンデミックもそれに準じて扱われる。近年では、2002年発生の重症急性呼吸器症候群（severe acute respiratory syndrome：SARS）、2009年発生の新型（H1N1）インフルエンザ（2009年6月パンデミック宣言）、2012年発生の中東呼吸器症候群（Middle East respiratory syndrome：MERS）、ジカ熱（2016年PHEIC宣言）、エボラ出血熱（2019年PHEIC宣言）などがあり、国際保健上の課題となってきた。生物テロリズム（バイオテロリズム bioterrorism）行為としては、2001年アメリカ合衆国において炭疽菌テロが発生し、炭疽菌を含む郵便物が議員やメディア関係者に郵送され、社会的混乱が生じた。また、2021年8月中国中央テレビ（電子版）は、中国山西省の文水县で9人の皮膚に炭疽菌に感染した特徴が見られると伝え、社会中に騒ぎを巻き起こした。こうしたパンデミックに共通するのは、感染経路や影響範囲が予測困難であり、被害が空間的にも時間的にも拡散しやすいという点である。そのため、直接的な被災を免れた人々にも心理的・社会的影響が及ぶことが多い（重村 2020、Morganstein, J.C.ほか 2017）。

加えて CBRNE 災害のもう一つの特徴は、「不可視性」に起因する恐怖と不信の連鎖である。それゆえに、はるかに大きな社会的混乱を及ぼす（Ide, K.ほか 2021）。脅威が不可視であるゆえに、人々は誰が感染者であるか、何が安全であるかを判断できず、結果として他者に対する警戒と排除が生じる。さらに、報道が過熱しがちとなり、民衆は不満や憎悪、責任を、直接的な原因となる人に向けるのではなく、他の対象に転嫁する。被害を受けた人は、被害者であるにもかかわらず差別・中傷・いじめの対象となるスケープゴートや憎悪犯罪という形で事例化することもある。

例えば、福島原発事故直後、放射能で汚染されているとされる福島県民に対する差別の報道が数多くあった。ギルほか（2013）は以下のようにまとめた。福島県民の宿泊を拒否するホテル、福島県民を乗せないタクシー、福島ナンバープレートの車に燃料を入れないガソリンスタンド、福島県から非難した子どもたちが「菌」や「ばい菌」と呼ばれ虐められたり、福島県民が突然婚約破棄されたりと、様々な形で差別が行われた。福島県内に避難していた福島県旅館村長泥地区の人々もこういった差別と出会うことがあった。例えば区長は旅館の近くの町の工場で仕事していたが、毎朝出勤すると、仲間に「放射能が来たぞ」と言われたという。また、2011年に郡山女子大学女子学生189名を対象としたアンケート調査の結果によれば、風評被害に対しては、「偏見・差別と思う」60.3%、「仕方ない」24.9%、「よくわからない」14.3%という回答結果であった（武井ほか 2013）。

同様の現象は、コロナの発源地とされた武漢でも確認された。武漢の住民に対する差別に関する報道も数多くあった。2020年初頭、「42」からの身分証明書番号（中国において、湖北省出身の人は42からの身分証明書番号を持っている）を持っている人がホテルに拒否され、会社から解雇または強制的に隔離されたことや、武漢から帰省した出稼ぎ労働者が故郷に追い出されたこと³などが報告され、感染拡大の責任を負わされた形で社会的スティグマを被った（人民日報 2020年3月19日）。

1.3 ロックダウンの概要

感染症対策として、ワクチン開発やマスク着用、手洗い・消毒といった従来型の公衆衛生的措置に加え、ソーシャルディスタンスの確保やロックダウンなど、社会生活そのものを制限する施策が各国で導入された。

1.3.1 ロックダウンとは

都市封鎖・ロックダウン（英語: lockdown）という言葉は本来、「刑務所で囚人が房から逃げ出さないように自由を制限する措置」という意味だが（『英和中辞典』小学館 2012）、現在はケンブリッジ英英辞典（Cambridge University Press 第4版 2013）により、ロックダウンは危険や差し迫った脅威・リスクなどを理由に、建物やエリアへ入った

² CBRN（chemical, biological, radiological, nuclear：化学・生物・放射線物質・核）による緊急事態は「特殊災害」と呼ばれる。

テロリズムなど大量破壊を企てる者が高性能爆発物（high-yield explosives）を組合わけることも想定されるなか、CBRNE（chemical, biological, radiological, nuclear, high-yield explosives 化学・生物・放射線物質・核・高性能爆発物）という略語で称されることも多い。目に見えない脅威を介して社会に深刻な不安と混乱をもたらす。

³ 中国においては、ホテルへの宿泊や鉄道の利用の際に身分証明書の提示が義務付けられているため、このような制度的要請は客観的に見て差別を助長している。

り、そこから出たり、その中を移動したり（そのいずれか一つまたは複数）が自由にできない緊急の状況をいう。英和辞典と日本語辞書には記載がないが、朝日新聞（出版）社が提供する現代用語事典「知恵蔵 mini」によれば、ロックダウンとは一定期間、対象とする地域で人の移動を制限したり、企業活動を禁じたりする措置をとることである（朝日新聞出版 2020）。

本論文では、ロックダウンを「新型コロナウイルスの感染防止を主目的として、政府または自治体の人々の移動および屋外活動を原則として強制的に禁止する措置」と定義する。

そして、本論文で検討するのは主に 2020 年 1 月 23 日から 2020 年 4 月 8 日まで、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中国湖北省武漢市において実施されたロックダウンである。

さらに、中国語の「武汉封城」には複数の訳語が考えられるが、本論文では「武漢ロックダウン」を用いる。その理由は、まず中国語の「封城（fēngchéng）」という言葉は新型コロナウイルスのパンデミックによって初めて登場した新語であり、実際に「封城」という言葉は中国の主要な辞書にも収録されていない。これは前例のない状況で生まれた新語であり、流行語として定義されるに至った。この言葉は 2020 年 1 月 23 日午前 0 時に武漢市感染症防控指揮部から発表された第 1 号通知に由来し、その通知に基づき、同年 1 月 23 日午前 10 時より武漢市への出入り制限が開始された。武漢市内の空港、鉄道駅、フェリー、バス、地下鉄が停止し、市内は封鎖された（武漢市衛生健康委員会 2020）。したがって、「封城」とは感染拡大を防ぐために人々の外出や行動を制限する措置を意味し、中国政府の厳格な封じ込め政策を象徴する言葉でもあった。次に注目すべきは、「封城」の実際の意味が不明瞭である点である。報道では交通の停止や外出禁止令が伝えられたが、住民の生存を保証するために、完全に人の移動や物資の流通が停止することはなかった。この点が英語の「ロックダウン（lockdown）」の定義に厳密には一致しない。したがって、本論文では「武漢ロックダウン」という言葉を使用し、カッコ付きで、2020 年 1 月 23 日から 4 月 8 日までの武漢市で実施されたロックダウンを指す。

1.3.2 中国におけるロックダウン

中国におけるロックダウンは、人の移動・企業活動制限が法的処罰をもって行われるものであるため、「強制力がある」ことが日本と異なる特徴であると言える。大津山ほか（2020）が主要感染拡大国における事例の研究を踏まえ、表 2-2 では、各国の都市封鎖またはそれに類似する施策を規模、厳しさ、態度などによって、四つの類型に分類している。早期水際対策・行動管理型、強権的移動規制型、地域別対応型およびモラル依存型である。

表 2-2 都市封鎖またはそれに類似する施策の類型化

タイプ	初動対応と移動制限	長所	短所	主な適用国
早期水際対策・行動管理型：経路の特定と封じ込め	水際対策の強化と自己隔離のフォローアップの徹底	都市封鎖の期間を最低限にし、感染源の特定が可能	個人情報、人権問題があるため法規制の整備が必要 インバウンドの急激な低下	オーストラリア・ニュージーランド・韓国・シンガポール
強権的移動規制型：法規制罰則による管理	水際対策の遅れによる罰則規定を伴う強権的移動制限	罰則規定によって厳密な管理が可能	実施タイミングによっては医療崩壊の危険性	イタリア・スペイン・英国・ドイツ・中国
地域別対応型：州・地域単位の規制	罰則規定を伴う州単位の移動制限	地域性を考慮した対応が可能	地域毎の制約に違いが発生し、域内一部で感染爆発の危険性	米国・インドネシア
モラル依存	緩やかな水	経済とのバ	罰則規定がな	日本

型：自粛要請に基づく移動抑制	際対策と罰則規定を伴わない自主隔離要請	ランスを考慮し、緩やかな対策移行が可能	く市民個人の判断に依存 経済活動の長期停止の可能	
----------------	---------------------	---------------------	-----------------------------	--

「出典：大津山ほか（2020）」

そのうち、強権的移動規制型は市民の私権を大幅に制限し感染拡大を抑える戦略であり、実施以降は確実に感染者の減少が見込める。一方で、多くの逮捕者や処罰の対象者を生む可能性があるため、私権制限に伴うロックダウンは緊急事態条項に見られる事前の法整備が必要不可欠であると大津山ほか（2020）は指摘している。

1.3.3 ロックダウンの有効性

感染症対策の歴史を振り返ると、人の移動制限は感染拡大抑止の最も効果的な手段の一つである。1918年のスペイン風邪に関する Hatchett ら（2007）の比較研究によれば、米国フィラデルフィアとセントルイスでは、公的集会の早期中止や学校・劇場の閉鎖などの非薬理学的介入（non-pharmaceutical interventions, NPI）を迅速に導入した都市ほど、死亡率の上昇を抑え、医療崩壊を回避できたとされる。

新型コロナウイルス感染症に関しても、同様の傾向が多くの実証研究によって確認されている。Pan ら（2020）は、武漢市の公衆衛生介入を時系列的に分析し、ロックダウン政策が感染拡大曲線の急激な上昇を抑制する決定的な要因であったと結論づけた。また、Yang ら（2020）は数理モデルを用い、封鎖開始が5日遅れた場合、中国全土の感染規模は約3倍に達したと推定している。さらに、Tian ら（2020）は『Science』において、武漢市の移動制限が他都市への感染拡散を平均2.9日遅延させ、全国的な流行速度を有意に低下させたと報告した。

1.4 ロックダウンの諸課題

1.4.1 日常生活への影響

しかし、同研究からも、ロックダウンには、一方で経済の停滞や移動制限による糖尿病症状の悪化やメンタルヘルスへの影響が指摘されている（Hatchett ほか 2007）。このように、ロックダウンは、感染抑制に一定の効果をもたらした一方で、経済活動の停止や社会的孤立、精神的ストレスの増大など、生活全般に深刻な影響を及ぼすことも指摘されている（Hatchett 2007、景 2020、馮 2020）。ロックダウンによる外出制限により、住民のメンタルヘルスと QOL⁴が危険に晒されていると、2021年3月3日にユニセフ（国連児童基金）は警鐘を鳴らした。

まず、経済的活動について、ロックダウンによって移動・就労・教育など生活基盤に直結する領域が同時に制限され、社会経済活動は急速に停滞した。また、国際的なサプライチェーンの断絶により、原材料や生活必需品の供給が不安定化し、企業活動や家計の両面に持続的影響を残した。

景（2020）や馮（2020）は、武漢市における長期的ロックダウンが雇用・消費・地域経済に深刻な影響を及ぼしたことを指摘している。特に中小企業やサービス業の休業が相次ぎ、多くの労働者が収入源を失った。このような経済的影響は、発展途上国や非正規就業者の多い社会で一層顕著にみられた。Panigrahi（2021）によれば、インドにおける全国的なロックダウンでは、就業者の約9割を占めるインフォーマル労働層が急激な収入減に直面し、最低限の生活維持すら困難となった。

武漢では、感染拡大防止のために住宅地の完全封鎖など厳格な措置が実施された。多くの地域で住民の外出が禁止され、食料や生活物資は行政やボランティアを通じて配送される体制に切り替えられた。しかし、行政対応の遅延や地域間の管理能力の差により、食料や医薬品が一時的に不足する事例も見られた。例えば、吉林省通化市では2021年1月の封鎖直後、住民が「突然ロックダウンが実施されたため、1週間以上も何の配給もなくアパートに閉じ込められている」と SNS 上で訴え、行政が謝罪する事態となった（新京報 2020）。こうした事例は、ロックダウンが制度的には感染防止措置であっても、実施過程における供給体制の脆弱性が日常生活に重大な影響を与えることを示している。

さらに、医療崩壊の危険性も深刻な課題として指摘されている。ここで言う医療崩壊とは、医療需要の急増によって医療サービスの受給バランスが崩壊し、医療を必要とする人に適切な医療サービスを供給できなくなる状況を

⁴ QOL: (Quality of Life) 生活の質

指す。感染者対応に資源が集中した結果、慢性疾患や救急患者が十分な治療を受けられない状況が生じたこと（景 2020）や、強権的移動規制の副作用として地域医療体制の機能不全が拡大するリスクも指摘している（大津山ほか 2020）。武漢においては、新型コロナウイルスに感染した人のみならず、その不安を抱く大勢の人が病院に押し寄せた。診察待ちで夜中まで病院に長蛇の列ができ、それでも診察を受けられない人が街にあふれ出した。このように、感染症対策としての医療集中が、他の医療需要を圧迫し、結果として医療アクセスの不平等をもたらしたことが確認されている。これにより、健康を損ね関連死を招いてしまうこともあり、基礎疾患のある者は家に閉じこもることになり、突然症状が悪化する例があった。2020 年 1 月 29 日には、湖北省で脳性まひ患者の 17 歳の少年が死亡しているのが発見された。少年の唯一の介助者だった父親は、新型コロナウイルス感染の疑いで、1 週間前から隔離されていた。新京報（2020）によると、この父親は、息子が食べ物や水がない状態で 1 人取り残されているから助けて欲しいと、中国のソーシャルメディア「微博（ウェイボ）」に書き込んだ（新京報 2020 年 1 月 30 日）。

また、ロックダウンの長期化に伴い、社会的活動の低下が心身機能に影響を与えることも指摘された。特に身体的活動が必要とされる高齢者層では、外出自粛による社会的孤立が健康寿命を縮める要因となる（中井ほか 2021、斎藤ほか 2013、広瀬 2023）。高齢者だけではなく、あらゆる年代での「コロナフレイル⁵」の顕在化については、考えておかななくてはならない喫緊の課題と考えられる。

さらに、社会的信頼と制度的正当性をも揺るがせた。感染症への恐怖と情報の不確実性は、行政・専門家への不信を増幅させ、デマや陰謀論が SNS を通じて拡散した。特定地域・職業・感染者への差別やスティグマ化も顕在化し、社会的分断が深まった（景 2020、趙ほか 2020）。

1.4.2 メンタルヘルスへの影響

ロックダウンは前述した生活基盤のみならず、人々の心理や社会的関係にも深刻な影響を及ぼした。「当たり前の日常」が瞬間に一変させる中に、人々の心理状態は不安定化される。Panigrahi（2021）は、インドにおけるロックダウン関連自殺の約 95% にストレス要因が関与していたと報告しており、その背景には隔離、不安、経済的損失、社会的偏見が複合的に作用していたことを指摘している。これにより、ロックダウンによる心理的ストレスが多大な影響を与えていると示唆された。

「武漢ロックダウン」の場合、趙ほか（2020）の研究は、この心理的影響を実証的に示している。中国科学院心理研究所の計算ネットワーク心理学研究所が開発した「文心」中国精神分析システム（TextMind）を使用し、微博で投稿された感情を表す品詞を抽出し分析した。この分析を通し、繰り返し使用された各辞書⁶の品詞の頻度比に基づいた測定分析により、1 月 23 日以降の武漢住民の心理的および行動的变化を調査した。その結果として、コロナの脅威は、感染源や感染方法などについて、高い不確実性をはらんでいたことが分かった。また人々は慣れ親しんだ環境を失った。ことも加わり、人々に非常に大きな不安や恐怖などの心理的ストレスを引き起こした。同研究からの「武漢市住民の心理的および行動的变化調査」データの分析結果によれば、政府が「ロックダウン」を表明して以来、武漢住民は、不安、失望、怒り、敵意など、さまざまなネガティブな感情を示してきた。1 月 23 日以降、武漢の人々の恐怖と心理的苦痛はさらに高まり、彼らから中国のほかの地域のように春節の間に「幸福を増やし、ネガティブな感情を減らす」という通常の傾向を見いだせなかった。

さらに、1.2.3 節で述べたように、感染症は「不可視の脅威」として他者不信を誘発し、社会的排除や偏見の連鎖を生み出す（Morganstein ほか 2017）。誰が感染者か分からないという状況は、他者への警戒心を強め、地域社会に潜在的な分断をもたらした。感染者やその家族は、スティグマや偏見にさらされることも多く、心理的孤立を深めた。これにより、社会的結束の弱体化と心理的孤立の拡大が同時に進行したといえる。医療従事者もまた、ロックダウン下における代表的な高ストレス集団である。SARS 流行期の調査では、隔離環境で勤務した医療スタッフの約 3 分の 1 が精神的苦痛を訴え、うつ病の発症率が 20% を超えた（Maunder ほか 2003、柳 2003）。コロナの拡大期にも、同様の傾向が報告されている。過重労働、感染リスクへの恐怖、そして社会的偏見や差別が重なり、医療従事者の心理的疲弊を一層深刻化させた。

最後に、ロックダウン下では、公共空間の閉鎖や対面交流の中断により、地域コミュニティといった既存の社会

⁵ コロナフレイルとは、高齢者における自粛生活の長期化による顕著な生活不活発を基盤とするフレイル化およびフレイル状態の悪化ことを指す（飯島 2020）。

⁶ この研究では主に「簡体中国語 LIWC 辞書」、「自殺辞書」、「大連工科大学感情語彙」、「マイクロブログ基本感情語彙」という 4 つの辞書を指す。これらの辞書に記載された品詞は、精神的行動に関連する言語表現の特徴として、感情および行動パターンの観点からユーザーの状態を反映することができる。

的ネットワークが一時的に断絶した。葬儀や弔いなどの社会的儀礼が中断され、死者を悼む機会すら奪われた。対人接触の制限が共同体的な支えの機能が失われ、人々の安心感や連帯感が著しく損なわれる事態となった（黒澤 2020、Mete, B.ほか 2022）。

1.4.3 小括

新型コロナウイルス感染症は、単なる公衆衛生上の問題ではなく、社会の機能と構造を揺るがす災害である。感染拡大による医療崩壊や経済停滞のみならず、長期的な社会的孤立、スティグマの拡大など、社会関係のあり方そのものの変容を促した点において特異な災害と位置づけられる。すなわち、このパンデミックは、人々の生活様式のみならず、社会関係のあり方を根底から再編成する契機となったといえる。

さらに、感染拡大に伴い導入されたロックダウンは、感染防止を目的とした行政措置であると同時に、人々の社会的行動や生活様式を大幅に制限する政策でもあった。家庭は隔離の最小単位として閉ざされ、対面的交流は一時的に断絶したが、その一方で、オンライン空間を媒介とする新たなコミュニケーションや互助の実践が出現した。また、家族間の交流の増加は、家庭内部の関係性の再編をもたらしとも考えられる。

こうした社会関係の変容は、人間の相互行為と社会的連帯の再構築という観点から、災害社会学にとって重要な研究的意義を有している。しかし、具体的にどのような変化が生じ、どのような要因によってそれが形成または維持されたのかについては、いまだ十分な実証的研究が蓄積されていないと言える。

したがって、本研究ではロックダウンを人々の社会的行動と関係性を再編する契機として捉え、「武漢ロックダウン」における社会関係の変容過程を検討する。

2 大規模災害時における社会関係

2.1 リスク社会の視点から見るパンデミック

2.1.1 再帰的近代にける災害

パンデミックを CBRNE 災害の一形態として捉えると同時に、それを近代社会が内包する構造的リスクとして捉える視点も重要である。ベック（Beck 1986＝1998）は『危険社会』の中で、近代化の進展が新しいリスクを自ら生み出すことを再帰的近代化と呼んだ。科学技術の発展やグローバル経済、情報流通の高速化は、人々の生活を豊かにする一方で、感染症のようなリスクが国境を越えて拡散できる条件をも作り出した。今般の新型コロナウイルスはまさにそのような近代化の副作用として発生した危機である。

ベックはまた、現代のリスクは社会のすべての人に共通して降りかかる点を指摘し、これを「リスクの民主化」と呼んだ。パンデミックのリスクは、特定の地域や階層に限定されず、誰もが感染者にも被害者にもなり得る。目に見えない感染の不安は、他者への不信や差別を引き起こし、社会的排除やスティグマ化を再生産する。つまり、パンデミックは、人々の間の信頼関係を揺るがす社会的現象として理解することができる。このような信頼の動揺は、リスク社会におけるもう一つの重要な側面——すなわち「専門知識への依存とその不安定さ」——を浮き彫りにしている。

2.1.2 専門的知識を要する CBRNE 災害

ギデンズ（Giddens 1990）によれば、「リスク」という概念は、専門家知識への信頼と不可分なものとして位置づけられる。専門家や制度への信頼は、近代社会の安定を支える基盤であり、その信頼が揺らぐと社会全体の安定が失われる。しかし、新型コロナウイルス感染症初期には感染経路や致死率、ワクチン開発をめぐる専門家の意見が分裂し、一般市民はどの情報を信じるべきか判断できない状況に置かれた。

2019 年末に感染が拡大し始めた頃、武漢ではすでに現地の医師による注意喚起が行われていた。武漢中心医院の眼科医であった李文亮は、重症急性呼吸器症候群（SARS）に似た肺炎が市内で広がっていると同僚に警告した。彼は医療関係者のチャットグループ内で、感染拡大の可能性を指摘し、防護服の着用を呼びかけた。

しかしその後、警察から「虚偽の情報を流すな」との指導を受け、「噂を広めた」として捜査対象となった。当局は「デマを流布した者」に対する処罰方針を発表し、李文亮を含む 8 名の医師が処分を受けた。さらに、武漢市の衛生当局は当初、「原因不明の肺炎には人から人への感染の証拠がない」と繰り返し発表していた。そのため、市民の多くは感染の危険性を認識できず、マスクを着用せずに公共交通（鉄道や航空機など）を利用していた（湖

北新聞 2020)。こうした初期対応の遅れと情報統制が、感染の実態把握を妨げ、結果として武漢から他地域への急速な感染拡大を招いた要因の一つと考えられる。

このように、健康への影響が十分に知られていなく専門的知識を要する CBRNE 災害については、専門家や政府などの意見が分かれがちで、情報の不確実性が社会的信頼を損ないやすい。結果として、人々は不安と混乱に翻弄され、行動や心理に深刻な影響を受ける。

2.1.3 リスクの個人化

以上のように、専門知識への信頼が揺らぎ、制度的対応が後手に回るなかで、人々は自らの安全を守るために、最終的には自分で判断して行動せざるを得なくなった。マスクの着用や外出の控え方、誰とどこまで接触するかといった日常の決定は、政府の要請や職場の方針と結びつきつつも、実際には各個人に委ねられていたと言える。ベック（Beck 1986=1998）は、このようにリスクへの対応責任が国家や制度から個人へと移されていく過程を「リスクの個人化」と呼び、近代社会では制度がもはやリスクを引き受けきれず、その結果を個人が直接負わされると指摘した。

伊藤（2008）は、こうした「個人化」が単に自由や自立の拡大を意味するのではなく、社会構造の分化によって個人が社会との媒介的な紐帯を失い、自己と社会との関係を自分で説明し直さざるを得ない状況であることを明らかにしている。すなわち、個人は社会的リスクに直接さらされるなかで、自らの生活史を語りとして再構成し、「なぜ自分は今ここにいるのか」「どのような選択をしてきたのか」を振り返ることではしか、自分の人生のまとまりを確保できなくなっているのである。パンデミック下における感染リスクへの対応も、まさにこのような「再帰的近代における個人化」の一局面と理解できる。

このように、リスクの個人化が進む社会では、制度的な支えや画一的なルールだけでは、人々の不安や具体的な生活上の問題に対応しきれない。人々は、家族や近隣、職場やオンライン・コミュニティといった身近な関係に依拠しながら、「何が安全か」「どこまで他者を信頼してよいか」といった判断基準を、自分たちなりに作り出していく必要に迫られる。そこでは、一人ひとりが個人としてリスクを引き受けつつ、その負担を分かち合うための非公式なルールや助け合いの実践が、生活の場から立ち上がってくる。

したがって、リスクの個人化は、必ずしも社会的連帯の完全な崩壊を意味するわけではない。むしろ、従来の制度的な枠組みが十分に機能しないなかで、人々がどのようにして新しい結びつきや規範を編み直していくのかを捉えることが重要になる。本研究はこの点に着目し、「武漢ロックダウン」における住民の互助実践を、リスク社会における社会関係と規範の再構築過程として位置づける。

以上のように、制度的な支えが不安定化するリスク社会では、人々は不確実性のもとで自律的な判断に依拠せざるを得ない。では、その空白の中で社会秩序はいかに再構築されるのか。

2.2 災害社会学の視点

前節で述べたように、新型コロナウイルス感染症の拡大とそれに伴う「武漢ロックダウン」は、人々の移動を制限し、社会的孤立を引き起こした。その結果、住民は深刻な心理的・経済的負担を強いられ、日常生活の基盤そのものが揺らぐ事態となった。しかし、このような大規模災害が、必ずしも社会の崩壊や分断だけをもたらすわけではない。むしろ、制度が機能不全に陥るという極限状況下においてこそ、人々の間に自発的な互助行為や協力の芽が生まれ、新しい連帯の形が立ち上がる場合があることが、組織論・災害ボランティア論・相互行為論などから多くの知見が蓄積されてきた。

本節では、このような「混乱の中に立ち現れる秩序」という逆説的な現象を、レベッカ・ソルニット（Rebecca Solnit）が提示した「災害ユートピア」の概念から出発して論じる。すなわち、危機が人間の利他性や共同性を呼び覚まし、平時には見えにくい連帯が再生するという視点である。その上で、災害社会学における先行研究を整理し、これらが示す知見を踏まえて本研究のオリジナリティを明確にする。

2.2.1 災害ユートピア

まず、大規模災害の文脈で注目されるのが、ソルニットは『A Paradise Built in Hell』（2009）において、災害によって社会秩序が一時的に崩壊したとき、人々のあいだに自発的な協力や利他性が生まれ、平時には見られない共

同体的秩序が立ち上がる「災害ユートピア⁷」という現象である。具体的には、地震や洪水、パンデミックといった極限状況の中で、既存の制度や階層が消え去り、人々が水平的で対等な関係のもとに互いを支え合う社会である。そこでは、指導者も命令もなく、必要に応じて人々が協働し、支え合いながら生き延びるという即興的な秩序が形成される。例えば、1906年、サンフランシスコは大地震とそれに続く大火災に見舞われた。災害直後、市民たちは自発的に炊き出し所を設け、家を失った人々に食事を提供した。また、医療用のテントを寄付して避難者に仮の住まいを与えるなど、多様な支援活動が展開された。ソルニットはこのような互助の実践を高く評価し、次のように述べている。

Mutual aid means that every participant is both giver and recipient in acts of care that bind them together, as distinct from the one-way street of charity. In this sense it is reciprocity, a network of people cooperating to meet each others' wants and share each others' wealth.

(Solnit 2009: 86)

つまり、災害時の社会は決して混乱や暴動だけではなく、むしろ一時的な平等性と相互扶助の精神によって成り立つ共同体の秩序が出現する。

同様に、Tierney (2003) は、災害を「社会秩序の断絶」ではなく「社会的連帯の再編」として捉える視点を提示した。Tierney (2003) は、半世紀以上にわたる災害社会学の実証研究を踏まえ、人々の行動は混乱や暴動ではなく、むしろ適応的で協力的な傾向を示すことを指摘している。にもかかわらず、「人々は災害時にパニックに陥る」「秩序は指揮命令系統によってしか維持できない」といった災害神話⁸が根強く再生産されていると批判する。特に、2001年のアメリカ同時多発テロの後には、こうした神話が「国家安全保障」や「専門知識に基づく危機管理」と結びつき、市民の自律的な参加を排除する形で利用されたという。Tierneyによれば、これらの神話は、人々の主体的・共助的行動を過小評価し、行政・専門家主導の管理体制を正当化する制度的利害の反映である。したがって、彼女の議論は、災害時の社会秩序を「破壊」ではなく「創発」として捉え直す理論的転換を示すものであり、制度の外側に生まれる自律的協力の社会的意義を再評価するための重要な視座を提供している。

さらに、この制度外の自律をさらに理論的に深化させたのが小川 (2021) である。小川 (2021) は、災害によって一時的に現れる無秩序の中に、平等と主体性の回復を見出し、これをアナキズムの視点から読み替えた。小川によれば、災害ユートピアは「秩序がないからこそ人々が主体的に動き、互いに助け合う場」である。そこでは、国家や制度が与える秩序に従うのではなく、人々自身が即興的判断によって秩序を生み出していく。この視点は、ハーバーマス (Habermas 1962/1973) の公共圏論との対比でより明確になる。ハーバーマスが描く公共圏は、討議と合理性を基盤とした「秩序の内側の公共性」であるのに対し、災害ユートピアの公共圏は、秩序の外側、すなわち制度が一時的に機能不全となった「空白の中」に立ち上がる公共性である。そこでは、上下関係や役割分担が一時的に無効化され、人々は水平的な関係のもとで他者と向き合う。

総じて、災害ユートピアとは、制度の機能が停止し、秩序が失われたときにこそ現れる、人間の自由と連帯のもう一つの形である。そこでは、平等は制度によって作られるものではなく、行為と関係の中で生まれるものである。安定を求めて秩序に依存する社会とは対照的に、無秩序の中でこそ主体は回復し、人々は互いに信頼と共感を再発見する。したがって、災害ユートピアは単なる理想論ではなく、危機を通じて社会の可能性を映し出す鏡であり、秩序と自由のあいだにある新しい公共性の萌芽といえる。

一方、Turner (1974) が提唱した「コミュニタス」の概念は、災害ユートピアという現象を社会的に捉えるための理論的示唆を与えるものである。コミュニタスとは、図 2-1 が示すように、通過儀礼⁹の過程において、既存の地位秩序や制度的役割から一時的に解放された人々が、身分・性別・財産といった社会構造を越えて「生身の人間」として出会う平等的関係の状態を指す。すなわち、コミュニタスは社会の「反構造」として現れ、秩序と無秩序、制度と即興の間に生まれる一過的な共同性である。

⁷ もっとも、被害の不平等や排除が見えにくくするという批判もある。本研究では、ユートピア性を行為と関係の再編が観察される現象面に限定して参照する。

⁸ 災害神話: myths about disaster behavior (Tierney 2003)

⁹ 通過儀礼 (イニシエーション) とは、人間が出生してから死に至るまでの人が生まれてから死ぬまでに経過する、「誕生」「成人」「結婚」「死亡」などに伴う儀礼。人生儀礼ともいうが、通過儀礼を広義に取り、人生儀礼を下位概念とする分け方もある。

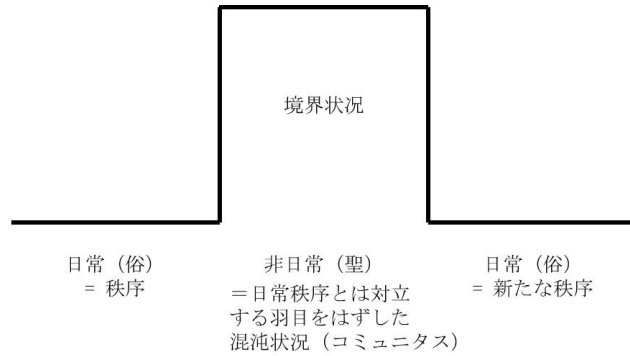


図 2-1 コミュニタス Turner (1974) による筆者作成

災害やパンデミックのような状況もまた、この「リミナリティ¹⁰（境界状況）」を社会的に再現する。都市機能や行政秩序が一時的に停止し、人々が「制度の外」に置かれるとき、彼らは互助や共感を通して新たな関係を紡ぎ直す。例えば、避難所やオンライン上の支援ネットワークでは、地位や職業といった日常の階層区分が曖昧化し、「誰もが誰かを支えることができる」という感覚が共有される。そこでは、平等や連帯は制度によって与えられるものではなく、相互行為と共感の実践を通じて生成される。

このように、災害ユートピアは単なる理想ではなく、制度的秩序の外で生まれる「もう一つの公共性」を示す現実的な社会現象である。それは、社会的支配や制度的拘束から解放された人々が、孤立や不信といった負の連鎖を超えて、共感と即興的協力を基盤に新しい秩序を再構築する過程を示す。言い換えれば、災害は単に社会を破壊する契機ではなく、社会性そのものが再編される場である。そのため、ロックダウンのような制度的災害を理解する上で重要な理論的契機となる。

2.2.2 創発規範と災害下位文化

前節で見たように、ソルニット（2009）が描く「災害ユートピア」は、混乱の中においても人々が自発的に協力し、新しい社会的秩序を立ち上げる現象を指していた。しかし、こうした秩序はどのようにして可能となるのか。この問いに対し、災害社会学や群集行動研究の分野では、災害時における行動の規範化や社会秩序の形成過程を説明する概念として、「創発規範理論」および「災害下位文化」が提示されてきた。

まず、創発規範論は、災害や集団的混乱のような非日常的状况において、既存の制度的規範が一時的に機能を失うとき、人々が新たな規範を相互作用の中から生み出す過程を説明する理論である。Turner と Killian (1957=1972) は、群集行動を単なる逸脱や無秩序ではなく、参加者同士の相互行為を通じて「新しい行動規範が創発される過程」として捉えた。災害下では明確な指導者や公式ルールが不在であるため、個々人は他者の行動を観察し、模倣し、相互に調整しながら「いまこの場で何が正しいか」を定義していく。その結果、一定の行為様式が集合的に受け入れられ、即興的でありながらも秩序をもった社会的行動が形成されるのである。

吉田（1996）はこの創発規範論を再構成し、創発を「非制度的状況下で再組織化された状況定義」と位置づけた。すなわち、創発とはまったく新しいルールの突然の生成ではなく、既存の知識・経験・関係性が再配置される社会的プロセスである。災害時においても、人々は過去の経験や地域的慣習を手がかりに、互いの行動を調整しながら「共有可能な新しい秩序」を形づくる。そのため、創発は、社会秩序の崩壊ではなく、「秩序の再構築」の契機として理解できる。

こうした創発的秩序の概念を社会文化の次元へ拡張したのが、野田（1990）の災害下位文化である。災害下位文化とは、平時には潜在している地域の慣習や互助の精神が非常時に顕在化し、行政命令や制度的枠組みに依存せずに人々が生活を維持していくための柔軟な規範体系である。野田は、災害が社会全体の秩序を揺るがす一方で、地域社会の内部には独自の価値観や行動規範が再編成され、一定の秩序が維持されることを指摘した。たとえば、避難所での物資配分のルールづくり、近隣住民による食料や情報の共有、子育て・介護の相互代替など、日常的スキ

¹⁰ リミナリティ（境界状況）とは、ある状態から別の状態へと移行する中間にある、曖昧で不安定な状態を指す。もともとは文化人類学で通過儀礼の「中間段階」を指す言葉で、アイデンティティや役割が定まっていないうぶらりんの状態を意味する。道化・トリックスター・シャーマン・修行者などの位置・状況をさすのに用いることが多いが、現在は物理的な場所（「リミナルスペース」）や、心理的な状態など、様々な文脈で使われている。日常生活の規範から逸脱し、境界状態にある人間の不確かな状況をさす言葉になっている。

ルを活用した支援実践はその典型である。これらは、災害下の混乱を前提としつつも、地域の相互信頼と共有経験にもとづいて新たな秩序を生み出す営みである。

さらに野田は、災害時に既存組織が機能不全に陥るとき、その空白を埋める形で自発的な創発集団が現れることを指摘した。彼によれば、創発的な行動や組織は「定置型組織の適応の失敗や調整機能の欠落」によって出現し、被災社会全体の対応能力を補完する役割を果たす。このように創発現象は、制度的機構の外部で立ち上がるが、既存の社会的信頼や文化的価値観に支えられているという点で、完全な逸脱ではなく「社会的連続性の中の変容」として理解されるべきものである。

このような創発的秩序や下位文化は、しばしば「小さな合意」の積み重ねによって支えられる。すなわち、「誰が・いつ・どこで・どのように支え合うか」という即興的な取り決めが、相互承認のもとで繰り返されることによって、非公式ながらも安定した規範が共有されていく。ここでは、法的ルールや命令よりも、「あの人が困っているから助けよう」「次は自分がやる番だ」といった具体的な行為の連鎖こそが秩序の基盤となる。その担い手は特別なリーダーや専門家ではなく、日常を生きる「ふつうの住民」である。すなわち、創発的秩序とは、制度的枠組みが一時的に空白化した状況下で、住民自身が生活の場を維持するために立ち上げる微視的な社会秩序の総体といえる。

このように、創発規範論および災害下位文化論は、ソルニット（2009）が描いた「災害ユートピア」現象の社会的基盤を理論的に説明する視座を提供する。すなわち、災害によって制度が麻痺しても、人々は相互行為を通じて新たな秩序を再構築する力を有しており、その過程にこそ社会のレジリエンスが表れる。

2.2.3 支援主体における創発

前節で述べたように、創発規範や災害下位文化は、制度的秩序が機能不全に陥った状況下でも、人々が相互行為を通じて新たな秩序を生み出す過程を説明する理論である。では、そのような創発的秩序は、どのような主体によって、どのように支えられるのだろうか。

災害対応の現場では、しばしば「臨時に寄せ集められた人々が、見知らぬ者同士で、慣れない場所において、日常とは異なる役割を担う状況」（林 2015: 3）が生じる。すなわち、「とにかくやってみよう」「やってみなければ分からない」といった即興的な判断と行動が、被災者や支援者の双方に求められるのである。このような不確実な環境は、行政職員や専門的支援者であっても例外ではなく、現場では常に「未知の課題」に対して臨機応変に対応することが求められる。

渥美（2014、2017、2019）による災害ボランティア研究を参照しながら、組織化された支援主体における現場的な創発のあり方を検討する。研究対象は本研究の関心である「住民の自発的互助」とは異なるが、現場で形成される協働のルールや経験的判断という点で、理論的に重要な示唆を与える。

渥美（2014）は、災害ボランティアのあり方をめぐって、「秩序化のドライブ」と「遊動化のドライブ」という二つの傾向の対比を示している。前者は、制度や手続きによる組織的な安定化を志向する動きであり、後者は、現場での臨機応変な対応や自由な活動を促す動きである。渥美は、これら二つのドライブを単に対立するものとしてではなく、災害時のボランティア実践を支える両面的な力として位置づけた。

その理由として、災害現場では、想定外の事態が多く、マニュアルに従うだけでは十分に対応できない。そのため、事前に活動マニュアルや災害ボランティアセンターという仕組みが準備されていたわけではなく、その場で被災者のニーズを汲み取りながら、臨機応変に活動することになった。このような遊動化のドライブは、制度的秩序からの逸脱ではなく、むしろ現場の複雑性に適応する合理的な行動である。一方で、活動が継続する中で、参加者間の調整や経験の共有を通じて、一定の手順や暗黙的な合意が形成される。これが秩序化のドライブにあたる。渥美は、この二つのドライブが循環的に作用することで、ボランティアの現場に新しい秩序が形づくられていくと述べている。現場の相互調整と共感を通じて生まれる秩序である。

さらに、渥美（2009）は、新潟県中越地震の復興支援活動に長期的に関わりながら、研究者自身が現場での実践を通して学び、課題意識を形成していく過程を記述している。このような描写からは、知識が現場での経験や対話の積み重ねを通して形成されていくことがうかがえる。この知識の更新こそが、現場の柔軟性と持続性を支えている。

このような渥美の議論は、制度化された支援組織を対象としつつも、より広く「災害時の創発的秩序形成」を理解するうえで大きな示唆を与える。すなわち、創発とは単に混乱の中の一時的な適応行動ではなく、行為者間の相互作用と実践知の蓄積によって持続的に更新される秩序生成のプロセスである。渥美が明らかにした「遊動化と秩

序化のダイナミックス」は、後述する住民レベルの自発的互助や支援活動の分析においても重要な視点となる。すなわち、住民による互助行為もまた、制度の外側で生まれる創発的秩序の一形態であり、その背後には「場を共有し、相互に学び合う」関係性が存在する。

本研究においては、渥美が示したこの創発的秩序形成の枠組みを踏まえつつ、次節で扱う王（2019、2021）の研究に見られるような住民自身による創発的支援のプロセスを検討する。すなわち、組織化されたボランティアの枠を越え、生活の現場で生じる即興的な協働が、いかに信頼や社会関係を再構築していくのかを明らかにする。

2.2.4 住民による創発的支援

しかし、災害時の創発は、必ずしもボランティアやNPOといった組織的支援主体に限られない。むしろ、被災地域の住民自身が、生活の場を基盤として自発的に支援を組織し、協働のルールを形成していく現象も数多く報告されている。また、被災者—支援者という両者関係に限定せず、両者の関係を取り巻く人々が集まる場やネットワークを観察対象として描くことで現れる様相にも注目すべきであると王（2019）が指摘している。

王（2019、2021）は、東日本大震災後や熊本地震後の被災地を対象に、行政や既存NPOの支援が十分に届かないなかで、住民が主体的に展開した支援実践に注目した。王は、こうした活動を「創発的支援活動」と呼び、制度的な枠組みや命令によらず、地域住民の相互作用のなかから自然に立ち上がる支援として示した。

創発的支援の特徴として、活動の初期段階では「できる人ができることをする」という即興的な行動から始まり、その繰り返しのなかで暗黙の了解や役割分担が形成され、やがて継続的な支援のかたちへとつながっていくことが挙げられている。

王（2021）は、こうした支援がどのように継続・拡張していくかをさらに分析し、その鍵を握る要素として実践知の形成を挙げている。実践知とは、災害現場の不確実性に対応するために、参加者が経験や感覚を共有しながら獲得していく判断の知である。王によれば、被災地域では多くの場合、制度的なマニュアルや指導が欠如しているため、住民たちは自らの経験を語り合い、他者の行動を参照しながら「どうすればよいか」をその都度決定していく。この過程で、行動の指針や役割分担、資源の配分などに関する暗黙の了解が形成される。こうした相互行為の連鎖こそが、災害時の創発的支援を可能にしている。

さらに王（2021）は、この創発的支援が展開される具体的な場として「被災キープレイス」という概念を提示した。被災キープレイスとは、支援をめぐる人々の交流・物資交換・心理的支え合いが重なり合う拠点的な場所であり、地域のレジリエンスを支える結節点である。典型的には、地域の集会所、避難所、仮設住宅、公民館、あるいはカフェや商店といった日常的な場がこれに該当する。これらの場所では、地域内外から集まった人々が互いのニーズを共有し、支援の方法を話し合いながら関係を築いていく。王は、こうした場所を創発の結び目と呼び、創発的支援の持続と拡散を支える社会的・空間的基盤として位置づけた。

このように、創発的支援が単なる自助・共助ではなく、社会関係そのものを再編するプロセスであるという点である。住民たちは、既存の制度的秩序が崩れた状況においても、他者との相互行為を通じて支援を組織し、信頼と連帯を再構築する。その背後には、生活世界に根ざした即興的判断と実践知、そして共感的なつながりがある。

「武漢ロックダウン」においても、同様に公的支援が途絶した状況下で、住民たちは自らのネットワークを活用し、團購や物資共有などの自発的互助を展開していた。これらの行為は、まさに王の言う「創発的支援」の一形態であり、制度の外側で立ち上がる社会的秩序の具体例といえる。そのため、実践しながら新たなルールの創出して点から見ると、ロックダウンにおける住民同士の互助行為を「創発的な互助」として位置づけられる。

ただし、王が対象とした東日本大震災後の被災地域における「被災キープレイス」は、人々が直接集まり、語り合い、支援を媒介する物理的な場として機能していたのに対し、ロックダウン下の都市空間では移動や接触が厳しく制限され、そのような場は実質的に存在し得なかった。したがって、武漢の事例における創発的互助は、対面的な共在を前提としない、ネットワーク媒介型の創発として位置づけられる。この点で、パンデミック期の創発は、従来の災害社会学が想定してきた空間的・身体的な「場」に依拠する支援とは異なる性質を持つといえる。

2.2.5 公共性と連帯の再生

また、王によれば、被災キープレイスにおける支援のやり取りは、単なる物資供給や労働分担にとどまらず、感情的なつながりの形成にも寄与する。たとえば、被災経験を共有する対話の場では、「自分たちの困難は他者の支えの中で分かち合える」という感覚が醸成され、相互信頼と共感が生まれる。こうした感情的な交流は、支援を一時的な行為に終わらせず、地域社会における新しい関係性の再編を促す。では、こうした創発的支援の背後にある

信頼・共感・公共性の再生メカニズムはどのようなものであるのか。

稲場（2011、2013、2015）は、阪神・淡路大震災（1995 年）や東日本大震災（2011 年）においては、「無縁社会¹¹」のなかであったにもかかわらず、多くの人々が被災地に駆けつけ、義援金を送り、血縁や地縁を超えて他者の苦に心を寄せる行為が広がった。稲場は、このような直接の利害関係をもたない他者への共感に基づくつながりを「共感縁」と名づけ、これを「無縁社会」に対する新たな社会的契機として位置づけている。

稲場（2015）は、東日本大震災をきっかけに、人々の中に「お互いさま」という感覚や共感する心が再び息づいたと述べている。このような動きは、宗教や地域を越えて多様な人びとが支援活動に関わることで、社会に新しい信頼とつながりを生み出した点に特徴がある。また、稲場は宗教の視点から、宗教者やボランティアが他者の苦しみに寄り添う実践を挙げ、宗教施設が避難所や支援の場となって人々が「共に祈り、共に語る」関係を築いたことを指摘している。このような支え合いは、制度的な支援の枠組みを超えて、人々のあいだに信頼や共感を回復させる契機となったと考えられる。

さらに、稲場（2011）は、他者を思いやり支え合う行為を「利他主義」の実践として位置づけ、それを「社会通念に照らして困っている他者を援助する行為であり、自分の利益を主な目的としないもの」と定義している。また、こうした行為の背後には「おかげさま」や「恩返し」といった感謝の感情があり、それが思いやりの行動を生み出す動機となることを指摘している。

このように、稲場の議論は、災害という極限状況を通して、人々が他者への共感と利他性を再び取り戻す過程を示している。支え合いや思いやりに基づく関係は、制度や契約によって与えられるものではなく、人々の日常的な行為の中から自発的に生まれるものである。災害時の支援や協働の中には、このような利他性に支えられた関係が多く見られ、社会のつながりを回復する力となっている。

「武漢ロックダウン」においても、感染拡大への不安のなかで、多くの市民が互いに支え合い、共感を通じて関係を再生させていった事例が報告された。家族、近隣住民、あるいは SNS を介した見知らぬ他者とのつながりのなかで、人々は情報や物資を分かち合い、孤立した個人を再び社会につなぎ戻していった姿勢が見られた。このような動きは、稲場が述べる思いやりや利他性にもとづく支え合いの実践に通じるものであり、ロックダウンといった非常時における社会関係の再構築として理解できる。

2.3 小括：災害社会学における本研究の位置づけ

本節では、パンデミックや災害のような極限状況において、人々が相互行為を通じて新たな秩序や関係を創発する過程を、災害社会学の先行研究から整理した。ソルニット（2009）は「災害ユートピア」という概念を通して、危機が人間の利他性や共同性を呼び覚まし、混乱のなかから新しい連帯が生まれる可能性を提示した。Turner と Killian（1957＝1972）の創発規範論や野田（1990）の災害下位文化論は、既存の制度や規範が失効する場面で、人々が相互調整を通じて簡易なルールや役割を生み出すメカニズムを明らかにした。また、渥美（2014、2017）は、組織的支援主体における「遊動化」と「秩序化」の動態を分析し、現場の経験と相互行為から形成される実践知の重要性を指摘した。さらに、王（2019、2021）は、被災地の住民自身が主体となって展開する創発的支援を明らかにし、地域社会の中で新たな信頼と関係が再構築される過程を描いた。稲場（2011、2013、2015）は、こうした災害を契機に他者への共感と利他性が再び立ち上がる現象を「共感縁」として捉え、無縁社会における公共性と連帯の再生を論じた。

しかし、これらの研究の多くは、災害後の支援実践の成立や継続のプロセス、あるいは支援組織や被災地コミュニティの内部に焦点を当てており、行政・NPO・ボランティアといった公式組織による支援活動に焦点を当てる傾向が強く、被災地住民同士による非公式な互助メカニズムについての議論は十分ではなかった。特に、住民間の自発的互助や、物資・情報の融通といった交換、さらには困難を共有する中で生まれる感情的な交流（共感や心理的サポート）の重要性は、先行研究ではあまり正面から十分に論じられていない。そして互助行為そのものが社会関係にどのような影響を及ぼすのかについても十分に検討されていない。特に、パンデミックのように移動や接触が制限され、対面的な「場（被災キープレイス）」が成立しにくい状況下で、人々がいかに互助を形成し、ネットワークを介して新たな信頼や連帯を構築するのかという点は、まだ十分に明らかにされていない。

例えば、稲場（2015）は東日本大震災を契機に人々の間に「お互いさま」の精神や共感が再び息づき、新たな信

¹¹ 無縁社会：稲場（2011）は、現代日本社会において血縁・地縁・社縁などの伝統的なつながりが弱まり、人々が孤立する傾向を「無縁社会」と呼び、効率や利益を優先する社会の中で思いやりや共感の感覚が失われていると指摘した。

頼とつながりが生まれた現象を指摘し、これを「共感縁」として論じているが、このような物質的・情緒的な相互支援行為そのものが社会関係の再編に如何に寄与するかについては十分な検討がなされていない。王（2019、2021）による住民主体の創発的支援の研究も、被災地コミュニティ内部で新たな信頼関係が構築されるプロセスを描き出したものの、その分析対象は主として被災直後の支援実践の成立・継続過程であり、日常生活レベルでの住民間の一般交換（遅延的互酬にもとづく物資・情報・サービスの循環的交換）が社会関係に及ぼす影響およびその日常生活への持続性について踏み込んだ議論は少ないと言える。

以上の観点から、本研究はロックダウン下の互助を単なる生存戦略ではなく、人々の行為と関係から創発する公共性の再構築として捉える。そして、住民間の「創発的互助」による「創発的秩序」に焦点を当て、制度の空白を埋める主体は特定組織ではなく、生活世界に根ざした小さな合意と実践の累積であるという立場をとる。ただ、これら先行研究から得た知見を踏まえつつも、分析の焦点を互助行為の実践知だけではなく、その行為が社会関係をどのように形成または変容させたのかに重きを置く。すなわち、ロックダウンという制度的制約下で、市民による「創発的な互助」がいかに信頼や連帯を再構築し、新しい社会的つながりを生み出したのか、さらにどう変容したかを明らかにすることを目的とする。

一方、デジタルメディア（ソーシャルメディア）の災害時活用に関する先行研究では、主に情報伝達（被害情報の共有、避難・支援情報の発信）や組織動員（ボランティア募集、救援活動の調整）といった機能に注目が集まってきた。たとえば、Tagliacozzo（2018）の研究はニュージーランド地震後に政府機関が SNS で復興情報を発信した事例を報告しており、また他の多くの研究でも災害時の SNS がリアルタイム情報共有や救援要請に有効である点が強調されている（Yates, D.ほか 2011、Peary, B. D.ほか 2012、Simon, T.ほか 2015）。しかし、ソーシャルメディアが被災者同士の関係性構築を媒介するプラットフォームとして果たす役割については十分に検討されていないのが現状である。特に、本研究が焦点を当てる「武漢ロックダウン」の状況下では、人々の移動・対面接触が厳しく制限され、従来災害時に報告されてきたような住民が直接集う物理的な「場」（避難所や仮設住宅、地域の集会所など）が事実上存在し得なかった。その代替として、WeChat グループに代表されるデジタルなコミュニケーション基盤が近隣住民の交流プラットフォームとなり、物資の團購（共同購入）や情報共有、さらには安否確認や励まし合いといったネットワーク媒介型の互助が展開されたのである。これは、人々が顔を合わせて交流する従来型の支援拠点とは異なり、オンライン上の「プラットフォーム」を介して、社会関係を再構築する新たな形態の支援といえる。実際、ソーシャルメディアの活用次第では被災コミュニティにおける信頼・連帯といったソーシャル・キャピタルの醸成に資する可能性が指摘されており（Aldrich 2012）、SNS 上での相互作用が被災者の共同体意識の形成や主体的な復興プロセスにつながった事例も報告されつつある（Aldrich 2015）。しかしながら、このようなデジタルプラットフォーム上の住民互助が具体的にどのように社会関係の再編を媒介するかについて体系的に論じた研究はまだ少なく、本研究はまさにその空白を埋めることを目指している。

以上の視点に立ち、本研究では「住民間の一般交換による社会関係再編」と「デジタルプラットフォームの媒介的役割」に着目することで、先行研究には見られない独自の知見を提示したいと考える。すなわち、ロックダウン下の武漢において、物質的・情緒的な互助行為がどのように新たな信頼と共感を醸成し、WeChat というデジタル媒介を通じて新しい社会的つながりを生み出したのかを解明することが、本研究のオリジナリティとされる。こうした分析を通じて、災害時における非公式・自発的な住民互助の意義と、デジタル基盤がそれを支える社会関係インフラとして機能し得る可能性を明らかにしたい。これにより、従来の災害支援論に対し、草の根的な日常互助の力とデジタル媒介の新たな役割を付け加えることで、本研究の独自性を一層明確に示すことができるだろう。

3. 互助行為に関する理論的視点

本研究では社会的交換理論（以下：SET 理論）とソーシャル・キャピタル理論（以下：SC 理論）を理論的基盤として用いる。その理由として、SET 理論は、人々の相互行為を資源の交換として捉え、互酬性や信頼の形成過程を分析する上で有効であるため、近年の研究でも、相互に支援を交換し合う関係が被災者の精神的健康を支えることや、地域の実践的支援（物資提供・避難支援など）はコミュニティの絆を強めることが示唆されている（Horak, M.ほか 2023 ; Zhou, Y.ほか 2023）。このように、危機下での住民の助け合い行動を分析する上で、SET 理論は重要な示唆を与えてくれる。

一方、SC 理論は、そうした交換の累積がどのように共同体内部の信頼・規範・ネットワークを再編し、社会的連

帯を強化するかを示すことができることから、両理論を併用することで、パンデミック下における住民同士の互助が社会的交換を通じていかに人々の関係性や連帯を再編成するか、その動態的なメカニズムを包括的に解明できると考えられる（3.3 で後述）。

そのため、本節では SET 理論と SC 理論の二つの視点から、災害時における互助行為と社会関係の変容を捉える理論的枠組みを整理する。本節では、まず SET 理論の源流と発展（3.1 節）やそれから展開されてきた概念要素を整理（3.2 節）、SET 理論が本研究のフィールドである「武漢ロックダウン」へ説明するの限界（3.3 節）を整理する。それから、SC 理論（3.4 節）を整理し、SC の災害時の効果（3.5 節）を議論する、という構成になる。次節（4 節）に本研究の理論的枠組みを確立する。

3.1 社会的交換理論の源流と発展

社会的交換理論（Social Exchange Theory、以下：SET 理論）は、20 世紀半ばにアメリカ社会学で形成された主要な理論的潮流の一つであり、人間の社会的行動を「資源の交換」という観点から説明しようとするものである。この理論の成立は 1950 年代末から 1960 年代初頭にかけてであり、その基礎を築いたのは、ジョージ・C・ホーマズ（George C. Homans）、ジョン・H・ターバウ（John H. Thibaut）とハロルド・H・ケリー（Harold H. Kelley）、そしてピーター・M・ブラウ（Peter M. Blau）らの研究である。したがって、理論として体系化されてからの SET 理論の歴史は、まだおよそ 70 年ほどにすぎない。

しかし、人と人との社会的相互行為の過程を交換関係として捉える見地自体は、それ以前から長い歴史をもっている。たとえば、古代ギリシアの哲学者アリストテレスも『ニコマコス倫理学』（Nichomachean Ethics）の第五巻の第三章において社会的行為を互酬的な交換として詳細に論じている（アリストテレス 1938）。それは現代の SET 理論の思想形成にも大きな影響を及ぼしたとホーマズが承認した（ホーマズ 1961=1974:356）。

こうした長い思想史を背景にしつつも、現代の SET 理論を直接的に支えた源流は、近代西洋における功利主義経済学、機能主義人類学、および行動主義心理学である。こうした多様な源泉を背景として、この理論は本質的に学際的な性格を帯びることになった。実際、ターナーは、現代の SET 理論をこれら諸学派的錯綜した混合体であると評している（Turner 1978:259）。以下ではまずこれらの源流を整理し、その上で SET 理論の展開と本研究との関係を検討する。

3.1.1 功利主義経済学

功利主義経済学の代表的な学者にはアダム・スミスやデヴィッド・リカードなどがある。これらの英国古典派経済学者にとって、利益追求は人間の一般的な「本性」とみなされている。人々は自由貿易や市場競争の中で他者と取引をする際、常に最大の物質的利益を合理的に追求するとされる。さらに、人々は自由市場における合理的主体として、あらゆる情報を得る手段を持ち、考え得るすべての選択肢を比較検討する。そして、その検討結果に基づいて、最小のコストで最大の報酬を得られる行動を合理的に選択するのである。

経済学におけるこのような功利主義的な見方は、SET 理論に大きな影響を与えた。ホーマズはこの人間の経済行動に対する理解を修正した上で、人間のあらゆる社会的行動の説明に応用できると考えた。彼の論文「交換としての社会行動」（Homans 1958）はその出発点とされ、続く著書『社会的行動：その基本形態』（Homans 1961）では、人間の行動を報酬とコストの交換過程として捉えた。

このように、交換理論における人間行動の基本的な仮定は、功利主義の原則を受け継ぎながらも、それを独自に修正・発展させたものである。Turner（1986）は、その修正された仮定を次のように整理している。

人々は必ずしも最大の利益を追求するわけではないが、他者と社会的取引をする際には常に一定の利益を得ようとする。

人々は完全に合理的ではないが、社会的取引においては確かにコストと利益の計算を行う。

人々は選択可能な完全な情報を持っているわけではないが、少なくとも一部の選択肢がコストと利益の評価の基礎になり得ることを認識している。

（中略）すべての社会において、人々は明確に定められた市場で経済取引を行っている。しかし、それは現実の社会環境における個人間のより一般的な交換関係の特殊例にすぎない。

（Turner 1986: 260-261）

さらに Turner は、交換理論が対象とする資源は貨幣や財だけではなく、感情・サービス・シンボルといった非物

質的資源も含むことを強調する。

人々は確かに交換において物質的目標を追求するが、同時に感情、サービス、シンボルといった非物質的資源も流通・交換している。

(Turner 1986: 260-261)

つまり、人間社会における交換には物質的資源だけでなく、感情、サービス、シンボルといった非物質的資源の交換も含まれることを示している。こうした視点の変化の背景には文化人類学の研究がある。

3.1.2 機能主義人類学

一方で、SET 理論の背景には、人類学における互酬性の研究というもう一つの源流がある。イギリスの人類学者ジェームズ・フレイザー (Frazer 1919) は、原始社会における女性交換婚をはじめとする親族構造や婚姻慣行を、女性親族の数の違いが資源の不平等と地位の差を生み出す経済的交換¹²として捉えた。フレイザーの研究は、人類学において否定しがたい先駆的意義をもつ(とりわけ、交換過程が集団の権力や地位の分化をもたらすという指摘)。しかし、功利主義経済学の枠内を出るものではなかった。

これに対してマリノフスキー (Malinowski 1922、1961) は、トロブリアン諸島での参与観察にもとづき、原始社会の経済生活を支える原理は社会的義務にもとづく互酬的な交換であり、人々がそこにおいて追求するのは物質的利益の最大化ではなく、友情の維持や儀礼的な名声といった社会的価値であると論じた。その代表例はクラ交易¹³と考えられる。彼は、クラ交易の交換は経済的な制度であるとともに、社会的・儀礼的な制度であり、その背景には「互酬性」があるものと考えた (Malinowski 2002: 211-213)。さらにモースは、『贈与論』 (Mauss 1954) において、マリノフスキーの交換の概念を理論化し、「贈与」の論理こそがいわゆる「未開社会」を維持する基本原理であることを論じた。マオリの人々は、贈物には、貨幣を媒介にした交換において商品に付着する交換価値を表す値札のように、霊的な余剰としての「ハウ¹⁴」が付着すると考える。

ホーマンズ (Homans 1958) は、自らの対人関係を物質的・非物質的資源の交換として捉える発想が Mauss の『The gift: forms and functions of exchange in archaic societies.』 (Mauss 1954) から示唆を得ていると述べて、具体的な事例理解においてはマリノフスキーのクラ研究に大きく依拠した。その後、Mauss やレヴィ=ストロース (Lévi-Strauss 1949) は、贈与や婚姻連盟の分析を通じて、社会構造が交換過程をどのように調整するか、また直接交換と間接交換の型がどのような社会組織の違いと結びつくかを論じ、後の SET 理論に重要な理論的資源を提供している。このように文化人類学の議論は、功利主義経済学が前提としてきた「利益」「効用」の理解を拡張し、象徴や名声、友情のような非物質的資源をも交換の対象として明確に位置づける役割を果たした。

3.1.3 行動主義心理学

行動主義心理学は、ロシアの生理学者パブロフの古典的条件付けの研究と、アメリカの心理学者ソーンダイクによる動物行動実験¹⁵から大きな影響を受けた。パブロフとソーンダイクの洞察はワトソンとスキナーによってさらに発展された。特にスキナーのオペラント条件づけ理論¹⁶は、後にホーマンズが社会交換論を構築する際の心理学

¹² フレイザー (1923=1976) は、『旧約聖書のフォークロア』において、原始社会に広く見られる交換婚を、経済的動機によって生じる一種の交換行為として捉えうると述べた。この過程では、富に乏しいが妻を迎えたい者は、自身の女性親族(姉妹や娘)を嫁がせることで、別の女性を得ることができる。原始社会における多様な親族・婚姻慣習を交換論的に解釈することで、フレイザーが立証しようとしたのは次の二点である。① 特定の文化を象徴する社会構造の型(たとえば婚姻の型)は、実際には人々の経済的動機の反映であること。② 資源の保有に不平等があるため(たとえば姉妹や娘の多少)、特権や権力の面で社会体系に分化が生じること。たとえば「オーストラリアでは、多くの姉妹や娘をもつ男は富者であり、持たない者は貧者で、そもそも妻をめとる力もない可能性がある」(フレイザー 1923=1976: 198)。

¹³ クラ交易：首飾りや腕輪などの貝製品が循環するこの儀礼は、双方の効用を高める取引ではなく、特定の相手との関係を固めることや、保有する貝製品を通じて地位と威信を可視化する象徴的な交換として描かれている (Malinowski 1961)。

¹⁴ ハウ (hau) という形而上学的余剰は、贈与者や製作者などと人格的に結びついており、受け手に一時的な使用を許すが、占有することを許さない。なぜならハウは、もとの贈り手や祖先の聖所などの古巣へと戻りたがると観念されているからである。したがって、あらゆる財はその贈り主へと贈り返されることになる (Mauss 1954)。

¹⁵ パブロフは条件反射の成立と消失の一般原理を明らかにし、「報酬」が条件反射の形成に果たす役割を強調した。一方、ソーンダイクは著書『動物の知能——動物の連想過程に関する実験研究』の中で、実験で動物が得る「報酬」を伴う行動パターンが学習に重要であることを示した。たとえば、迷路実験において猫が迷路から脱出する行動には報酬が結びついており、その報酬が猫にとってその行動を習得する原因になっていた。

¹⁶ オペラント条件づけとは、報酬や罰などの結果に応じて、自発的な行動が学習される過程のことである。

的基盤となった。ホーマンズは、経済学の功利主義的な「利益追求」という見方を、こうした学習理論の枠組みへと接続し、人間の社会的行動を報酬と罰の獲得・回避として説明しようとしたのである。すなわち、人々の行動は、報酬を得るか罰を避けるかという二つの動機によって説明できると想定された。

行動主義心理学は、人間と動物のあいだに本質的差異は存在しないと考える。そのため、動物行動の理解は人間行動の理解につながるとされ、ホーマンズはスキナーが動物実験から導き出した理論的命題をそのまま社会交換論に取り入れた。これらの命題の例としては、次のようなものが挙げられる。

一、成功命題：人の行なうすべての行為に言えることだが、ある人のある特定の行為が報酬を受けることが多ければ多いほど、それだけその人はその行為を行なうことが多くなるであろう。

二、刺激命題：過去においてある人が報酬を受けた時にある特定の刺激あるいは刺激群が現われていたとする。今、その過去の刺激に現在の刺激が類似していればいるほど、それだけその人はその行為を、あるいはそれと類似した行為を行なうことが多くなるであろう。

三、価値命題：ある人の行為結果がその人にとって価値があればあるほど、それだけ彼はその行為を行なうことが多くなるであろう。

(後略)

(ホーマンズ 1961=1974:22-37)

行動主義心理学が功利主義経済学と並んで現代交換理論の源流となったのは、両者が共通して「人間は報酬を追求する存在であり、最大の報酬と最小の罰（もしくはコスト）をもたらすような行動をとる」という原理に立脚しているからである。ただし、功利主義経済学が市場における合理的選択としてこの原理を扱うのに対し、行動主義心理学は学習過程における刺激と反応の連結としてそれを捉えるという違いがあると言える。

この意味で、現代の交換論者が行動主義から借用した「報酬」という語は、経済学者がいう「効用」とほぼ同義である。しかし、「報酬」という語は功利主義者が交換行動を経済的動機のみ限定して考える枠組みを超える概念であり、感情的満足や承認といった非物質的な側面も含みうる。これにより社会交換論者は、人間の社会的行動を単なる金銭的利益ではなく、さまざまな心理的欲求によって動機づけられるものとして捉えることができる。

3.1.4 ミクロ視点からマクロ視点へ

このような多様な思想的源流を受けつつ、Thibaut, J. H.と Kelley, H. H. (1959)、ブラウ (1964=1974)、Emerson, R. M (1976) らは、SET 理論を具体的な経験研究に基づいて展開していった。本節では、本研究の理論的枠組みに重要である従来の理論モデルを取り上げ、交換の構造および互酬性といった交換研究の基礎概念がどのように形成されたかを整理する。

Thibaut と Kelley は、ホーマンズのミクロ行動分析を発展させ、『The social psychology of groups』に「相互依存関係」を中心に据えた交換モデルを提示した (Thibaut, J. W.ほか 1959)。彼らは、行為者が報酬、コスト、比較レベルを総合的に評価し、満足度に基づいて交換関係を維持するか否かを判断するとした。また、個人の行動ではなく、他者との相互依存的関係が交換の単位であることを強調し、意思決定としての交換過程を体系化した。

これに対し、ブラウ (1964) は『交換と権力』において、ホーマンズ、Thibaut と Kelley らのミクロレベルの分析を拡張し、社会的交換がどのように集団間の関係や社会構造、ひいては権力関係の形成に結びつくかを論じた。彼によれば、個々の行為者間の交換が持続するうちに、信頼や義務といった社会的規範が形成され、それが組織や制度といったマクロな秩序の基盤となる (糸林 2014:36)。

さらに、Emerson, R. M (1976) は SET 理論をネットワーク分析へと発展させ、社会構造を交換関係の連鎖として捉えた。彼の理論は、交換を単なる二者間の取引ではなく、複数の行為者が相互依存するネットワークとして理解するものであり、後の社会ネットワーク論や SC 理論にも大きな影響を与えた。

このように、ホーマンズ、Thibaut と Kelley、ブラウ、Emerson を中心とする SET 理論の展開は、個人の行動原理から社会構造の形成に至るまで、ミクロとマクロを架橋する分析枠組みを提供してきた。

ただし、ミクロな交換行為がどのようにして関係そのものへのコミットメントや集団レベルの連帯へと転化するのかという点は、古典的 SET 理論では十分に説明されてこなかった。近年の理論的展開では、交換がもたらす情動経験に注目し、その累積が関係的結束を生む過程を理論化する試みがみられる。とりわけ Lawler (2001, 2004) の情動の社会的交換理論は、このミクロ-マクロ連関を補助的に説明する視点として位置づけられる。

3.2 SET 理論の主要展開

3.2.1 互酬性

互酬性については、「恩恵に対してお返しをする」という原理として位置付けられる。人々は他者から利益や支援を受けた場合、感謝や義務感を抱き、その親切に報いようと行動する。たとえば、隣人から助けてもらった人は、後日その隣人を助けたいと考えるだろう。社会には、この互酬性を期待し義務を忘れさせない規範（互酬的規範¹⁷）が備わっている。このような助け合いの交換が繰り返されることで、明示的に意図しなくても相互の信頼関係が強化されていくと考えられる。

この互酬性の原理は、贈与交換に関する古典的な議論と結びついている。贈与交換における贈り物は、市場における商品とは異なり、単に排他的に所有される対象ではない。Mauss (1954) が指摘したように、贈り物は贈与者や製作者の人格と結びついており、受け手に一時的な使用を許しても、完全な占有を認めない。Mauss によれば、未開社会における贈り物は、人々の共通感覚として、原初的な「法」の観念として現れている。たとえばマオリ族においては、贈り物には「ハウ (hau)」と呼ばれる霊的な余剰が付着しており、贈与者の手を離れた後もなお、その人格の一部として認識され続ける。この「贈与の霊」としてのハウの圧力が、多産性や豊穡性の観念と結びつき、贈与の義務的な循環を生み出すのだと Mauss は論じている (Mauss 1954:37-41)。

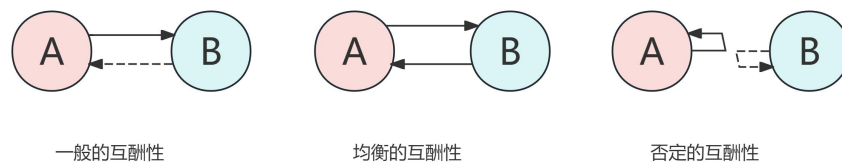
この視点をさらに理論的に展開したのがマーシャル・サーリンズである。彼は「経済は社会のなかに埋め込まれている」と考えつつ、『石器時代の経済学』において、互酬性（相互性）を「二当事者間の財の双方向的な移転」と定義し、そのあり方を図 2-2 で示すように、次の三類型に整理した（サーリンズ 1974=1984: 233-235）。

まず、「一般的互酬性」は、利他的のみなされる取引であり、援助が一方的に与えられ、もし可能かつ必要であればいつか返礼されるような交換である。具体的には、共有、もてなし、無償贈与、手助けといった行為、さらには「親族としての義務」や「高い身分に伴う義務」などが含まれる。

また、「均衡的互酬性」は、直接的な交換であり、返礼は受け取ったものに対する慣例的な等価物とされる。返礼の遅延はほとんど認められず、限定された短い時間内に、同等の価値や有用性を持つ返礼を求める取引である。民族誌に描かれる贈与交換や交易、売買などが典型例である。

さらに、「否定的互酬性」は、罰せられることなく「ただで何かを得ようとする」試みであり、さまざまな占有の形態を含む。物々交換における一方的な利得の追求、値切り、策略、窃盗など、純粹に功利的な優位性を目指す取引がここに含まれる。

図 2-2 互酬性の三類型



注：サーリンズ（1974=1984）；糸林（2014）による筆者作成

サーリンズは、これら三つの互酬性を、連帯の極（一般的互酬性）、その中間（均衡的互酬性）、反社会性の極（否定的互酬性）を結ぶ連続体として位置づける。そして、どの互酬性が選択されるかを規定するのは当事者間の社会的距離であると考ええる。親族関係など社会的な結びつきが近い場合には一般的互酬性が優勢となり、親族的・社会的な距離が大きくなるにつれて、均衡的互酬性、さらには否定的互酬性へと傾いていくと指摘している（サーリンズ 1974=1984: 233-235）。

以上のように、互酬性は「恩恵に対してお返しをする」という基本原理として、人々のあいだに感謝や義務感、信頼を生み出し、継続的な交換関係を支える役割を果たしてきた。しかし、互酬性がどのような社会関係を形成するのかは、恩恵のやり取りが誰と誰のあいだで行われるのか、またどのような方向で循環するのかによって大きく異なる。

¹⁷ Gouldner, A. W. (1960)による「互恵の規範」の指摘にもある通り、互酬性は人間社会の普遍的な道德規範であり、交換関係の安定に不可欠である。

3.2.2 限定交換と一般交換

互酬性の原理を、集団構造や婚姻規則のレベルから類型化したのが、レヴィ＝ストロース（1949＝1977-1978）による限定交換（restricted exchange）と一般交換（generalized exchange）の区別である¹⁸。限定交換は、二者間の資源の直接交換であるに対し、一般交換とは、直接的な見返りを特定の相手からすぐ得るのではなく、集団内で恩恵が巡回するような交換形態を指す。例えば、A が B を助け、B は C を助け、やがて別の誰かが A を助ける、といった循環的な助け合いが一般交換である。交換の義務が特定化されていないため、「今はお返しできなくても、いずれ誰かが返してくれるだろう」という信頼が必要になる。前述したクラ交易（本章 3.1.2 節）は、こうした一般交換の事例であり、互酬的な義務が制度化された形態と言える。

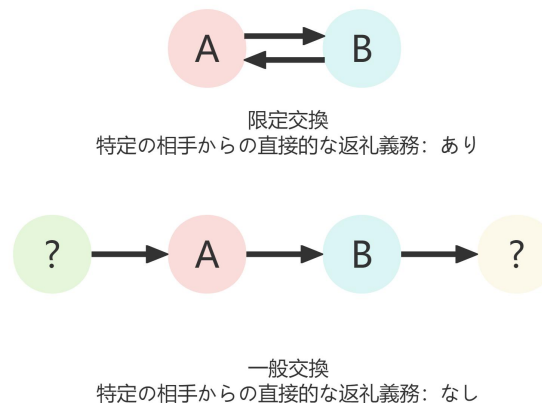


図 2-3 限定交換と一般交換

レヴィ＝ストロース（1949＝2000）；による筆者作成

ブラウ（1964＝1974）は、「社会的交換は厳密な経済的交換とは異なり、特定されない義務を伴う」点を強調し、互酬的義務の存在ゆえに信頼の感情が重要になると述べた。つまり、社会的交換過程では互酬的な義務や感謝、信頼が生まれるのに対し、純粋な経済的交換ではそのような感情は生じにくい。この信頼関係に基づく互惠関係が形成されることで、個人同士だけでなくコミュニティ全体の結束が強まる。さらに Ekeh, P. P.（1974）は、既存の SET 理論を総合し、限定交換よりも一般交換のほうが成員間の相互信頼を高めるため社会的統合機能が強いと論じた（次節で詳述）。

震災ボランティア研究において、SET 理論の観点から一般交換として理解できる事例として、渥美（2012、2014）が提示した「被災地のリレー」がある。これは、かつて災害時にボランティアや他地域から支援を受けた被災地の住民が、その後に発生した別の被災地を今度は自ら支援するという連鎖的な支援のあり方を指す。渥美は、支援を受けた側の住民が、その経験を単なる「ありがたい出来事」としてではなく、自分の内に残る「負債」として受け止め、別の被災地を支援することでようやくその負債を返済できたという安堵感を抱く点に注目する（渥美 2012、三谷 2015）。すなわち、「被災地のリレー」は、直接自分を助けてくれたボランティア個人ではなく、次に困難に直面した別の被災地に向けて恩を「回す」実践として、一般交換の一形態とみなされる（三谷 2015）。

3.2.3 社会的関係へ及ぼす影響

さらに、社会的交換が社会的関係に及ぼす影響については、Emerson, R. M.（1981）の「交換ネットワーク理論」をはじめ、Ekeh, P. P.（1974）、Molm, L. D.ほか（2000、2007）なども論じている。彼らは、交換関係の構造的差異が人々の感情的結びつきや連帯感にどのような影響をもたらすのかを明らかにしようとしてきた。

Ekeh, P. P.（1974）は、既存の SET 理論を総合し、限定交換よりも一般交換のほうが成員間の相互信頼を高めるため社会的統合機能が強いと論じた。実際に Uehara, E.（1990）の社会ネットワーク調査では、限定交換よりも一般交換のほうが信頼感や協力行動を促進することが示された。ただし Molm, L. D.ほか（2007）の実験では、交渉を通じ

¹⁸ レヴィ＝ストロースは『親族の基本構造（下）』において、親族間における女性の交換をめぐる婚姻規則を分析し、互酬的な贈与が特定の二者間で直接に完結する場合（限定交換）と、集団内をめぐり巡る形で行われる場合（一般交換）とを区別し、それぞれが社会統合にもたらす効果の違いを論じた（Lévi-Strauss 1949＝花崎皋平ほか訳 1978：741-763）。

て行動を決める交渉的限定交換よりも、交渉なしに行動を決める均衡的限定交換のほうが、信頼感や公正さの認知が高まることが示された。均衡的交換は交渉的交換に比べて、相手が協力するかどうかわからない不確実性の高い状況であるため、協力行動を相手の信頼性や公正さへと帰属しやすいと考えられる。一般交換は交渉のない交換であるため、従来の議論は、交換形態の違いと交渉の有無を混同していた可能性がある（大澤ほか2012）。したがって、信頼や協力を高める要因が、「一般交換」という構造それ自体にあるのか、それとも「交渉を伴わない不確実な状況」で互酬性が働く点にあるのか、現在の重要な論点となっている。

3.3 SET 理論の限界と新しい視点

3.3.1 SET 理論の限界

以上の議論から、SET 理論は物質的資源だけでなく、感情・承認・象徴といった非物質的資源の授受をも視野に入れ、人々の相互行為を報酬とコストの過程として捉える枠組みを形成してきた。また、限定交換・一般交換といった交換の構造の違いに注目することで、個人間のやり取りがコミュニティ全体の信頼や連帯、あるいは権力関係の形成にどのようにつながるかを分析する理論的視点を提供している。

一方で、SET 理論にはいくつかの限界も指摘されてきた。功利主義的な前提に依拠するため、利他的無償共助のように明確な見返りを期待しない行為をどのように位置づけるかという問題が残されている。また、多くの議論は平常時の継続的かつ反復的な対面関係が成立する相互作用を前提としており、災害やパンデミックのような極端な危機状況における行為を十分に扱ってこなかった点である。さらに、ホーマンズやブラウら、主として米国の社会学者によって発展させられてきた SET 理論は、三谷（2015）が指摘¹⁹するように、キリスト教圏の対人関係を暗黙の前提としており、そのまま東アジア社会に適用しうるかどうかはなお明らかではない。

表 2-3 SET 理論の適用上の課題

	従来の理論	「武漢ロックダウン」の事例
基準	市場調達原理	政府による施策
文化	西洋個人主義社会	東アジア集団主義社会
状況	日常・対面関係	緊急事態・オンライン空間
時間	継続的かつ反復的	一時的かつ一回きり

これに対して、2020 年初頭の「武漢ロックダウン」は、緊急事態下で人びとの移動が制限されるなか、オンライン空間を通じた一時的な関係において互助行為が展開された事例である。また、その舞台となるのは東アジアの集団主義的な都市社会であり、資源の流通や行動の制約は市場メカニズムだけでなく政府による強力な施策に規定されていた。そのため、本研究のフィールドは、従来の理論から大きく逸脱している。したがって、本研究はそこから地域性やオリジナリティを備えた枝葉を広げていくことで交換理論研究の発展の一助としたい。

3.3.2 新しい視点：Lawler の交換モード

こうした議論を踏まえ、近年の SET 理論およびその派生理論は、交換のあり方をいくつかの類型に整理している。特に Lawler, E. J. (2001) は、次の四種類の交換モードを区別している。

These are (a) productive exchange, that is, coordinating efforts or combining resources to generate a joint good; (b) negotiated exchange, that is, negotiating an explicit agreement or the terms of a trade; (c) reciprocal exchange (sequential, often tacit, giving of benefits across time) and (d) generalized exchange (providing unilateral benefits to one actor or member of a network or group while receiving them from one or more other members;

(Lawler, E. J. 2001:334)

¹⁹ そもそも日本人の恩返しは、自分に恩恵を施した特定の相手に返報するものとされており、西欧人にとっては奇異に映るものであった。神の恩寵への返礼として他者に善意を施すユダヤ・キリスト教圏の人々にとって、特定の相手への恩返しは奇妙なのである。

表 2-4 が示すように、Lawler, E. J. (2001) による四つの交換モデルの分類は、交換形態の違いと交渉の有無の違いを捉えると同時に、交換形態の違いが社会関係に及ぼす影響をも視野に収めている。近年の交換行為パターンを整理した代表的な枠組みとして位置づけられており、関連する諸分野の研究で広く参照されている (Serenko, A.ほか 2016 ; Zhou, Y.ほか 2023 ; Horak, M.ほか 2024)。

表 2-4 交換のモード

	事前に条件の交渉するか	互酬性（見返りのあり方）	関係の特徴	社会関係への影響
生産的交換 (productive)	交渉というより協働	共同で生み出した成果を共有	協同性・共同産出・責任の共有	共同責任・「われわれ感」
交渉的交換 (negotiated)	明確に条件を交渉する	即時的・契約的な報酬	契約性・制度的安定性	契約的な信頼・安定性
相互交換 (reciprocal)	条件を交渉しない	後日の返報（保証されない）	人際性・互酬性・義務感	親密で情緒的な紐帯
一般交換 (generalized)	交渉しない	他者または集団から返ってくる	三者以上のネットワーク	集合的な連帯感

注：Ekeh, P. P. (1974)、Emerson, R. M. (1981)、Molm, L. D.ほか(2000)、Lawler, E. J. (2001)、稲葉 (2012) により筆者作成

さらに、Lawler, E. J. (2001) は、それぞれの交換モードが生み出される社会関係の性質に異なる影響を与えると指摘している。生産的交換は、複数の行為者が協力して一つの成果物を生み出す点で相互依存性が高く、共同責任や「われわれ感」が強まりやすい。その結果、参加者のあいだには協調的で長期的な関係が形成され、集団内部の情動的結束が高まる傾向がある。これに対して交渉的交換は、Molm, L. D.ほか (2007) および稲葉 (2012) が指摘するように、事前に条件を明示して取引を完結させる交換であり、互いの権利・義務が明確である分、関係は計算的・道具的になりやすいが、見返りが予測可能であるため制度的安定性や契約的な信頼を高める。また、相互交換は、時間を隔てた贈与のやり取りを前提とするため、将来の返礼を信頼することが不可欠であり、恩義や義務感を通じて親密で情緒的な紐帯を強化する。

さらに、一般交換は、特定の相手からの直接の返礼を期待せずに第三者や集団に向けて一方的に資源を提供する形態であり、恩恵の循環がネットワーク全体に広がることで、個々の二者関係を越えた広範な互酬性と集合的な連帯感を生み出し (Ekeh, P. P. 1974、Emerson, R. M. 1981)、先に見た Uehara, E. (1990) のネットワーク調査でも確認されている。この点で、一般交換は新たなつながりを生み出し、ネットワークの拡張とコミュニティ全体の統合にとって重要な役割を果たすと考えられる。

3.3.3 情動の社会的交換理論

ただし、交換モードの差異が信頼や連帯を強める理由は、互酬性構造や交渉の有無だけでは十分に説明できない。そこで本研究では、従来の SET 理論がもつ功利主義的前提を補完する視点として、Lawler ら (2008) が提唱する「情動の社会的交換理論 (Affect Theory of Social Exchange)」を導入する。Lawler ら (2008) は、交換が円滑に成立し成果が得られること自体が達成経験となり、成功した交換がポジティブな情動を生み、その情動が関係や集団という社会単位へ帰属されうる点を強調している。

We posit, and have found empirically, that solving an exchange problem is an accomplishment that produces positive emotions; and under some conditions, actors associate these emotions with their relational or group affiliation.

(中略) These effects are indirect and operate through an endogenous causal chain: (1) more frequent exchange generates more positive feelings; (2) more positive feelings generate a perception of the exchange relation as a unifying

(cohesive) force; and (3) greater perceived cohesion promotes commitment behavior.

(Lawler ほか 2008: 522-523)

つまり、こうした情動の帰属が生じると、反復的な交換であればあるほどポジティブ感情が蓄積し、その結果、当該の交換関係が凝集性（cohesion）の感覚が高まると指摘している。そして、このように高まった凝集性は、内生的連鎖を通じて、過去に交換した相手との交換を継続しようとするコミットメント行動（commitment behavior）を促進するとされる。

とりわけ、生産的交換や見返りが不確定な相互交換・一般交換では、協働の達成や不確実性の克服が強いポジティブ情動を生みやすい。その情動が社会単位に帰属されることで凝集性が強まり、その結果として交換の持続と危機状況下におけるミクロな秩序形成が促されると考えられる。とりわけ Horak ほか（2024）は、この枠組みをパンデミック期の北アメリカ地域社会に適用し、危機状況下では交渉や契約を伴わない相互交換・一般交換がむしろ社会的連帯を強め、地域ネットワークを再編成することを指摘している。こうした議論は本研究にとっても重要な示唆を与える。

3.4 ソーシャル・キャピタル理論の起源と発展

以上のように、SET 理論は、個人がどのような報酬・コスト構造のもとで互酬的な行為を選択するのかを説明する点に強みをもつ。他方で、交換関係が中間団体や制度的枠組みのなかでどのように社会的統合や SC の形成へと接続されていくのかについては、十分に検討されてこなかった。

そこで本研究では、ミクロな交換行為の累積がメゾ・マクロレベルの信頼や互酬性とどのように結びつくのかを考察するため、SC 理論を取り入れる。

SC（または社会関係資本、社会的資本）理論は、1980 年代に誕生して以来、社会学、経済学、政治学など多くの学問分野で広く議論され、発展してきた。現在まで、学界ではソーシャルキャピタルの概念について統一した見解がなく、様々な解釈が存在する。そのため、本節では、これまでの主な SC に関する議論をレビューし、Portes（2000）、筒井（2007）、稲葉（2011）、佐藤（2019）の整理を取り入れ、ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）、ジェームズ・コールマン（James Coleman）、ナン・リン（Nan Lin）、ロバート・パットナム（Robert Putnam）、エリノア・オストロム（Elinor Ostrom）による定義を概観する。

そこで本節の構成は、まず SC の概念提起（3.4.1 節）をレビューし、SC に関する議論を三つの立場に分けて整理する（3.4.2 節-3.4.4 節）整理する。そして次節（3.5 節）では SC の災害時における効果をまとめる、

3.4.1 概念の提起：ブルデューとコールマン

SC という概念を体系的に提唱し議論される以前に、教育学や経済学の分野においては、Hanifan（1916）、Jane Jacobs（1961）、Glenn Loury（1977）などの学者によって SC について論じられていた。しかしその後、SC に関する活発な議論はなく、その概念が再び注目を浴び始めたのは、1980 年代に入りフランスの社会学者ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）がその概念を本格的に社会学へ導入したためである。。

ブルデューは、階層間移動のコンテキストで関係主義的な方法論に基づいて「界」と「資本」の概念を提唱し、日常のプラティクとは、各人が特定の界においてハビトゥスを行使して、資本を獲得するとした。さらにブルデューは資本を三つに分類した：経済資本、文化資本と社会関係資本（SC）である（Bourdieu, P. 1979）。さらに、ブルデュー（Bourdieu 1986）は、SC を、以下の引用文が示すように、成員が所属する集団において形成される持続的な人的ネットワークに結びついた、現実的または潜在的な諸資源の総体として定義している。

Social capital is the aggregate of the actual or potential resources which are linked to possession of a durable network of more or less institutionalized relationships of mutual acquaintance and recognition — or in other words, to membership in a group — which provides each of its members with the backing of the collectively-owned capital, a “credential” which entitles them to credit, in the various senses of the word.

(Bourdieu, P. 1986 : 248)

すなわち、SC とは個人が権力やリソース配分の決定権にアクセスするためにもっている家族・血縁関係や人的ネットワーク、コネクションといったものを指す。そこで SC は、階級による社会の階層化や搾取の構造を説明する概念として用いられた。つまり、個人がもっている SC が教育機会、雇用機会を規定し、その結果、社会は分化さ

れ固定化されるという議論が展開されている（Bourdieu, P. 1986、坂本 2003）。

一方、ジェームズ・コールマン（James Coleman）は、ブルデューと同じように、SC を経済学の物的資本や人的資本（Human Capital）²⁰と同様に「資本²¹」として、人々がお互いの関係を維持・強化するために行う投資行動の有無に応じて増加したり減価したりするものとみなした。しかし、ブルデューがSCを「社会を分化させる仕組み」として捉えたのとは対照的に、コールマンは「社会における人々の結びつきを強める機能をもつもの」として位置づけた。

彼の著書『Foundations of Social Theory』（Coleman 1995）によれば、SC とは、「個人に協調行動を起こさせる社会の構造や制度」を指し、単一の実体ではなく共通の機能をもつ多様な実体の集合であり、その具体的形態として、義務と期待、情報の潜在的可能性²²、規範と実効性のある制裁、支配関係、他の目的に充当される社会組織²³、意図的組織などを挙げられている（コールマン 1990=2004：480-490）。このように、「合理的選択論者」という立場をとったコールマンは、ミクロとマクロの結びつきを切り口としつつ、合理的個人がどのように協調行動を起こするのかを、社会的ネットワークの存在や信頼・互惠といった規範の働きから説明しようとした。

それからSCに関する議論が活発し、現在まで、学界では統一した見解がなく、様々な解釈が存在する。したがって本研究で用いるSC概念の位置づけを明確にするために、筒井（2007）を参照しつつ、先行研究における二つの立場を整理しておく。

筒井によれば、図2-4が示すように、SC論にはおおまかに次の二つの流れがある。第一に、SCを社会的な共有財とみなし、それが社会の成員全員に何らかのプラスの機能を果たしていると考ええる立場。第二に、SCを個人の持つ社会関係とみなし、それが個人に何らかの便益をもたらしていると考ええる立場である（筒井 2007）。

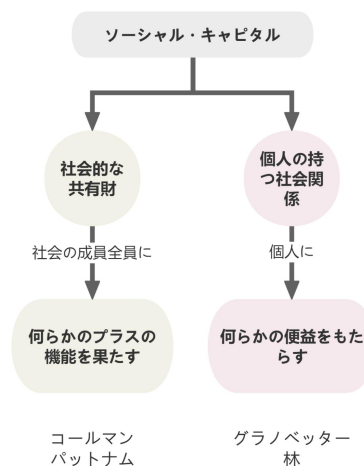


図 2-4 SC 理論の二つの立場
注：筒井（2007）より筆者作成

3.4.2 第一の立場：コールマンとパットナム

第一の立場の代表としては、パットナムが広く知られているが、理論的な枠組みを提示したのはコールマンである（コールマン 1990=2004）。

²⁰ 人的資本（Human Capital）は、一個人によって習得される技能と知識のなかに体现される（コールマン 1990=2004）。

²¹ 物的資本が有形であるのに対し、人的資本とSCはいずれも無形であり、とりわけSCは小規模で閉じた関係のなかで形成・蓄積されやすく、外部からは見えにくい、これら三者は相互に転換可能であるとされる。

²² 情報を取得するにはコストが伴うが、既存の社会関係を利用することで情報を取得する上でかかるコストを削減することができる例えば、ある女性が流行の服装を身に着けたいと望んでいるが、最新のトレンドスタイルについて知らない場合、彼女は友人の中で最もトレンドに詳しい人から情報を得ることで情報取得にかかるコストを削減しているのである（Coleman 1995）。

²³ 特定の目的で設立された組織は、他の目的にも利用され得るため、「特定の目的以外でも」使用可能なSCを形成することができる。例えば、ニューヨーク印刷工組合は印刷工によって構成され、印刷工同士の交流を目的に組合員は「印刷工人クラブ」という社交的組織を組織したが、雇用主が適切な印刷工を探し、印刷工が仕事を探す際にもこの組織が役に立ったことが明らかになっている。他にも、自発的に設立され公共財の性質を持つ連合会も具体例として挙げられる。同じ学校に子供を通わせる一群の保護者が家長教師連合会（PTA）を結成したが、この組織は、設立者だけでなく、学校、学生、そして他の保護者にとってもSCとして機能した。

前節で議論したが、コールマンはブルデューとは逆に、SCを「社会における人々の結びつきを強め、協調行動を促す社会構造や制度」と捉えた。重要な点は、SCは個人ではなく「人と人との間」に存在する資本だということである。具体例としてコールマンは、子供の教育研究で「親同士が知り合いで互いに監督し合える地域社会では子供の成績が向上する」「高密度なネットワークでは規範が有効に機能する」等を示し、信頼やネットワークといった社会的構造が個人の行動（例えば高校中退率）に影響を与えることを実証した。コールマンの議論では、相互扶助による義務と期待、情報の流通経路、規範と制裁といった要素がSCの具体的形態として挙げられている。また、地域社会におけるネットワークや規範、制裁のあり方の違いが、犯罪率などの機能面での違いとして現れるという理解である。

ロバート・パットナム（Robert Putnam）は、コールマンの研究を基にSCの概念を個人レベルから集団・地域社会レベルへと拡張し、政治学の研究に導入した。とりわけイタリアの地域共同体研究にもとづく著書『Making Democracy Work』（1993）を通じて、この概念を広く知らしめた。パットナムは、自発的なグループへの参加度を通じてSCを研究し、この著作において市民参加ネットワークという視点を提起する。彼によれば、共有する歴史と独自の文化環境をもつ地域では、人々が密接な関係を築きやすく、そのような関係から成る強固な市民参加ネットワークが形成される。このネットワークは、人々の信頼関係を破壊する行為に対して制裁を加えることで一層強化される。

パットナムの定義によれば、「SC」とは、人々の協調行動を円滑にすることで社会の効率性を高めるような社会組織の特徴、すなわち「信頼」「規範」「ネットワーク」を指し、信頼や規範といった機能としてのSCが、経済成長、政治的パフォーマンス、健康といった側面にさまざまな利便性をもたらすと論じられる（Putnam 1993, 2000）。この議論の流れにおいては、SCは特定の個人の所有物というよりも、コミュニティや地域社会に共有された「社会的な共有財」として想定されており、投票率や地域組織への参加率、ボランティア活動の頻度といったマクロ指標、さらには自発的なグループへの参加度を通じて把握されてきた。

パットナムは後の研究『孤独なボウリング（Bowling Alone）』（2000=2006）において、アメリカ社会における投票率や社会活動（PTA など）への参加率の低下、すなわち人々のつながりの希薄化を「SCの衰退」と呼び、危機感を示しつつ、個人間のつながり（社会的ネットワーク）と、そこから生じる互酬の規範や信頼がSCであると改めて述べた。この定義は非常に広範であるが、SCはその作用する範囲や性質に応じて複数の類型に分けられることがある。具体的には、パットナムは共同体内の紐帯に着目して「結束型」SC（bonding）と「橋渡し型」SC（bridging）の区別を導入した（パットナム 2000=2006:19-20）。結束型SCは家族や親密な友人、同質的な集団内部の強い絆に基づく信頼と互助関係であり、内部の結束力や支え合いをもたらす。一方、橋渡し型SCは異なる集団同士を緩やかにつなぐネットワークに由来し、外部から新奇な情報や多様な資源へのアクセスを可能にする。さらに近年では、権力や社会的地位が異なる階層をつなぐ「連結型」（linking）SCも第三の類型として指摘されている（3.5で後述）。

つまり、パットナムにとって、SCは個人の資産ではなく、集団や国家の資産であり、その重要性を認識するならば、個人の機会を増やすのではなく、コミュニティの発展に注力し、さまざまな社会組織の存在を支援すべきだと強調している。

3.4.3 第二の立場：グラノベッターとリン

これに対して第二の立場は、SCを個人レベルの社会関係資源としてとらえる。筒井（2007）は、この流れの代表としてグラノベッター（Granovetter 1983, 1985）とリン（Lin 2002）を挙げている。グラノベッターの研究は、「弱い紐帯の強さ（The Strength of Weak Ties）」という議論を通じて、親密な強い紐帯だけでなく、知人レベルの弱い紐帯が新しい情報や機会へのアクセスにおいて重要な役割を果たすことを示し、理論的・経験的に「ネットワークが実際にどのように役に立つのか」を明らかにした（Granovetter 1983）。彼によれば、親友や核家族といった緊密な社会的つながり（強い紐帯）は、強い支援や統制には適しているが、強い紐帯どうしが密なネットワークを形成すると、メンバーが共有する情報は互いに似通ってしまい、新しい情報を得るための「探索」においてはあまり有効ではない。一方、単なる知り合い関係のような弱い紐帯は、情報の重複が少ないため、新たな仕事の機会や資源に関する情報を得るうえで極めて有効であり、特に求職の場面などでは、しばしば家族や親しい友人よりも重要な役割を果たすとされる。

グラノベッターの観点から見ると、強い紐帯同士はクリーク（clique）的に凝集しネットワークの中心に位置づけられやすいが、その分、異なる集団をつなぐブリッジとして機能することは難しい。これに対して、弱い紐帯はネ

ネットワークの周辺に位置づけられやすく、異なるネットワークを結びつけるコネクションとして働き、新しい情報や資源の流入を可能にする。ただしその一方で、弱い紐帯は特定のネットワーク内部で強い影響力を発揮することは難しいという限界もあり、これが弱い紐帯のメリットでもありデメリットでもあると指摘されている(リン 2011)。

このような議論をふまえ、ナン・リン(Nan Lin)は、社会ネットワークの研究を通じて社会資源理論を提唱し、その基盤の上にSC理論を構築した。リン(2002=2008)は、SCを「社会関係に投資され、市場でのリターンを期待する資源²⁴」と定義し、行為者は自らの人的資本や経済資本だけでなく、親族、友人、職場の同僚などとの関係を通じて他者が保有する資源にアクセスできると考える。このように社会関係ネットワークに埋め込まれ、そこを通じてアクセス・動員できる情報、影響力、社会的信用、情緒的支援などが、個人にとってのSCである。

SCは一定の社会構造の中で存在し、行動には社会の規則に従う必要があるが、目的を持った行動によって取得や移動が可能であると林(2002=2008)は強調している。ここでの関心は、SCが、教育達成、職業キャリア、所得水準、生活上の困難への対処といった個人のライフチャンスにどのような便益をもたらすのか、という点に置かれている。

このように、SC論には、社会全体の統合やガバナンスに関わる「社会的な共有財」としてそれをとらえる立場と、個人が保有するネットワークを通じて動員し得る社会関係資源としてとらえる立場の二つが併存している。

3.3.4 第三の立場：オストロム

さらに、本研究は筒井(2007)が提示したこの二つの立場以外に、エリノア・オストロム(Elinor Ostrom)の視点も重要視すべきであると捉える。その理由は、オストロムが公式・非公式の制度の双方をSCの構成要素として捉えており、その点が災害社会学の視角で論じられてきた創発的規範の理解と接続しうるからである(本章2.2.2節を参照)。

具体的には、オストロムは、協力すればより良い解に達しうるにもかかわらず、各人が自己利益を優先するために最善解に至らないという集合行為のジレンマに着目し、SCがその克服を可能にする個人の能力を高めると論じる(Ostrom 2009 : 12-13)。

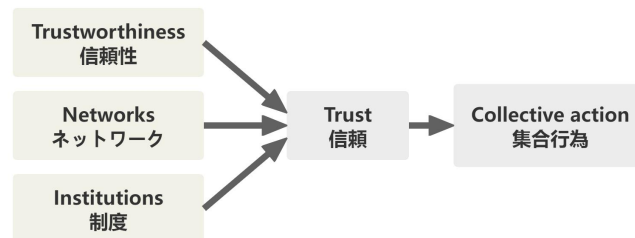


図2-5 オストロム：SCと集合行為達成とのリンク

注：Ostrom ほか (2009 : 23 Figure 2.1 Trust, forms of social capital and their linkage to achieving collective action)
を改変

日本語訳は稲葉 (2024) を参照

図2-5は、オストロムのSC概念が集合行為の達成へと結びつく論理を簡略化したものである。すなわち、行為者の信頼性(trustworthiness)、相互に連結されたネットワーク、そして正直な行動に報いる公式・非公式の制度(institutions)が相乗的に作用することで信頼(trust)が醸成され、その信頼が集合行為を容易にするという連鎖である。

以上の議論を踏まえると、オストロムはSCの中核に「制度(institutions)」を位置づける。彼女のSCの定義をコールマンやパットナムと比較すると、パットナムが「信頼・規範・ネットワーク」といった歴史的に蓄積された文化的資源を強調し、とりわけ互酬性規範をコミュニティ・社会水準における協調の基盤として捉えてきたのに対し、オストロムはこの「規範」概念を、ミクロな相互行為のなかで形成・更新されながらマクロな集合行為の達成

²⁴ リン(2002=2008)は資源を「社会や集団の中で特定の手続きを経て価値が認められたもの」と定義し、個人資源と社会資源に分類した。個人資源は個人が所有する財産や知識など、社会資源は個人の社会関係ネットワーク内に埋め込まれた資源(権力、富、声望など)を指す。社会資源は個人が目標を達成するための効果的な手段であり、個人資源が社会資源の獲得に大きく影響する。

へと接続していく動態的な要素として整理し、その担い手を公式・非公式の rules-in-use としての institutions に求めている。

具体的にいうと、彼女のいう institutions とは、制度を具現したハードな組織というよりもソフトなルールであり、非公式のルールまで含めた概念であって、どのような行動が必要か、禁止されるか、あるいは認められるのか、もしルールが守られなければどのような制裁が認められているのかを定めた「ゲームのルール」を指し、単なる道德的規範よりも意図的に設計・変更しうるものとされる。オストロムは以下のように述べている。

We define institutions in broad terms as prescriptions that specify what actions (or outcomes) are required, prohibited or permitted, and the sanctions authorized if the rules are not followed (Ostrom et al., 1994: 38; Crawford and Ostrom, 2005). Institutions are thus the rules of a game that people devise (North, 1990).

(中略) To provide themselves with working rules to deal with their collective-action problems, individuals need to invest time and resources to devise, revise, monitor and sanction.

(Ostrom ほか 2009 : 28-29)

ここで重要なのは、従来のハードな制度ではなく、参加や監視、罰則、紛争解決などのルール配置を通じてインセンティブ構造を変化させ、参加者間の期待と信頼を形成する現場のソフトな制度に注目している点である。

オストロム自身は災害やパンデミックといった危機状況を正面から論じたわけではないが、制度・規範が相互行為の過程で生成・調整されつつ集合行為の達成へと結びつくというこの動態的視角は、ロックダウン下の互助行為に伴う創発的秩序を捉えようとする本研究に重要な示唆を与える。

3.4.5 小括

以上のことから、本研究は SC の定義を表 2-5 に示すように整理することができる。

表 2-5 SC の定義

	学者	社会ネットワーク	信頼	追加要素	文脈
第一の立場 (筒井 2007)	Coleman (1988=2006)	閉鎖的社会ネットワーク	個別的信頼		高校生と親の間
	Putnam (1993=2001)	社会ネットワーク	一般的信頼	互酬性規範	集団や国家の資産
	稲葉 (2011、2024)	社会ネットワーク	一般的信頼	互酬性規範、心の外部性	
第二の立場 (筒井 2007)	Granovetter (1973、1983)	個人が持つ社会関係			ネットワークが実際に役に立つ
	リン (2002=2008)	個人を中心とした社会関係			社会理論・経済理論
第三の立場	Ostrom (2009)	社会ネットワーク	信頼性	公式・非公式制度	集合行為のジレンマの克服

注：筒井 (2007)、稲葉 (2011)、佐藤 (2019) より筆者作成

3.5 SC の災害時の効果

特に災害復興に関する先行研究の多くは、SC 理論を中心に展開されている。例えば、アルドリッチ (2012=2015) は『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か』で、高い水準の SC が復興の原動力として大きな影響を与えることを主張している。同じ自然災害の被災地でも、SC の豊かな地域の方がそうでない地域よりも復旧のスピードが速いことを示している。

また、Hawkins ほか（2010）の研究では、SC の各類型は災害状況下で相補的に機能することが明らかになっており、緊密な絆（結束型 SC）が即時の支援に重要である一方で、橋渡し型と連結型²⁵の SC が長期的な生存と広範な近隣やコミュニティの再活性化につながる道筋を提供することが検証された。具体的には、災害初動期には、「結束型」SC を通じて物資や心理的サポートが提供される。「橋渡し型」と「連結型」の SC を通じて、（被災地の）人々は情報、資源、生活用品、食料などの支援を受ける傾向にあることが明らかになっている。さらに、「結束型」SC を媒介として「橋渡し型」と「連結型」SC が連携することで、最大の効果がもたらされることも示されている（桑名 2019）。

一方、SC の負の側面も指摘されている。アルドリッチは、「結束型」の SC は、社会資源の乏しい被災住民が支援の輪から外される可能性を生むなど、ときに意図せずに負の影響を及ぼすことを強調している。災害救援に当たる様々な組織がそれぞれの立場や価値観を持つなかで連携を模索するには、衝突は避けられない。さらには、コロナの影響は、普段は隠されていたそれぞれの立場の違いを際立たせ、分断や対立を生み出しがちである（桑名 2020）。

大災害が人間関係に大きな影響をもたらすことは多くの研究で指摘されている。離婚率の変化に着目した研究では、ハリケーン・ヒューゴで被災した郡では、被災していない郡に比べて離婚率が上昇した一方、2001 年 9 月 11 日にニューヨークで起きた同時多発テロの後には離婚率が減少したことが報告されている（Cohan ほか 2002）。このことは、災害のタイプによって人間関係への影響が様ではなく、ときに結束強化というポジティブな方向にも働きうることを示唆している。その背景として、自然災害は目に見える物理的なダメージがあるため、復旧や復興についての共通の課題認識や合意が形成されやすいという指摘がある（澤田 2011）。

東日本大震災においても、従来の閉じた地域性のなかで相互扶助の共同性を発揮する「よきコミュニティ」をいかに再生するかが議論されてきたが（保井 2019）、同時に、既存の地域共同体に還元されない新たなコミュニティの形を模索する必要性も指摘されている。藺田（2020）は、人々の分断を解く鍵は「想像力」にあると主張し、吉原（2015）は予期せぬ状況のなかで立ち上がる「創発性」に着目して「創発的なコミュニティの可能性」を提起している。これらの議論は、大災害が既存の社会関係を破壊する一方で、人々が新しいつながりを構想し、実践する契機にもなり得ることを示している。

こうした災害と人間関係の変容に関する議論と並行して、SC 研究では、災害や危機の場面において、地域内の信頼やネットワーク、互酬の規範がコミュニティのレジリエンスを高める要因として注目されてきた。多くの研究が、地域の SC が高いほど住民同士が助け合い、被害を乗り越える力が強いことを指摘している。例えば、阪神・淡路大震災（1995 年）の復興過程を分析した山内直人の研究では、震災後の復興速度や生活再建の充実度に地域差が見られ、その違いは地域コミュニティが有していた SC の量（絆の強さ）によると報告されている。具体的には、震災前から住民同士の交流が盛んで互助の伝統があった地区ほど、仮設住宅での見守り活動や情報共有が円滑に行われ、行政支援に頼るだけでなく自主的・相互的な復興支援が早期になされたという。

同様に、2011 年の東日本大震災でも、地域の消防団・自治会などネットワークの強い組織が初動期に救助・物資供給で大きな役割を果たし、高齢者や要配慮者の安否確認では日頃からのご近所づきあい（顔の見える関係）が決定的な役割を果たした。内閣府も、「大規模災害に対処するには住民の自助・共助を強化することが不可欠であり、そのためには日頃から地域行事などを通じて地域づくりを進めていくことが重要だ」と指摘しており、これは平時の SC 蓄積が有事の相互支援を促進するという政策的認識だといえる。

パンデミック時にも同様の傾向が見られ、新型コロナウイルス感染症の流行下では、人と人の物理的接触が制限されるなかでも、地域の隣組やオンラインコミュニティといった既存ネットワークが食料品の買い物代行や見回り支援を組織し、高齢者や病人を支えた事例が各地で報告されている。とりわけ、自治会やボランティア団体の活動が活発で住民の信頼関係が厚い地域では、「困った人を放っておけない」という規範意識が共有され、多くの住民が自主的な互助活動に参加した一方、日頃から住民のつながりが希薄だった地域では、ロックダウン下での情報孤立や支援の偏在が問題となったケースもある。これらの知見は、ロックダウンによる社会的な制約が、人々の社会的絆と連携を促進し、SC の効果を発揮する可能性があることを示唆している。

²⁵ 連結型とは、社会階層が異なる者同士を結びつけるソーシャル・キャピタルである。例えば地域コミュニティと行政機関を結ぶ関係性や、住民と NPO・企業・大学などを媒介するネットワークが連結型に相当し、公的資源の獲得や制度的支援を引き出す経路となる。

4. 本研究の理論的枠組み

4.1 SET 理論と SC 理論の相互補完性

4.1.1 SC 理論の強みと限界

3.4 で詳述したように、SC 理論は、特定の社会やコミュニティにおける協力の基盤を、信頼・規範・ネットワークといった資源として概念化し、マクロな社会統合や集合的成果を説明するうえで大きな有効性を持つ。しかし、投票率や組織参加率などのマクロ指標を用いて SC 水準を測定する研究が多いため、個人レベルの具体的な交換過程や、行為者がどのような判断を経て協力を踏み切るのかというプロセスは捉えにくいという限界を抱えている。

「武漢ロックダウン」のような極端な危機状況においては、まさにこのミクロな相互行為の編成過程こそが問われるべきであり、SC 理論だけではその生成の起点を十分に描き出せないと言える。

もっとも、SC 理論のなかにも、ミクロな相互行為とマクロな集合的成果とを動的に接続しようとする試みが存在する。たとえば本章 3.4.4 で検討したオストロム（2009）は、行為者の信頼性、ネットワーク、そして公式・非公式の制度（rules-in-use）が信頼を媒介して集合行為を促進するという連鎖に注目し、SC を動的に捉え直している（図 2-5 参照）。この視点は、SC がいかに協力へと結びつくかというプロセス理解に重要な示唆を与える一方で、個々の行為者がどのような動機や期待にもとづき互助に踏み切るのかといった具体的な交換過程までは十分に理論化していないだろう。

このように、SC 理論はなおしばしば機能主義的な視角に立っており、コールマン（1990）やパットナム（2000＝2006）も、SC を「信頼や規範が経済成長や民主主義のパフォーマンスに好ましい効果をもたらす社会的資源」として位置づけて論じてきた。しかし、Portes（2000）が指摘するように、この種の議論はしばしば、SC を信頼や規範といった望ましい社会機能として定義したうえで、その SC が再び望ましい機能を生むと説明してしまう。その結果、「社会的に望ましい働きが社会的に望ましい働きをもたらす」というトートロジーに陥りやすく、SC がいかに生成・再生産されるのかというメカニズムは十分に理論化されていないと言えるだろう。

4.1.2 SET 理論の補足

そこで本研究は、SC 理論の強みと限界を踏まえつつ、SET 理論を組み合わせることでロックダウン下の互助行為の分析を試みる。SET 理論は、とりわけ個人が互助行為に踏み切る動機やメカニズム、例えば互酬的期待、コストと報酬の比較、合理的選択、あるいは援助したいという感情に着目し、比較的ミクロなレベルで説明する枠組みを提供できると考えられる。

また、ロックダウン下の團購や物資の融通、情報提供といった互助行為では、感謝や安心、互酬性といった無形資源のやり取りにとどまらず、食料・医薬品・生活必需品など生命維持に直結する有形資源の交換が中心的な位置を占めていた。従来の SC 理論が信頼・規範（制度）・互酬性といった無形の関係資源に主として注目してきたのに対し、SET 理論はこうした有形資源の移転過程とその意味づけをも分析対象に含め、災害状況における互助の実態をより具体的に捉えうる。

さらに、前述したように、SC 理論は互助の「結果」として信頼や規範（制度）が機能する点を強調するあまり、危機状況で人びとがなぜ、どのように互助に踏み出すのかという個人の能動性や選択過程を十分に説明してこなかった。SET 理論の視点は、協力が生じた「結果」を信頼の高さとして記述するのではなく、行為者が危険や不確実性をどのように解釈し、どのような期待や感情にもとづいてコストと報酬を見積もり、リスクを引き受けて他者を支援するのかという能動的な行為選択のプロセスを具体的に描き出すことを可能にする。

以上の三つの観点から、以下の図 2-6 のように SET 理論と SC 理論の区別を整理することができる。

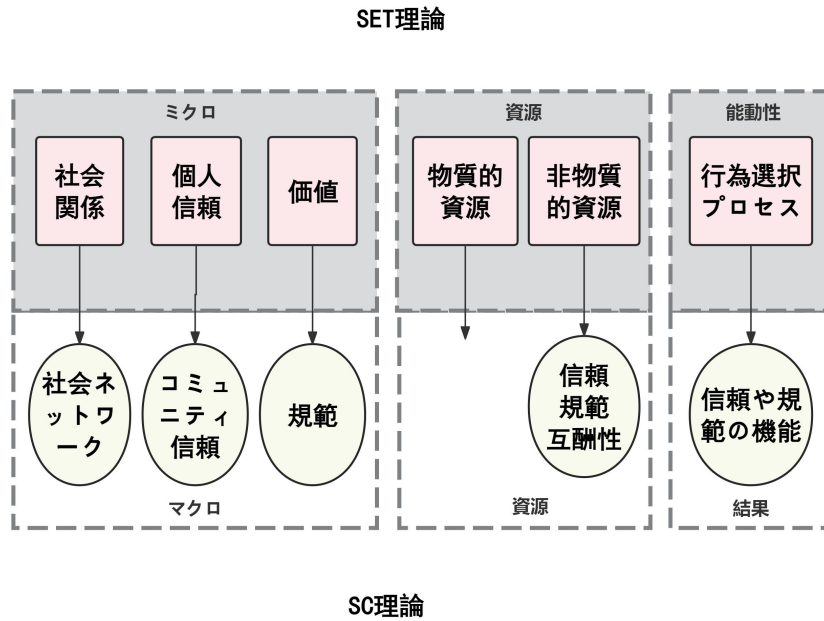


図 2-6 SC 理論と SET の区別

注：オストロムの視点を取り入れれば、規範が制度になる

4.1.3 信頼という概念の接続

ここで重要となるのが、両理論における「信頼」概念の接続である。社会的交換理論、とりわけ本章 3.3.2 節で詳述した Lawler (2008) の情動的アプローチでは、信頼は繰り返される相互交換のなかで生成される関係的な期待として理解される。交換が成功に遂行されると、当事者はポジティブな情動を経験し、その感情を相手や関係単位に帰属させることで、「この相手（この関係）は信頼できる」という評価とコミットメントが強化される。このような意味での信頼は、特定の他者とのあいだで形成されるミクロレベルの関係的信頼である。

これに対して、SC 論、特にパットナムの議論における信頼は、「多くの人びとは一般に信頼できる」というかたちで表現される一般的信頼として定式化される（パットナム 2000=2006）。一般的信頼は、未知の他者や直接の返礼が期待しにくい状況においても、他者に協力的にふるまうことを可能にする社会的な基盤であり、投票行動やボランティア活動など、広範な集合行為を支えるマクロからメゾレベルの資源とみなされる。

本研究では、これら二つの信頼概念を対立的にではなく、連続的なプロセスの異なる位相として捉え直す。すなわち、Lawler が描写するようなミクロな相互交換の成功経験が、ポジティブ感情の蓄積と関係的信頼の強化を通じて、「このコミュニティの人びとはおおむね信頼できる」というより抽象度の高い一般的信頼へと一般化されていくと想定する。そのうえで、Ekeh (1974) が論じた一般交換のように、「誰かを助ければ、直接の返礼はなくても、いずれ別の誰かから助けが返ってくる」というメゾレベルの交換様式が作動するためには、この一般的信頼が不可欠の条件となる。言い換えれば、一般交換という形態が成立しうるのであり、ここに SET と SC を架橋する一つの接続モデルを見出すことができる。

このように、ミクロな相互交換に焦点を当てる SET と、一般化信頼を中核資源として扱う SC 論を、信頼の生成・一般化プロセスとして統合的に位置づけることで、「武漢ロックダウン」下の互助行為を、個々の交換からコミュニティレベルの一般交換へと至るダイナミックな連鎖過程として記述することが可能になる。

4.2 相互強化の循環モデル

以上の検討を踏まえると、ロックダウン下の互助は、個々の交換行為（ミクロ）と、信頼・規範・ネットワークからなる SC（マクロ）を分断して捉えるのではなく、両者が相互に生成・強化し合う循環的過程として把握されるべきである。前節でみたように、SET は特定の他者との相互交換と関係的信頼の生成プロセスに焦点を当て、SC 論は「多くの人びとは一般に信頼できる」という一般的信頼を中核とする社会的資源を強調してきた。本研究は、この二つの視角を接合し、互助行為と SC の連関を示す分析枠組みとして、図 2-7 の循環モデルを作業仮説として提示する。

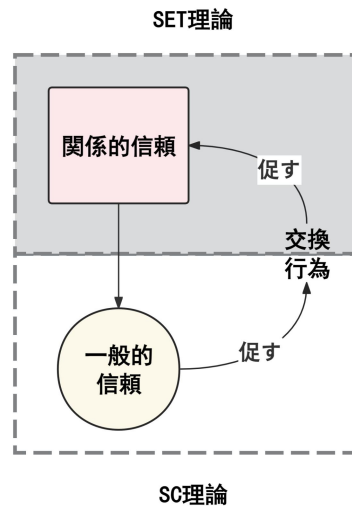


図 2-7 相互強化の循環モデル

ここで提示する循環モデルは、SC を交換の「結果」とであると同時に、その後の交換を支える「前提条件」として整理している点に特徴がある。実際、コールマン（1990）は、個人同士の相互行為の蓄積が SC という集団的な資源を生み出すことを論じており、例えば「人に親切にすれば信用という形の『預託』ができる」といった具合に、行為の結果として SC が貯まっていくプロセスを描いている。また、SC が豊かな社会では、人々は裏切られる不安が少ないため、見返りを厳密に計算せずとも協力を踏み切れると述べ、SC が協力行動を促す条件として働くことも示唆している。こうしたコールマンの議論は、SC を交換の結果であると同時に、その後の交換を促す資源として捉える視点を与えているが、もっとも、コールマン自身は、さらに体系的に論じているわけではない。本研究の循環モデルは、これらの示唆を明示的な循環過程として図式化したものであり、関係的信頼と一般的信頼の相互連関を分かりやすく示すことを意図している。

4.3 操作的定義

本研究では、SET 理論の議論を踏まえ、「社会的交換」を次のように操作的に定義する。社会的交換とは、人々が互いに価値ある資源（物質的資源および非物質的資源）をやりとりする相互行為を指し、その関係のなかで報酬・コスト・互酬性・期待といった要素が立ち上がる社会的プロセスである。本研究では、食材・医療物資・情報・感情的サポートなど、ロックダウン期に実際にやりとりされた資源を対象として、これらがどのような交換形態のもとで流通したのかを分析する。

本研究では、この社会的交換をより具体的に把握するために、前述した Lawler（2001）の四種類の交換モード（表 2-4 を参照）を操作概念として導入する。すなわち、①複数の行為者が資源や労力を出し合い、共同の成果物を生み出して分配する生産的交換、②事前に価値や条件を明確に交渉し、合意に基づいて資源をやりとりする交渉的交換、③明示的な契約を結ばず、時間を隔てて一対一の返報が繰り返される相互交換、④誰が返すかを特定せず、集団内で恩恵が巡回する一般交換の四つである。これらの交換モードは互助場面の相互行為構造を類型化するための尺度であり、交換がもたらす情動的帰結については後節（4.3 節）で別途検討する。

さらに、各互助場面がどの交換モードに該当するのか、すなわち交渉の有無、見返りの有無・関係の特徴といった点を指標として交換形態の違いを記述し、それぞれの交換形態が信頼感や義務感、連帯感などの社会関係にどのような影響を及ぼしているのかを分析する。

次に、本研究では、3.4.4 節で詳述したオストロムらの議論を踏まえ、SC を「信頼」「ネットワーク」「制度」という三つの側面から操作的に定義する。

「信頼」とは、近隣住民や團購グループのメンバーが約束を守り、不当に他者を利用しないと期待できるかどうかに関する主観的認識であり、互助経験や相手に対する評価・評判をめぐる語りとして把握する。

「ネットワーク」とは、小区内外の隣人関係や WeChat 團購グループ、ボランティア組織など、互助や情報交換が実際に行われる対人関係の結びつきの広がりや強さを指す。

「制度」とは、政府による外出制限・物資配給のルールのような公式制度と、WeChat 團購グループの発注・支払

いルールや「災害弱者への配慮」といった現場・実践による創発的な非公式制度を含む、人々の相互行為を方向づけるルール体系である。

4.4 小括

まとめると、本研究の枠組みは、パンデミックという極端な危機状況における互助行為を、一時的な「災害ユートピア」としてではなく、社会的交換と SC の相互強化過程として分析する視点を提供する。この相互強化の循環モデルを理論的枠組みとして、次章以降の実証分析では、得られたデータを「どのような資源がどのような交換様式でやり取りされ、その交換がいかなる信頼や制度に支えられていたのか、さらにその過程がどのような信頼や制度を生み出したのか」という観点から検討していく。

本章で提示した理論的枠組みは、そのための分析軸を提示するものであり、「武漢ロックダウン」における住民互助の実相を、ミクロな行為とメゾ、マクロな社会関係の三面から立体的に描き出すための土台となる。

第三章：調査の詳細

1. 調査の背景

具体的な調査の説明に移る前に、本研究の調査背景を述べ、本研究で扱う当時の武漢市の状況と特異性を説明する必要がある。本節では、まず武漢市の概要を紹介する（1.1 節）。また、日中両国は一衣帯水の隣国であるが、行政構成や住宅事情に大きな違いがあるため、中国都市部の住宅事情と行政組織の構成についても説明を行う（1.2 節）。さらに、ロックダウンの施策をまとめ（1.3 節）、「武漢ロックダウン」下で住民が受けた支援構造を明らかにする（1.4 節）。

1.1 武漢市の概要

世界で初めて新型コロナウイルスの発生が報告されたのは、武漢市だとされている。「原因不明のウイルス性肺炎」が最初に確認されたのは 2019 年 11 月 22 日であり、武漢市華南海鮮卸売市場の従業員が複数含まれていたとされる患者集団であった。その後武漢市内から中国大陆に大規模な感染が広がり、国境を越えて他の国や地域にも拡大していった。

感染拡大の「震源地」である武漢市は、1949 年の中華人民共和国建国後に漢口、武昌、漢陽の 3 都市が併合されて成立した湖北省の省都²⁶である。湖北省は、略称で「鄂」（がく）とも呼ばれている。

2020 年の時点で、武漢市は人口 1232 万超の中国有数の大都市であった。極めて人口密度の高い地区であり、中国の「国家中心都市」の一つにも指定されている。武漢市を中心とする武漢都市圏の人口は 3144.81 万人に達し、湖北省ないし華中地域の政治、経済、文教の中核機能を担っている（中国第 7 回国勢調査 2020）。

また、武漢市は流動人口が多いことも特徴的である。その理由は、武漢市が中国最大級の文教都市であると同時に、多くの出稼ぎ労働者を受け入れているからである。武漢市内には 84 の大学が存在し、学生数は 120 万人以上に達し、これは中国国内で最大規模である（中国国家统计局 2019）。これに加え労働力移動も活発であり、流動人口は 287 万人を超え、武漢総人口の 23.3%を占めている（中国第 7 回国勢調査 2020）。

さらに、武漢市は中国屈指の交通の要衝でもある。長江と京広線²⁷が交差する地理的優位性を持ち、内陸部最大の交通ハブとして機能している。特に高速鉄道網が発達しており、中国の 25 省と直結し、多くの全国主要都市への移動が数時間圏内に収められている。2019 年度の全市旅客輸送量は 2 億 5370 万人であり、そのうち航空輸送量は 2715 万人に達する。また、鉄道輸送においては、武漢鉄道局管内の年間旅客送信数が約 1 億 9000 万人に上り、道路輸送から高速鉄道・航空へのシフトが進むことで、そのハブ機能は一層強化された（武漢市統計局 2020、武漢市政府 2020）。

特に春節（旧正月）期間中には、大勢の大学生と出稼ぎ労働者が帰省するため、輸送量は年間で最多となり、「春運²⁸」と呼ばれる民族大移動現象が起きる。春運期間に移動する旅客の延べ人数は中国総人口を遥かに超え、2018 年には 29.7 億人を記録するなど、人類最大規模の人口移動と言われている（中国広播電視总台央視網 2019 年 1 月 21 日）。

武漢市交通局の予測では、2020 年の春節期間、武漢の鉄道、道路、航空の総旅客数は 1500 万人に達し、1 日平均約 37.5 万人が移動すると見込まれていた。特に武漢は 120 万人以上の大学生を抱えるため、彼らの冬休みと労働者の帰省ラッシュが重なり、ウイルスが全国各地へ運ばれる可能性があった。実際、武漢市当局は後に、ロックダウン（1 月 23 日）が実施されるまでの間に、約 500 万人以上の人々がすでに武漢を離れ、帰省や旅行に出ていることを明らかにしている（武漢市人民政府記者会見 2020 年 1 月 26 日）。

²⁶ 省都（しょうと）とは、中国における行政区分としての省の政府が所在する都市。

²⁷ 京広線は中華人民共和国の鉄道路線。北京西から広州に至る路線であり、全長は 2324Km である。中国国内で重要な路線の一つでもある。

²⁸ 春運現象は、中国で春節と呼ばれる旧正月のころに交通量が非常に多くなる現象。日本で言うところの「帰省ラッシュ」に近い。

大規模な人口移動が感染症蔓延の主因であり、移動制限が有効な対抗手段であることは、疫学や医学の領域でも明らかにされている（廖ほか 2020）。しかし、今回の流行初期は2020年の春節（1月25日）の直前と重なっていた。さらに、武漢市卫生健康委員会は当初、「人から人への感染の明確な証拠はない」との発表を繰り返していた（武漢衛健委第7則通報 2020年1月14日）。そのため、一般市民はウイルスが市中で蔓延している事実を知らされず、危機感を持ってないまま、マスクなしで公共交通機関（長距離移動を含む）を利用し続けた（湖北新聞 2020）。これが、武漢市から中国全土、さらには海外へと感染が急速かつ広範囲に拡大した決定的要因であると考えられる。

感染流行の早期において、湖北省の感染者数は中国全土の8割以上、そのうち武漢市の感染者数が7割以上を占めていた（新華社 2020）。事態が急転したのは2020年1月20日である。中国政府が派遣した国家卫生健康委員会の専門家グループ（鍾南山氏ら）が「人から人への感染」を公式に認め、そのわずか3日後の1月23日、武漢市はロックダウンに至った。これに続き、中国の31の省・市・自治区で「重大突発公共衛生事件」の第1級レベルの緊急対応が発動され、人類史上最大規模の人口を対象とした強制的な感染予防・管理体制が敷かれることとなった。

1.2 中国都市部の事情

1.2.1 中国都市部の行政組織と居住構造

まず、中国都市部における独特な行政組織と居住空間の構造について説明する。1978年、中国では改革開放政策が実施され、経済体制が大きく変更されたのに伴い、社会福祉・社会保障制度も構築されつつあった。また、中国の社会福祉の分野では、公平性を求め、福祉サービスの提供システムが従来の「単位²⁹福祉」が「社区福祉」へと移行している（立石 2002）。

現代中国の都市住民管理と行政サービスを行うのは、市と区の政府と、その下にある政府の派出機構「街道」（街道弁事処）である。その下にさらに「社区」（社区居民委員会）がある。そして、その最下層には実務的な管理単位として「網格（グリッド）」が設置され、住民の居住区である「小区」をカバーしている。これらを含めた5段階の構成を図3-1に示す。

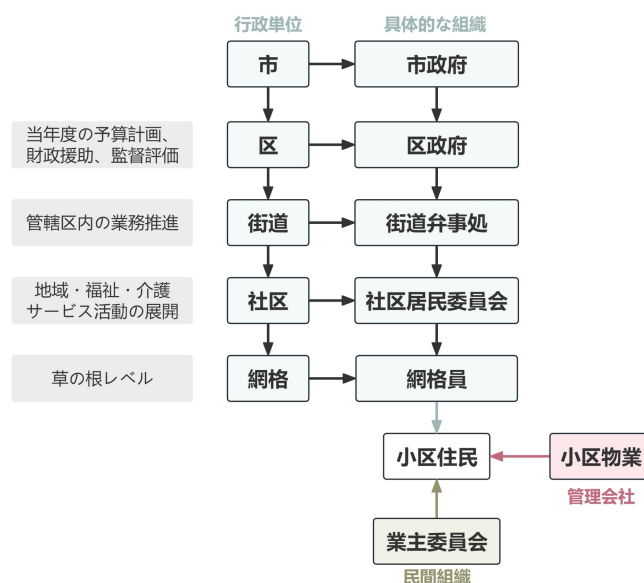


図 3-1 中国都市部の行政組織の構成図

立石（2002）、張（2013）、（朱 2014）、梁（2018）より筆者作成

「社区（中国語の意味では community に相当する）」とは、本来「生活共同体」を指す概念であり、1930年代に中国の社会学領域に登場した（羅 2007）。しかし1980年代後期以降、中国政府は社区を社会福祉や社会保障サービスの供給単位として位置づけ、これを基盤とする行政サービス体制を整備してきた。具体的には、街道弁事処

²⁹ ここでいう「単位」とは、中国の計画経済期（建国から改革開放前まで）における国有企業、行政機関、学校などの職場の総称である。当時の中国では、単位は従業員とその家族に対し、住宅の無償提供をはじめ、医療、年金、子弟の教育、食堂、入浴施設に至るまで、包括的に保障していた（武重 2006）。

がコミュニティサービスセンターを設置し、住民自治組織である「社区居民委員会（以下：居委会）」がその実務を補完・担当することで、福祉や管理業務が展開されている。このように、社区は現在の中国において行政サービスの提供拠点として機能している。

1.2.2 グリッド・マネジメント

中国は社会主義国として、2001 年以来、先端的な IT と中国伝統の人海戦術の組み合わせによって「グリッド・マネジメント（網格化管理）」と呼ばれる手法を採用してきた（鄭ほか 2005）。「グリッド（grid、網格）」とは、直訳すれば「格子、格子状の、碁盤目状の」という意味である。中国で行われている「グリッド・マネジメント」とは、市や県などの行政区域を小さな単位に区切り、その一つひとつに各分野の責任者を置き、その域内で住民との深いコミュニケーションを通じて、下からの情報収集、上からの政策の実施を徹底していく仕組みである（朱ほか 2014）。武漢では市内を 9300 のグリッド³⁰に分け、そこに約 1.5 万人の「社区网格员³¹」を配置している（長江新聞 2012、竺 2012）。

感染症を抑え込むには、人やモノの動きを、一人一人、一品一品の単位で細かく把握し、管理することが最も有効だと田中（2021）は指摘している。その指摘を踏まえると、党や政府が感染拡大という非常時に、グリッドの機能の強化に動いたこと（意図）は容易に理解できる。そして、こういった命にかかわる非常時となれば、人々は心理的にそうした強化も受け入れやすくなる。

「武漢ロックダウン」の際には、各グリッドの网格员が居委会などと連携しつつボランティアを組織し、支援活動を立ち上げた。加えて、感染の拡大防止や感染経路の特定に大きな役割を果たした「健康コード」も、まさに人の動きを「個」の単位で特定、把握するための手段であった（王ほか 2021）。

1.2.3 物理的な壁：「小区」という閉鎖空間

本研究において特に重要なのが、最下層の「小区」という居住形態である。「小区」とは、「社区」の管轄下にある居住区画を指す。その中には、複数の高層マンションや低層住宅、あるいは戸建て（ヴィラ）などが立ち並び、さらに生活に必要な商店や公園、幼稚園などの施設までもが含まれる場合がある。

日本の読者がイメージしやすい例としては、「大規模な団地」や「大学のキャンパス」の敷地全体が、高い塀や柵によって外部から物理的に完全に遮断されている状態に近い。これを都市計画や建築の用語では「ゲートコミュニティ（Gated community）」と呼ぶが、中国の都市部では富裕層に限らず、一般的な庶民の居住形態としてこの構造が定着している（繆 2004）。日本の団地との決定的な違いは、この「閉鎖性」にある。中国の都市部の住宅は、基本的に小区ごとに物理的な壁で囲まれており、外部とつながる出入り口（ゲート）は数カ所に限定され、そこには平常時から警備員（保安）が 24 時間体制で常駐している。つまり、居住者であってもゲートを通らなければ帰宅できない構造になっているのである。

パンデミック時には、この既存のゲートが完全に閉鎖され、わずかに開かれた搬入口さえも厳重に管理されたため、住民は敷地外への自由な出入りが禁じられた。この「あらかじめ街の中に存在していた無数の物理的な壁」の存在こそが、1000 万人規模の巨大都市において、極めて短期間かつ厳格な移動制限（封鎖）を可能にした基盤である。同時にそれは、住民の食料調達ルートを物理的に遮断し、塀の内側での相互扶助を不可避なものにした決定的な要因でもあった。

1.3 武漢におけるロックダウン施策のまとめ

新型コロナウイルス感染症の爆発的な拡大を受け、中国政府は 2020 年 1 月 23 日から 4 月 8 日までの計 76 日間、湖北省武漢市において厳格なロックダウンを実施した。この措置は単一の命令によって完結したものではなく、感染状況の変化に応じて段階的に通告・改定が重ねられたプロセスであった。武漢市人民政府の公式サイトによれば、同期間中に少なくとも 20 件以上の関連通告が公表されている（武漢市人民政府 2020）。これらは罰則を伴う「強制力のある行政命令」として実施され、中国の行政システム特有の強力な統制力を示している。

³⁰ 「グリッド」とはいても、実際の単位は必ずしも地図上で格子状に区切られているわけではなく、「住宅団地のこの一角」や「この通りに沿った家庭すべて」のように、ひとつのまとまりとして定められている。

³¹ 社区网格员（または网格员）とは、グリッドの担当エリア内の住民情報を把握・管理する専任職員である。雇用形態は地域差があるものの、一般に編制外の契約職（労務派遣等）として採用され、公務員とは限らない（武漢市硚口区人民政府ホームページ 2022）。

ロックダウン政策の核心は、都市機能の停止と住民行動の物理的な遮断にあった。第一段階として、対外的な移動制限が断行された。1月23日午前10時をもって市内の公共交通機関（地下鉄、バス、フェリー等）および空港・鉄道駅からの出発便が全面的に停止され、市民の市外への脱出は原則禁止された。交通遮断による医療従事者の通勤や緊急搬送の困難を補うため、市当局は約6000台のタクシーを徴用し、公用車としてコミュニティに配備する応急措置を取った。

第二段階として、市民生活の最小単位である「社区（コミュニティ）」における厳格な封鎖管理（社区封控）が導入された。特に2月中旬以降、各住宅団地は物理的に壁や柵で囲まれ、住民の出入りが厳しく制限された。生活物資の購入さえも個人的な外出が禁じられ、社区スタッフやボランティアによる一括購入・配送（團購）に依存せざるを得ない状況が作られた。この「物理的な隔離」こそが、住民間の相互扶助が必要不可欠となった最大の社会的背景である。

加えて、防疫体制はデジタル技術と強権的な衛生管理によって強化された。公共空間でのマスク着用義務化や違反者への行政処罰に加え、全住民を対象とした体温測定と発熱報告が義務づけられた。さらに、感染状況の把握には「健康コード（健康碼）」システムが導入され、個人の移動履歴や健康状態をQRコードで可視化・管理するデジタル監視体制が構築された。環境面でも、2月9日以降、都市全域での徹底的な消毒作業（一部では低濃度次亜塩素酸ナトリウムの夜間散布等）が実施された。

以上の諸政策は、感染症の拡大を物理的に遮断することを目的とした強権的かつ全体主義的な都市統制の典型であり、政府主導による感染防御システムの迅速性と強制性を特徴としていた。中国政府衛生弁法（办法）および武漢市卫生健康委員会ホームページ（2020）、大津山ほか（2020）に基づき、要約された公的衛生管理対策の変遷、ならびにロックダウン等に至る経緯、罰則規定、法的根拠を表5に示す。

表 3-1 武漢におけるロックダウン施策の変遷

	市外からの移動制限	市内の移動制限	医療に関する措置	法的根拠と罰則内容
1/23	武漢市における空港の閉鎖	公共交通営業停止、出入口封鎖による移動制限	「火神山医院」と「雷神山医院」の建設を開始	中華人民共和国突発事件応対法、中華人民共和国伝染病防治法による違法行為者に対する強制措置（罰金、拘留など）
1/24		タクシー運営停止	上海からの「援鄂医療チーム」の来漢 ³²	
1/25		水底トンネルの閉鎖、公共バスの運営停止、無料タクシーを配布する		
1/26		許可以外の車走行禁止	北京からの「援鄂医療チーム」の来漢	
1/31	湖北省全域における交通機関の停止、駅と空港の閉鎖			
2/4			「火神山医院」と「雷神山医院」を引き渡し	
2/9			3つ「クリーンアップ方針」の実施	
2/11		武漢市全域「社区封控」の実施開始		
2/16			非コロナ患者向けの専用病院を発表	
3/25	14日間に外国滞在歴がある者の個人関連情報の申請を義務付け			
3/10		「防疫健康碼」を用いた個人管理の開始		
3/24	武漢市を除く湖北省の鉄道旅客駅17駅の発着便の再開			
3/28	訪中査証および居留許可を有する外国人入国停止			
4/8	武漢市における商業航空の運便再開	道路の規制解除、鉄道営業再開		

注：武漢市卫生健康委員会ホームページ、中国政府網衛生応急辦公室ホームページ、大津山ほか（2020）より筆者作成。

ただし、場所や地域によって施策が異なる場合がある。

Pan, A.ほか（2020）の研究では公衆衛生介入の主な時点に従って武漢における流行状況を5つのステージに分けて研究を行った。この5ステージにわたる地理的な分布を図3-2に示す。それを踏まえ、本研究はPan, A.ほかの整理を参考にして、ロックダウンの後期も含め、計6つのステージの視点から、「武漢ロックダウン」に関する対策をまとめる。武漢における流行状況およびロックダウンの6ステージは図3-2に示した通りである。

³² 武漢にきた

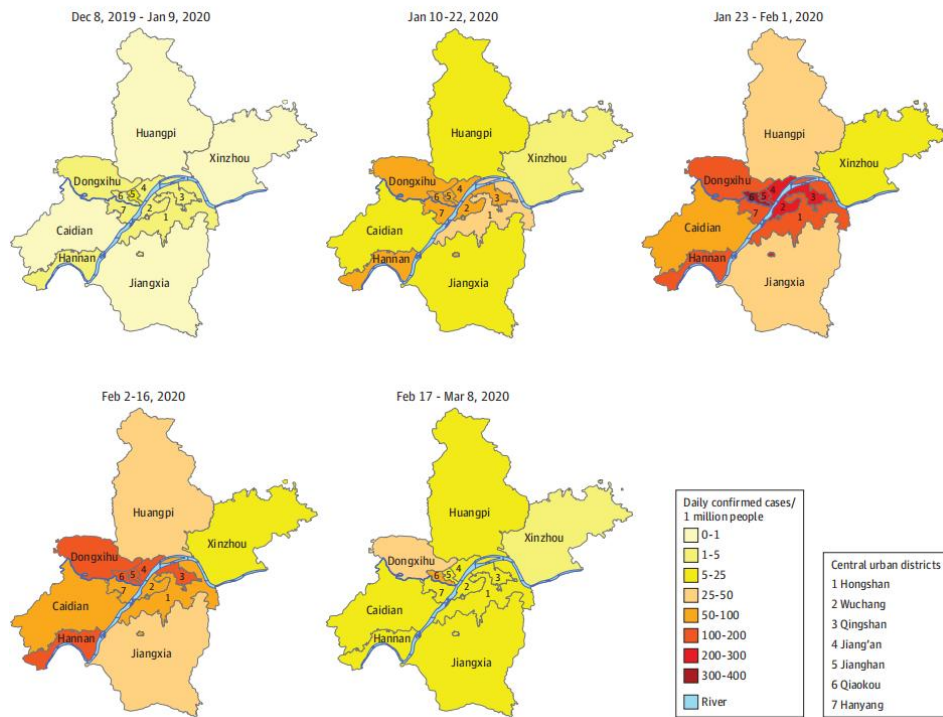


図 3-2 中国武漢市における流行状況の 5 ステージにわたる地理的な分布

「出典：Pan, A.ほか（2020）」

注：流行状況は主に毎日の新規感染者数で表されている

そのうえで、「武漢ロックダウン」が実施された 2020 年 1 月 23 日には既に第 3 ステージに突入したため、ロックダウンに注目する本研究では第 3 ステージ以降を分析対象とする。

表 3-2 武漢における流行状況およびロックダウンの6ステージ

ステージ	時間	概要
第1ステージ	12月8日～1月9日	感染症流行の早期であり、政府が介入しなかった時期である。
第2ステージ	1月10日～22日	春節休みに伴う「春運」によって人の動きが大きくなり、感染拡大が大きく広がっていく。
第3ステージ	1月23日～2月1日	健康宣伝の増進、交通機関の制限、家内隔離を求めるなど、さまざまな健康介入措置が行われた。この時期、武漢市への出入りが禁止され、市内交通の停止、社交の場の閉鎖、マスクの着用を徹底的に要求された。また、「火神山病院」や「雷神山病院」の建設工事を開始した。他の主要病院は迅速に病棟を改装し、ベッド数を増やした。病院の各種検査室や一部の商業検査室はPCR検査サービスを開始し、検査能力が大幅にアップした。
第4ステージ	2月2日～16日	「火神山医院」をはじめとした仮設病院の完成により、医療環境や資源が大幅に改善され、「4類人員 ³³ 」の集中隔離・治療が行われた。同時に、社区や一般市民に対する管理措置も強化され、社区封鎖、自宅隔離、物資の配給制など、地域での感染リスクをさらに低減させるための措置がとられた。
第5ステージ	2月17日～3月8日	武漢では3日間の抜き打ち検査が始まり、核酸検査の量を増やし、これまでと同じように強力な管理体制が敷かれていた。
第6ステージ	3月8日～4月8日	武漢におけるウイルスの広がり収束に向かい、予防・蔓延防止対策も段階的な成果を上げ、医薬品不足も大幅に改善された。流行状況の改善につれ、スーパーや市場以外の産業も、秩序ある業務再開が推し進められていた。

出典：Pan, A.ほか（2020）、武漢市衛生健康委員会ホームページ、中国政府網衛生応急辦公室ホームページ、湖北省新型冠状病毒感染肺炎疫情防控指挥部ホームページより筆者作成

1.3.1 第3ステージ（医療資源の拡充）

「武漢ロックダウン」は2020年1月23日、湖北省武漢市において開始された。同日午前10時より、武漢市内の空港、鉄道駅、フェリー、長距離バスおよび地下鉄の運行が全面的に停止され、事実上のロックダウン状態となった（武漢市衛生健康委員会 2020）。新華社通信（2020年1月23日）によると、観光地やホテル、文化施設（図書館、美術館、劇場等）は閉鎖やイベントの中止を命じられた。また、公共施設や交通機関の運営者に対し、利用者へのマスク着用の強制が義務付けられ、違反者は処罰の対象とされた。さらに、全市民に対し1日2回の検温と、37.3度以上の発熱時の報告が義務化され、発熱者は政府の手配した車両で隔離施設へ移送される体制が敷かれた。市内の衛生環境保持も徹底され、毎日定時に医療機関、隔離施設、市場等の消毒が行われたほか、防護服を着用した作業員や消毒車による市街地の一斉消毒の様子が多くのメディアで報道された（界面新聞 2020、湖北日報荆楚网 2020、大久保 2021）。

当時、医療資源の枯渇は深刻であり、外来診療における待機時間の長期化と病床不足が発生していた。これに対処するため、発熱患者のトリアージ（選別や分類）ルールが厳格化された。具体的には、各地域の社区スタッフが発熱者を把握した場合、専用車両で指定の発熱外来へ搬送し、診療拒否を禁じた。一方で、入院の必要がない軽症者等については、社区が責任を持って在宅観察³⁴を管理する体制が取られた。

特筆すべきは、感染症専門病院の緊急建設である。1月23日午後、武漢市政府は2003年のSARS³⁵流行時の「北京小湯山医院」モデルを参考に、仮設専門病院「火神山（かじんざん）病院」の建設を決定した。同日夜より24時間体制で工事が開始され、わずか10日間で約5万平方メートルの敷地に1,000床の病床（ICU含む）を備える病院が完成した。2月4日には人民解放軍の医療チーム1400人が投入され、運用が開始された（人民網 2020）。同時期に、同規模の「雷神山（らいじんざん）病院」も建設された。

これに加え、全国から「援鄂医療チーム」として、3月1日までに計344チーム、4万2000人以上の医療従事者

³³ 4類人員とは、感染確定患者、感染疑いのある患者、感染の可能性を排除できない発熱患者、感染確定患者の近接接触者のことを指す。

³⁴ ここでいう「在宅観察」とは、中国の感染症対策における「居家医学观察」を指す。社区による厳格な管理下で実施される防疫措置であり、対象者は外出が禁じられ、社区スタッフによる毎日の体温確認や生活物資の配給など、徹底した健康観察と行動制限が課された。

³⁵ 2003年に中国南部の広東省を起源とした重症な非定型肺炎である。重症急性呼吸器症候群（SARS: severe acute respiratory syndrome）と呼ばれている。

が武漢へ派遣され、国を挙げた総力戦が展開された。交通面の規制はさらに強化され、1月24日以降、長江トンネルの閉鎖や自家用車の通行禁止（1月26日～）が実施された。それに伴い当局は、市民の足の代わりとして6000台のタクシーを手配し、緊急時の移動手段として各社区に配備した。

1.3.2 第4ステージ（社区封鎖の徹底）

2月9日以降、政府は「グリッド・マネジメント（網格化管理）」の手法を用い、市内1100以上の社区において「感染確定患者、感染疑いのある患者、感染の可能性を排除できない発熱患者、感染確定患者の近接接触者」のいわゆる「4類人員」を徹底的に洗い出す「クリーンアップ方針」を推進した。これにより、すべての感染リスク者を隔離・治療する体制が強化された。

感染状況がピークに達した2月11日³⁶、武漢市は管理レベルを最高度まで引き上げ、「社区封鎖（居住地閉鎖管理）」へと移行した。全ての小区は物理的に閉鎖され、出入り口は原則1カ所に限定された上で、24時間体制の警備が敷かれた。医療・インフラ関連の従事者などを除き、住民には在宅を徹底することが求められた。その結果、特別な許可がない限り、居住区（小区）の外へ出ることはできず、食料や生活必需品の調達も、個人の買い出しではなく、社区単位での「集団購入（團購）」や政府指定業者による配送（配給制）に依存せざるを得なくなった。約1000万人の市民が事実上の外出禁止状態に置かれ、生活は必要最低限の維持レベルに制限された。

1.3.3 第5ステージ（収束への兆し）

武漢市卫生健康委員会は2月16日、新型コロナ以外の患者（慢性疾患の患者、妊産婦、透析患者、がん患者など）への医療提供体制を再構築するため、6病院を新型コロナ以外の患者の受け入れ専用病院に指定した。第4ステージにおける強力な移動制限と社区封鎖の効果が現れ始め、第3ステージをピークに、罹患率は急速に低下した。Pan, A.ほか（2020）によれば、重症者の割合も第1ステージの53.1%から、第5ステージには10.3%へと劇的に改善した。

1.3.4 第6ステージ（ロックダウン解除）

3月10日、湖北省全域で「健康コード（防疫健康碼）」システムが導入された。これはスマートフォンアプリ（AlipayやWeChat等）を通じて個人の移動履歴や健康状態を追跡し、ビッグデータに基づいて感染リスクを「緑（低リスク）・黄（中リスク）・赤（高リスク）」の3色で可視化する仕組みである。このシステムは中国全土で採用されており、「緑色」のコードがなければ公共交通機関の利用や施設への立ち入り、さらには都市間の移動も認められない。形式上は任意登録とされているが、実社会生活を送る上では事実上の義務（強制）として機能している。

感染状況の改善に伴い、3月24日には武漢を除く湖北省内の鉄道運行が再開された。そして4月8日0時、8日間連続で新規感染者が確認されなかったことを受け、ついに武漢市の対外交通遮断が解除された。高速道路、空港、鉄道が一斉に再開され、76日間に及んだロックダウンは終了した。これにより、長期間足止めされていた人々の移動や、出稼ぎ労働者の再出発が可能となり、武漢市民の生活は新たな日常へと動き出した。

1.3.5 ロックダウンと社区封鎖の有効性について

世界的に変異株の流行が続く中、非薬理的介入（NPI）の重要性は高い（第二章1.3.3節参照）。Pan, A.ほか（2020）は、武漢の強硬な介入措置が感染制御に寄与したと結論づけている。しかし、詳細に分析すると、1月23日の「交通遮断（ロックダウン）」発令直後に感染が収束したわけではない。図3-4が示す通り、武漢市内の新規感染者数は2月中旬まで増加傾向にあった。これは、都市間の交通を遮断しても、潜伏期間中の発症や、家庭内・コミュニティ内での感染連鎖までは防げなかったことを示唆している。

実際に感染者数が顕著な減少傾向を見せたのは、2月11日以降の「社区封鎖（住宅地の完全封鎖）」が徹底されてからである。3月末には新規感染者が1桁台まで減少していることから、ロックダウン（マクロな移動制限）だけでなく、市民の生活単位であるコミュニティを封鎖し、人と人との接触を物理的に遮断するミクロな措置こそが、流行制圧の主要な要因となったと考えられる。大林（2021）は、感染症対策と基本的人権（自由）のバランスについて、必要最小限の規制が求められると述べている。しかし、武漢の事例は、爆発的な感染拡大を短期間で抑え込むためには、一時的であれ強制的かつ厳格な移動制限、特に「社区封鎖」のような強硬な措置が必要不可欠であっ

³⁶ （時差のため）地域によって日付が変わる場合がある。

た可能性を示している。

以下は、中国大陸における新規感染者数・新規死亡者数の推移を図 3-3 に示したものであり、図 3-4 には湖北省・武漢市における新規感染者数・新規死亡者数の推移を示す。

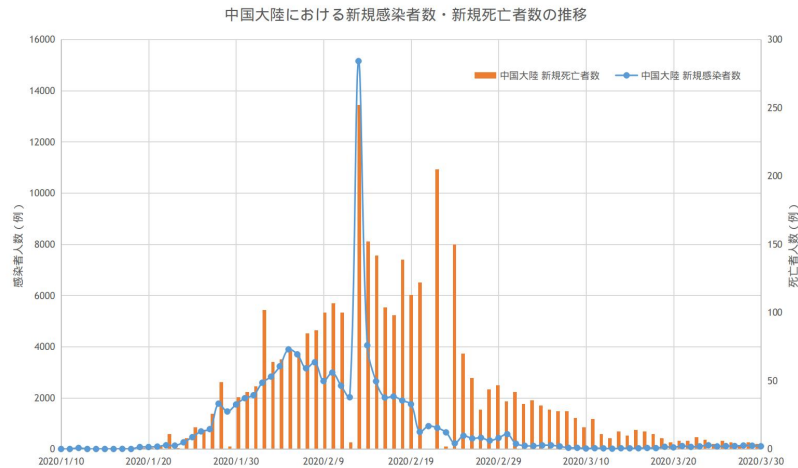


図 3-3³⁷ 中国大陸における新規感染者数・新規死亡者数の推移（2020.1.3-2020.3.30）

中国国家衛生健康委員会（NHC）、世界保健機関（WHO）COVID-19 Global Data、湖北省衛生健康委員会ホームページ³⁸より、著者作成

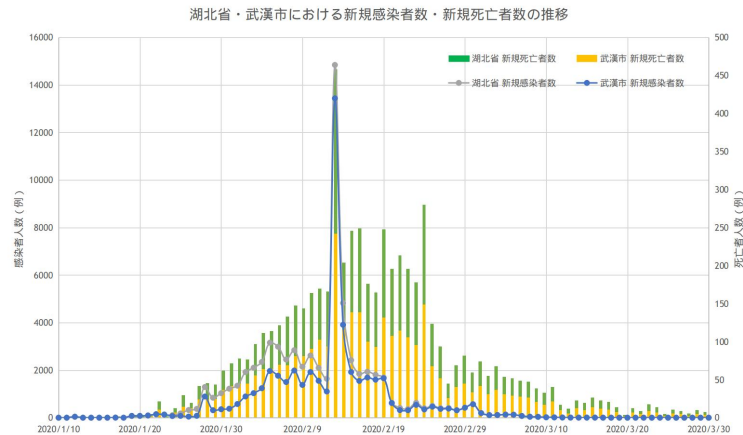


図 3-4³⁹湖北省・武漢市における新規感染者数・新規死亡者数の推移（2020.1.3-2020.3.30）

中国国家衛生健康委員会（NHC）、世界保健機関（WHO）COVID-19 Global Data、湖北省衛生健康委員会ホームページより、筆者作成

1.4 ロックダウン下の支援供給構造：公的支援と民間共助

1.4.1 公的支援

76 日間のロックダウン下で、武漢に住む約 1000 万人の住民の生活を確保するため、市の供給保障システムは非常に重要な役割を果たした。この供給保障システムとは、「武漢ロックダウン」下に形成され、「居委会」が主導し、「業主委員会」、および社区网格员など、複雑なネットワークにより、住民の生活を直接に支援するシステムのことである。図 3-5 は、封鎖された各小区に住んでいる住民に至るまでの支援ルートを構造化したものである。これを見ると、支援は大きく分けて「公的支援」と、「民間共助」という二つの層から構成されていることがわかる。

³⁷ 2 月 13 日に激増したのは、その日に、過去の疑いのある例について、新しい診断分類に従って、診断結果の見直しを行ったためである。新しい診断分類とは、新規感染者数＝疑い例＋画像診断である。つまり、PCR 検査は不要になったが、これには他のウイルス性肺炎も含まれる可能性がある。

³⁸ 湖北省衛生健康委員会ホームページ上で毎日更新された「湖北省新型コロナ情報」のデータをまとめ、整理したもの。

³⁹ 2 月 13 日に激増した原因は注 38 を参照

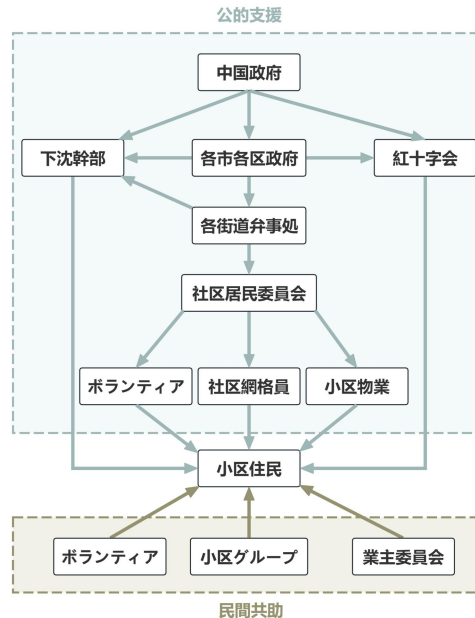


図 3-5 「武漢ロックダウン」における供給保障の構造図

筆者作成

まず、この構造の上にある「公的支援」について説明する。これは中国政府から各市・区政府、街道弁事処を経て、末端の「居委会」に至る縦的な行政ラインによって形成されている。この公的支援の枠組みには、外部からの重要なリソースとして「中国紅十字会」および「下沈幹部」が含まれる。中国紅十字会は、日本の赤十字社に相当する組織であるが、中国においては政府および各市区政府衛生部の指導下に置かれ、公衆衛生や救護活動を担う役割を持っている。現場レベルでは、「居委会」が中心的な調整役となり、複数の組織と連携して住民管理と物資配給を行った。具体的には、前述した社区网格员、「小区物業⁴⁰」、そして「居委会」の募集に応じてその指揮下で物資運搬などの補助業務を行う「ボランティア」である。ここで留意すべきは、図 3-5 の公的支援枠内にあるボランティアは、あくまで行政システムの補助として機能する存在であるという点である。

しかし、未曾有の危機に対し、「居委会」の人員だけでは圧倒的に不足していた。そこで投入されたのが、中国特有の動員システムである「下沈幹部」である。「下沈」とは公務員が現場へ「降りる」ことを意味する。武漢市政府（2021）のデータによれば、ロックダウン期間中、省・市・区レベルの合計 2211 もの行政機関が管轄下の社区をカバーするために「下沈」し、約 14 万 9 千人の党員や幹部が各社区に責任を持って配置された。彼らは本来の業務を離れ、各「居委会」と連携して最前線の住民対応にあたった。行政側の人的リソース不足を補完するため、多くの住民が「公的支援システム内のボランティア」として動員された点も見逃せない。武漢市人民政府（2021）によれば、実名登録され、「居委会」等の指揮下で活動したボランティアの総数は 169 万人に達した。これは武漢市内人口の 15.13% を占める規模であり、市内には 7046 ものボランティアチームが組織され、行政の末端機能を支えた。

1.4.2 公助の限界と「民間共助」の役割

Cary（2021）の調査によれば、「居委会」やボランティアが十分に機能していた地域の住民ほど、精神的な鬱屈度が低いことが示されている。これは公的支援が一定の成果を上げた証左である。しかしながら、1000 万人を超える全市民の生活を、行政主導のシステムだけで完全にカバーすることは物理的に不可能であった。Min, S.ほか（2020）が指摘するように、特にロックダウンの初期段階では、物流の「ラストワンマイル」で深刻なボトルネックが発生し、物資が各家庭まで届かない事態が頻発した。加えて、個別の細かいニーズ（特定の薬の入手、精神的なケアなど）に対して、画一的な行政サービスでは手が回らない「構造的な隙間」が生じたのである。この公的支援の隙間を埋める機能を果たしたのが、図 3-5 の下段に示される「民間共助」のメカニズムである。ここでは、同じ「小区」という壁の中に物理的に隔離された住民同士が、水平方向に繋がり、自律的な互助活動を展開した。この民間共助の主体となるのが、「自発的ボランティア」、「小区グループ」、「業主委員会⁴¹」である。

⁴⁰ 小区物業は、日常的な共有部分の管理や治安のための警備員などの手配を行う小区の管理会社である。

⁴¹ 業主委員会とは、小区内の所有者によって組織される管理組合に相当する組織である。

まず、民間側の「ボランティア」は、「居委会」の指示を待つのではなく、住民が自発的に行動を起こしたものであり、独居老人のケアや取り残されたペットの救助など、行政の手が届かない領域をカバーした。次に、「小区グループ」とは、中国のメッセージアプリ「WeChat（微信）」上で形成された、同じ小区やマンション棟の住民専用グループチャットである。物理的な接触が制限される中、このグループは住民間の連絡手段としてだけでなく、食料の共同購入（團購）や情報の共有を行うための重要なプラットフォームとして機能した。そして、「業主委員会」は、小区の住宅の所有者によって構成される住民自治組織であり、住民の代表として管理会社や「居委会」との交渉を行い、住民の利益を保護する役割を果たした。

このように、武漢の供給保障システムは、強力な権限と資源を持つ「公的支援」という縦のラインと、住民の自発性と生活ニーズに基づく「民間共助」という横のラインが、小区住民という結節点で交わることで機能していたのである。

2 調査の概要

本研究は、「武漢ロックダウン」下における住民の経験と社会関係の変容を多角的に捉えるため、時期と目的を異にする二段階の調査から構成されている。第一章第二節で述べた通り、本研究は当初、「災害弱者」が直面した生活物資の供給不足や心理的課題といった困難の解明を出発点としていた（第1回調査：2021年実施）。しかし、その過程で住民間の自発的な「互助（社会交換）」という新たな事象の重要性が浮き彫りとなったため、それらが社会関係に与えた影響を解明するための調査を新たに追加した（第2回調査：2023年～2024年実施）。本節では、問題発見のための第1回調査と、研究課題を深化させるための第2回調査、それぞれの目的、対象、および分析方法について詳述する。

2.1 第1回調査：災害弱者の実態と互助の萌芽（2021年）

2.1.1 調査の目的と位置づけ

第1回調査は、2021年8月から9月にかけて実施した。本調査の目的は、新型コロナウイルス感染症対策として実施された「強制的ロックダウン」という極限状況が、基礎疾患を有する者や高齢者などの「災害弱者」に対し、いかなる生活上・心理上の影響を及ぼしたのかを明らかにすることにあった。

なぜ、最初の調査対象として「災害弱者」に着目したのか。その理由は、彼らが有する社会的脆弱性ゆえに、非常時の環境変化による影響が生活実態として最も顕著に現れると考えられたためである。

未曾有の規模で実施された「武漢ロックダウン」は、住民の移動や物流に大きな制約をもたらした。その際、自力での対処資源（健康、移動手段、物資の備蓄など）が限られている人々が、具体的にどのような経験をし、いかにして困難な状況を乗り越えようとしたのか。そのプロセスを追うことは、ロックダウン下における住民生活の実相を理解する上で最も有効なアプローチの一つである。すなわち、あくまで生活者の視点に立ち、当時の状況下で人々が何を経験し、どのように生活を維持していたのかという事実を客観的に把握・記録することを主眼としている。

なお、本調査は筆者の修士論文（Ziyun 2024）における核心部分を構成するものであるが、本博士論文においては、ロックダウン下の生活環境を記述し、かつ、次節で述べる「社会交換（互助）」という新たな研究視点を導出するための探索的調査として位置づけられる。

2.1.2 調査対象と方法

調査対象者は、武漢ロックダウンを経験した「災害弱者（高齢者、基礎疾患患者、妊婦等）」およびその家族である。対象者の選定にはスノーボール・サンプリング（雪だるま式標本法）を用いた。その理由は、「災害弱者」という属性は、社会的スティグマや差別への懸念から外部への発信が躊躇される傾向にあり、無作為抽出による協力依頼は困難であるため、信頼関係に基づく紹介を重視した。

具体的なリクルートプロセスとして、まず中国の主要なソーシャル・メディア（新浪微博など）を用いて、ロックダウン期間中に救援要請を発信していた投稿者を検索し、コンタクトを試みた。その結果、2021年8月下旬に最初の対象者であるHさんの協力を得、そこから親族や知人へと紹介の連鎖が生じ、最終的に計13名から協力を得た。

データ収集は半構造化インタビューによって行い、当時の生活困難、医療アクセスの断絶、心理的葛藤に焦点を当てて聞き取りを実施した。なお、インタビューは当時の水際対策による渡航制限のため、全てオンラインで実施した。所要時間は1回あたり60分を目安としたが、身体的制約のあるC氏（半身不随）に対しては複数回に分割するなど、対象者の状況に配慮しつつ、詳細な語りを収集した。

調査対象者の状況の概要を表3-1に示す。

表 3-1 第1回調査の対象者概要

	性別	年齢	生計/職業	健康状況	説明
A	女	50	年金繰り上げ ⁴²	基礎疾患	一人でロックダウン、乳癌で療養中
B	女	45	補助金	基礎疾患	尿毒症患者、毎週2回透析
C	女	68	支援給付金	障害者・高齢者	脳卒中で半身不随に
D	女	25	会社員	妊婦	妊娠中（33週）
E	女	47	従業員	基礎疾患	乳癌で療養中
F	男	58	会社員	基礎疾患	悪性リンパ腫（10年前）当時は療養中
G	女	70	無年金	障害者	聴覚障害者。子供なし、一人でロックダウン
J	女	73	年金	準高齢者	一人でロックダウン
M	女	39	補助金	基礎疾患	尿毒症患者、毎週3回透析
S	女	49	年金繰り上げ	基礎疾患	甲状腺癌で療養中、夫は大腸癌を化学療法で治療中
W	男	42	事業者	基礎疾患	大腸癌で療養中
Y	女	29	主婦	妊婦	妊娠中（24週）
Z	男	84	年金	高齢者	車椅子に乗っている。従弟が肺がんで死亡

2.1.3 データの扱い

本調査で得られたデータからは、移動制限や物流の停滞により、対象者が生活物資の確保や通院といった日常的な行為において、様々な課題に直面していた実態が明らかになった。それと同時に、制度的な支援が直ちに行き届かない状況下において、近隣住民やSNS上の他者との間で、食料や薬、情報のやり取り（社会交換）が自発的に行われていたことも確認された。したがって本論文では、これらのデータを単なる「困難の記録」としてのみならず、次節で扱う第2回調査（互助のメカニズム解明）の前提となる、当時の社会状況を示す基礎データとして活用する。

分析にはKJ法とナラティブ・アプローチを用いた。ロックダウンという非日常的环境下における当事者の「状況」と「内面」を深く理解するため、得られたデータを単なる事実の羅列ではなく、当事者が自身の経験に意味づけを行った「物語（ナラティブ）」として捉えた。具体的には、計655分の録音データを文字起こしし、抽出された要素をKJ法によってカテゴリー化し、「災害弱者特有の経験」と「属性に関わらず共通する経験」の2つの側面から整理・構造化した。

なお、本調査から得られた分析結果は、第四章の冒頭で詳述する。

2.2 第1回調査から第2回調査へ

第1回調査の結果、災害弱者が直面した最も深刻な課題として「生活物資の供給不全」と「心理的孤立」が浮き

⁴² ここでの「繰り上げ」とは、本来65歳から受給する老齢年金を、健康上の理由や職業特有の事情による早期引退に伴い、60歳代前半から前倒しで受給することを指す。なお、受給開始を早める代償として、年金受給額は生涯にわたり減額される。

彫りとなった。ロックダウン下において行政システム（公助）は機能不全に陥っており、多くの住民が孤立無援の状態に置かれていたことが確認された。

しかし同時に、第1回調査のインタビューデータからは、新たな重要な事実が見出された。それは、公的な支援が届かない空白期間において、住民たちが決して受動的に耐え忍んでいたわけではなく、SNSや地域コミュニティを通じて自発的に繋がり、物資や情報を融通し合う「社会交換（互助行為）」を活発に行っていたという点である。「災害弱者」であっても、一方的に支援を受けるだけでなく、情報の共有や精神的な励まし合いといった形で交換に関与している事例が見受けられた。

第1回調査はあくまで「直面した困難」に焦点を当てていたため、この「人々がどのように繋がり、危機を乗り越えたか（対処の実態）」というメカニズムまでは十分に解明できなかった。

行政機能が麻痺した極限状況下において、人々の生存を支えたのは、このインフォーマルな「社会交換」であった可能性が高い。このメカニズムを解明するためには、調査対象を「弱者」に限定せず、交換のネットワーク全体に関わる「一般住民」を含めたより広い層へと拡大し、焦点も「被害」から「関係性の構築」へと転換する必要がある。

以上の経緯から、ロックダウンにおいて重要な役割を果たした「社会交換の実態」と「社会関係の変容」を解明するため、第2回調査を設計するに至った。

2.3 第2回調査：社会交換と関係変容の解明（2023年～2024年）

2.3.1 調査目的と位置づけ

本研究の中核をなす第2回調査は、2023年9月から2024年3月にかけて実施された。本調査の目的は、ロックダウン期間中の住民間における自発的な互助行為（社会交換）の実態を解明し、極限状況下における社会関係の形成と変容を考察することにある。具体的には、ロックダウン経験者がいかにして互助ネットワークを構築したのか、そして、その経験が個人の心理や社会関係に対し、長期的あるいは短期的にどのような変容をもたらしたのかを解明することを目指した。

2.3.2 調査対象の拡大と属性

第2回調査における最大の特徴は、対象者の範囲を大幅に拡大した点にある。第1回調査における「災害弱者」という枠組みを取り払い、ロックダウンを経験したより広範な住民層を対象とすることで、支援を「受ける側」と「提供する側」、あるいはその双方の立場から、互助の実態を立体的かつ動的に捉えることを意図した。最終的に、「武漢ロックダウン」経験者計36名に対して詳細なインタビューを実施した。

対象者の選定にあたっては、個人的かつセンシティブな記憶を扱うため、第1回調査同様、信頼性を確保しやすいスノーボール・サンプリングを採用した。それに加え、本調査では居住地域の地理的分布にも特に配慮を行っている。前節で論じた通り、武漢市内であっても地域によって感染拡大の状況や被害の程度は均一ではなかったためである（本章1.3節を参照）。したがって、インタビュー対象者は、感染爆発の中心地となった漢口地区⁴³（華南海鮮市場が存在する江漢区、江岸区、礄口区）の居住者を重点的に採用した。一方で、データの網羅性と信頼性を高めるため、中心部から離れた遠隔地の住民もあえて選定に加えている（I3さん、E3さんなど）。例えばE3さんの居住地は武漢市内ではあるものの、感染者が比較的少なかった地域に位置しており、会社の寮に封鎖されていたという、中心部とは異なる環境下での経験を有している。こうした地理的要素に加え、互助行為の多様な形態を網羅するため、年齢、性別、職業のバランスを考慮した層化抽出の視点も取り入れている。なお、対象者のうち5名は第1回調査からの継続協力者でもある（第2回調査のD2さん、L2さん、S2さん、X2さん、D3さんはそれぞれ第1回調査のFさん、Yさん、Bさんの母、Aさん、Wさんである）。

⁴³ かつては漢口市という都市名が存在したが、現在は区名として使われていない。ただし、汎称地名として漢口駅、漢口銀行などの機関・組織名に残され、市民の間でも地理名詞としてよく使われている。狭義の「漢口」は旧漢口市に由来する礄口区・江岸区・江漢区を指すが、広義の「漢口」は漢口三区の北側にある、元々郊外地域であった東西湖区も含まれる。

表 3-2 調査対象者

	年齢	性別	状況	仕事	居住地域	説明	取材時間
A2*	27	女	家族 3 人	会社員	洪山区	出産直後、留学生	2023 年 9 月 23 日
B2	66	女	1 人	定年	江漢区		2023 年 9 月 23 日
C2	55	男	妻と 2 人	不明	礄口区		2023 年 9 月 27 日
D2*	60	男	家族 3 人	定年	武昌区	医療関係者	2023 年 10 月 1 日
E2	46	女	家族 3 人	公務員	武昌区	猫砂、ペット救助	2023 年 10 月 1 日
F2	55	女	家族 3 人	定年	江岸区		2023 年 10 月 2 日
G2	26	男	1 人	自由	江岸区		2023 年 10 月 2 日
H2	33	女	兄と 2 人	公務員	東西湖区		2023 年 10 月 2 日
I2	58	男	1 人	管理職	蔡甸区		2023 年 10 月 2 日
J2	26	男	1 人	学生	武昌区		2023 年 10 月 3 日
K2	27	女	家族 3 人	教師	江岸区	喘息持ち	2023 年 10 月 4 日
L2	32	女	家族 3 人	会社員	江岸区	妊婦	2023 年 10 月 4 日
M2	49	女	1 人	無職	江岸区	八百屋を紹介	2023 年 10 月 4 日
N2	50	男	家族 3 人	会社員	漢陽区	同窓会	2023 年 10 月 5 日
O2	53	男	家族 3 人	企業主	漢陽区	親戚と喧嘩	2023 年 10 月 5 日
P2*	26	男	家族 3 人	教師	漢陽区	高額転売	2023 年 10 月 5 日
Q2	30	男	家族 3 人	会社員	武昌区		2023 年 10 月 6 日
R2	55	男	家族 3 人	部長	洪山区	同僚からの関心	2023 年 10 月 6 日
S2	75	女	娘と 2 人	定年	江岸区	娘が尿毒症	2023 年 10 月 7 日
T2	39	女	家族 4 人	保育士	江岸区	教科書を借りた	2023 年 10 月 8 日
U2	64	女	家族 4 人	職員	江岸区	タバコ高額転売	2023 年 10 月 8 日
V2	60	女	家族 2 人	定年	江岸区	猫探し	2023 年 10 月 8 日
W2	25	男	家族 3 人	学生	武昌区		2023 年 10 月 13 日
X2*	52	女	1 人	主婦	江岸区	慎重	2023 年 10 月 18 日
Y2*	29	女	家族 3 人	社員	洪山区	物々交換	2023 年 10 月 19 日
Z2*	28	男	家族 4 人	学生	洪山区		2023 年 10 月 19 日
A3*	29	女	家族 3 人	学生	洪山区	ペット用品	2023 年 11 月 7 日
B3*	52	女	家族 3 人	社員	武昌区		2023 年 11 月 7 日
C3*	49	男	家族 3 人	不明	漢陽区	犬の散歩	2023 年 11 月 7 日
D3*	44	男	家族 4 人	企業主	漢陽区	キャットフード	2023 年 11 月 8 日
E3*	30	男	職員寮	社員	新洲区		2023 年 11 月 9 日
F3*	54	女	不明	定年	青山区	包丁	2023 年 11 月 9 日
G3*	53	女	家族 3 人	社員	洪山区	同僚、店主	2023 年 11 月 9 日
H3	68	女	不明	定年	江岸区	スマホ・魚	2024 年 3 月 1 日
I3	39	男	妻と 2 人	社員	新洲区		2024 年 3 月 3 日
J3	30	女	家族 4 人	経営者	江岸区	団長	2024 年 3 月 3 日

注：調査は原則として対面で実施されたが、オンラインによる追加聴取を行った対象者には*を付記している。

「説明」欄の記述は分析上のコードではなく、読み手の参照の便宜を図るための簡易的な注記（キーワード）である。なお、本欄に記載がないことは、当該対象者が互助行為に関与しなかったことを意味するものではない。

2.3.3 分析手法

分析には同じくナラティブ・アプローチと KJ 法を採用した。計 1187 分に及ぶ録音データを全て逐語録として文字起こしし、そこからデータの抽出と考察を行うにあたっては、特に三つの観点に着目した。第一に「互助の内容」

である。各個人が他者との関わりの中で具体的に何を得たのか、それが食料や医薬品といった「物質的支援」であったのか、あるいは情報の提供や精神的な慰めといった「非物質的支援」であったのかを詳細に分類した。第二に「互助の手段」である。物理的な接触が厳しく制限されたロックダウン下において、どのような連絡手段やソーシャル・メディアが媒介となって交換が行われたのか、そのプロセスを分析した。そして第三に「関係の継続性」である。ロックダウン解除後、危機的状況下で形成された人間関係が一時的なもので終わったのか、あるいはその後も継続しているのかを追跡した。

これらの観点から抽出されたデータは、意味のまとまりごとにコードを生成してカテゴリー分類を行った。最終的にはナラティブ・アプローチの観点に基づき、対象者が一連の互助行為にどのような主観的意味を与えているか、またロックダウン前後で生活や価値観がどう変化したかという「物語」としての側面を解釈・記述した。

なお、本調査から得られた分析結果は、第五章の冒頭で詳述する。

3 倫理的配慮

第1回の調査および第2回の調査は、完全に自由意志による調査への参加を確認したうえで、インタビュー同意書への署名も依頼した。すべての調査対象者に本研究の研究目的を説明し、プライバシーの保護、守秘義務、データの保管と廃棄、研究成果の公表について説明した。なお、入退院などの個人情報の公表は、必要最低限になるよう配慮した。また、本論文中に掲載した写真はすべて、撮影および掲載について事前に対象者の同意を得たものである。

第四章 調査結果：住民が直面した困難と公的支援の不足

「武漢ロックダウン」宣言の発令により、武漢住民の「当たり前の日常」が瞬く間に一変した。学校、企業、工場などにも休校や休業要請がなされ、自宅待機が求められたため、ロックダウンの影響は様々な領域、対象に広がった。前章までは、「武漢ロックダウン」における施策の変遷といったマクロな視点を中心に論じてきた。しかし、それらの記述だけでは、封鎖された武漢の「現場」で人々がいかなる経験をし、どのような感情を抱いていたかという「生の声」までは十分に捉えきれていない。そこで本章では、第1回調査（2021年実施）で得られたデータを再分析し、次章以降で論じる「住民間の互助行為（社会的交換）」が発生せざるを得なかった具体的背景、すなわち互助の「駆動場」を明らかにする。

第1回調査の主要な対象は、高齢者や基礎疾患を有するいわゆる「災害弱者」であった。しかし、彼らが直面した「物流の途絶」、「情報の不確実性」、「孤立」といった課題は、決して彼ら特有のものではなく、当時の武漢市住民全体が共有していた普遍的な構造的問題であった。したがって、本章で提示する「災害弱者」の語りは、ロックダウンという極限状況において、個人の生存がいかに脅かされ、既存のシステム（市場や行政）がいかに機能不全に陥っていたかを最も鋭敏に映し出す鏡として位置づけられる。なぜなら、彼らは社会的脆弱性を有するがゆえに、ロックダウンという環境変化がもたらす「交換コストの増大」や「資源獲得の困難」を最も鋭敏に感知し、その影響を先鋭的な形で経験した主体であるといえる。

したがって本章の目的は、記述的な被害実態の報告から一步進め、理論的な視座を用いて当時の状況を再定義することにある。具体的には、住民がいかにして「高い感染リスク（対人接触コスト）」と「切実な生存資源への欲求（報酬）」の板挟みになり、既存の「市場交換」や「公的支援（再分配）」が機能不全に陥る中で、そのジレンマを乗り越える手段として「互助（社会的交換）」を選択するに至ったのか、その構造的メカニズムを描き出す。これにより、第五章で扱う「一般住民」を含めた広範な互助ネットワークがいかにして形成され得たのか、その前提条件を提示する。

分析にあたっては、「災害弱者」が特有の影響（特定の医療アクセスの欠如等）については本論文の主題である「互助のメカニズム」とは異なるため割愛し、筆者の別稿（Ziyun, 2024）に譲るものとする。本章ではあくまで、災害弱者を含めた一般住民が等しく直面した共通の困難に焦点を絞る。そこで本章ではまず「武漢ロックダウン」下の住民が受けた共通の影響に目を向け、主に加藤（2020）の考察の視点を参考として、ロックダウン関連の影響を検討する（第1節）。それに加えて、公的支援の不足と格差に関する課題も検討する（第2節）。

加藤（2020）は、「感染リスクおよび感染そのものが引き起こす心理的反応」、「環境の変化が引き起こす問題（移動制限）」、「情報が引き起こす問題（マスメディア関連）」という3つに分けて整理している。本研究は加藤（2020）の視点を取り入れながら、「都市機能の制限」という物理的影響と「支援に関する影響」も検討する。調査の結果を以下表4-1に示す。

表4-1 第一回調査の結果

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
感染症に関連する影響	感染リスクに伴う不安（恐怖・緊張も含め）	あまりにも突然すぎて慌てていた・覚悟していなかった・涙が出るほど怖かった・経験したことのないものの怖さ・経験したことがないから怖がっていた・目には見えないものへの不安・目には見えないから不安を感じていた・自分もかかる可能性・自分がウイルスに感染していないか・すでに感染したとの疑い・すでに感染していたかもしれないと疑っていた・強迫的な思考や行動を示す症状・過度に手洗いやアルコール消毒をしてしまう
	ストレスによ	見通しがつかない絶望・じりじりして居ても

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
	って健康に支障が生じた	立ってもいられなかった・不眠・ぐっすり眠れなかった・不安障害・うつ病になっていた（自己判断）・強迫的な思考や行動を示す症状
	感染症そのもの	知り合いが亡くなったので悲しんだ・身近な人が感染したことによって怖がっていた
	長期化による疲弊	見通しが見つからない絶望・経済的な負担・過剰な気遣いによる疲れ・麻痺している
移動・自由および都市機能の制限による影響	コミュニティの分断（他者との接触が制限された）	親に会いに行けないことに罪悪感を感じていた・会いたい人に会えなかった・気持ちが落ち込むことが多かった・怒りや不安を感じた・焦燥感・人と人との繋がり・絆を失った
	行動制限（人の移動が制限された）	住み慣れた生活が奪われた・家にいる時間が長くなった・退屈だった・孤独感を感じた・運動不足になった・友人や家族との連絡が増えた（スマホで）・家族との関係が変化した・家庭内不和・互いの絆を深めた
	ネット・メディア依存	オンライン相談や SNS の需要が高まった・ニュースを見る頻度が増えた・コミュニケーションへの需要が増加した・朝一番にテレビをつける
	交通機能の制限	物流停止による物資不足になった・移動できないから不便だった・喪失感を感じていた
	商業機能の制限	好きなお店が閉店した・欲しい食べ物や生活用品が買えなかった・マスクなどの保健衛生品が買えなかった・消費支出が減少した
	業務機能の制限	生活費プラス住宅ローンの支払い・事業継続に関する心配があった・収入が減少した・経済的なプレッシャーがあった
マスメディアによる影響	気持ちの変化	代理トラウマで悲しんだ・気持ちは流行状況に大きく左右された・脆弱になって、よく泣いていた・よく怒りを感じた
	マスメディア依存	スマホの長時間使用・ニュースを見る頻度が増えた・朝一番に感染情報を見ていた
	フェイクニュース	不確かな情報に惑わされた・パニック状態になったことがある
	差別・中傷	ネットで差別・中傷の言葉を見たことがある・その差別・中傷に苦しめられていた
支援に関連する影響	民間互助	近所の人から援助をもらった・他者を助けた・友達から援助を受けた
	民間自助	自宅に食料や物資を備蓄していた・家族、親戚から援助をもらった

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
	支援の地域格差による不公平な扱い	タイムリーで良い支援を受けていた・タイムリーで良い支援を受けていなかった・社区の支援不公平を感じていた

1 住民が直面した困難

1.1 感染リスクによるストレス

まず、感染症の拡大が続くなかで、多くの対象者は「自分が感染しているのではないか」という不安と恐怖を抱えていた。ウイルスが目に見えないがゆえに心理的な恐怖や不安がかき立てられやすい点は松本（2021）が指摘するところであり、わずかな身体の変化にも過敏になる。例えば、WさんとDさんの語りから、そのことがうかがえる。

その時、私も朝起きると、よく頭痛、体のだるさ、咳などの症状がでたような気がして、もしかしたら、自分もかかっているのではないかと心配してしまった。

（Wさん）

当時は、37.3度以上は報告する必要があった。そして私は毎日体温を測っていたのだが、ある日37.2という数値が出て、恐ろしくなった。私、熱があるのだろうか？そんな時、慌てて先生に電話をかけて、妊婦の体温は少し高いということを知って、やっと少し安心できた。

（Dさん）

Fさんも「ロックダウンの時は怖かったです。この恐怖感、具体的な情報を持っていないことが原因です。（中略）当時は（感染経路などが）わからなかったんです」と述べているように、情報の欠乏（不確実性）は心理的コストを増幅させ、合理的な行動選択を難しくしていた。

SET理論において情報の不完全性は取引コストを高める主要因とされるが、ここではそれが「恐怖」という情動的成本として現れ、その結果、社会的交換の前提となる他者への信頼が機能しにくくなり、初期段階における住民間の互助を抑制する構造的要因となっていた。パンデミック災害では、他の自然災害と異なり、他者との接触そのものが生命を脅かすリスクとなり、交換におけるコストとなる。

ロックダウン初期の武漢では、他者と物理的に接触することによる感染リスクが、そこから得られる社会的交流や情報の獲得といった報酬を大きく上回り、まさに「コストの極大化」とも言える状況が生じていた。その結果、他者は「助け合う隣人」である以前に「ウイルスを媒介するかもしれない脅威」として認識され、挨拶や立ち話、物の貸し借りといった近隣住民同士の相互作用は高コストな行為となり、本来は低いコストで安心感や情報を得られるはずの近隣交流のコスト構造が逆転していたのである。このような状況は、ZさんとWさんの語りにも端的に表れている。

私の家の近くには3つの病院があり、毎日救急車がひっきりなしに患者さんを運んでいました。家でもよく救急車の音が聞こえてきて、パニックになるんですよ。

（Zさん）

小区に感染者が出たと聞くと、さらに緊張してしまいます。

（Wさん）

このように、生活空間そのものがリスクに満ちた場へと変容し、目に見えない脅威であるがゆえにコストの計算が難しく、他者との接触や外出が「死」を連想させるほどの高コストな行為として経験されていたと言える。

さらに、高まりすぎたコストは、住民の心身に直接的な負荷として蓄積された。SET理論では、交換に伴う疲労やストレスもコストの一部とみなされる。長期間にわたる緊張状態と、感染予防のための過剰な配慮（頻繁な消毒、手洗いなど）は、住民にとって大きな負担となった。

ゴミを出すために下に降りなければならないのですが、エレベーターに乗るのが怖くて階段しか使えず、週

に一度しか下に降りる勇気がありませんでした。家にいても、空気中にウイルスがあるかも知るので、窓を開ける勇気もなかったです。毎日こんな調子で夜も眠れなかったですよ。

(Fさん)

Fさんの事例は、ゴミ出しという日常的な行為でさえも、感染リスクというコストによって遂行困難なタスクへと変貌したことを示している。エレベーターという密閉空間を避けるために階段を使用するという行動は、感染リスク（コスト）を下げるために、身体的労力（別のコスト）を支払うという、厳しいトレードオフの選択であったといえる。このような心身の疲弊は、他者への関心を向ける余裕（リソース）を奪い、社会関係の維持を困難にする要因となった。また、Eさんが「毎日繰り返し手洗いやアルコール消毒をして、麻痺しているような気がした」と語るように、強迫的な行動は、日常生活の維持コストを著しく増大させていた。

加えて、ロックダウンが76日間という長期に及んだことは、住民に「終わりの見えないコスト負担」「見通しがつかない絶望」を強いることとなった。SET理論において、将来の報酬予期は現在のコスト負担を正当化する要素であるが、収束時期が不明確な状況下では、この予期が形成されにくい。Aさんが「経済的な負担は言うまでもない」と語るように、感染リスクだけでなく、経済的損失や将来への不安といった複合的なコストが、時間の経過とともに重くのしかかっていた。この「コストの累積」は、住民を心理的に疲弊させ、新たな行動を起こすためのエネルギーを枯渇させる危険性を孕んでいた。

1.2 都市機能および移動の制限による影響

1.2.1 都市機能の制限による影響

交通機能の制限によって物流が滞り、物資不足は1か月以上にわたって続き、武漢市住民の生活水準は大きく切り下げられた。加えて、公共バスの運休などにより移動手段も厳しく制約された。Mさんのように特別な事情で外出が必要な者は小区外へ出ることも自体は可能だったが、公共交通が使えないため移動は著しく不便だったという。Mさんは次のように述べている。

私は2015年に尿毒症を発症して、近年ではさらに症状が重くなった。5年間、週3回4時間の透析のための通院を続けた。しかし、ロックダウンが行われた時には、交通機関が制限されたので、透析をするのに大変苦労をした。例えば、平常時には私はタクシーを呼んで病院まで行き、そこから10分ほどで到着できる。しかし、ロックダウン期間中に、自動車の通行が禁止されたことで、どうやって病院に行くかが最大の関心事となった。母が社区に連絡してタクシーを呼んでくれたが、そのタクシーの運転手は病院までは送るが、迎えには行かないと言った。私も自分で歩いて病院に行こうとしたが、長年の透析で体が弱っていたので、途中で諦めてしまった。

(Mさん)

都市機能を支える生産・流通・販売サービスが相次いで停止し、商業機能の制限が連鎖的に拡大した。武漢市政府は2月11日から、生活必需品の購入を目的とする外出であっても原則禁止とした。食料や日用品が確保できず、最低限の生活さえ維持しにくい状況は、住民の混乱を招いた。

その後、ロックダウン開始から約1か月を経て、社区主導の食料配達が始まると、混乱は徐々に落ち着いていった。行政は各社区を媒介として住民の食料調達を担い、配達へとつなげたため、多くの対象者はボランティアから継続的に食料品や物資を受け取ったと述べている。加えて、住民側でもオンライン注文が広がった。

しかし、先述のとおり交通機能の喪失に起因する物資不足が続いたため、生活は必要最低限の水準にとどまった。たとえば「食べたいものが買えないし、ちょっと贅沢なものなんてもっと無理だった」(Fさん)、「食べたい食料がなかなか手に入らず、手に入るのは基本的にジャガイモや大根ぐらいで、魚や肉は結構手に入りにくかった」(Aさん)といった語りがある。さらに、妊婦であるDさんは次のように語った。

社区は誰に何が必要であるかを調査して記録し、調達して配布していた。私は妊娠中なので、栄養を摂る必要があった。だからロックダウン前にはよくサプリメントや鶏肉、リブなどを買っていたが、ロックダウン期間中にはなかなか手に入らないことがあった。(筆者注：中国では妊婦が鶏ガラや豚骨を煮込んだスープで栄養を補うことが一般的である。) 平常時と比較すると、物資も不足し、質も悪いし、タイムリーでもなかった。例えばリブを買いたかったが、ボランティアに「今日はリブの在庫が切れているので、次の分までお待ちくだ

さい」と言われた。だから、私はロックダウンの時スープを飲むことが少なかった。

(Dさん)

ロックダウンは、都市の商業機能や物流機能を停止させ、住民が貨幣を介して必要な物資を入手する「市場交換（交渉的交換）」のルートを閉ざした。SET理論において、交換は「資源」の授受によって成立するが、市場機能の停止は、生存に必要な資源の深刻な欠乏をもたらし、資源を獲得することの「報酬」価値を相対的に急上昇させた。通常、都市生活者はスーパーマーケットや商店での購入によって生活資源を獲得しているが、ロックダウン下では店舗が閉鎖され、個人の外出も禁止されたため、この交換様式自体が不可能となった。食料という基本的欲求（Basic Needs）が十分に満たされない状態が続いたことで、資源獲得のための行動に対する動機づけ（報酬の価値）が極めて高まり、それがリスク（コスト）を冒してでも互助に参加する誘因となっていた。

食料以上に深刻であったのが、医療資源の欠乏である。これは、基礎疾患を持つ住民や妊婦にとって、生命維持に直結する資源の枯渇を意味した。Dさんも、前述のとおり妊娠中に必要なサプリメントや肉類が手に入りにくくなり、十分な栄養を確保できない不安を抱えていたと語っている。

医療資源が不足していたから、悪いニュースばかりが飛び交って、本当に心配でした。

(Jさん)

Dさんの語りにあるように、「個別ニーズ（特殊物資）」に対する供給の途絶は、特定の属性を持つ住民にとって極めて高いコスト（健康悪化のリスク）をもたらした。公的支援や市場交換では満たされないこの「資源の欠乏」こそが、後の章で論じる住民間の「特殊物資の交換」を駆動する直接的な要因となった。一般的な食料不足とは異なり、代替のきかない特殊物資の欠乏は、住民をより切実な行動へと駆り立て、特定のニーズを持つ者同士の連帯（結束型 SC）を生む土壌となった。

さらに、業務機能の停止による収入の減少も、住民に重い心理的負担を与えた。特に中小事業者や非正規雇用者にとって、ロックダウンの長期化は生計の破綻に直結するリスクを意味した。

その間、家賃を払わなければならない一方で、収入もないのですから、経済的な負担は言うまでもないことですね。

(Aさん)

工場での生産はほとんどなかったのですが、最初の1ヶ月は従業員に給料の全額、2ヶ月目は給料の半額を支払っていたんです。

(Wさん)

経済的な基盤が揺らぐ中で、住民は現在の資源欠乏だけでなく、将来の生活維持に対する不安（不確実性）とも向き合わざるを得なかった。この状況は、住民に対して「資源を節約する（守りの姿勢）」か、あるいは「他者と協力して資源を確保する（攻めの姿勢）」かの選択を迫る環境要因となり、その後の行政配給や住「民間互助（共助）」への関与を方向づける背景となっていた。

1.2.2 移動の自由への制限による影響

2か月以上に及ぶロックダウン関連措置は、1,000万人規模の住民の移動を大幅に制約した。とりわけ2月11日以降の厳格な「居住地封鎖」により移動制限はいつそう強まり、住民は人の往来や他者との接触を避けることを余儀なくされた。その結果、物理的距離の拡大にとどまらず、社会的距離も広がっていった。

これは、コミュニティの分断を生むと同時に、住民が保有していた既存の社会的ネットワーク（親族、友人、職場など）への物理的アクセスを遮断し、ソーシャル・キャピタル（SC）の観点から言えば、個人が外部の資源にアクセスするための「回路（ネットワーク）」が物理的に切断され、既存のSCが利用不能になったことを意味する。コミュニティの分断は社会的孤立を招き（松本 2021）、孤立が深まるほど怒り・不安・焦燥感が増幅し（日本赤十字社 2020）、自殺リスクの上昇にもつながり得ると指摘されている（重村ほか 2020）。Panigrahi ほか（2021）が整理したインドのロックダウン期に報告された自殺事例のうち、コミュニティ分断に伴う孤立がストレスとして言及されていたものは49.0%に上った。

しかし、本研究の調査対象者は、既存ネットワークへの物理的アクセスが遮断されるなかでも、必ずしも強い孤

立感のみに支配されていたわけではなかった。多くの住民にとって、日常生活の困りごとを解決するための主要な資源は、家族や親族といった「強い紐帯（Strong Ties）」であったが、ロックダウンによって市内交通が停止し、小区が封鎖されたことで、物理的に離れて暮らす親族からの支援を受けることは困難になった。例えば、Aさんは次のように語った。

親に会いに行けないことに罪悪感を感じていた

(Aさん)

Aさんの語りは、既存の支援ネットワークが機能不全に陥り、個人が孤立した状況（SCの欠乏状態）に置かれたことを示している。特に、本調査の対象である「災害弱者」にとっては、日常的なケアや支援を提供していた家族との分断は、直ちに生存のリスクへと直結する深刻な問題であった。Mさんが透析通院の困難さを語ったように、家族の送迎という支援リソースが断たれることは、生命維持の危機を意味した。

一方、対象者の多く（11人）は「会いたい人に会えなかった」と回答し、コミュニティ分断による心理的苦痛を訴えた者も一部（2人）いた。しかしその反面、9人は「（スマホを通じて）友人や家族との連絡が増えた」と述べ、5人は「家族と長時間過ごしたことで家族関係が良くなった」と答えている。実際、行動制限によって「在宅時間が長くなったこと」を契機に家庭関係の変化を挙げた者は10人にのぼり、そのうち9人は関係が改善したと回答した。ロックダウン期の家庭関係には、封鎖前の関係性がそのまま強まる傾向がみられ、既存の不和が深刻化する場合もあれば、相互の結びつきが深まる場合もあった。例えば、YさんとMさんは次のように語っている。

もともと義母との関係は良くなく、封鎖中はストレスがたまっていたからか、より衝突が多かったように思う。

(Yさん)

この試練を乗り越えた今、私たち（自分と母親）はより一層、お互いを大切にしている。

(Mさん)

家庭内においては、長時間を共に過ごすことによる関係の深化と、ストレスによる不和という両面性が現れていた。「互いの絆を深めた」（Mさん）というポジティブな報告がある一方で、「ストレスがたまって衝突が多かった」（Yさん）という事例も見られ、閉鎖空間における密な相互作用が、関係維持のコストと報酬のバランスを変化させていたことがうかがえる。また、行動制限がもたらす「ストレス反応から生じる家庭内による不和」や「住み慣れた生活が奪われたことによる不適応」、「運動不足」など、心理・生理的な問題も複合的に作用していた。

同時に、物理的な移動が制限されたことにより、住民の社会的相互作用は「家庭内」および「オンライン空間」へと限定され、そのことが既存の関係性の再確認や、新たな紐帯を模索する動きを生み出した。ロックダウンは物理的な隔離をもたらしたが、通信手段の発達により、物理的な距離の制約を克服し、オンライン空間で他者とコミュニケーションすることが可能になっていた。

スマホで連絡先を知っている全員に挨拶メッセージを送った。ロックダウン1ヶ月のとき1回目、そして2ヶ月のとき2回目のメッセージを送った。ありがたいことに、全員から返事をいただいた。それは思ってもいないことだった。

(Wさん)

Wさんの事例は、対面接触のコストが極端に高まった状況下で、比較的成本の低い「デジタル通信」を用いた社会的交換（安否確認、挨拶）が活性化したことを示している。ロックダウンによる物理的なネットワークの分断は、SCの一時的な欠乏をもたらしつつも、逆説的にデジタル空間における紐帯の維持・強化を促す「駆動因」としても機能しており、これは第五章以降で詳述するWeChatグループを用いた互助ネットワーク形成の前段階として位置づけられる。

1.3 マスメディアに関わる影響

1.3.1 情報の非対称性と認知的コスト

災害時において、正確な情報は生存に直結する重要な資源である。しかしロックダウン下では、マスメディアやSNSを通じて膨大な情報が絶えず流れ込む一方で、その真偽が判然としない「情報の非対称性」が生じていた。こ

のことは、住民にとって状況を正しく判断するための「認知的コスト」を大きく引き上げた。

李ほか（2021）の「新冠肺炎疫情背景下居民時間利用変化及其差异——以北京市双井街道為例（ロックダウン下住民の生活時間調査——北京双井街道を例に）」では、北京住民のマスメディア接触時間が平日平均で6時間27分に及ぶことが示されている。つまり、封鎖下の日常では人びとがマスメディアに大きく依拠していたと考えられる。本研究でも同様の傾向がみられ、ニュース視聴の頻度が増えたと答えた者は11人、スマホ利用時間が長くなったと答えた者は9人であった。さらに、「朝一番からテレビをつけて流行状況を繰り返し見ていた」「それまでのどの時期よりもマスメディアに触れる機会が多かった」といった語りが多く確認された。

1.3.2 不確実性とマスメディア依存

住民の多くは、外出が制限され、他者との直接的な接触が断たれた状況下で、マスメディアやSNSに情報を全面的に依存せざるを得なかった。

朝一番にテレビをつけてニュースを見ていました。そして見た内容もすべてが流行に関するものでした。

（Fさん）

情報の摂取は、一方で不安を和らげるための行動（報酬の希求）でありながら、他方でネガティブな情報に晒され続けることによる精神的な消耗（コスト）をもたらした。多くの対象者が「気持ちはコロナウイルスの流行状況に大きく左右された」と述べており、毎日の新規感染者数の推移がその日の気分と密接に結びついていた。新規感染者数が増え続ける日は楽観視できず、一日中気分が沈むといった影響があったことが明らかになった。

さらに、ロックダウン期の武漢では、フェイクニュースや差別・中傷を含む情報がインターネット上で拡散し、人びとの混乱と不安をいっそう増幅させていた。本調査でも、フェイクニュースに振り回されたと答えた者が3人、オンライン上の中傷や差別によって精神的負担を感じたと答えた者が4人確認された。

フェイクニュースばかりでストレスがたまり、考えれば考えるほど怖くて、どうしたらいいのかわからなくなりました。

（Dさん）

（デマを見て）怖くて下に降りられなくなりました。

（Mさん）

Dさんはまた、次のようにも語っている。

湖北は流行と一生懸命に戦っているのに、一部のよそ者は湖北の人々を受け入れず、湖北の人々がウイルスを持っているものだと思っている。このようなニュースを見て、非常に悲しい気持ちになった。私たちも犠牲者ではないか？

（Dさん）

この語りからは、フェイクニュースや偏見に満ちた報道が、当事者に二重の苦痛（感染への不安と、烙印を押される苦しみ）を与えていたことがうかがえる。

『デマの心理学』でオールポートとポストマンは、事態が切実で判断材料が乏しいほど、デマが生じやすく拡散もしやすいという法則を提示している（オールポート 1952）。すなわち、事態が重大で、なおかつ情報が不確かなほど、デマは発生しやすく流布しやすい。さらに彼らは、強い不安・不満・願望が支配する場面でデマが生じ、人びとがそれを信じて共有することで感情を落ち着かせ、自らの理解を支えようとする点を指摘した。ロックダウン期の武漢でフェイクニュースが広がった現象も、この説明枠組みによく合致すると言える。

このように、情報の質が保証されない環境では、情報へのアクセスそのものが逆に心理的コストを高め、合理的な行動を阻害する要因となる。「信頼できる情報の欠乏」は、後に WeChat グループを通じた住民間の情報共有（信頼に基づく情報の選別・フィルタリング）が重要性を帯びる背景条件となっていた。また、フェイクニュースが拡散しやすいロックダウン状況においては、政府が情報提供の透明性を高め、迅速かつ明確にデマを打ち消すことが重要な課題であったと言える。

1.3.3 代理トラウマと感情的消耗

マスメディアやSNSを通じて他者の苦境や悲劇的な場面に繰り返し触れることは、「代理トラウマ」と呼ばれる精神的コストを引き起こした。

ウェボーを見れば見るほど泣きそうになるから、よく微博を見ることをやめて、家でぼかんとしていたものです。

(Dさん)

看護師さんは泣きながら深々とお辞儀をしている動画を見て、私は涙が止まらなすぎて、思わず声を上げてひどく泣きだしました。

(Jさん)

他者の苦しみに共感することは、人間的な絆を感じさせる一方で、過度な共感個人の精神的リソースを消耗させる。このような感情的な消耗もまた、ロックダウンという環境が住民に課した不可避のコストであった。

しかし同時に、こうした共感性の高まりは、他者への支援行動（利他行動）を動機づける「情動的報酬」の源泉ともなり得る。苦境にある医療従事者や、同じ都市に暮らす見知らぬ他者に感情的に寄り添うことが、後に第五章以降で論じる「共感による紐帯」や、オンライン上の互助ネットワーク形成の基盤となっていたと考えられる。

2 公的支援の機能不全と「制度的空白」

前節で述べたように、ロックダウン下では市場メカニズムが停止し、住民の生活維持は「公的支援（再分配）」に大きく依存することになった。しかし、未曾有の危機に対し、行政システムは即座に対応できず、支援の空白や不均衡が生じた。SET理論の観点から見れば、これは「公的交換（税負担に対する行政サービスの提供）」の契約不履行、あるいは機能不全として捉えられる。この「制度的空白」こそが、住民たちが自発的な互助（民間共助）へと向かわざるを得なかった構造的な要因である。

2.1 公的支援の限界と資源配分の遅滞

ロックダウン初期から中期にかけて、行政による物資配給システムは混乱を極めた。全市民への食料供給という巨大なタスクに対し、物流のリソースや管理能力が追いつかず、「ラストワンマイル」での供給不全が常態化した。

3月10日頃までは、公式の物資はもちろん、民間的な物資の売買さえできませんでした。

(Fさん)

Fさんの証言にあるように、行政による支援が末端の住民に届くまでにはタイムラグが存在した。特に古い小区や管理体制の弱い地域では、この遅滞が顕著であった。この期間、住民は公的支援（再分配）に頼ることができず、生存資源を確保するための代替手段を模索する必要に迫られた。この「公助の不在」が、住民間の「互助（社会的交換）」を誘発する強力なドライバーとなったのである。

2.2 支援の不均衡と「不公平感」の発生

公的支援の質と量は、地域や居住する小区の条件によって大きな格差（不平等）が存在した。管理が行き届いた新しい小区や高級住宅地では比較的スムーズな支援が行われた一方、古い小区や管理体制の弱い地域では支援が滞ることが多かった。

私たちの近所では、毎日ビルを巡回している警備員さんがいて、外出しようとするたびに寄ってきて優しく説得してくれますよ。欲しいものをボランティアに伝えれば、できるだけ買ってきて、ドアツードアで届けてくれますよ。

(Yさん：新築マンション居住)

(古い小区では) ボランティアもおらず、政府の人々も手伝ってくれない。皆が疫病の蔓延を恐れている。

(Sさん)

YさんとSさんの語りの対比は、公的支援の享受における著しい格差を浮き彫りにしている。SET理論において

「公平性」は、システムへの信頼や満足度を規定する重要な要素である。支援の地域格差による不公平感は、行政システムへの信頼を揺るがすと同時に、公的支援が期待できない地域における住民同士の結束（自助・共助）をより切実なものにしたと考えられる。不公平な扱いは、住民に「自分たちで何とかしなければならない」という自律的な規範形成を促す契機ともなった。

2.3 「民間互助（共助）」への転換：制度的空白を埋める実践

公的支援（公助）と市場交換（自助）が共に機能不全に陥った状況下で、住民の生存を支える最後のセーフティネットとなったのが、近隣住民やボランティアによる「民間互助（共助）」であった。本調査のデータからも、公的支援が届かない領域で、住民が自発的にリソースを交換し合う姿が確認された。

階下の老夫婦の家にあまり食べ物が残っていないことが分かっていたので、3月初旬に食料品を買い始めることができたときには、その購入を手伝いました。

(Fさん)

Fさんの行動は、制度的な支援が届かない「空白」を、住民の自発的な行為によって埋め合わせるプロセスを示している。これは、行政から与えられる受動的なサービスの受益者から、自ら資源を配分し合う能動的な交換の主体へと、住民の役割が転換したことを意味する。

また、医療資源の不足に対して、患者同士が自律的に組織化し、資源を融通し合う動きも見られた。

「武漢抗疫（武漢・感染症と闘う）」という WeChat グループでは、（中略）「お互いに気をつけて、できれば（透析の）時間を短縮して、みんなが生きていけるように努力してください」というようなメッセージがよくありました。

(Mさん)

Mさんの事例は、公的な医療提供体制が限界に達した中で、患者コミュニティが「互譲」という規範に基づき、限られた資源（透析機会）を自律的に配分するシステム（秩序）を構築しようとした試みである。これは、制度の空白において、当事者たちが「一般交換（見返りを求めない譲り合い）」を通じて、生存のための秩序を維持しようとした SC の萌芽として捉えることができる。このような、制度の周縁や隙間で発生した自発的な秩序形成こそが、本研究が注目する「創発的な互助」の原点である。

3. 小括：社会的交換の「駆動場」としてのロックダウン

本章では、第一回調査のデータに基づき、「武漢ロックダウン」下における住民の置かれた環境を、社会的交換理論の視座から「コスト」「資源」「制度」の観点で再構成した。分析の結果、以下の三点が明らかになった。

第一に、感染リスクという「対人接触コスト」の極大化である。ウイルスの不可視性と情報の不確実性は、他者との物理的接触を著しく高コストな行為へと変え、当初、住民間の相互作用を抑制し、孤立を深める要因となった。

第二に、市場交換の停止による「資源」の深刻な欠乏である。物流と商業機能の停止は、食料や医薬品といった生存資源の入手を困難にし、資源を獲得することの「報酬」価値を急騰させた。これにより、高いコスト（感染リスク）を払ってでも新たな獲得ルートを開拓する動機が高まった。

第三に、公的支援の機能不全による「制度的空白」である。行政による支援の遅滞と不均衡は、住民に対し、行政に依存するだけでは生存できないという現実を突きつけ、自律的な解決策（互助）へと向かわせる構造的な圧力を形成した。

以上の分析から、「武漢ロックダウン」下の状況は、単なる「困難な状況」ではなく、「高いコスト（感染リスク）と高い報酬（生存欲求）が拮抗し、公的・市場的交換が閉ざされた中で、唯一残された社会的交換（互助）』へと人々を向かわせる強力な駆動場（Drive Field）」であったと結論づけることができる。この駆動場において、住民は「座して死を待つ」か「リスクを冒してつながる」かの選択を迫られ、後者を選択するための手段として、WeChat などのデジタルツールを活用し始めたのである。

次章以降では、この過酷な駆動場において、住民たちがいかにしてデジタルツール（低コストな接続手段）を活用し、感染リスク（コスト）を管理しながら、具体的な互助行為（交換）を展開していったのか。そして、その過

程でいかなる信頼や規範（SC）が生成されたのかについて、おもに第2回調査のデータをもとに詳細に分析するが、本章で確認された「災害弱者」の経験した困難は、次章で描かれる広範な住民による互助ネットワークが、なぜ、どのようにして必要とされたのかを説明する重要な前提となる。

第五章 調査結果：互助行為の実態

第三章 2.3.3 節で述べたように、得られたデータを分析するにあたっては、以下の三点に着目する。第一点は「互助の内容」である。各個人が他者との関わりの中で具体的に何を得たのか、それが食料や医薬品といった「物質的支援」であったのか、あるいは情報の提供や精神的な慰めといった「非物質的支援」であったのかを詳細に分類した。第二点は「互助の手段」である。物理的な接触が厳しく制限されたロックダウン下において、どのような連絡手段やソーシャル・メディアが媒介となって交換が行われたのか、そのプロセスを分析した。そして第三点は「関係の形成と継続性」である。ロックダウン解除後、危機的状況下で形成された人間関係が一時的なもので終わったのか、あるいはその後も継続しているのかを追跡した。

本章では、調査の結果を鑑み、ロックダウン下の異なる時期に展開された互助の形態を分類し、それぞれの特徴を示す。具体的な住民間の互助行為を分析する前に、第一節ではロックダウン期間中における住民の物資保障（事前備蓄と集団購入）を記述する。第二節では、ロックダウンの時期区分を行なう。第三節では物質的交換の実態、第四節では非物質的交換の実態を検討する、という構成になる。

なお、本研究ではロックダウン下の物資需要を「一般ニーズ」と「個別ニーズ」に区別する。あわせて、交換の対象となる物資を、需要の性質に対応させて「普通物資」と「特殊物資」に整理して議論する。

「一般ニーズ」とは、ほぼすべての世帯に共通する需要であり、それに対応する「普通物資」とは、主食や野菜、基本的な調味料、マスクや消毒液、一般的な常備薬など、短期的な生命維持と日常生活に不可欠な基礎的物資を指す。

一方、「個別ニーズ」とは家族構成や健康状態、ライフスタイルに応じて異なる、より個別化された需要であり、それに対応する「特殊物資」とは、妊婦や乳幼児向けのサプリメント、特定の基礎疾患に対する薬、乳幼児用オムツ、ペットフードや猫砂といった物資が典型例である。

表 5-1 カテゴリー「互助の内容」

サブカテゴリー	コード
住民間の物資贈与（普通物資）	タバコ・包丁・コーラ・小ネギの鉢植え・餃子・子どもにお菓子・近隣に魚・マスク・消毒液・自分が栽培した野菜を近隣に・調味料（唐辛子・八角）・ペットフード（キャットフード）・お隣さんに塩・薬・リブなどの食べ物・兄にごはん・近隣から大量の食べ物・近隣から教科書・近所のおばあさんに野菜・近隣から砂糖・友達に薬・近隣の老人に牛肉、近隣から譲ってもらったリブ、卵など・体温計・近隣の老人に食料品をたくさん送った
住民間の物資贈与（特殊物資）	小学校一年生の教科書・近隣からキャットフード（娘がグループで）・粉ミルク・葉酸・9年前のお医者さんから尿バッグ
非物資サポート	精神サポート・近所の人たちが一緒に猫を探してくれた・コロナに関する情報の共有・友達のため医療資源を探す・ネットで医者と連絡し、不安が払拭された・親戚がコロナでなくなった友達を皆が慰めた

表 5-2 カテゴリー「互助の手段」

サブカテゴリー①	サブカテゴリー②	コード

物質的交換（普通物資）	WeChat	小区のグループ・家族のグループ・團購専用グループ・モーメンツ・個別連絡
	その他	ボランティア・物々交換箱・壁に貼る・ベランダから投げる・電話
物質的交換（特殊物資）	WeChat	小区のグループ・家族のグループ・友達のグループ・個別連絡・ペット専用グループ
	その他	ボランティア
非物質サポート	WeChat	小区のグループ・家族のグループ・同級生のグループ・友達のグループ・職場のグループ・個別連絡・ビデオ通話
	その他	ボランティア・電話・メッセージ・新浪微博（SNS）・QQ（SNS）・小紅書（SNS）・ドアを開けて叫ぶ・車での配送（自家用車の提供）・近隣共同捜索（猫探し）

表 5-3 カテゴリー「関係の形成と持続性」

サブカテゴリー	コード
住民間の物資贈与（普通物資）	近所の人と知り合いになった・以前は会っても挨拶しなかったが、今は笑顔で挨拶するようになった・コロナが明けたら連絡がなくなった・店主と顔なじみになった・ほとんどない・同僚との関係深化・世代間・デジタル支援の関係（若者と高齢者）
住民間の物資贈与（特殊物資）	同じ小区の母とママ友になった・ペット互助グループに招待した・同じ妊婦である近所さんと友達になった
非物資サポート	旧友の再連絡・みんな温かいと感じる・昔の同級生グループで慰め合い・30年ぶりの同窓会まで開かれ・子どもの頃の旧友と交流を再開した

1 「武漢ロックダウン」における物資の保障

ロックダウン期間中における住民の物資の入手ルートは、主に以下の4種に分類される。①「事前備蓄」、②「団体購入（團購）」、③「政府による物資配給」、④「近隣住民間の互助」である。

また、③「政府による物資配給」については前章で詳述したことを踏まえた上で、④「近隣住民間の互助」を本章第3節と第4節で重点的に検討することから、本節では、主に①事前備蓄と②團購を説明する。

1.1 事前備蓄

「武漢ロックダウン」（2020年1月23日～2020年4月8日）は、ちょうど2020年中国の春節の時期（2020年1月25日～2020年2月8日）と重なっていた。中国の都市部では、春節の前に食料や日用品を買い込むことが一般的であり、店舗の休業や帰省・親戚訪問などを見越して、ふだんより多めに備蓄しておく習慣がある。そのため、ロックダウンが宣言された時点で、多くの世帯はすでに一定量の食料や生活必需品を自宅に蓄えていたと考えられる。

もっとも、どの程度備蓄していたのかについては、世帯ごとの差が大きかった。調査の中には、医療関係者など一部の住民が、1月23日の市全体のロックダウン宣言が公表される前の段階から、感染拡大に関する情報を早期に入手し、意図的に買い置きを進めていたという語りが含まれている（D2さん、O2さん）。他方で、多くの住民は、宣言後から小区の出入口が閉じられるまでの短い期間に、市内のスーパーや商業施設で急いで買いだめを行ったと

語っている（C2 さん、U2 さん）。本研究の対象者 D2 さんのように、平常時から「まとめ買い」や「買い置き」を好む生活スタイルを持つ住民もあり、もともとの購買習慣の違いも備蓄量の差に影響していた。

このように、市全体の封鎖が始まる時点で、各世帯が保有していた物資にはすでに大きな格差が存在していたと言える。こうした事前備蓄の差は、その後のロックダウン生活において、住民間の互助行為を生み出す重要な前提条件となっていたと考えられる。

1.2 團購

本研究でいう「團購」（中国語：团购「tuángòu」、日本語：団体購入、以下：團購）とは、ロックダウン下において、住民がオンライン上のチャットグループ（主に WeChat）を通じて共同で商品を注文し、小区単位でまとめて配送を受ける仕組みを指す。團購は、感染拡大防止のために個人が自由に外出して買い物をすることができない状況のなかで、外部の供給業者と小区内部の住民をつなぐ媒介として機能していた。

ここで重要なのは、團購を取り仕切る「团长」が、必ずしも住民によって選出された公式な代表ではないという点である。前章で説明したように、小区によっては、住民や「業主委員会」から選ばれた「楼長」が存在し、日常的な連絡や防疫措置の周知などを担っていたが、团长はそうした制度的な役職とは別に、自らの人脈や業者とのつながりを活かして物資の調達を引き受けた住民であった。

1.2.1 萌芽的な團購：M2 さんの事例

團購の萌芽は、必ずしも最初から組織的な形をとっていたわけではない。聞き取りのなかには、自分がもともと知っていた店とのつながりを小区の住民に「紹介する」ところから始まった事例が見られる。例えば、M2 さんは次のように語っている。

前から知ってた八百屋さんがいて、小区が封鎖されちゃって、その人の店の野菜が売れなくて全部ダメになりそうだったんです。こっちも小区の中に閉じ込められて買いに行けないでしょう。それで、小区の WeChat グループでその人の野菜をおすすめして、買いたい人はみんな私を友達追加してもらって、まとめてその人に頼んだんです。そしたら、その人がみんなの分を小区のゲートまで持ってきてくれて、私たちは下まで取りに行くだけでした。

（M2 さん）

この事例では、M2 さん自身は最終的に团长として継続的に團購を運営したわけではなく、「買い物ルートの共有者」として機能している。すなわち、外部の八百屋と小区内の住民とのあいだを一時的に仲介することで、事実上の團購に近い形態が生まれているが、組織としての團購システムが確立していたわけではない。こうした個人の脈に依拠した自発的な取り組みは、のちにより制度化された團購へと発展していく前段階として位置づけられる。

1.2.2 小区内における制度化：J3 さんの事例

より組織的な團購の形としては、本研究の対象者のなかで唯一の团长である J3 さんの事例が典型的である。J3 さんによれば、團購という仕組み自体は「武漢ロックダウン」以前から存在していたものの、その規模は小さく、限られた範囲でしか知られていなかったという。

実は武漢が封鎖になる前から團購はあったんですよ。でも、そのときは本当に小さい規模で、知ってる人も少なかったです。（中略）あとで小区が封鎖されて、私たちも買い物に行けなくなって、家の食べ物もほとんどなくなってしまっ。私たち（私と夫）は、前からそういう團購をやっている友だちが一人いて、その人に「一緒にやらせてもらえないか」って相談したんです。

（J3 さん）

團購を本格的に始めるためには、多くの手続きや証明が必要であり、その準備にはかなりの時間と労力がかかったと J3 さんは振り返る。

そのときはいろんな手続きとか、証明書を出したりとか、すごく面倒で、長い時間がかかりました。しかも、最初の一回目の入荷を待つのにすごく時間がかかって、たしか半月くらい待ったと思います。外地から入ってくる荷物は全部消毒とか防疫のチェックをしないとイケなかったの。でも、いったん手続きが全部通って、

向こう（業者）も流れに慣れてきてからは、だいたい週に一回固定で届けてもらえるようになって。そうってから、小区のグループで「一緒に團購できますよ」って近所の人たちに通知するようになりました。

(J3 さん)

J3 さんの小区では、その後、團購専用の WeChat グループがいくつも立ち上がり、小区の規模や居住者数に応じて複数の団長が活動していたという。団長は、もともと八百屋や薬局、ペットショップなどの業者として物資供給にかかわっていた人が兼ねる場合もあれば、J3 さんのようにロックダウンを契機として新たに参入した住民が務める場合もあった。

うちの小区は、そのとき團購のグループがいくつかあったと思います。でも、何グループかは途中でやめてしまっていて、最後まで続いたのは私たちだけだったと記憶しています。やっぱりこの仕事はけっこう大変で、住民の中には要求がすごく多くて、クレームも多い人がいて、対応するのが本当に難しかったです。

(J3 さん)

1.2.3 團購の問題点

團購の注文は、主に WeChat グループ内でいわゆる「接龍⁴⁴」と呼ばれる機能で受け付けられていた。住民は、団長が提示した野菜セットや肉類セットなどの商品リストに対して、「1. 102 号室 野菜セット A」「2. 202 号室 肉セット B」などと番号をふりながら自分の希望を順番に書き込んでいく。一定数の注文が集まると、団長が業者に発注し、商品が小区の出入口に一括で配送される。その後、団長や協力者が棟ごとに仕分けを行い、住民は時間をずらして受け取りに行くか、あるいは玄関先に置いてもらうなど、非接触の方法で受け渡しが行われていた⁴⁵。

團購は、中期以降、住民の「一般ニーズ」を支える主要な「普通物資」の供給ルートとなった一方で、特定の食材やベビー用品、ペット飼育などに伴う「個別ニーズ」には十分に対応しきれなかった。そのため、團購でカバーされない部分を補う形で、近隣住民どうしの物資の融通や贈与といった互助行為が生じていた。この点については、第 2 節および第 3 節で改めて検討する。

なお、こうした團購システムは、中国の都市部におけるスマートフォンとモバイル決済の高い普及率を前提としている。たとえば、2019 年に大都市圏の利用者を対象に行われた調査では、回答者の 9 割以上が中国のモバイル決済アプリである WeChat Pay（微信支付）や Alipay（支付宝）を日常的に利用していることが報告されている（Torre, D.Q.ほか 2020）⁴⁶。また、2020 年 6 月の時点で、オンライン決済の利用者は中国全体で 8 億人を超え、インターネット利用者の 8 割以上を占めていたとされる（Liu, L.ほか 2021）。こうしたデジタル基盤があったからこそ、住民は WeChat グループを通じて注文をとりまとめ、モバイル決済で支払いを完結させる團購が短期間のうちに広がっていったと考えられる。

一方で、同じ時期に 60 歳以上の高齢者のインターネット利用率は 2 割にとどまり、ネット利用者全体に占める高齢者の割合も 1 割に満たないと指摘されている（Liu, L.ほか 2021）⁴⁷。このことは、都市部の多くの住民にとって WeChat やモバイル決済が日常生活に深く組み込まれている一方で、高齢者やスマートフォン操作に不慣れな人びとにとっては、團購の仕組みに自力でアクセスすることが難しい場合が少なくないことを意味する。実際、本研究では、團購グループを立ち上げたのは、相対的に情報アクセスやデジタル・リテラシーの高い若年層やホワイトカラー層であり、高齢者世帯は近隣住民に代わりに申し込みや支払いを依頼せざるをえなかったという証言が繰り返し語られている。

このように、WeChat を基盤とする團購は、多くの住民にとっては生活を支える重要なインフラであると同時に、デジタル機器を使いこなせない人びとを新たな「災害弱者」として浮かび上がらせる側面も持っていた。本章 3.3

⁴⁴ 接龍機能とは、あるグループチャット内で人々が特定の活動に参加申し込みをする際に、番号を付けて自分の名前を一つ一つ上げていくことを指す。たとえば、最初に申し込んだ人は「1.102 号室 白菜、肉」と書き、次の人は「2. 202 号室 魚、マスク」と続けられる。

⁴⁵ 團購の具体的取引方法は、小区や団長によって多少違う。

⁴⁶ 都市部の住民を対象とした調査では、回答者の 92.4%が「WeChat Pay」、72.1%が「Alipay」を日常的に利用しており、いずれか一方または両方を利用する者は全体の 93.8%に達すると報告されている（Torre, D.ほか Q.2020）。

⁴⁷ 中国互聯網信息中心（CNNIC）の統計に基づく研究によれば、2020 年 3 月時点で 60 歳以上の高齢ネット利用者は全ネット利用者の 6.7%にとどまっている。また、高齢者全体のインターネット利用率は約 23.7%であり、若年層の利用率（約 73%）の 3 分の 1 にも満たないと指摘されている（Liu, L.ほか 2021）。

節では、そうした「災害弱者」に対する配慮が、どのように住民間の互助と結びついていたのかを詳しく検討する。

2 ロックダウンの時期区分

本調査から得られたデータに基づくと、ロックダウン期間中の物資の供給源と需要の充足状況は、おおむね次のように変化していった。最初は一切の物資配給がなく、住民の生活基礎物資の主な供給源は事前備蓄であった。約1～2週間後、政府による物資の無償提供（配給）が開始され、團購もこの時期に徐々に流行し始めた。ただし、團購システムの構築初期は購入可能な物品の数量と種類がともに少なく、主に一部の食料品や日用品といった「一般ニーズ」の一部を補うにとどまっていた。その後、政府による物資管理の最適化および團購メカニズムの徐々に成熟に伴い、團購は基本的に「一般ニーズ」をカバーできるようになった。他方で、「個別ニーズ」の多くは依然として公的な供給では十分に満たされず、その埋め合わせとして住民間の自発的な互助行為がロックダウン全期間を通じて継続していた。

以上のような物資保障の構造とその変化を前提として、本節では、ロックダウン期を初期・中期・後期の三つの時期に区分し、各時期における住民の主観的経験と互助行為の実態を検討する。

なお、本調査（第2回の調査）はロックダウン解除から約3～4年後に実施したインタビューに基づくため、対象者の語りは当時の経験を現在の視点から振り返る形で為されたものでもある。加えて、小区によって実施された政策や封鎖の厳しさ、各家庭の備蓄量や家族構成は大きく異なる。そのため、同じ日付であっても、ある住民にとっては「まだ何も見通しが立たず、外に出ることも怖い初期」の感覚であり、別の住民にとっては「政府配給や團購が始まり、ある程度は安心できる中期」に近い感覚であったというように、各対象者がどのタイミングで特定の時期に入ったと認識するかは一律ではない。したがって、本研究の時期区分は特定の暦日を厳密に画定するものではなく、物資供給の変化に対する不安の推移を手がかりとした分析上の目安として設定した。

得られたデータにより、ロックダウン初期には、物資供給の不透明さとウイルスに関する情報不足により、「家にある備蓄でどこまで持つか分からない」「外に出て感染したくない」といった強い不安が共有されていたことが分かった。その一方で、徐々に政府配給や團購が始まり、最低限の「一般ニーズ」がある程度見通せるようになると、「少しずつ外に出てみる」「WeChat グループで物資を探す」といった行動が生まれ、後期には「一般ニーズ」はおおむね満たされつつ、「個別ニーズ」をめぐる不安や不満が浮き彫りになっていく。

以上のように、本研究における三つの時期区分は、①政府配給や團購といった物資供給体制、および一般ニーズ／個別ニーズの充足状況という客観的条件と、②それに対する住民の不安感・安全感、外出や物資交換に対する心理的ハードルといった主観的経験、の双方をふまえた分析上の類型である。表5-4は、特に前者の側面を整理したものである。

表5-4 ロックダウン各時期における物資供給とニーズ充足状況

時期	政府配給	團購	一般ニーズ	個別ニーズ
初期(1月23日-2月上旬)	なし	なし	×	×
中期(2月上旬-3月中旬)	あり	あり	△	×
後期(3月中旬-4月8日)	あり	あり	○	△

注：「×」はほとんど満たされていない状態であり、「△」は一部は満たされているが不安定な状態であり、「○」はおおむね満たされている状態を示す。

2.1 初期（1月23日～2月上旬）

前述したように、初期（1月23日～2月上旬）は、一切の物資配給がなく、住民は自宅にある備蓄物資のみに頼らざるを得ず、支援体系が不十分で、「一般ニーズ」を満たすことが困難であった時期である。同時に、ウイルスの実態やロックダウンの見通しが不明瞭であったため、外出や対面での物資交換に対する恐怖が強く、多くの住民が極めて控えめな行動にとどまっていた。

調査対象者の多くは、ロックダウン初期の1～2週間に強い不安を経験したと語る。生活リズムが突然断ち切られ、物資供給の見通しが立たないことが大きな要因である。J3さんは次のように述べた。「最初の1週間は非常に

不安で、自分たちが見捨てられたのではないかと感じた」。B3さんも同様に、食料不足や感染拡大の不確実性に強い不安を抱いた。さらに、「あの頃なんて、とても下まで降りていくなんて無理で、毎日ずっと家にいましたね。うちの犬がそのとき本当に外で遊びたがってて、もうかわいそうなくらいストレス溜まってましたよ（笑）。でも実際、小区全体で、犬の散歩に下に降りる人なんて一人もいなかったです。」とC3さんは語った。

このように、多くの住民は「家にある備蓄だけでどこまで持つのか」「外に出れば感染するのではないか」という不安を抱え、家族・親族以外とのやり取りは最小限にとどまり、他者との接触や新しい購入ルートの利用に対して慎重な態度をとっていた。

2.2 中期（2月上旬～3月中旬）

中期（2月上旬～3月中旬）に入るところには、多くの世帯でロックダウン開始時に備えていた食料や日用品がどんどん少なくなり、外から物資を補う必要が出てきた。政府による物資配給と團購は、中期における主要な物資供給源となったが、まだ量も種類も十分ではなく、届くタイミングにもばらつきがあったため、住民の側には「もらえるけれど安心できない」「あっても足りない」という感覚が残っていた。こうした状況のなかで、足りないところを近隣どうしで分け合ったり、融通し合ったりする動きが目立つようになり、感染への不安を抱えつつも、政府配給と團購に加えて近隣住民間の物資共有を試行する住民が増えていった。

物資配給は主に中央政府の負担によって実施され、本調査においても全ての対象者が政府からの物資を受け取ったと回答している。しかし、その支援は安定せず、時間的・地域的に大きな格差が存在した。ある対象者（E2さん、I2さん、W2さんなど）は政府配給の物資が種類豊富で質も良いと語る一方、別の対象者（U2さん、S2さんなど）は量も種類も不足していたと指摘している。

当初の團購も物資不足により、セット内容や量が固定されており、自由に選択できなかった。そのため、ロックダウン中期における食料や医療物資の入手は非常に受動的であった。こうした制度は生活の下支えにはなったものの、住民の体感としては依然として「選べない、足りない」という不満が強かったことが、以下のような語りがあ

その團購はどのセットを買うかしか選べず、白菜や肉、米などがセットで組まれていて（C2さん）。

ちょっとした高級な食材は全く買えなかった。飢え死にはしないという程度（C3さん）。

食べたいものが手に入らないことが多かった。例えば魚は何か月も食べられなかった（武漢人は魚を好む）。ようやく魚を買えたとき、その味は死ぬほどおいしかった（B3さん）。

2.3 後期（3月中旬～4月8日）

後期（3月中旬～4月8日）では、政府配給と團購の支援体系の基盤が形成され、「普通物資」が概ね保証されるようになった一方で、「特殊物資」の需要は依然として公的支援では充足しきれず、その一部が近隣住民間の互助行為によって補われていた時期である。多くの住民にとっては、生命維持の不安がある程度緩和された一方で、妊婦や乳幼児、ペット、高齢者などを抱える世帯は、自らの「個別ニーズ」をめぐる不安を抱えつつ、WeChatを通じた互助ネットワークへの依存を強めていった。

後期においては、政府は資源を再配分することで、生活物資を比較的安定的に供給できるようになった。さらに各小区における團購を通じて個人まで物資を届けるシステムも整えられた。その結果、後期における「一般ニーズ」は概ね満たされ、対象者も後期には食料や医薬品などの基本的な生存資源に不足はなかったと報告している。しかし、個別的かつ深層的なニーズについては依然として十分に満たされておらず、こうした「個別ニーズ」を中心とする互助活動が後期における主要な互助行動の類型となった。

資源が不足している状況下では、まず「一般ニーズ」を優先的に確保することは当然の判断である。しかしながら、「個別ニーズ」の緊急性は決して低くはない。特に後期に入ると、多くの住民は蓄えた物資がほとんど尽き、例えば妊婦が必要とするサプリメントや乳幼児のオムツ、ペット用品など、「個別ニーズ」に対応する「特殊物資」は依然として入手困難であった。このため、住民はWeChatを基盤とした互助ネットワークに大きく依存せざるを得なかった。

3 物質的交換の展開

3.1 初期：家族内支援

本調査の対象者 36 名のうち、ロックダウン初期に近隣住民から何らかの物質的支援を受けたと回答した者は S2 さんのみであった。他の対象者はいずれも、ロックダウン初期には「近隣から物資支援を受けなかった」「特に助け合いはなかった」と述べており、少なくとも本調査の範囲では、「武漢ロックダウン」の初期段階に小区内の近隣住民同士の物資交換はほとんど存在しなかったことが確認できる。

S2 さん（75 歳）は、88 歳で一人暮らしの兄と同一の小区に居住していた。兄は脚が不自由な障害者であり、スマホも使用できないため、ロックダウン期間中の生活は S2 さんに全面的に依存せざるを得なかった。また、彼女の娘は尿毒症を患っていたため、S2 さんは娘を病院に送って透析治療を受けさせるため、初期段階においてもリスクを冒して頻繁に外出し、同時に物資の調達と兄の世話を並行して行わなければならなかった。S2 さんは次のように述べている。

ボランティアもおらず、政府の人々も手伝ってくれない。皆が疫病の蔓延を恐れている。（中略）うちの状況が大変だと知っていたのは上の階の隣人だけで、野菜を少し玄関先に置いてくれた。

（S2 さん）

「武漢ロックダウン」の初期段階では、本章 2.1 で記述したように、疫病の蔓延が深刻であり、住民のウイルスに対する未知の恐怖および物資保障の不確定性から、大部分の住民は控えめな行動をとるにとどまった。初期の物資交換行為は極めて稀にしか発生せず、政府の支援活動さえも十分に実施できず、住民の日常的な社会的交流が急激に制限された。

以上のデータから、ロックダウン初期の物質的交換は、基本的に家族・親族といった既存の強い紐帯の内部にとどまり、小区内の近隣住民とのあいだで新たな援助関係が広がっていたわけではないことが分かる。S2 さんの事例のように、同じ建物の住民が玄関先に野菜を置いていくといった行為は確認されたものの、これはあくまでごく限られた例外であり、多くの住民は他者との接触そのものを避けていた。未知のウイルスに対する恐怖や、封鎖がいつまで続くのか見通しの立たない状況は、外出や対面でのやり取りに高い心理的コストを与え、互助行為を抑制する方向に働いていたと言える。

その一方で、物資や医療へのアクセスが家族内だけでは賄いきれない世帯ほど、やむを得ず外出せざるを得ず、その過程で周囲の住民から「特に困難な状況にある世帯」として認識されやすかったと考えられる。S2 さんに対する隣人からの支援は、まだ互助ネットワークと呼べるほどの広がりを持ってはいないものの、後に中期以降に見られる近隣住民間の支援関係の、ごく初期的な萌芽として位置づけることができる。この点については、次節で検討する中期の物質的交換の分析において、改めて取り上げる。

3.2 中期：近隣住民間物資の贈与の活発

中期は、物資保障の体制が整い始めたことで、住民が他者と資源を融通し合う余地が生まれた時期である。前節で整理した物資供給の変化を背景に、近隣住民間の自発的な物資共有が多数確認され、生活維持のうえで重要な役割を担うようになった。本調査の 36 名のうち、本人が近隣住民との物質的交換に少なくとも一度参加したと答えた者は 15 名であった。一方、物質的交換に全く参加しなかった者は 11 名であり、残る 10 名は「自分では関わっていないが、家族の誰かは参加していたと思う」と述べている。また、これらの参加経験はロックダウン中期に集中していたと言える⁴⁸。

さらに、物資の贈与には 2 つの形態があった。第一は公共空間に設置された物々交換箱である。第二の形態は、WeChat グループを介した近隣住民間の物資贈与（呼びかけ型）である。

⁴⁸ 前述したように、ここでいう「中期」は暦日を厳密に区切ったものではない。対象者が互助行為に参加した時期を語る際、「後になって少し状況が落ち着いてから」「團購が始まってから」といった比較的あいまいな主観的経験を手がかりに設定した分析上の区分である。

3.2.1 物々交換箱

近隣住民による自発的な食料の共有やお裾分け、貸し借りが行われ、例えばエレベーターやロビーに置かれた箱に不要品を入れ、自由に持ち帰れるようにする事例があった。ただし、「武漢ロックダウン」ではウイルスへの不安や物資逼迫のため、この形態は比較的少なかった。このような物々交換箱は、後の上海ロックダウンでより一般的に見られるようになった（Zhou, Y. 2023）。また、A3さんは印象的な事例として、「ゴミを捨てに行ったとき、壁にイブプロフェンが貼られてたんです。誰が置いたか分からないけど、当時は解熱剤が本当に足りなくて、『え、すごい……』って思っただけ。思わず写真撮って友だちに送っちゃいました。ていうか、薬を壁に貼る人いる？ってちょっと笑っちゃいましたけどね」と語った。



図 5-1 A3さんが提供した写真（箱には「ひとり一袋」）

感染リスクへの懸念から対面接触が避けられる中、非接触で物資を共有する手段として、マンションの共用部分（ロビーやエレベーターホールなど）に「物々交換箱」や共有スペースを設置する事例が見られた。これは、住民が自宅にある余剰物資を箱に入れ、必要な住民が自由に持ち帰ることができる仕組みである。

特に印象的な事例として、Y2さんは、一階エントランスに置かれた箱をめぐって展開した物資交換の様子を、次のように振り返っている。

一番印象に残ってるのは、これですね。ロックダウンが始まってかなり経った頃、同じマンションの住人がグループチャットで「どうしてもコーラが飲みたいなあ」って言ったことがあって。

そしたら、ある親切な人がコーラ 12 本入りの箱をドーンと一階のエントランスに持ってきて、「ご自由にどうぞ」って置いてくれたんです。

そこからみんな自分の手持ちの物をその箱に入れていくっていう、物々交換が自然に始まったんですよ。ものが減るどころか、むしろどんどん増えていっちゃって。中には当時すごく貴重だった物も入ってたし、最後には誰かが小ネギの鉢植えまで置いていたりして、すごくほっこりしました。

（Y2さん）

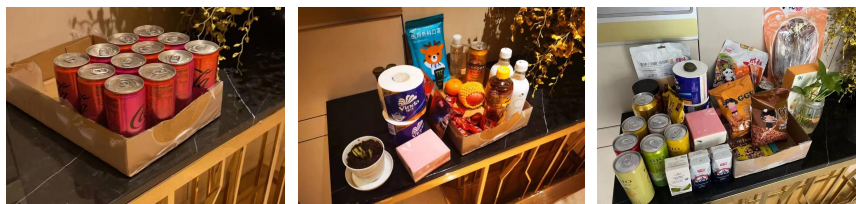


図 5-2 Y2さんが提供した（同じ場所で撮った）写真

この事例では、特定の「AさんからBさんへ」という二者間の贈与ではなく、共有スペースを介して不特定多数の住民が物資を持ち寄り、持ち帰るといった連鎖的な循環が発生していた。誰が何を置いたかは必ずしも明確ではないが、この「箱」を通じて、住民たちの間で物資と善意がリレーのように手渡されていく現象が、ロックダウン中期の小区内で実際に起きていたことが確認できる。

3.2.2 呼びかけ型

第二の形態は、WeChat グループを介した近隣住民間の物資贈与（呼びかけ型）である。すなわち、特定の住民がグループ内で「〇〇が足りない」「〇〇を探している」といった需要を投稿したり、あるいは「うちに〇〇が余っ

ている」と資源の提供可能性を示したりすることで始まる。こうした投稿はグループ全体に共有されるため、複数の住民が同時に見え、そのなかで「私が渡します」「うちにもありますよ」と応答した住民が、最終的な提供者となる。その後の受け渡しは、グループ内で相手を特定したうえで個別に連絡を取り合い、玄関先に置く、ドアノブに掛けるなど非接触的な方法で行われていた。

つまり、需要や提供の呼びかけは WeChat グループ内で広く可視化されるが、実際の物資の受け渡しは、応答した特定の住民同士の間で個別に行われる。例えば、L2 さんは以下のように語った。

当時は家で手持ち無沙汰で、多くの人が料理を学び始め、包子やパンを作っていた。ある家庭には小麦粉がなく、別の家庭には砂糖がない。そこでグループで声をかけ合い、互いに融通していた。（中略）小さい子どものいる家庭はお菓子を欲しがり、同じ建物の住民が分けてあげることもあった。

（質問：どのように渡していましたか？）

玄関に置いて取りに来てもらうとか、相手の玄関に掛けておくなど、接触を避ける方法であった。

（L2 さん）

以上の二つの形態はいずれも、同じ建物、同じ小区という地理的近接性のなかで展開していた。いずれの場合も、感染リスクを最小化しつつ、物資を融通し合う実践が工夫されていたことがうかがえる。たとえば E2 さんと N2 さんは次のように述べている。

（下の階の隣人が）猫砂をエレベーターに置いて、WeChat でひと言知らせてくれて。私があとでエレベーター呼んで、上がってきたら猫砂を出した。（中略）わざとけっこう時間をあけてから呼んだんですよ（その頃みんな家にいて、エレベーター使う人がいなかったから）。それで（ウイルスが怖かったので）戻ってきて消毒してから家に入れました。

（E2 さん）

團購で買った野菜のセットには、入ってない調味料がいくつかあるんですよ。たとえば干し唐辛子は売ってなくてね。俺、辛いのが好きだから、グループで「誰か唐辛子ある？ちょっと借りられない？」って書いたら、すぐ、隣の棟の別のユニットの人が「うちあるよ」って言うてくれて。で、俺が下に降りて（彼女の家の下まで行って）、そしたら彼女がベランダからポンって投げてくれたんだよね。（中略）こういう互いに助けるの、グループの中に他にもいっぱいあったよ。

（N2 さん）

また、交換の対象となる物資は、主食や野菜、調味料といった「普通物資」が中心であり、一部に解熱剤や常備薬など医療関連の物資が含まれていた。H3 さんと P2 さんは以下のように語った。

調味料のほうが多かったかな。（團購ができるようになって）家にはみんなどうにか野菜はあったけど、唐辛子とか八角とか、ない家もあって、それだと料理できなくてさ。

（H3 さん）

グループで薬とかマスクとか防護服を聞く人もいたけど、薬はみんなすごく足りなくて、あんまり人にあげられなかった。だから聞く人も（自分から）お金払って買いますって言うことが多かったね。あの時は蓮花清瘟（漢方薬）カプセルが効くって話で、グループで高い値段で買う人もいた。でも子どもが病気で解熱剤がほしいってなると、やっぱり誰かが助けてくれたりした。

（P2 さん）

3.3 後期：特殊物資の交換

後期において「一般ニーズ」がある程度満たされつつあった状況でも、「個別ニーズ」に基づく互助行動は引き続き活発に行われていたことが分かる。この背景には、中期のやり取りを通じて蓄積された信頼や安心感が、後期の支援を支える土台になっていた可能性がある。

本調査の対象者のうち 5 名（E2 さん、A3 さん、D3 さん、G3 さん、C3 さん、そのなか A3 さんと G3 さんは親子である）はペットを飼育していた。だが、いずれの世帯もペット関連物資の優先度は低く、十分な供給を受けられなかったと報告している。例えば猫砂やペットフードなどの製品は流通が滞り、入手は困難であったが、WeChat グループを通じた互助により確保したという。D3 さんは次のように述べている。

キャットフードがもうすぐなくなるとき、娘もすぐ困っていたが、團購では売っていなかったの、小区のグループで聞いたところ、幸い近所の方がたくさん備蓄していて少し分けてもらえた。

(D3 さん)

また、A3 さんはキャットフードの共有をきっかけに、同じ小区で猫を飼育する多くの隣人と知り合い、彼らを（ペット専用の）互助グループに招待した。A3 さんは以下のように語った。

小区のグループでペット用品を求める人がいるのを見て、私はそのグループ（ペット専用救援グループ）のリンクを小区のグループに共有したところ、多くの飼い主が参加した。（中略）私の友人もキャットフードが手に入らなくて。彼の住む小区には販売してくれる人がいなかった。だから彼をうちの小区のペット専用グループに招待した。印象的だったのは、彼の小区は管理がすごく厳しかったので、最終的に店主にお願いして、キャットフードをお米の袋に詰め替えて「お米」に偽装して、小区の中まで届けてもらったことだね。

猫の飼育は犬に比べて飼育者同士の交流が少ないこともあり、調査データからも、同じ小区に住んでいてもロックダウン前には猫飼育者同士の交流や連絡がほとんど存在しなかったことがうかがえる。そのため、「武漢ロックダウン」は、同じ関心をもつ飼育者同士が相互に接触し、関係を構築する契機となったことが示唆される。

さらに、妊婦である L2 さんも、グループ内で助けを求めている別の妊婦に支援を行ったことを報告している。L2 さんは次のように述べている。

グループで、ある妊婦が葉酸の補充が必要だと投稿していた。私も妊婦で、自宅に備蓄があったため、彼女を助けることができた。

(L2 さん)

以上の事例から、後期の物質的交換において特徴的なのは、互助の対象が「特殊物資に関わる個別ニーズ」を共有する特定の住民に集中していた点である。妊婦や乳幼児を抱える世帯、基礎疾患のある家族をもつ世帯、ペット飼育者などは、いずれも公的な配給や一般的な團購では十分に対応されない「個別ニーズ」を抱えていた。こうした住民同士は、WeChat グループ上で自ら不足を訴えたり、同じ困難を抱える他者の投稿に反応したりすることで、互いに結びつきを強めていった。とりわけペット用品や妊婦向けサプリメントのように、生活にとっては重要だが社会的には「ぜいたく品」だとみなされかねない物資については、同じ経験を共有する者同士だからこそ、ためらいなく支援を求めたり提供したりできる側面があったと考えられる。

こうしたやり取りは、単に物資を融通し合うだけでなく、「同じ状況にいる仲間」としての一体感や安心感を生み出していた。例えば A3 さんがペット専用の互助グループを立ち上げた事例からは、特定の関心やライフステージを共有する住民が、既存の小区グループから枝分かれする形で新たなネットワークを形成するプロセスが確認できる。このようなネットワークは、参加者の属性や経験がある程度似通っているため、相互の信頼や義務感が比較的短期間で醸成されやすく、結束型の SC を生み出していたと解釈できる。なお、こうした「特殊物資」を媒介とするつながりは、ロックダウン解除後の社会関係の持続にも影響を残しうる点で重要であり、この点は第 7 章で改めて検討する。

3.4 小括

以上の記述を鑑み、初期・中期・後期の物質的交換を比較すると、互助行為は、図 5-3 が示すように、①家族・親族内部の支援にほぼ限定される段階から、②小区という地縁的な枠組みのなかでの近隣間の贈与へと広がり、さらに③「特殊物資」を共有する住民同士のネットワークへと分化していく過程をたどったことが分かる。

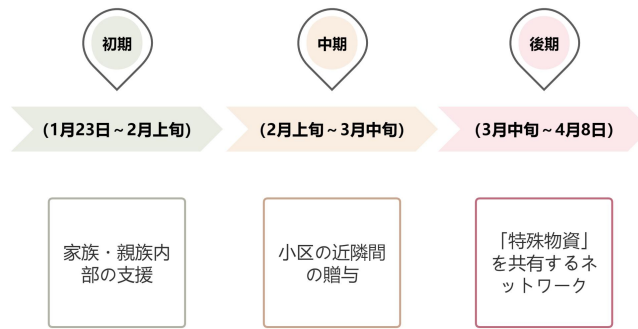


図 5-3 武漢ロックダウンにおける物質的交換の変化

ここで注目すべきは、公助と共助の機能的関係の変化である。一般に、公権力による「公助」は、画一的な「一般ニーズ（普通物資）」の大量供給には適しているが、各世帯で異なる「個別ニーズ（特殊物資）」にまできめ細かく対応することには限界がある。これに対して、民間の「共助」は、そうした制度の隙間にある「個別ニーズ」を埋める独自の機能を有している。ロックダウンの進行過程では、まさにこの両者の境界線が、時間の経過とともに動的に調整されていたと言える。具体的には、公助の能力が回復し「一般ニーズ」の領域をカバーするにつれて、共助はなくなったのではなく、公助の手が届かない「個別ニーズ」の領域へと移り、その役割を絞っていったのである。

その結果、後期には、妊婦やペット飼育者など、特定の属性をもつマイノリティの「個別ニーズ」がより鮮明に浮き彫りとなり、それに応答する形で、地縁的なつながりから、より選択的な互助ネットワーク（趣縁的なつながり）が形成されていった。この点は、ロックダウン解除後の社会関係の持続ともつながる可能性があるため、第七章において詳しく論じる。

すなわち、ロックダウンの進行は、単なる物資の変化ではなく、「公助」と「共助」の機能的分界線が移動し、役割分担が明確化していくプロセスであったと言える。ロックダウンの進行は、公助と共助の機能的すみ分けを明確化させるプロセスでもあった。この点は、第六章以降で検討する社会的交換の構造とも深く関わってくる。

初期には感染リスクと物資不足のためにほとんど交換が成立せず、家族内での助け合いが見られたが、中期には政府配給と団購が「一般ニーズ」をある程度下支えすることで、住民は余剰分を近隣に分け与える余裕ができた。後期には、基本的な「普通物資」への不安が緩和される一方で、妊婦やペット飼育者など、特定の属性をもつマイノリティの「個別ニーズ」が浮彫になり、それに応答する形でより選択的な互助ネットワークが形成されていったと言える。この点は、ロックダウン解除後の社会関係の持続とも関わる可能性があるため、第七章において詳しく論じる。

コールマン（Coleman 1990=2004 : 501）が述べるように、平時における制度的支援の整備は互助の必要性を弱め、社会関係の生成を抑制しうが、「武漢ロックダウン」の後期には、制度的供給と住民間の互助が単純な代替関係ではなく、異なるニーズ領域を担い合う形で併存していたことが示唆される。この制度的支援と互助行為の関係については、次章で改めて検討する。

また、3つの時期を通じて、贈る側は見返りを強く意識せず、受ける側も直ちに返礼義務を感じない「無償の供与」が多く観察された。こうした利他的行為は、SET 理論における一般的互酬性の視点から理解しうるものであり、その意味づけや互酬性の構造についての理論的検討も次章で行う。

以上のような物質的交換の変容は、次節で検討する非物質的交換の広がりとも密接に関連しており、第六章で論じる SET 理論および SC 理論から解釈を行う際の前提となる。

4 非物質的交換

ロックダウン下の交換行為は、物資を直接やり取りする物質的交換として観察される一方で、非物質的交換も継続的に存在していた。これらの非物質的交換は、住民が状況を理解し不安を調整する手がかりとなるだけでなく、物質的交換を立ち上げ、拡散させる媒介としても機能していた。そこで本節では、WeChat グループを基盤として展

開した非物質的交換の実態を、情報共有、精神的サポート、災害弱者への配慮という三つの側面から検討する。

なお、前節までに見た物質的交換は、ロックダウンによる移動制限（第四章 1.3 参照）のため、やり取りの範囲がほぼ同じ小区の中に限られていた。これに対して非物質的交換の特徴としては、主に WeChat などのオンラインプラットフォームで行われたため、同じ小区の住民に限られず、市内の別の地域に住む人びとや、武漢市の外にいる親族・友人ともつながることができることである。

4.1 情報共有：感染情報や購買ルートの情報交換

ロックダウン期の小区 WeChat グループでは、生活に関わるさまざまな情報が日々流れ込み、住民はとりわけ感染状況や対策に関する情報と、生活物資をどこでどう手に入れるかという購買ルートの情報を頻繁にやり取りしていた。

ロックダウンの初期であっても、住民は感染者数の増減や医療の動き、感染の見分け方などを、グループ内ではほぼ毎日のように共有していた。感染の広がりやどこまで進んでいるのか、状況がどう変わるのか分からないなかで、こうした情報を追いつけること自体が不安を和らげる手がかりになっていたと考えられる。E2 さんは当時の様子を次のように語る。

グループで毎日誰かがニュースを流してたんですよ。今日の新規感染者数が何人だとか、火神山病院がどこまでできたとか、あとはどうやって自分がかかったのかどうかを判断するとか。とにかくみんなの気持ちはずっと感染状況に引っ張られてて、グループでもそういう話ばかりでした。

（E2 さん）

一方で、感染情報と雑談が同じ場所に集まるため、情報量が多くなりすぎることもあった。G2 さんは次のように振り返っている。

とにかくメッセージが多くて、ちょっと見てないだけで何百件にもなった。真面目な情報もあれば、雑談とか言い合いみたいなのも混ざってました。

（G2 さん）

また、生活を維持するための物資入手に関する情報も、グループ内で頻繁に共有されていた。中期以降は特に、どの店やルートが機能しているか、何が買えるか、どう注文すればよいかといった実践的な「購買ルート情報」が、各世帯にとっては、物資不足の中で生活をつなぐために欠かせない手がかりとなっていた。特に本章 1.2.1 で述べた團購の成立は、ある住民が持っていた取引先の情報がグループ内で共有され、それをきっかけに團購の仕組みが立ち上がったという点で、典型例だと言える。

さらに、「個別ニーズ」に関わる情報が、新たなテーマ別ネットワークを生むきっかけにもなった。たとえば A3 さんは、キャットフードが足りなくなったときに小区グループで入手先を尋ねたところ、同じ小区に住むペットショップ店主が反応し、飼い主側の需要と店側の供給が結びついたという。このやり取りをきっかけにペット専用のグループが作られ、ペット用品の入手ルートなどの情報がその場に集まりやすくなっていった（詳細は本章 5.2 節で後述）。つまり、特定の「個別ニーズ」に関する情報が共有されることで、互助のつながりがより細かく分かれて広がっていく過程が確認できた。

4.2 精神的サポート

ロックダウン期の精神的サポートは、小区 WeChat グループでのやり取りだけでなく、家族・友人との個別の連絡や、職場グループでの声かけなど、複数の場を通じて行われていた。本調査のデータでは、多くの対象者がロックダウン期間中に他者との連絡頻度が増えたと語っている。連絡の相手には、家族、親戚、友人、同じ小区の住民、オンライン上の知人などが含まれ、その内容は、コロナに関する情報のやり取りや安否確認、気持ちのサポートなどが中心であった。ロックダウン以前に比べて、やり取りする相手の範囲が広がったという証言も少なくない。

4.2.1 個人間の支え

個人間の支えの典型的な事例として、日常的に行われていた親族や友人の間での安否確認がある。B2 さんは、次のように述べた。

親戚とは電話でずっと話していて、「陽性になった？陽性になった？」って、ほとんど毎日（WeChat で親戚と）電話してた。

（B2 さん）

また身近な人びとの安否が気になって、自分から連絡を広く取った事例もある。普段はあまりやり取りしない相手も含めて、一斉に安否確認をしたという点で、ロックダウンにおける個人間の支えの特徴として位置づけられる。D3 さんと A2 さんは次のように振り返る。

当時、スマホの連絡先に登録してある全員に、安否を気遣うメッセージを送った。そしたら、ほんとに全員から返事が来て、それがすごく印象に残ってる。

（D3 さん）

前はあんまり連絡取ってなかった友だちも結構いて、私が武漢人だって知ってる人ね。留学してた時に知り合った、そんなに仲良くない同級生でも、とりあえず普段はほとんどやり取りしないような人たちも、私が武漢人だからって連絡してきて、「マスクとか送ろうか」とか言ってくれたりしたんだよね。でも結局、最後まで私の手元には届かなかったけど。

（質問：彼らは送ったけど、あなたが受け取れなかったの？）

うんうん、そうそう。当時は武漢宛ての荷物が、けっこう途中で止められたことが多かったって聞いたし。

（A2 さん）

危機状況のなかで、一度距離があいていた相手との関係が、改めて動き出した様子がうかがえる。A2 さんもまた、そうした気遣いの連絡が来るとはまったく想定しておらず、そのメッセージを受け取った際には大きな感動を覚えたと述べている。このようなやりとりが、精神的サポートとして機能していた事例もある。例えば、旧友との会話が支えになったという語りも多い。さらに A2 さんは、家族が隔離されたことで情緒不安定になっていた友人に対して、ロックダウン期間中に継続的に声をかけて気持ちを落ち着かせようとしていたことも語っている。K2 さんも次のように述べている。

あの時、友人と話をしなければ、日々がとても辛かった。特にロックダウンが決まった直前の数日間は恐怖感で一杯で、その恐怖を解消する場所もなかった。（中略）当時はしばしばで人と連絡を取っていた。何もすることがなく、ロックダウンがいつ終わるかも分からない状況は、本当に怖かった。（中略）今は、（コロナが収束後）友人と連絡を取っていなくても、友情は途切れていない。必要なときに助けてくれると分かると安心できるようになってる。

（K2 さん）

もともと、こうした変化は一方向ではない。連絡が増えたという語りがある一方で、家族との生活に意識が集中した結果、友人との接触がむしろ減ったという語りもあった。T2 さんは当時を次のように述べている。

（友だちとは）むしろ連絡が減ったと思う。仕事にも行かなくなって、毎日家で、子どもの勉強のことばかり見てたからね。

（T2 さん）

ただし、本調査の範囲では、ネット上での連絡が「減った」と明確に述べたのは T2 さん一人のみであり、それ以外の多くの対象者は、WeChat などのオンラインプラットフォームを通じたやり取りに平時より多くの時間を割いていたと語っている。このように、ロックダウンをきっかけとした心理的な支え方や関係の変化は、対象者によって異なるパターンを示していた。ただし、本調査の対象者数には限りがあり、こうした違いの原因について一般的な傾向を述べることはできず、今後の検討が必要だろう。

4.2.2 グループの支え

こうした一対一のやり取りだけでなく、複数人が入っているグループチャットでも、雑談や励まし合いが前より活発になったという語りが見られた。N2 さんは、長い間動きがなかった同級生グループのチャットが急に賑やかになった経験を語っている。学生時代を思い出すようなやり取りが復活し、さらにロックダウン解除後には久しぶり

の同窓会も開かれた。昔からの旧友との交流はその後も続き、現在も休日に食事や釣りを共にすることもあるという。

仕事のグループとか同級生のグループとかいろいろあるんだけど、あの時期は特に同級生グループがよく動いてたね。中学の同級生グループなんだけど、もう卒業して30年以上になるのに、普段はほとんど会わないし、チャットも静かだった。でもロックダウンの時は毎日メッセージが流れてて、みんなで冗談言い合ったり、からかったりしてさ。（中略）グループに中医学が分かる同級生がいて、抵抗力つけるにはどうしたらいいか、とかそういう話も教えてくれたりした。（中略）家にずっと閉じこもってたから、みんなでふざけて雰囲気盛り上げようとしてたんだと思う。ネットでも面白いネタがいっぱい流れてたし。覚えてるのは、家の床をミミズみたいによいように前に進む動画が流行ってて、みんなその動きを真似して動画撮って、グループに上げたりしてた。まあ、そうやって自分たちで笑い合ってた感じかな。

（N2 さん）

また G3 さんは、連絡の「内容」の変化に言及している。

以前は学校に行く人は学校へ、仕事に行く人は仕事へって感じで、近所の人とも同僚とも、普段はあんまり雑談などの連絡しなかった。でもロックダウンになってからは、小区の人とも同僚とも WeChat でやり取りするようになって、みんなが健康とか生活のことを本気で気にかけてくれるのが伝わってきたんだ。仕事の話だけじゃなくて、前よりずっと近い関係になった気がした。

（G3 さん）

このような語りからは、ロックダウン期に、これまであまり個人的な話をしなかった相手との間でも、体調や暮らしぶりをめぐるやり取りが増えた様子が読み取れる。また、グループ内で共有された呼びかけや共同の行動が、住民に強く印象づけられ、精神的サポートに見られていた事例もある。U2 さんは、小区の住民がオンライン上の呼びかけを通じて、同じ時間に声を合わせた経験を次のように語る。

ある夜、WeChat グループで呼びかけがあって、決まった時間にみんな電気を消して、懐中電灯だけで窓の外に向かって「武漢頑張れ」って叫ぶことになったんです。その時はすごくワクワクして、体の中から力がわいてくる感じがした。武漢の人たちは前より団結した、って本気で思いました。

（U2 さん）

また、V2 さんは、猫（この猫は、実は隣の部屋の借主が帰省のため V2 さんの家に預けていた猫である）が逃げた際に小区グループを通じて助けを求め、多くの住民が捜索に協力した場面を次のように振り返る。ここでは、安否確認や励ましにとどまらず、具体的な行動を共有する形での支え合いが語られている。

ドアを開けた時に猫が逃げちゃって、上の階も下の階も階段も全部探したけど見つからなくて、小区の外にも出られないから、中を探しても見つからなかった。（飼い主の彼女らにどう説明したらいいのかわからなくて）毎日泣いてもう必死だった。そこでグループにお知らせを出して猫の写真を送って、「この猫を見かけたら絶対捕まえて教えてください」って呼びかけた。（中略）グループの人たちも一緒に呼んでくれて、下に降りたついでに探してくれる人もいてさ。その数日間は、小区中に「ミミ〜！（猫の名前）」って声が響いてた。

（V2 さん）

同様のやり取りは、小区のグループだけでなく、職場のグループでもみられた。R2 さんは、勤務先の大きなグループチャットについて、感染拡大期には同僚同士の安否確認や励ましが頻繁に行われていたと述べる。特に、ロックダウン直前の会社の新年会で感染者が出たことを受け、同僚からの連絡が一気に増えたことが記憶に残っているという。

〇〇（R2 さんの会社名）の大きいグループがあって、たしか8、9人くらいコロナにかかってたんですよ。ちょうどロックダウンの2日前にみんなで食事会をしてて、10何卓もあるうちの1卓で2人が陽性になって。私はその卓じゃないけど隣の卓にいたから、同僚がみんな心配して連絡してきてね。（中略）普段はそんなに気にしてくれないのに（笑）、急にいっぱいメッセージ来て、私は「え、何??俺は大丈夫だよ」って返して。みんな怖がってたっていうより、ほんとに心配してくれてたんだと思う。

(R2 さん)

一方で、情報と感情が集まる場であるがゆえに、衝突が生じることもあった。B3 さんは、WeChat グループ内での言い合いについて次のように述べている。

グループで言い合いになることもありましたよ。怖がらせるようなニュースとか、明らかなデマみたいなのを誰かが流すと、「そういうのはやめて」って注意する人が出て、そこでケンカになる。結構しょっちゅう誰かが揉めてて、みんなストレスも溜まってたと思う。

(B3 さん)

このような語りから、WeChat グループは多くの対象者にとって、励ましや心配の言葉が行き交う拠り所として経験されていた一方で、不安や苛立ちが表に出て、摩擦が生じる場面もあったことが分かる。

以上のように、本節で取り上げた語りからは、ロックダウン期に、オンラインを介したさまざまな精神的サポートが行われていたことが確認できる。こうした非物質的なやり取りが、住民間の互助の広がりや信頼の形成とどのように関わっていたのかについては、第六章で改めて検討する。

4.3 災害弱者への配慮

前節まで見てきたように、WeChat を基盤とした互助ネットワークは、スマートフォンを日常的に利用する住民を中心に機能していた。その一方で、高齢者などのいわゆる「デジタル弱者」にとっては、こうした仕組みに自ら参加すること自体が難しい場合も少なくなかった。本節では、そうした災害弱者に対して、住民がどのように資源を優先的に配分し、互助を実践していたのかを検討する。

4.3.1 デジタル弱者の対応

高齢者世帯への配慮に関する事例が複数の聞き取りで報告された。D2 さんは、同じ建物に住む高齢夫婦への対応について次のように振り返る。

上の階に 80 代くらいのご夫婦が住んでいて、スマホもあまり使えないし、團購のやり方も分からないんです。最初にうちの小区で團購ができるようになった時、「あの 2 人はきっと自分じゃ注文できない」と思って、うちで頼む分とは別に、大きな袋の野菜セットをもう 1 つ多めに頼んでおいて、届いたら一緒にエレベーターで持って行きました。

(D2 さん)

ここでは、高齢者がデジタル機器を使いこなすことの難しさを前提に、若い世帯が代理人として注文と受け取りを引き受け、物資を優先的に分け与えた。D2 さん自身はこの行為を特別な善行として語るのではなく、「困っているなら、ついでに一緒に頼む」という感覚で述べており、日常的な近隣関係の延長線上で配慮が実践されていたことが分かる。

また、高齢者自身が近所の住民に教わりながら團購に参加した例もあった。68 歳の H3 さんは次のように語っている。

團購はやり方が難しいです。最初はグループだけだったのに、あとからいろんな小程序（ミニプログラム）⁴⁹ も出てきて、私はもうよく分からなかったんです。隣の小娘に、グループで「接龍」するやり方を教えてもらって、それだけはできるようになりました。

(H3 さん)

このように、代わりにやってもらう場合だけでなく、「やり方を教えてもらう」という支え方も、高齢者が互助ネットワークに関わるための実際の手立てになっていた。

さらに、高齢者への支援は同じ小区の近隣に限られず、離れて暮らす家族がオンラインで補う場合もあった。N2 さんは両親と別の小区に住んでいたため、両親が入っている團購グループに自分も参加し、そこで代わりに注文していたという。ここでは、物理的に移動できない状況のなかでも、オンライン上の仕組みであったために、家族に

⁴⁹ 小程序（ミニプログラム）は WeChat 内のコンテンツを、ダウンロードやインストールせずに閲覧利用できるアプリ内アプリである（iCJ 2020）。

よる代理行為が可能になっていたといえる。

つまり、ロックダウン下では、生活物資の調達システムが物理空間から WeChat という「デジタル空間」へと急速に移行した。この環境変化により、スマートフォンを扱えない高齢者は、コミュニティ内部に居ながらにして生存リソースへのアクセスを断たれる「二重の孤立（物理的・デジタル的孤立）」の危機に瀕していた。若年層は、単に代理購入を行っただけでなく、デジタル空間と物理空間をつなぐ「デジタル・ゲートキーパー」としての役割を担っていたことがわかる。彼らの介在によって、本来であればデジタル・デバイドにより孤立するはずだった高齢者が、互助のネットワークの中に包摂され続けた点は、本研究の事例における重要な特徴の一つである（第七章で詳述）。

4.3.2 資源の優先配分とサポート

また、妊婦や乳幼児を抱える世帯に対する配慮も同様である。L2 さんは、当時の團購で入手が難しかった豚のスペアリブをめぐるやり取りについて、次のように述べている。

その頃は買える野菜も本当に少なくて、たまにスペアリブが出てもすぐ売り切れちゃうんです。うちの姑がグループに「お嫁さんが妊娠してるので、スペアリブが少しあればスープ作ってあげたい」って書いたら、すでにスペアリブを確保してた別の住民が「それならうちの分を譲りますよ」って言ってきて、団長に「スペアリブはあの人に回してあげてください」って連絡してくれました。

(L2 さん)

この事例では、希少な食材が単なる「早い者勝ち」ではなく、「妊婦という弱者への配慮」を優先する原理に基づいて再配分されている。譲った側が明確な見返りを求めたり、後日の返礼を期待したりする様子は聞き取りからは確認されず、「今いちばん必要な人に回したほうがいい」という共通の理解のもとで譲渡が行われていたと理解できる。

同じく乳幼児・産後の母親をめぐる、身近な余剰を回す形の支援も語られた。H3 さんは次のように述べている。

グループに新しく赤ちゃんを出産した方がいて、（家に栄養のあるものがなくて）母乳が足りないそうだった。ちょうど（社区が配給してくれた）魚が私には食べられないので、その魚を（自分の）ドアの外にかけて、彼女が取りに来るようにした。

(H3 さん)

ここでは、産後の母親という状況が共有されることで、食べられない魚という「家にある資源」が自然に優先配分の対象として差し出されている。妊婦や乳幼児を抱える世帯が、物資の不足状況のなかで「優先すべき相手」として見えやすくなっていたことを示す事例だといえる。

また、薬のように特に不足していた物資についても、緊急あるいは特殊な事情が共有された場合に優先的な支援が立ち上がる場面があった。たとえば本章 3.2 で P2 さんが述べていたように、一般の薬は皆が不足しておりなかなか分けられない一方、子どもの発熱など差し迫った事情が示されると、誰かが助けることがあったという。グループ内で「なぜそれが必要なのか」という事情が可視化されることで支援が動きやすくなる点は、住民同士の一定の信頼感を前提にしたやり取りとして理解できるだろう。

くわえて、慢性疾患を抱える住民に対して、周囲が安否を気遣う形での配慮が立ち上がっていた事例も確認された。K2 さんは幼少期から喘息を患っており、ロックダウン期には体調悪化のリスクを心配した幼馴染や昔の同級生から連絡が相次いだという。なかには直接の連絡先を知らない者が、別の知人に問い合わせまで K2 さんの状況を尋ねてきたこともあった。K2 さんの語りは、災害弱者が物資の優先配分の対象としてだけでなく、健康上の脆弱性ゆえに「気かけられる対象」としてネットワークのなかで見えやすくなり、安否確認や情報の伝達といった非物質的な支えを受けうることを示している。

以上のように、WeChat を基盤とした互助ネットワークはスマートフォン利用を前提とする仕組みでありながら、そのなかで高齢者・妊婦・乳幼児世帯・慢性疾患のある住民に対する代理行為や優先配分が繰り返し実践されていた。これらの語りは、ロックダウンという制約の強い状況のなかで、住民が「困っている人を放っておかない」という感覚にもとづき、物質的支援と非物質的な配慮を組み合わせながら互助を成り立たせていたことを示唆している。

4.4 小括

本節では、ロックダウン期における非物質的な交換として、感染状況や購買ルートに関する情報共有（4.1 節）、家族・友人・同級生や小区・職場グループを通じた精神的サポート（4.2 節）、高齢者や妊婦、慢性疾患を抱える人びとなど「災害弱者」への配慮や優先的な声かけ（4.3 節）を取り上げてきた。これらの多くは、WeChat グループや個別チャットといったオンライン空間で行われ、顔を合わせる必要がないという点で、感染のリスクがほとんどないやり取りであった。

このため、前節でみた物質的交換が主として同じ小区内部に限定され、かつ中期・後期に集中していたのに対し、非物質的な交換はロックダウンの全期間を通じて比較的活発に見られた。とりわけ、感染者数や医療状況、團購のルートなどに関する情報の共有は、各世帯が状況を見きわめ、日々の生活を組み立てるための重要な手がかりとなっていた。また、励ましや冗談のやり取り、共同のキャッチフレーズや呼びかけ（「武漢頑張れ」など）は、強い不安のなかで気持ちを支え合う実践として語られていた。

さらに、こうした非物質的なやり取りは、空間的な広がりという点でも特徴をもつ。物資の受け渡しは小区の内部にほぼ限定されていたのに対し、オンラインを介した連絡は、小区外に住む親族や友人、他地域の同級生・同僚にまで及んでいた。災害弱者への配慮もまた、野菜セットやスペアリブの優先配分といった小区内だけでなく、喘息を抱える対象者の安否を旧友が気にかけるといったかたちで、小区の外側からも人々の動きが立ち上がっていたことがうかがえる。

以上のように、非物質的交換は、感染リスクを伴わないオンラインのやり取りであるがゆえに、ロックダウン期を通じて広い範囲で維持されていた。その内容は、情報のやり取り、気持ちの支え合い、災害弱者への配慮といった複数の層からなり、物質的交換とも密接に結びついていたと考えられる。こうした非物質的なやり取りが、どのようにして住民間の互助の広がりや信頼の形成と関わっていたのかについては、第六章において SET 理論および SC 論の枠組みから改めて検討する。

5 総合的な事例

本節では、これまでの節で見てきた團購、高齢者や災害弱者への配慮、（個別ニーズによる）趣縁的ネットワークの形成などの要素が、どのように一つの「線」としてつながっていたのかを示すために、より連続性のある事例を取り上げる。

ここで扱う J3 さんの「團購から小売店への展開」の事例と、A3 さん、E2 さんを中心とする「ペット救助グループ」の事例は、いずれもロックダウン期の物資確保、近隣関係の変化、デジタル技術の利用、ロックダウン解除後の関係の持続といった複数の要素を含んでいる。こうした一連の流れを示すため、本節では一つの節のなかにまとめつつも、二つの独立した事例として記述する。これらの事例は、第六章で検討する社会的交換の構造分析および第七章で扱う SC の生成メカニズムを考えるうえでの橋渡しとなるものである。

5.1 「團購」から「小売店」へ：J3 さんの事例

ロックダウン解除後も、当時の「團購」の習慣が消滅せず、むしろ地域の生活インフラとして定着・制度化された事例が存在する。その典型例として、本節では J3 さんの事例を取り上げる。

J3 さん（30 代女性）は、息子との三人暮らしをしている。彼女はロックダウン期間中、自ら団長となって住民を組織し、物資の共同購入を行っていた。そしてロックダウン解除後、彼女は夫と小区の入り口にある小さな店舗物件を買い取り、そこで小売店を経営し始めていた。興味深いのは、彼女が現在も店を拠点として、ロックダウン期と同様の團購ビジネスを継続している点である。



図 5-4 5-5 筆者が撮った J3 さんの小売店の写真

5.1.1 團購の成立

彼女が團購を始めた当初の動機は、自身の親族や家族の生活を守るための切実なニーズからだった。彼女は当時を次のように振り返る。

あの時は、モノを確保するのが本当に大変で。武漢市全体の人がある（團購のプラットフォームの）ミニプログラム上で注文しようとしていましたから、みんなが画面に張り付いて奪い合いでした。特に少し安い商品なんかは、棚に並んだ（商品が出た）瞬間に、一分もしないうちに売り切れです。本当に早かった。

武漢市全体で本当に物が買えなくて、運ぼうにも手続きが大変で、そもそも入ってこなかったんですよ。だから個人じゃとても買えなくて、まとめて注文しないとダメでね。うちは一回に 30 セット以上じゃないと配送してくれませんでした（後略）。

（質問：最初はどのような経緯でグループを作ろうと思ったんですか？）

（小区の）封鎖が始まって一、二週間経った頃でしたね。最初は自分でグループを作ろうなんて思っていませんでした。同じ小区に親戚が住んでいるので、最初は親戚と相談して、「自分たちだけじゃ（最低注文金額が高すぎて）買えないね、数千元分買わないと配達してくれないから」って話していたんです。そこで「じゃあ一緒に買おう」となって、誰かが「いっそのこと小区の人たちも誘って一緒に買えばいいんじゃない？」って提案して（團購が）始まったんです。

（中略）最初は、商品の受け渡しを建物の下でするなんて絶対嫌でしたよ。だって、当時は本当に命がけで外に出て荷物を配るような状況でしたから。社区のスタッフに来てもらって配ってもらおうとしたけど、誰も手伝ってくれなくて。もう自分たちでやるしかなかったんです。しかも当時は利益を出そうなんて全く考えていなくて、ただ各家庭に物資が行き渡ればいい、それだけでした。

（J3 さん）

当時、小区内には J3 さん以外にも複数の団長が存在していた。しかし、現在まで活動を継続しているのは J3 さん一家のみである。J3 さんによれば、別の棟で活動していたある主催者は、住民に対する態度が原因で支持を失ったという。

2 号棟にも團購をやっている人がいたんですが、その人は性格があまり良くなくて……みんなを敵に回しちゃったんですよ。すぐ怒るし、言葉もきつくて。小区にはお年寄りもいて、「上の階まで運んでくれないか」って頼む人もいないじゃないですか。でも彼は手伝わなくて、「手足があるんだから自分で取りに來い」って言うような人で。結局、そういう噂は小区の中ですぐに「一から十へ、十から百へ」で広まるから、みんな彼のことを嫌うようになって、誰も頼まなくなりましたね。

（J3 さん）

このように、ロックダウン期における住民との関わり方や、信頼関係の構築が團購の継続には大きく影響していた。住民たちそれぞれの要望に対し、J3 さんは高齢者の世帯には玄関先まで物資を届けるなど、きめ細やかな配慮を行っていた。こうした対応の差が住民からの評判を形成し、結果として J3 さんのネットワークだけが生き残る形となったといえる。

この事例は、團購という実践が、単に物資を手に入れる手段にとどまらず、依頼への応答や些細な気配りを通じ

て、特定の人を中心とした信頼や互酬的な期待のネットワークを形成していたことを示している。こうした交換過程の特徴が、第七章で検討する SC をどのように形成したのかについては、改めて整理していく。

5.1.2 コミュニティ・スペースとしての小売店

さらに特筆すべきは、J3 さんの店舗が単なる商業施設にとどまらず、小区の住民が集う「半ば公共的な空間」あるいは「交流の場」として機能している点である。実際に、筆者が店舗を訪れインタビューを行っている最中も、店にはひっきりなしに小区の住民が訪れていた。店の入り口には数脚の椅子が置かれており、住民たちが日常的に座って世間話をするスペースとなっている（図 5-5 を参照）。

インタビュー中、J3 さんの紹介者でもある U2 さんが店を訪れた際も、彼は自然な様子で入り口の椅子を店内に持ち込み、話の輪に加わった。U2 さんは、客が来ると J3 さんの代わりに商品を渡すなど、店員のような振る舞いすら見せていた。また、学校から帰ってきた J3 さんの息子に対し、その場に居合わせた近所の高齢男性と U2 さんが「テストは何点だった?」「スピーチ大会の動画を見せてみる」と声をかける場面も見られた。J3 さんによれば、小区の高齢者たちは特に用事がなくても店に立ち寄り、時間を過ごしていくという。そこには、ロックダウン期に培われた「持ちつ持たれつ」の関係が、平時の近隣関係へと形を変えて持続している様子が見て取れる。

足腰が弱くて不自由な高齢の方もいますし、年だと感染もしやすいですからね。私たちはそういった方々の家の玄関先まで、自分たちから進んで届けていました。それから、今でもはっきりと覚えている人がいるんですが、その人はウイルスをものすごく怖がっていて、「どうしても部屋まで送ってほしい」って言うんです。電話口で怖がって泣き出すほどで……本当に、すごくよく覚えています。そういう場合も、結局は届けてあげましたね。放っておくわけにもいきませんから。互いに助け合うのは当たり前のことだと思っています。

人それぞれですが、ちょっとしたこと（ロックダウンの時、私たちが荷物を出荷したり配達したり、お年寄りの家には直接届けたりしていたのを）でもずっと覚えていてくれる人も多いです。たとえば常連の翠おばさんは、毎年（春節の頃）タバコを一箱くれたり、私に 100 元のお年玉をくれたりします（笑）。私たちが苦労しているのを見てくれているんですね。

店で売るものも、できるだけ市場価格より安くしています。外でタバコが値上がりした時も、うちは値上げしませんでした。

だって、私たちは封鎖の時から一緒にやってきた、みんな顔なじみですから。「儲けは少なくともいい、1 元や 2 元多くもらったって金持ちになれるわけじゃないし」って。私の売るものは全部本物（タバコのことを指す）ですし、「真心には真心で（相手の身になって考える）」としか言えませんね。

おばさんたちは本当によくしてくれますが、同じように私たちも彼女たちを大切にしています。実家に帰省するたびに、地元の特産品を多めに買ってきて、仲の良いおばさんたちに「一人一羽の地鶏」を配ったりして。別に向こうも私のそんな物を必要としているわけじゃないでしょうけど、これは気持ちの問題ですから。

（中略）私たちが忙しくて手が回らない時は、彼女たちがよく手伝ってくれますよ。私も彼女たちを信頼しているので、彼女たちが勝手に（レジに入って）お金を受け取って、自分でお釣りを渡したりしています。店の商品価格も全部詳しく覚えているんですよ（笑）。

（中略）私が店で座っていると退屈だろうって思うみたいで、彼女たちも特に用事がなくても来て、座って私とおしゃべりしていくんです。「退屈しないように」って気遣ってくれているみたいですね。

（J3 さん）

J3 さんの語りからは、単なる売り手と買い手の関係を越えた、濃密な信頼関係が確認できる。ロックダウンという危機的な状況下で形成された團購というネットワークは、J3 さんの店舗という物理的な拠り所を得て、高齢者の（電子製品の使い方が分からない時の）デジタル支援や日常的な見守り、そして相互の気遣いが交錯する、持続可能なコミュニティの基盤となるような関係へと変化していた様子がうかがえる。

5.1.3 習慣の定着と経済的合理性

現在、J3 さんの店では、ロックダウン期と同様の手法でビジネスが行われている。J3 さんはメーカーや工場から直接仕入れるルートを持っており、中間業者を通さないため、市場価格より安価に商品を提供できる。また、ロックダウンという極限状況は、本来デジタル機器の扱いに不慣れだった高齢者層に、強制的に「スマホで團購に参加する」というスキルを習得させる契機となった。この経験が土台となり、ロックダウン解除後も高齢者を含む多く

の住民が、安価で便利な團購を利用し続けている。

今の團購も、流れは（ロックダウン期と）だいたい同じです。私がグループチャットで注文をとって、商品が届いたらグループで知らせる。みんなは私の店に取りに来る。封鎖の時はマンションの下で配っていたのが、今は店に取りに来るようになった、という違いですね。

(J3 さん)

ロックダウン期に形成されたこうした團購ネットワークが、解除後には店舗を拠点とした日常的な交流の場として残存していることは、危機下の互助が、後にどのような SC として地域社会に組み込まれていくのかを考えるうえで重要な示唆を与える。第六章では、この事例を含む互助行為の交換構造を社会的交換理論の観点から整理し、第七章では、それが信頼・規範・ネットワークから成る SC の形成とどのように結びついていたのかを検討する。

5.2 ペット救助グループの形成：A3 さんと E2 さんの事例

5.2.1 購買から救助へ

前述したように、ロックダウン後期において、食料などの一般物資が充足してくる一方で、ペット飼育者たちは依然として深刻な「特殊物資」の不足に直面していた（本章 3.3 節を参照）。この不足は、同じ関心を持つ者同士を結びつけ、小区という地理的な枠組みを超えた趣縁的なネットワークを形成する契機となった。

A3 さん（29 歳女性）の事例は、当初はキャットフードの共同購入という目的で始まったつながりが、次第に情報のハブとして機能し、より広範な支援活動へと接続されていくプロセスを示している。

A3 さんは当初、自宅のキャットフードが底をつきかけ、不安を募らせていた。その際、（同じ小区に住む）ペットショップ店主が小区 WeChat グループで商品を販売しているのを見つけ、購入のために参加した。ここに趣縁的なネットワークの一つの特徴としては、小区という境界を越えて機能できた点である。例えば、A3 さんは、別の小区に住む友人も同様に餌不足で困窮していることを知り、彼をこのグループに招待したのである。

以前からその店のことは知っていた。私たちの小区の入り口にあるから。ただ、普段キャットフードや猫砂はネットで買っていたから、お店に行ったことはなかったんだけど。（小区が封鎖されて）店は営業できないし在庫も売れずに彼らは困っていて、私たち飼い主はフードが手に入らない。まさに利害が一致した形だった。

それから、小区のグループでペット用品を求める人がいるのを何回も見したが、私はそのグループのリンクを小区のグループにまた共有したところ、多くの飼い主が参加した。

（中略）私の友人もキャットフードが手に入らなくて。彼の住む小区には販売してくれる人がいなかった。だから彼をうちの小区のペット専用グループに招待した。印象的だったのは、彼の小区は管理がすごく厳しかったので、最終的に店主にお願いして、キャットフードをお米の袋に詰め替えて「お米」に偽装して、小区の中まで届けてもらったことだね。

(A3 さん)

さらに重要な点は、この購買グループが単なる商取引の場にとどまらず、ペットの生命に関わる緊急情報を共有する主要な「場」へと変化したことである。A3 さんによれば、小区の一般グループでは生活情報や雑談の量が膨大であり、「特殊物資」（この場合はペット飼育者）が必要とする情報はすぐに埋もれてしまう。そのため、ペット専用グループは、飼育者にとって不可欠な情報を効率的に選別、共有するための「フィルター」として機能した。

あの（うちの小区のペット用品）グループには、よくペットの救助情報も流れてきていた。だいたい他からの転送で、例えば「〇〇小区でペットが助けを求めている！拡散希望！」みたいなやつだね。

あと、救助専用グループのリンクを直接貼ってくれる人もいた。「これは武漢洪山区の救助グループです」とかって。そこは、ロックダウンで取り残されたペットや野良動物を助けるための専門のグループなんだ。当時はほら、みんな実家に帰省していて、ペットを連れて帰れなかった人が多かったじゃないか。飼い主が帰れなくて、家に閉じ込められてご飯もない、小区の人にも頼めない、そういう SOS がそこに集まってくるんだよ。「誰か家に来て世話してくれませんか」ってお願いするための場所みたいな。

私も当時、そういうグループにいくつか入ったよ。洪山区救助グループとか、光谷⁵⁰の救助グループとか。

⁵⁰ 武漢市洪山区の地名

(質問：じゃあ、封鎖中はスマホの中がグループだらけだったんじゃないですか?)

だって、小区の普通のグループはメッセージが多すぎるじゃないか。雑談とか、ニュースとか、喧嘩や言い合いとか、もう山ほどあって。ペットの情報なんてすぐに流れて見えなくなっちゃう。だから、わざわざこういうペット専用のグループに分けられていたんだと思う。

(A3 さん)

A3 さん自身は直接的な救助活動には参加しなかったものの、「もし自分の小区で誰かが助けを求めていたら手伝おう」という意識でこれらの情報を見ていたと語る。これは、実際にアクションを起こさずとも、ネットワークに接続していること自体が「何かあった時のためのセーフティネット」として安心感をもたらしていたことも示唆している。

5.2.2 「留守宅」への介入とケアの実践

一方で、実際に救助活動がどのように行われていたのかについて、E2 さん（46 歳女性）の語りはその実態を浮き彫りにしている。普段から動物好きで地域猫の世話をしていた E2 さんは、ロックダウン期間中、飼い主が帰宅できずに「留守宅」に取り残されたペットたちの惨状を目の当たりにし、たくさん語っていた。以下代表的な語りを引用する。

普段からうちの小区の近くにいる何匹かの野良猫に餌をやってるんです。家にはいつもキャットフードを二種類用意してて、一つはちょっといいやつ、もう一つは野良ちゃん用の少し安いやつでね。封鎖中も下に降りてあげてましたよ。小区からは出られないけど、建物の下に置いてね。だからうちは餌にはずっと困ってなかったんですけど、まさか猫砂が足りなくなっちゃうとは（思いもしなくて）……

(中略) あの時はペットたちが本当にかわいそうで仕方なかった。みんな実家に帰省してたでしょう？ そしたら突然のロックダウンで、もう終わりだ、帰れないってなって。犬や猫が家に閉じ込められたままになっちゃったんです。最初はこんなに長く封鎖されるなんて誰も思ってたから、（武漢にいなかった飼い主たち）みんな死ぬほど焦ってましたよ。

(E2 さん)

E2 さんが参加した救助グループでは、ボランティアたちが飼い主からの依頼を受け、リスクを冒して他人の家に入り、給餌や給水を行っていた。

若い人たちは本当にすごいですよ。ボランティア専門の子たちがいて、家まで行って餌や水をあげるんです。グループにはよく彼らが訪問した時の写真とかがアップされてたんですけど、もう家の中がめっちゃくちゃで。足の踏み場もないくらい、そこら中フンだらけになってて。犬も猫も怖かったんでしょうね。彼らは掃除までしてあげてました。猫はきれい好きだから、長いことトイレを掃除してないと、外でしちゃって部屋がびっくりするくらい汚れてて。

(中略) 一番印象に残ってるのは、ある男の子が家の猫二匹を誰かに頼もうとした話ですね。最初は武漢にいる友達に頼んでたんだけど、その友達の小区も封鎖されちゃって出られなくなった。それで彼、あちこちに投稿したりグループに入ったりして必死で探して、彼、ボランティアを見つけるのに 1 ヶ月もかかったそうです。普通は 1 ヶ月も水や食料がなかったら、もう死んでるって思うじゃないですか。それでもそこまで諦めなかったのは、やっぱり飼い主さんがその子たちをどうしても見捨てられなかったからですね。やっとボランティアを見つけたんですね。

(中略) ボランティアの子が家に入って、ビデオ通話をつないで様子を見せてあげるんじゃないですか。そしたら飼い主が画面越しに「なんか違う」って気づいて。ボランティアがメス猫のお腹を触ったら、妊娠してたんです。数日後、またボランティアが行った時には、もう 4 匹の子猫が生まれてました。でも、生き残ったのは 1 匹だけ。……本当に、いたたまれない話ですよ。でも、親猫 2 匹はなんとか生き延びてくれたんです。彼はずっとグループでボランティアに「ありがとう」って感謝してて、私は（それを見て本当に感動しちゃって）今の若い子たちは本当に立派だなんて思いましたよ。

(E2 さん)

また、E2 さんは救助の過程で直面した具体的な困難についても言及している。特に鍵の受け渡しや小区への立

ち入りは、物理的・制度的な障壁となっていた。

家がパスワード式の鍵ならまだいいですよ、番号を教えればいいだけだから。でも普通の鍵の家の人は大変で。実家から鍵を郵送しようにも、あの時は宅配便も止まってて全然届かない。だから鍵開け業者を探さなきゃいけないけど、封鎖中にどこにそんな人がいるのって話で。それに、小区の警備員が入れてくれないって話もよく聞きました。警備員と押し問答したりして、本当に簡単じゃなかった。

(E2 さん)

5.2.3 封鎖解除後の展開と持続性

ロックダウンが解除後も、これらのペット関連グループは消滅することなく、その機能を変化させながら存続している。危機的な状況下で「救助」を目的として組織されたネットワークは、現在では平時の動物愛護や相互扶助のための場として使われるようになっている。E2 さんは、当時のグループが現在も機能している様子について次のように述べている。

当時入ったグループはいくつもあったけど、解禁後はもちろん「助けて」という人はいなくなりました。でも、いくつかのグループは今でも動いてますよ。「野良猫を保護しました」とか、「猫がマンホールに落ちた」とか、「怪我してる」とか。里親募集をしたり、野良猫の去勢手術のために寄付を募ったり、そういう活動に使われていますね。

(E2 さん)

A3 さんや E2 さんの事例から分かるのは、ロックダウンという非常事態が、同じ「ペット」という関心（趣縁）を持つ人々を可視化し、既存の地縁関係だけでは対応しきれない問題を解決するために、地域を超えた新たな連帯を生み出したということである。こうして立ち上がった連帯は、現在（少なくとも取材した時点）も動物の保護や里親探し、寄付の呼びかけなどを通じて活動を続けており、地域の動物福祉と相互扶助を支える関係資源として機能し続けているといえる。これらのネットワークが、どのような SC を形成していたのかについては、第七章で改めて検討する。

第六章 考察：社会的交換としての互助行為

本章では、前章までに記述した「武漢ロックダウン」下における住民の生活実態および互助行為の事例に基づき、それらが社会関係にいかなる形成と変容をもたらしたのかを理論的に分析する。分析の枠組みとして、第二章で提示した SET 理論および SC 理論を用いる。Lawler (2001、2008) が提唱した四つの交換モードの分類や、感情が社会秩序を形成するという「情動の社会交換理論」を援用しつつ、武漢の住民たちが経験したミクロな相互作用が、いかにしてマクロな社会的連帯を醸成したのかを論じる。特に、「武漢ロックダウン」という極限的な危機状況下において、なぜ見返りの保証がない状況で住民たちが助け合いを続けられたのか、そのメカニズムを「情動」と「創発的規範」の観点から解明する。

本研究が対象とする「武漢ロックダウン」は、外部からの物理的な支援が遮断され、内部でも移動が厳しく制限された状態であった。このような状況下では、生存のために他者と協力せざるを得ない「相互依存性」が極めて高まる一方で、感染リスクという「他者への不信」も同時に増大する。このジレンマを、住民たちはどのように乗り越えたのか。従来の災害社会学において、災害時の「ユートピア」的な連帯は一時的な現象として記述されることが多かった (Solnit 2009)。しかし、武漢の事例は、WeChat というデジタル・プラットフォームが介在することで、その連帯が可視化され、構造化され、ある種の「新しい秩序」として定着していった点に特徴がある。

そのうえで、交換の反復が関係の持続や連帯をもたらす仕組みを説明するために、Lawler (2008) の議論が示す「情動ライン」という過程に着目する。すなわち、互助の成功経験が生むポジティブ情動の蓄積が並行して作用し、参加継続へのコミットメントへと連鎖していくという視角である。こうして、互助実践のなかで生じる「助け合うべきだ」という雰囲気やルールの共有を、災害社会学における創発規範論の観点から捉え、交換の蓄積が規範的報酬へと転化する可能性を次章で検討する。

1 互助行為における報酬とコスト

ロックダウン下の住民間で行われた物資融通、情報共有、精神的な励まし合いは、広義の「社会的交換」として捉えることができる。また、交換が実際に生じるかどうかは、交換者本人の動機状態と、それを取り巻く環境や制度など、いくつかの条件に左右されると指摘されている (Foa ほか 1974 : 125)。本節では、Thibaut と Kelley (1959) が提示した「報酬・コスト均衡モデル」に基づき、Foa ほかの視点を取り入り、この交換プロセスの動機構造を分析する。

SET 理論の基本命題によれば、人々は行動を選択する際、予想される「報酬 (reward)」から「コスト (cost)」を差し引いた利益を最大化しようとする (第二章 3.1 節を参照)。これは単なる機械的な利害計算ではなく、相互依存関係の中で、個人が関係の維持や停止を判断する心理的なメカニズムである。すなわち、ある人が他者に資源を提供するかどうかは、その行為によって得られる心理的・物質的な利得と、そこに費やされる労力やリスクのバランスに基づいている。

この観点から、「武漢ロックダウン」における WeChat グループを通じた互助行為 (團購、物資共有、情報提供など) について考察すると、その報酬とコストは次のように整理できる。

まず「報酬」は、物質的な側面と心理的な側面の二つに分けられる。第一に、食材や医薬品といった生存に不可欠な生活必需品を確保できるという「直接的な利得」である。第二に、他者からの感謝や承認、そして社会的連帯感といった「心理的・象徴的な利得」である。特に、外出制限によって社会との接触が極端に減っていた状況下では、「誰かの役に立てる」という自己効力感や安心感といった情緒的な報酬の価値が、平常時よりも相対的に高まっていたと言える。

一方で、互助行為に伴う「コスト」としては、時間や労力の提供に加え、対面接触による感染リスクが挙げられる。さらに、物資の誤配送や金銭トラブル、詐欺への警戒といった心理的な負担や、連絡先・住所などの個人情報 が他者に知られるプライバシー面のリスクも存在した。

しかし、武漢の事例における重要な点は、WeChat というオンライン空間が活用されたことである。これにより、物理的な距離を超えた迅速なやり取りが可能となり、対面での活動に比べて身体的負担や感染リスクといったコストを大幅に低減させることができた。加えて、「同じ境遇にある」という共通の意識や事態の緊急性が、行為者の心理的報酬をより高める要因となった。つまり、報酬の価値が高まり、コストが軽減された結果、住民による互助

行為が自発的に、かつ広範囲に展開される土壌が整ったのである。

1.1 初期における物質的交換の抑制

第五章 3.1 節で提示したように、ロックダウンの初期（1 月 23 日から 2 月上旬）においては、住民間の物質的交換は著しく抑制されていた。

その理由として、SET における報酬・コスト均衡モデルから見ると、コストはコロナにかかる感染リスクに対し、報酬は生活物資がもらえることである。初期において、他者と接触することのコストは単なる「手間」や「金銭」ではなく、「コロナへの感染リスク」、すなわち死に直結する可能性のある極大のコストとして認識されていた。第四章 1.1 節、1.4 節で検討したように、ウイルスの正体は不明であり、感染経路も明確ではなかった。そのため、他者は「助け合う隣人」である以前に、「ウイルスを運んでくるかもしれない脅威」として映ったのである。この時期では、住民たちはウイルスという目に見えない脅威に直面し、極度の不安の中にいた。「父の友人が感染し、父が病院に付き添ったが、その人は亡くなった。父も感染してしまうのではないかと一晩中眠れなかった」と B3 さんは語った。F さんが語った「ゴミ出しでエレベーターに乗るのも怖くて、階段を使っていた」というエピソードは、住民が自宅に閉じこもらざるを得なかった状況を象徴している（第四章 1.1 節、第五章 3.1 節を参照）。

一方、初期段階では各家庭に十分な備蓄があり、他者と物資を交換する必要性が低かったことも要因として挙げられる。ロックダウンの開始時期は春節と重なり、また小区の封鎖が開始される前に、意図的に買い置きを進めていた人もいたため、多くの家庭ではすでに食料や日用品を備蓄していた。そのため、外部からの供給が断たれても、しばらくは家族内の備蓄（自助）だけで生活を維持することが可能であった（第五章 1.1 節を参照）。加えて、多くの住民は「まさかこれほど長く封鎖されるとは思わなかった（E2 さん）」「少し我慢すればすぐに終わるだろう（N2 さん）」と考えており、リスクを冒してまで新たな物資調達ルートを開拓しようとする動機が生まれにくかった。

このように、他者との接触に伴うコストが非常に高い状況下では、合理的な判断として交換行動は極限まで抑制される。実際、初期には「自助」や「家族内での共助」が中心であり、近隣住民との交換はほとんど発生しなかった。これは、「社会的な断絶」が物理的な隔離によって強制されただけでなく、心理的なコスト計算によっても強化されていたことを意味する。

1.2 中期からの物質的交換の活発化

しかし、時間の経過とともに状況は一変する。まず、各家庭の備蓄が枯渇し始めたことで、「交換を行わないことのコスト（食料不足、生活困窮）」が急上昇し、物資を得ることの「報酬（生存欲求）」の価値が相対的に高まった。目の前の生活維持の危機は、不確実な感染リスクよりも差し迫った脅威となったのである。

その一方で、住民たちは感染リスクという「コスト」を少しでも下げるために、行動様式を変化させていった。第五章 3.2.1 節で述べたように、團購や呼びかけ型の交換、あるいは物々交換箱など、いずれの形態においても、住民たちは感染リスクを最小化する工夫を行っていた。

具体的には、直接手渡しをせずに玄関先に物資を置いて時間を空けてから受け取るなど、徹底して物理的な接触を避ける手段が取られた。J3 さんと I2 さんは、次のように述べている。I2 さんからは、語りに加えて、当時の写真資料の提供を受けた。

外に出るときは、いつもマスクを二重にして、それとも必ず N95 マスクを使って、そのうえゴーグルもつけてましたよ。買ってきた物は、まずアルコールで消毒して玄関の外に置いておいて、しばらく時間をおいてから部屋の中に入れるようにしてました。

(I2 さん)

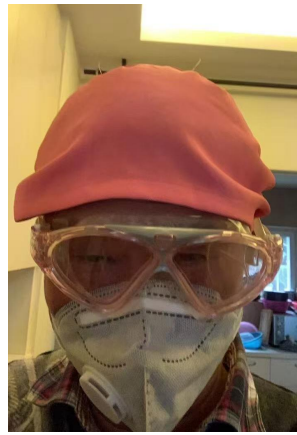


図 6-1 I2 さんが提供した写真

うちの棟で誰か物が必要なときは、直接エレベーターの中に置いちゃうんです。で、受け取る人がボタンを押せば（荷物だけ）上がっていくから、顔を合わせずに済むし。

家に余ってるものがあれば、みんなで譲り合ったりもしましたね。特に覚えてるのがオムツかな。あれは私が何とかしてあげたんですけど、相手が向こうでボタンを押して、オムツだけがエレベーターに乗って運ばれていく……っていう光景がすごく印象に残ってます。

（J3 さん）

こうした「接触しない工夫」が普及したことで、交換に伴う心理的・物理的なハードル（コスト）が低減されたのである。X2 さんは、当時の様子を次のように振り返っている。

最初なんて、とても外に出るなんてできなかったですよ。毎日家でニュースばかり見てて。

（質問：生活物資が足りなくなる不安はありましたか）

最初は家にあったものを食べて、だんだん食べ尽くしていった、最後は豆絲⁵¹しか残っていなくて、毎日そればかり食べてました。そのあと團購が始まったんですけど、最初のうちは私もあまり参加しなくて。下まで取りに行ったら感染するんじゃないかと思って、やっぱり怖かったですね。

（中略）グループの中では、みんなけっこう買っていましたよ。団長が「この時間は誰、その次何時からは誰」というふうに、時間をずらして野菜を取りに行くように段取りしてくれてね。そういう仕組みが回り始めてからは、だいぶましになりました。でも、私自身はそんなに回数は多くなかったです。ひとりですから、そんなにたくさん買っても食べきれませんしね。

（X2 さん）

X2 さんの語りは、初期には感染への恐怖（コスト）が勝っていたものの、備蓄の減少による生存欲求（報酬）の高まりと、團購などのシステム化・非接触化による不安（コスト）の軽減が重なり、やがて互助行動へと踏み出していくプロセスを示している。つまり、物資への切実なニーズが増加すると同時に、非接触という安全策によってリスクが抑制されたことで、中期以降、住民間の互助行為が徐々に活性化していったと言える。

2 互助行為の交換のモード

Thibaut & Kelley (1959) が指摘するように、社会的交換の核心は「相互依存 (interdependence)」にある。「武漢ロックダウン」という特殊な状況下では、物流の遮断や感染リスクといった環境要因により、住民たちは生存のために他者と関わらざるを得ない、いわば運命共同体的な相互依存関係に強制的に置かれていた。

しかし、この極限状態におけるダイナミクスを解明するためには、単に依存関係の存在を指摘するだけでは不十分である。重要なのは、その相互依存がどのような「形式」で実践され、結果としていかなる社会的結合を生み出したかという点である。

⁵¹ 豆絲（ドウスー dòusī）は、武漢の伝統的な郷土料理の一つである。米や緑豆などを粉にしてこね、薄くのばした生地を細く切ったものである。豆絲は天日干しにして保存できるため、日持ちしやすいである。

ここで、Lawler (2001、2008) の理論的枠組みが分析の鍵となる。Lawler は、交換がいかなる構造（モード）で行われるかによって、行為者に生じる感情や、集団に対する凝集性（cohesion）の強さが異なると論じている（第二章 3.3.2 節、3.3.3 節を参照）。ロックダウン下の互助行為が、単なる物資の移動を超えて、いかにして「コミュニティの連帯」へと変容されたのかを説明するには、この「交換モード」の視点が不可欠である。

したがって本節では、Lawler が提唱した交換モードの分類に依拠しながら、「武漢ロックダウン」における住民間の互助行為を検討する。

2.1 「生産的交換」としての團購

この関係性の中で、Lawler (2001) が提唱する四つの交換モードの中の「生産的交換」の典型例として現れたのが團購である。

以下のように、Lawler によれば、生産的交換とは「複数のアクターが資源や労力を供出し合い、単独では生み出せない共同の利益を創出する形態」を指す。

The potential for productive exchange exists when cooperation provides actors the greatest individual benefits and the main issue is coordination. The prototype is a partnership in which two or more actors bring something specific to a collective endeavor and the whole of what they produce is greater than the sum of the parts.

Lawler (2001 : 336)

これに対し、通常の市場での買い物は、買い手と売り手がそれぞれの商品と貨幣を交換する「直接交換」または「交渉的交換」である。

團購において、住民は構造的な制約に直面していた。ロックダウンによる物流の制限により、供給業者は物流効率を優先し、「通常 30 セット以上でなければ配送しない」といった大口注文の条件を提示していた。そのため、個人の力では食料を確保することが不可能だったのである。ここで、他者の参加が自分の利益（生存）にとって不可欠な条件となる。つまり、A さんが食料を得るためには B さんの注文が必要であり、B さんもまた A さんの注文を必要としている。個々の世帯がバラバラに動くのではなく、小区単位で注文を集約することによって、はじめて「配送」という共同の利益を引き出すことができたのである。J3 さんは「配送」の流れを次のように振り返っている。

あの頃は、武漢市全体で本当に物が買えなくて、運ぼうにも手続きが大変で、そもそも入ってこなかったんですよ。だから個人じゃとても買えなくて、まとめて注文しないとダメでね。うちは一回に 30 セット以上じゃないと配送してくれませんでした。（供給業者は）もともと大きな会社なんですけど、どんな会社でも政府側とやり取りしなきゃいけないし、これだけの量を入れるとなると消毒なんかのチェックも必要でしょ。で、政府と話がついてようやく荷物が入ってきて、そこから各小区に回って、最後に私たち（団長）が配る、っていう流れでしたね。

(J3 さん)

この構造は、住民間に対等で協力的な関係を生み出した。団長と参加者の関係も、単なる「売り手と買い手」ではない。団長自身も、住民たちの注文数が集まらなければ自分の食料を確保できないため、両者は互いに依存し合っている。また、団長は多くの場合低い報酬で調整役を引き受けていたが、住民からの感謝や承認が心理的な報酬として機能していた（本章 3.2.1 節で後述）。

このように、武漢における互助の発生は、単なる善意の表れではなく、極限環境下で「協力しなければ生きられない」という状況によって要請された、構造的な生存戦略としての側面を強く持っていたのである。

2.2 「一般交換」としての物質的資源的交換

前節で述べた生産的交換（團購）が、共通の目標を達成するために協力してリソースを出し合う形態であったのに対し、もう一つの重要な形態として観察されたのが、Lawler (2001) が「一般交換（Generalized Exchange）」として分類した相互扶助の実践である。本節では、この一般交換の特徴から、「武漢ロックダウン」における住民間の物質的資源の交換を検討する。

第二章 3.2.2 節で整理したように、一般交換の概念自体は、レヴィ＝ストロース (1949) による婚姻規則の研究や、マリノフスキによるクラ交易の研究といった人類学の領域に端を発するものである。ただし、学術的な議論の展開

において、この一般交換という枠組みは、資源の流れ方や義務性の有無によって「鎖状 (chain)」と「純 (pure)」の二類型に区別されてきた (Takahashi 2000)。古典的な人類学研究に見られる母型交叉イトコ婚やクラ交換などは「鎖状一般交換」に分類され、これらは「制度化された義務」や厳格な社会制度によって強制される側面が強い。

これに対し、Lawler (2001) らが社会心理学的文脈で定義する一般交換は、前述のような制度的義務を伴う「鎖状」のものとは性質が異なり、義務性を伴わない「純一般交換 (pure generalized exchange)」として位置づけられる。Lawler はこの交換形式について、次のように説明している。

Finally, generalized exchange is indirect rather than direct. Unilateral benefits are provided to another, as in reciprocal exchange, but the giver at time 1 receives a benefit from a different actor at time 2, for example, A gives to B who gives to C who gives to A.

(Lawler 2001: 338)

Lawler の定義によれば、一般交換は次の二つの要素によって特徴づけられる。第一に、見返りを即座に求めない「一方的な利益 (unilateral benefits)」が提供されること。第二に、提供者はその見返りを直接の相手からではなく、「異なる他者からの利益 (benefit from a different actor)」として受け取ることである。

したがって、武漢における互助行為は、提供者が特定の相手を固定せずに資源を分配する、Lawler の定義する意味での「一般交換」、すなわち「純一般交換」として理解するのが妥当である。これは「情けは人のためならず」という言葉に象徴されるように、誰に与えるか、誰から受け取るかが特定されない、より不確定性の高い協力行動である (芳賀 2014)。

この構造により、「武漢ロックダウン」下において、この「一方向的な供与」と「恩恵の循環」は、主に SNS 上の「呼びかけ」による緊急支援や、「物々交換箱」という形で具体的に現れることとなった。

2.2.1 SNS 上の呼びかけ型交換と遅延的互酬性

初期から中期にかけては、各世帯の備蓄にばらつきが生じ始め、ある家庭では米が、別の家庭では調味料や薬が不足するという事態に陥っていた。こうした状況下で、WeChat グループを介して行われた救済は、前節で確認した一方的な物資の供与が典型的に現れた場面であった。

具体的には、特定の住民がグループ内で欠乏を訴え、それを見た別の住民が資源を提供するというプロセスである。ここで重要なのは、このやり取りが市場取引のような対価 (金銭) を伴わず、また團購のような事前の契約関係にも基かない点である。あくまで「余力のある者が、困っている者に与える」という、見返りを即座に求めない一方的な贈与として成立していた。例えば、送る側である E2 さんは「(相手が) 返すことなど考えなかったので、(WeChat 上の) 友達追加もしなかった」、受ける側である G3 さんは「(返礼は) 考えなかった。当時相手の部屋番号さえ覚えなかった」と語る。その理由として、いずれも災害の特殊性と緊急性を理由に挙げていたが、同時に「感染リスクの最小化」という物理的な制約も大きく影響していた。C3 さんが「本来、接触はできるだけ減らさなきゃいけなかったし、あの時はお返ししようなんて全然考えなかったよ。もし感染したらどうするんだって感じで」と述べるように、ウイルスへの警戒心が即時的な返礼行動を抑制する要因となっていたのである。

F3 さんは、写真を提供し、当時の様子を次のように語っている。

家でトウモロコシを叩き切ろうとしたら、力の入れどころが悪かったのか、包丁がバキッと折れちゃったんです。「参ったな、こんな時にどこで包丁なんて買えるのよ……」って途方に暮れちゃって。それで、グループチャットで「誰か要らない包丁持ってませんか？」って聞いてみたんです。そうしたら、今でもはっきり覚えてますけど、すぐに「うちにありますよ」って返信が来て (後略)。

(質問：お金は払いましたか?)

いいえ、払ってません。あの頃はグループ内のみんながそんな感じで (お金のやり取りがなかった)。ええ、本当に。

(F3 さん)

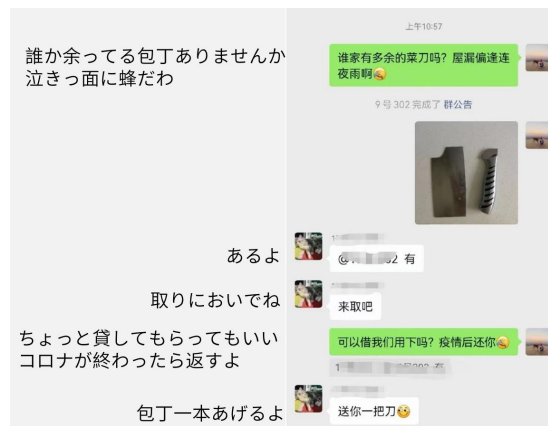


図 6-2 F3 さんが提供した写真（当時のグループのトーク履歴）

注：筆者による訳文付き

実際、F3 さんは直接に語らなかったが、提供されたトーク履歴（図 6-2）を確認すると、F3 さんは当初「借りるだけで、事態が収束したら返す」と申し出ているにもかかわらず、提供者がそれを断り、譲渡を貫いている様子が見て取れる。また G3 さんも、「当時、グループ内で物資を分け合う際に金銭の話が出ることはまずなかった」と証言している。J3 さんが言及したように一部で物品を販売する住民もいたとはいえ、総じて言えば、この「無償の共有」は、ある種の暗黙のルールとして住民全体に共有されていたことが明らかになったと考えられる。

これはサーリンズ（Sahlins 1974）のいう「一般的互酬」、すなわち厳密な等価性を伴わない利他的行為に相当する。ただし、サーリンズが一般的互酬性を親族関係に基づく義務や身分的上下関係に関連づけて論じたのとは異なり、本調査で確認された互助は、災害下において「見知らぬ住民同士」の間で発生していた点に大きな特徴があると言える。

もっとも、「武漢ロックダウン」における互助行為は、単なる一方の「純粹贈与」ではなく、遅延的互酬性の性質を帯びていたと考えられる。すなわち、提供者は即時的な返礼を期待せずとも、将来的に必要なが生じた際には相互に助け合う可能性を想定していたのである。例えば、G3 さんは「緊急事態だから、（将来）誰かが困ったら私が助けると思う」と述べており、返礼義務の弱さが緊急性に起因すること、そして延長された時間の中での互酬関係が、長期的な連帯意識の形成につながっていることが示唆されている。言い換えれば、物理的・状況的制約から即時の返礼は期待されず、代わりに「将来的な助け合いへの潜在的期待」が共有されていたと言えるだろう（次章で詳述）。

2.2.2 公共財としての「物々交換箱」とリレー性

さらに、前述した一方的な「贈与」が、物理的空間においてよりシステム化された形態として現れたのが、マンションのエントランスなどに設置された「物々交換箱」である。これは、住民が余っている物資を箱に入れ、必要な住民が自由に持ち帰るといった仕組みである。

このメカニズムは、資源の流れが個人間（A から B）で直接完結せず、一度「箱」という共有プールを経由する点で重要である。Ekeh（1974）が論じたように、これは個人の資源を集団全体に供出する行為に近い。ここでは、SNS 上の呼びかけ以上に「誰が誰に与えたか」という個別のつながりは消失しており、Lawler の定義する「異なる他者からの利益」の循環構造が、より匿名性の高い形で実現されていると言える。

V2 さんは、当時の様子を次のように振り返っている。

（エレベーターに段ボール箱が置いてあって）みんなそこに余った野菜なんかを入れていくんです。私も作りすぎた料理やお菓子を置いたりしました。誰が持っていったかは分からないけれど、それでいいんです。

（V2 さん）

V2 さんの語りは、特定の相手からの見返りを求めない一方的な物資の提供そのものが、住民自身の納得感や充足感につながっていたことを示している。ここでは、資源を投入する行為自体がコミュニティへの貢献として肯定され、いつか自分もその箱（あるいはコミュニティ全体）から恩恵を受けるかもしれないという潜在的な期待が、このシステムを支えていたと考えられる。

さらに、物資の共有に関しては、ある住民の働きかけを起点に、別の住民が次々と物資を持ち寄る連鎖的なやり取りも報告された。ここは、Y2 さんが語ったマンションのエントランスにおける物資の循環が挙げられる（第五章 3.2.1 節を参照）。この事例の発端は、ある住民が WeChat グループで発した「どうしてもコーラが飲みたい」という何気ないつぶやきであった。これに応答した別の住民が、手持ちのコーラ（12 本入りの箱）を無償で提供し、エントランスホールに「ご自由にどうぞ」と設置したのである。特筆すべきは、その後の展開である。Y2 さんの語りによれば、コーラを受け取りに降りてきた住民たちは、単に物資を受け取るだけでなく、代わりとして自発的に自宅にある別の物資（菓子や食材など）をその箱に入れていったという。その結果、箱の中身は空になるどころか、次々と新しい物資に入れ替わりながら増え続け、最終的には誰かが持ち寄った「小ネギの鉢植え」までもが置かれるに至った。この事例では、最初にコーラを提供した住民の呼びかけをきっかけに、別の住民が自分の余分な物資を持ち寄り、それをさらに別の住民が受け取る、という形で交換が連鎖している。こうした交換箱をめぐるやり取りは、ロックダウン下の小区内で、自発的な物資の「リレー」が生じていた一つの具体的な姿として位置づけることができる。

災害社会学において、こうした支援の連鎖は「被災地のリレー」として概念化されてきた。渥美（2012）は、支援を受けた側の住民が、その経験を単なる「ありがたい出来事」としてではなく、自分の内に残る「負債」として受け止め、別の被災地を支援することでようやくその負債を返済できたという安堵感を抱く点に注目する。渥美は、この現象を「被災地のリレー」と呼び、これを恩恵が特定の二者間で完結しない「広域ユイ」の可能性として論じている。また三谷（2015）は、この現象を一般交換として捉え、第三者への恩返しが社会的な連帯を促進する機能を果たしていると指摘した。

本調査で見られた「物々交換箱」による物資循環も、見返りを求めない一方的な贈与の連鎖である点において、この一般交換としてのリレー現象と構造を同じくする。しかし、先行研究で議論されてきた「被災地のリレー」は、阪神・淡路大震災から中越地震、そして東日本大震災へとといったように、異なる時間と空間（被災地）をまたいで行われるものである。そこでは、過去の災害時に受けた支援に対する「第三者への恩返し」や、被災経験の共有に基づく「共感」が動機となり、長い時間軸の中でリレーがつながれていく。それに対して、本事例における物々交換箱は、同じ封鎖された小区内という限定された空間において、リアルタイムで進行するものであった。ここでは、誰かが物資を提供した事実や、そこに物が蓄積されていく様子が常に住民の目に触れる状態にあった。

すなわち、Y2 さんの事例にあるような「コーラから小ねぎの鉢植えへ」と至る連鎖は、他者の贈与行為が可視化されることによって誘発されたものと言える。先行研究におけるリレーが、過去の被援助経験に基づく内面的な動機によって駆動されるとすれば、ここでのリレーは「可視化された贈与」そのものが次の贈与を促す呼び水となっていた。感染リスクによって他者との直接接触が避けられる状況下において、この「物々交換箱」は、一般交換のプロセスを可視化し、住民間の連帯を深める機能として働いていたと考えられる。

2.3 「一般交換」としての非物質的資源の交換

SET 理論は、経済的な物質交換だけに限定されるものではない。Turner（1986）が指摘するように、人々は社会的取引において物質的利益を追求するだけでなく、「感情、サービス、シンボル」といった非物質的資源もまた流通・交換させている（第二章 3.1.1 節を参照）。さらに、Foa ほか（1974）の資源理論によれば、これらの非物質的資源は、知識や事実の伝達である「情報（Information）」と、他者への配慮や好意を表す感情的な資源に細分化して捉えることができる⁵²。

そのため、本節では、WeChat グループにおける不特定多数への一般交換を、「情報の共有」と「感情の共有」の二つの側面から分析する。

2.3.1 情報の共有と物資の保証

ロックダウン初期、住民たちは「ウイルスの正体」や「感染状況」に関する深刻な情報不足に直面していた。この状況下で、WeChat グループでは「情報」という資源の交換が活発に行われた。住民は、感染者数の増減や医療体制の動き、感染の見分け方などをグループ内で頻繁に共有した。第五章 4.1 節でも引用したが、ここでもう一度 E2

⁵² Foa ほか（1974）によれば、社会経験とは、人びとが相互作用の中でさまざまな資源を与えたり取り去ったりする過程にほかならない。さらに彼は、社会的交換においてやり取りされる資源を Love（愛情）、Status（地位）、Information（情報）、Money（金銭）、Goods（物品）、Services（サービス）の六種類に分類している（Foa ほか 1974：125）。

さんの語りを以下に示す。

グループで毎日誰かがニュースを流してたんですよ。今日の新規感染者数が何人だとか、火神山病院がどこまでできたとか、あとはどうやって自分がかかったのかどうかを判断するとか。とにかくみんなの気持ちはずっと感染状況に引っ張られてて、グループでもそういう話ばかりでした。

(E2 さん)

Foa ほか (1974) の分類に従えば、これは純粋な情報の提供であるが、その機能は単なる事実の伝達にとどまらない。E2 さんの語りから、見通しの立たない状況において、情報を追いつけ、それを他者と共有することは、心理的な不安を和らげるという報酬をもたらしていたことが判明した。

また、中期以降は「生活物資をどう手に入れるか」という実利的な情報が、生存を左右する重要な資源となった。例えば、ある住民が持っている「どの店が営業しているか」「誰に連絡すれば配送してくれるか」といった情報は、グループ内で共有されることで、第五章 1.2 節で述べた「團購」という物質的交換を成立させるための土台となった。

さらに、A3 さんの事例は、このプロセスを端的に示している。A3 さんが「キャットフードが足りない」という個別ニーズに関する情報をグループに投じたところ、同じ小区に住むペットショップ店主がそれに反応し、飼い主側の需要と店側の供給が結びついたのである。このやり取りをきっかけに、ペット用品専用のグループが形成され、情報の集約が進んだ（第五章 3.3 節を参照）。このように、「情報」という非物質的資源の一般交換は、住民の不安を抑制するだけでなく、物質的交換を可能にする触媒としての機能を果たしていたといえる。

2.3.2 「感情」資源の共有と連帯の醸成

情報交換と並行して、WeChat グループでは「感情」という資源の交換も行われていた。これは、特定の個人に向けられた私的なやり取り（限定交換）とは異なり、グループ全体に向けて発信される冗談、励まし、あるいは共同行為の呼びかけといった形で現れた。

例えば N2 さんは、長年静まり返っていた同級生グループが、ロックダウンを機に活発化した様子を語っている。第五章 4.2.2 節でも一部触れたが、ここでもう一度 N2 さんの語りを以下に示す。

（昔の同級生グループに）みんなで冗談言い合ったり、からかったりしてさ。（中略）家にずっと閉じこもってたから、みんなでふざけて雰囲気盛り上げようとしてたんだと思う。

（中略）ネットでも面白いネタがいっぱい流れてたし。覚えてるのは、家の床をミミズみたいになうにように前に進む動画が流行ってて、みんなその動きを真似して動画撮って、グループに上げたりしてた。まあ、そうやって自分たちで笑い合ってた感じかな。

(N2 さん)

ここで交わされる冗談や動画の共有は、閉塞した集団の空気を変え、互いに精神的な安定を与え合うための「感情的資源の一般交換」とであると解釈できる。また、U2 さんが経験した「一斉に窓の外に向かって『武漢頑張れ』と叫ぶ」という活動や、V2 さんの飼い猫の搜索活動も、この文脈で理解できる（第五章 4.2.2 節を参照）。V2 さんの事例において、住民たちが猫を探したのは、V2 さん個人への義理があったからではない。困っている隣人を助けるという行為を通じて、非常時における相互扶助の感情を共有し、小区という共同体への帰属意識を高めていたのである。G3 さんが「以前は仕事の話しかしなかった同僚とも、健康や生活を気にかけるようになり、関係が近くなった」と述べるように、危機的状況下での感情的資源の交換は、既存の社会関係の質を変容させ、見知らぬ他者（あるいは希薄な関係の他者）を「信頼できる仲間」へと再定義する機能を果たした。

以上のように、武漢のロックダウン下においては、食料などの「物質的資源」だけでなく、情報や感情といった「非物質的資源」もまた、WeChat グループという場を通じて活発に交換されていた。これらの交換は、住民の生存を物理的に支えるだけでなく、心理的な孤立を防ぎ、コミュニティの結束を維持する上で不可欠な要素であったと言える。

2.4 「交渉的交換」としての売買行為

Lawler (2001) が提示する「交渉的交換 (Negotiated Exchange)」は、交換の条件（価格や数量など）について双方が明示的に合意し、厳密な対価性を伴って行われる直接交換を指す。通常、この形態は感情的な結びつきを生み

にくく、最も「ビジネスライク」な関係であるとされる。しかし、「武漢ロックダウン」の場合、このような交渉的交換は、二面性を持つことが明らかになった。

2.4.1 利己的な「交渉的交換」

実際に、ロックダウンという極限状態において、欠乏した物資をめぐって市場原理がむき出しになる場面は少なかった。中国国内の報道によれば、後の上海ロックダウンの事例ではあるが、百貨店で白菜が一玉 77.9 元（約 1800 円）という高値で販売され、市民の怒りを買った事件が象徴的である（新華社 2022）。また、遼寧省の事例では、薬局がマスクの価格を 220% 上乗せしたり、スーパーマーケットが野菜（ズッキーニ）の価格を 506% も引き上げたりするケースが報告され、「国難に乗じて財を成す」悪徳業者への批判が殺到した（浙江工人日報 2022）。こうした行為に対し、湖北省市場监督管理局も「武漢ロックダウン」直後の 2020 年 1 月に「《新型冠状病毒感染肺炎疫情防控期间查处哄抬价格违法行为的指导意见》（『新型コロナウイルス感染肺炎の予防・抑制期間における価格のつり上げ違法行為の摘発に関する指導意見』）」を発出し、原価や同種商品の価格に対して 20% 以上の値上げを行うことを「価格つり上げ」と認定するなど、厳格な統制を試みていた（国家市场监督管理总局 2020）。

本調査においても、こうした「利己交渉的交換」は確認されている。P2 さんは、同級生による高額転売を見た際の感想を次のように語っている。

あの頃さ、モーメンツ⁵³で防護服とかマスク売ってる奴がいて。見たら昔の同級生だったんだよ。どっから仕入れたか謎だけど、当時はマジで手に入らなかったから、すげー高値で売ってて。

（中略）それ見た時、『あいつ、なんであんな風になっちゃったんだろ』って思ったな。まあ正直、ネットで高額転売してる奴なんて山ほどいたし、珍しいことじゃないんだけど。でも、昔は仲良くつるんでた友達ただけに、なんかなあ……

（P2 さん）

また、U2 さんの小区では、より直接的な対立が生じていた。

グループ内でタバコを求める声があったが、タバコは團購でも手に入らなかった。そうした中、ある人がグループ内でタバコを販売し始めたが、彼は価格を吊り上げ、平常時の 10 倍という高値で売っていた。これに対して、みんなが「国難につけ込むな」としてグループ内で非難し（後略）。

（U2 さん）

このように、P2 さんは、かつての友人が、危機に乗じた利益追求によって変容してしまったことへの失望を表している。また、同じコミュニティ内で法外な利益を追求する行為は、住民からの強い反発を招き、連帯どころか亀裂を生じさせる要因となっていた（規範による制裁については次章で詳述する）。これらは Lawler の理論通り、交渉的交換が肯定的な感情的愛着を生まなかった典型的な例である。

2.4.2 利他的な「交渉的交換」

しかし、特筆すべきは、同じく金銭を介した「売買」でありながら、全く異なる社会的意味を持つ事例が存在したことである。J3 さんは、同じくタバコのやり取りについて、次のように語っている。

ある街坊（近隣住民）のことはよく覚えています。彼、タバコを余分に持っていて、それを（グループ内で）売ってくれたんですよ。いくらで買ったかという原価そのまま売ってくれました。

あの頃、タバコを売ってくれるなんて、かなりいい人ですよ。だってタバコは消耗品だし、いつ封鎖が解けるか分からないから、普通なら手元に持っていたら絶対に売りませんからね。

（中略）普段なら誰も家にタバコなんて備蓄しないでしょうけど、多分その人は春節の親戚回り用に用意していたんでしょうね。値段も上乗せせずに、買った値段そのまま売ってくれました。印象に残っています。でも結果的に、後で彼自身の分も足りなくなっちゃったみたいですけど（笑）。あ、そういえば至る所でタバコが買えなくて。

⁵³ モーメンツ（中国語：朋友圈）とは、WeChat アプリ上で、写真や動画などを投稿できる機能である。Facebook のタイムライン機能と似ており、利用者数が膨大であることと親密性が高いことが特徴的であると思われる（CRESO 2024）。

(質問：團購でも、ずっとタバコの販売はないのですか?)

はい。團購でもずっとタバコはなかったですね。タバコはオンラインでの販売が禁止されているため、ずっと買えなかったんです。夫のいとこが私と同じ小区に住んでいて、夫も少しタバコを分けてあげていたくらいです。

そういえば、その堂兄はその時、春節用に餃子を大量に買っていたらしくて、それもグループで街坊たちに回していましたね。それも売っていました。ただ、買った値段そのままです。

(J3 さん)

ここで重要なのは、J3 さんが彼を「かなりいい人」と評価している点である。タバコはネット通販も禁止されており、ロックダウンのときには入手が非常に困難だった。その状況なら、「価格を釣り上げない(原価で譲る)」という行為は、経済的な合理的判断からすれば利益の放棄に等しい。これは形式上は「売買」だが、実質的には隣人を助けるための行為であると言えるだろう。

同様に、お互いの困りごとを解決するために協力した売買の例として、A3 さんのペットフードの事例がある。第五章 5.1 節でも一部重なったが、ここでもう一度 A3 さんの語りを以下に引用する。

私の友人もキャットフードが手に入らず、彼の小区には販売者がいなかったため、私は彼を小区のペット専用グループに招いた。印象的だったのは、彼の小区の管理が非常に厳しかったため、最終的に彼に頼んでキャットフードを米に偽装し、小区まで届けてもらったことだ。

(A3 さん)

A3 さんの事例では、店主は「在庫を売りたい」、飼い主は「餌がほしい」というお互いのニーズが一致し、適正な価格で取引が行われた。ここでも、店主は足元を見て価格を上げたりせず、むしろ「米に偽装して届ける」という手間をかけてまで協力してくれている。これは単なる商売を超えた、危機におけるパートナーシップと言える。

2.4.3 災害時におけるお金の意味の変容

以上の事例から、災害時における「交渉的交換(売買)」は、その動機と条件設定によって、全く異なる社会的意味をもたらす「利己交渉的交換」と「利他交渉的交換」という二つの形態があることが明らかになった。

Lawler (2001) は、交渉的交換には「合意形成のための協力」と「条件闘争という競争」の双方が混在する「混合動機(mixed-motive)」の性質があると指摘している(Lawler 2001 : 337)。P2 さんや U2 さんの事例に見られる「利己交渉的交換」について、ロックダウン下の物資欠乏という非対称な構造において、売り手が利益最大化(価格釣り上げ)を追求した場合では、交換の「競争的」側面が極大化されたと言える。その結果、買い手が抱いた不快感や怒りは、Lawler の情動理論によれば相手への感情として属され、社会的紐帯を分断する要因となった。

しかし、ここで特筆すべきは、J3 さんや A3 さんの事例に見られる「利他交渉的交換」の場合は、Lawler の理論的枠組みに対する本事例の含意となることである。Lawler の理論の核心は、交換の構造がタスクの「共同性(Jointness)」を決定し、それが感情の発生を左右するという構造決定論にあると言える。

Second, social exchange is a quintessential joint activity, but the nature and degree of jointness varies. Interdependencies embedded in exchange structures determine the jointness of the exchange task. My theory argues that, contingent on the exchange structure, emotions or feelings from exchange influence how actors perceive and feel about their shared activity, their relation, and/or their common group affiliations.

(Lawler 2001 : 322)

さらに、表 6-1 が示すように、彼のモデルにおいて、金銭や物資が明確な「交渉的交換」は、通常「中程度」の共同性と感情効果しか持たないとされる。

表 6-1 ⁵⁴交換構造の効果の比較
(Lawler 2001 : 340 TABLE 2 を改変)

⁵⁴ 表中の「間接的(Indirect)」は、「一般交換」を指す。Lawler (2001) は、交渉的交換および互酬的交換を「直接交換(Direct exchange)」と位置づけており、これらとの構造的な対比を強調するために「間接的」という用語を用いている(Lawler 2001)。

	非分離性 (Nonseparability)	共有責任の知覚 (Perception of Shared Responsibility)	全体的感情 (Global Emotions)
生産的 (Productive)	高	高	高
交渉的 (Negotiated)	中	高	中～高
互酬的 (Reciprocal)	低	中～高	中
間接的 (Indirect)	低	低	低

しかし、本調査の結果は、同じ「交渉的交換」という構造（明示的な契約と金銭のやり取り）を維持していても、行動者の動機（利己か利他か）によって、その社会的意味が分かれることを示した。これは、交換の性質を決定するのは単なる構造だけではなく、その場の「情境的意味」や「行動者の意図」が重要な変数となることを示唆しており、交渉的交換の内部には多様な可変性が存在することを明らかにしている。

では、なぜ形式上の売買が連帯を生んだのか。そのメカニズムは、前述した「混合動機」の解消にある。J3さんの事例にある「原価販売（利益の放棄）」やA3さんの事例にある「リスクを冒して届ける」というような行為は、交渉的交換に本来内在しているはずの「競合」の要素を、売り手が自発的に排除したことを意味する。Lawlerは、交渉的交換における競合性が感情的な矛盾を生み、連帯を弱めるとしたが、本事例では利益の放棄によってこの「競合」が消滅している。その結果、交換の文脈は「対立する利益の調整」から、心理的なレベルにおいて、「危機を共に乗り越える」という高度な共同目標を持つ活動へと変容したと考えられる。この意味では、形式は「交渉的交換」でありながら、実質的にはLawlerが最も共同性と連帯が高いとした「生産的交換」に近似した状態へと変容されたと言えるだろう。

2.5 「相互交換」とその限定性

Lawler (2001) の分類における「相互交換 (Reciprocal Exchange)」とは、アクター A がアクター B に利益を与え、時間をおいて B が A に返礼を行うという、二者間での直接的な交換を指す。この形態は、特定の二者間での反復的なやり取りを通じて、個人の信頼や持続的な関係性を構築する上で重要な機能を果たすとされる (Molm ほか 2007)。

しかし、本調査のインタビューデータにおいて、この「相互交換」に該当する事例は極めて限定的であった。本節では、まず確認された数少ない相互交換の事例を検討し、その上で、なぜロックダウン下の武漢においてこの形態が抑制され、一般交換が優位になったのか、その要因を考察する。

2.5.1 具体的な事例：近隣関係の深化

まず、特定の二者間で明確な「お返し」が発生した事例について確認する。本調査でこれについて語ったのは、N2さんとL2さんの二名のみであった。N2さんは、上の階に住む高齢者夫婦とのやり取りを次のように振り返っている。

最初は上の階に老夫婦が住んでるのを知ってたから、野菜を家の前に置いたんだよ。当時はみんな多少なりとも警戒心があったからね、直接は会わずに WeChat で伝えて。そうしたら（ロックダウンの）後半になって、社区から野菜が配給された時に、彼らが「食べきれないから」って野菜を返してくれたんだ。自分たちがもらった分を分けてくれたんだね。

(N2さん)

ここでは、当初は「一方的な利益」（野菜の提供）であったものが、後に相手からの返礼（配給野菜のシェア）によって事後的に相互交換の形をとっている。また、L2さんの事例は、より親密なやり取りへの発展を示唆している。第五章 4.2.2 節でも一部触れたが、ここでもう一度 L2さんの語りを以下に引用する。

同じ小区に住んでる人で、グループで葉酸が欲しいって書いてたんだよね。（中略）で、私とその人の WeChat 友達を追加して、「私持ってるからあげるよ、妊娠してるの？何か月？」って聞いたの。その後、その人が家

でまんじゅう作って、「牛乳ある？」って聞かれたから、うちの旦那に持って行ってもらったの。そのあと、その人も自分で作ったエッグタルトをくれたりして。

(L2 さん)

L2 さんのケースでは、「妊婦への共感」から始まった支援が、牛乳とエッグタルトという物資の交換へと発展している。以上の事例から確認できるのは、相互交換は、特定の隣人間で繰り返されることで、個別の信頼関係を深める契機となっていたことである。

2.5.2 相互交換が抑制された要因：機能主義的解釈と遅延的互酬性

しかし、全体として見れば、こうした特定の二者間での返礼行動（相互交換）は稀であり、不特定多数による「一般交換」や「團購」が主流であった。なぜ、ロックダウン下では相互交換が少なかったのか。

まず、感染リスクへの警戒心による物理的・心理的な抑制である。直接的な「お返し」をするためには、物資の移動や接触の機会を再び作り出す必要がある。C3 さんが「本来、接触はできるだけ減らさなきゃいけなかった」が示すように（本章 2.2.1 節を参照）、感染症パンデミックという特殊な状況下では、儀礼的な返礼行動であっても、それが「接触回数の増加」を意味する限り、双方にとってのリスク（コスト）となる。そのため、即時的な返礼は非合理的な判断として抑制されたのである。

さらに、システム全体の生存確率を高めるための「無意識の合理的選択」という機能主義的な解釈が可能である。危機的状況において、特定の相手（A さん）から受けた恩を、必ずしもその人に返すことは効率的ではない。なぜなら、A さんがその時点で物資を必要としているとは限らないからだ。むしろ、手元にある余剰リソースは、特定の恩人への返済に充てるよりも、「今まさに困っている誰か（C さん）」に回す方が、コミュニティ全体の生存確率を高めることにつながる。

これは、本章 2.2.1 節で論じた「遅延的互酬性」や一般交換の論理とも呼応する。住民たちは、特定の個人への返済義務を放棄したのではなく、その義務を「コミュニティ全体への貢献」へと捉え直し、あるいは将来の時間軸へと先送りしたといえる。すなわち、「特定の相手にお返しをするコスト」をかけることよりも、「今困っている誰かにリソースを回す」ことを優先するという集団的な生存戦略が、規範として共有されていたのではないだろうか。この規範の定着に関する議論は、第七章 2.2 節で改めて検討する。

2.6 小括：連帯の萌芽

本節では、Lawler (2001) の SET 理論を分析枠組みとし、「武漢ロックダウン」という極限状況下における住民間の互助行為を四つの交換モードから検討した。分析の結果明らかになったのは、未曾有の危機に対し、住民たちが多様な交換形式によって適応しようとした姿である。生存のために協力を不可欠とする「生産的交換（團購）」、見返りを求めない「一般交換」、そして既存の理論的枠組みを超えて利他的な意味を帯びた「交渉的交換（利他的売買）」、これらは単なる物資の獲得手段にとどまらず、孤立した個人を再び社会的に結合させる機能を果たしていた。形式上は利益対立を内包するはずの「交渉的交換」においてさえ、危機共有の文脈においては、人々の動機によって「共同性」が見出され、連帯の萌芽となり得た。これは、交換の社会的意味が、構造的な形式だけでなく、その場を支配する情境定義によって変容することを示唆している。

しかし、ここで一つの問いが残る。なぜ、多くの住民は自身の利益を犠牲にしてまで、こうした協力的・利他的な交換へと向かうことができたのか。次章では、本節で明らかにした交換の「構造」がいかなる「規範」によって支えられ、いかなる動機で維持されていたのかに注目する。ロックダウン下のコミュニティで生成された社会的規範や信頼と、それがもたらした SC の生成メカニズムについて、さらに詳細な分析を進めることとする。

3 交換の成立

3.1 駆動場の構造

本節では、「武漢ロックダウン」という未曾有の危機的状況下において、なぜ、そしてどのようにして住民間の活発な互助行為が発生したのか、その構造的要因を「駆動場」という概念を用いて分析する。「駆動場」とは、物

理的な移動制限と資源の欠乏という「プッシュ要因」と、生存維持への欲求とオンライン空間での低い取引コストという「プル要因」が拮抗し、個人を互助へと強力に方向づける社会構造的な「場」を指す。本節では、第四章で詳述された住民が直面した困難と公的支援の不足、および第五章の互助の実態に関する記述、さらに第六章第1節、第2節で論じられた報酬とコストの均衡を統合し、「駆動場」の構成を考察する。

3.1.1 公助の限界という「プッシュ要因」

「駆動場」の形成における最大の要因は、ロックダウンによって生じた公的支援の不足と都市機能の停止であると考えられる。第四章の調査結果が示すように、1100万人の巨大都市を封鎖するという決定は、行政の物資配給能力を瞬時に超えるものであった。この「公助の限界」が、住民を自力での解決、すなわち「共助」へと駆り立てる根本的な「プッシュ要因」となった。

ロックダウン政策の核心は社区封控（小区の完全封鎖）であった。これにより、都市の物流網における「ラストワンマイル」が物理的に切断された。第四章の分析によれば、市内の倉庫に物資が存在していても、それを個々の家庭に届ける手段が欠如していたため、住民は「物資はあるのに届かない」という場面に直面した。同時に、ロックダウンは市場経済の機能を停止させた。スーパーマーケットや薬局は閉鎖され、通常のネット販売も機能不全に陥った。さらに、公的支援の展開には地域間で大きな格差が存在した（第四章を参照）。管理が行き届いた新しいマンションでは比較的スムーズな配給が行われた一方、管理会社が存在しない古い小区では、支援がほとんど届かない「空白地帯」が発生した。

このことは、逆に言えば、感染リスクや管理の厳しさが相対的に低い地域では、「駆動場」自体が十分に立ち上らず、互助への参加が必ずしも生じなかったことも意味している。たとえば、E3さんとI3さんは、いずれも武漢市中心部から離れた地域に居住しており、周辺の感染例も少なく、封鎖管理もそれほど厳しくなかったと語っている。E3さんは会社の寮に住んでおり、ロックダウン初期には会社から通常どおり出勤するよう求められていたという。こうした状況のなかで、E3さんとI3さんは、生活物資の不足や移動制限に対する強い不安を感じることは少なく、物資交換のネットワークにも参加しなかったと述べている。

この事例は、互助を生み出す「駆動場」が都市全体で一様に存在していたわけではなく、ロックダウンの厳しさや公的支援のあり方によって、地域ごとに強弱があったことを示している。

3.1.2 オンライン空間という「プル要因」

「駆動場」のもう一つの重要な側面は、行動コストの低下である。通常、感染症パンデミック下において他者と接触することは、感染リスクという極めて高いコストを伴う。しかし、武漢の事例においては、WeChatを中心としたオンライン空間が物理的接触のリスクを回避しつつ、社会的つながりを維持・構築する「低コストなインフラ」として機能した。

WeChatグループは、互助行為に伴うコストを劇的に低下させた。通常時であれば、誰が余分な野菜を持っているか、誰が薬を必要としているかを知るためには、物理的に訪問して確認する必要がある。しかし、ロックダウン下ではこれが不可能であった。そのような状況下で登場したWeChatグループは、この情報の非対称性を解消するプラットフォームとなった。第五章で説明したように、住民はグループチャットに「誰かイブプロフェンを持っていますか？」「余った白菜があります」といった投稿をするだけで、瞬時に数百人の隣人とマッチングすることができていた。

さらに特筆すべきは、WeChatが社会的なつながりと物理的な接触を分離することを可能にした点である。住民たちの間では自宅にいながらにして、團購の注文や安否確認、励まし合いといった社会的相互作用が行われていた。物理的な接触は、物資を受け渡す際の「ドアノブにかける」「エレベーターに置く」といった「低コスト」の方法に限定された（本章第1節を参照）。このようなデジタル技術によるリスクの分離とコストの低下が、「駆動場」における「プル要因」として機能したのである。

また、團購の成立においても、オンライン空間は有効に機能した。個別の世帯が業者と交渉することは不可能であったが、WeChatグループ上で注文を取りまとめることで、数百世帯分の需要を一つの「大口注文」としてパッケージ化することができた。また、アプリ上の「接龍機能」によって、集計や会計といったコストも大幅に削減した。これにより、普通の住民でも団長として活動することが可能となった。デジタルツールが組織化のコストを下げたことで、Lawlerの言う「生産的交換」が、草の根レベルで自然発生的に立ち上がる土壤が整ったのであると言える。

以上のことを鑑み、図6-3が示すように、「武漢ロックダウン」における交換行動の「駆動場」は、公的支援の

欠如という「プッシュ要因」と、オンラインツールによる「プル要因」が結合することで形成された。この場において、互助は単なる道徳的な選択ではなく、構造的に要請された最も合理的な生存戦略となったのである。

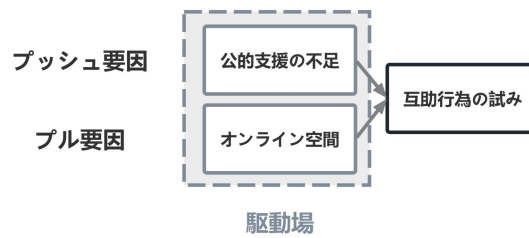


図 6-3 「武漢ロックダウン」における交換行動の駆動場

3.2 交換の持続メカニズム：情動によるコミットメントの強化

「駆動場」は、住民を互助行為へと向かわせる構造的な条件であった。しかし、リスクやコストを伴う交換行為が、一回きりで終わらず、なぜ長期にわたって持続し、繰り返されたのか。本節では、Lawler (2001) の「情動の社会的交換理論 (Affect Theory of Social Exchange)」を枠組みとし、交換過程で生じた「情動」が、いかに関係へのコミットメントを高め、交換を持続させる原動力となったかを分析する。

There are five foundational assumptions of the affect theory of social exchange:

ASSUMPTION 1. -Social exchange produces global emotions or feelings, along a positive-to-negative dimension.

ASSUMPTION 2. -Global emotions from social exchange are internal (self) reinforcing or punishing stimuli.

ASSUMPTION 3. -Actors strive to reproduce global positive emotions and avoid global negative emotions experienced as a result of social exchange.

(後略)

Lawler (2001 : 327)

Lawler によれば、社会的交換は単なる資源のやり取りではなく、感情を生成するメカニズムである（第二章 3.3.3 を参照）。交換が成功に完了したとき、参加者は「高揚感 (uplift)」や「誇り (pride)」といったポジティブな情動を経験する (Lawler 2001: 322)。重要なのは、この情動が「自己強化的な報酬 (internal reinforcement)」として機能し (Assumption 2)、人々はその快感情を再現しようと動機づけられる点である (Assumption 3)。

さらに、その交換が「共同課題 (Joint Task)」としての側面が強いほど、生じた情動は個人の手柄ではなく「関係や集団」に帰属され、結果として集団への「凝集性」が高まり、関係維持への「コミットメント」が強化される。本節では、このプロセスを①ポジティブ情動の生成、②社会単位への帰属と凝集性、③コミットメントによる持続、の三段階に分けて分析する。

3.2.1 ポジティブ情動の生成

ロックダウン下での互助行為は、食料や医薬品といった生存資源の獲得に成功した際、強烈なポジティブ情動を生み出した。例えば、長期間にわたり新鮮な食材を入手できなかった住民にとって、團購や近隣からの差し入れによって得られた食料は、単なる栄養補給以上の意味を持っていた。第五章 2.2 節でも触れた B3 さんの語りは、この点を端的に示している。

食べたいものが手に入らないことが多かった。例えば魚は何か月も食べられなかった（武漢人は魚を好む）。ようやく魚を買えたとき、その味は死ぬほどおいしかった。

(B3 さん)

このように、「魚をもらう」ことは、B3 さんにとって単なる資源を超えた、「高揚感 (uplift)」というポジティブ感情をもたらした。Assumption 2 に従えば、交換の成功によって生じたこのポジティブ感情自体が「内部報酬」となり、次の交換に向かうための強力な動機づけ (Assumption 3) となる。

また、互助を提供する側においても、情動は活動を持続させるための重要な報酬として機能した。自分の行為が他者の生存を助けたという実感は、ロックダウンにおいて、自己の存在意義を確認する「誇り (Pride)」をもたらした。団長として活動した J3 さんは以下のように語った。

小区にはすごく情に厚いお婆ちゃんたちがいて、自分だって高齢なのに「あんた、無理してない？」「ちゃんにご飯食べてる？」って、逆にこっちの心配をしてくれるんですよ。「これ、お子さんに」って貴重な果物を分けてくれたりもして。今でも夕食後に、うちの店へよくお喋りしに来ますよ。

正直、（團購は）手間もかかるリスクもあるから大変なんですけど、配ったときにみんなから「ありがとう、助かったよ」って言われると、やっぱり嬉しいじゃないですか。もちろん、ナッツに悪いのが混じってただけで「金返せ」とか、電話口で泣き出す人とか、面倒なこともありましたがね。

（J3 さん）

このように、不快な経験やトラブルもあったが、J3 さんは團購を通じた経験を総じてポジティブに捉えている。「嬉しい」「ありがとうと言われる」という情動的報酬がコストを上回り、彼女が困難な状況下でも活動を継続する原動力となっていたのであると考えられる。

さらに、個別の交換を超えた集合的な行為も、ポジティブ感情を生み出し、交換の舞台となる小区全体の空気を変えた。U2 さんが体験した、窓越しに「武漢頑張れ」と叫び合う活動はその典型である。第五章 4.2.2 節でも触れたが、ここでもう一度 U2 さんの語りを以下に示す。

（小区グループで）決まった時間にみんな電気を消して、懐中電灯だけで窓の外に向かって「武漢頑張れ」って叫ぶことになったんです。その時はすごくワクワクして、体の中から力がわいてくる感じがした。武漢の人たちは前より団結した、って本気で思いました。

（U2 さん）

こういった約束とキャッチフレーズは、隔離による無力感を打ち消し、住民たちに「私たちは共に戦っている」という感覚を共有させた。こうした集合的な情動体験は、個々の互助活動を行うための精神的な基盤を醸成し、互助行為への参加障壁を下げる役割を果たしたと考えられる。

3.2.2 情動から凝集性へ

Lawler (2001) の理論の核心は、共同性の高い活動から生じた情動が、個人の感情にとどまらず、その原因であるグループへと帰属 (Attribution) されることで、集団への愛着、すなわち「凝集性」を生む点にある。

前述したように、武漢における「團購」は、Lawler が最も強い凝集性を生むとする「生産的交換」の構造を持っていた（本章 2.1 節を参照）。團購は「最低注文数」というハードルを越えるために、住民全員の協力を必要とする。その結果、團購が成功した瞬間の喜びは、個人の購買成功ではなく「私たちの成功」として認識された。このプロセスを通じて、ポジティブな情動は「團購グループ」や「コミュニティ」という社会単位への愛着へと転化したと考えられる。

V2 さんの語る「一般交換」的な事例もまた、この愛着形成を裏付けている。本章 2.2.2 節でも触れたが、ここでもう一度 V2 さんの語りを以下に示す。

みんなそこ（物々交換箱）に余った野菜なんかを入れていくんです。私も作りすぎた料理やお菓子を置いたりしました。誰が持っていったかは分からないけれど、それでいいんです。

（V2 さん）

ここで見られる「それでいい」という感覚は、特定の個人への見返りを求めないほどに、コミュニティという「社会単位」そのものへの信頼と愛着が形成されていたことを示唆している。

3.2.3 凝集性からコミットメントへ

最終的に、形成された凝集性は具体的な「コミットメント (Commitment)」へと結実し、これが交換を持続させる直接的な要因となった。Lawler が指摘するように、集団への凝集性が高まると、人々は「一方的な贈与を行う」「トラブルを許容する」「関係に留まる」といったコミットメント行動をとるようになる。

J3 さんが「面倒なこと」やトラブルに見舞われても団長を辞めずに役割を遂行し続けたことや、V2 さんが見知らぬ誰かに食料を無償で提供したことは、まさにこのコミットメントの表れである。合理的選択論の枠組みでは説明しづらいこれらの行動は、「自分はこのコミュニティの一員である」という強い凝集性に支えられていた。

結論として、交換が長期にわたり持続した理由は、図 6-4 で示すように、交換のプロセス自体がポジティブな情

動を生産し、その情動がコミュニティへの凝集性を高め、その結果としてリスクやコストを乗り越えるコミットメント行動が引き出されたからである。この循環メカニズムこそが、ロックダウン下の互助を持続可能なものにしていたのである。

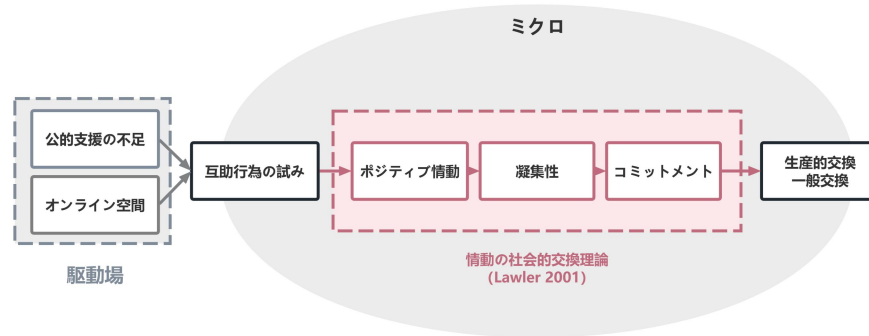


図 6-4 「武漢ロックダウン」における交換の持続メカニズム

3.3 不安の共有と共感による「共感縁」

前節までは、交換の成功によって生じるポジティブな情動が関係維持の原動力となるプロセスを検討した。しかし、ロックダウン下の連帯を支えたのは、成功体験による喜びだけではない。ネガティブな情動、すなわち「不安」や「恐怖」の共有もまた、住民同士の心理的距離を縮め、互助へと向かわせる重要な要因であった。

ロックダウン初期、住民たちは「見えないウイルスへの恐怖」と「出口の見えない閉塞感」に苛まれていた。稲場（2011）は、災害時において直接の利害関係を持たない他者への共感に基づくつながりを「共感縁」と定義している。当時の武漢では、誰もが同じく封鎖され、同じ不安を感じている当事者であった。自分自身も恐怖を感じているからこそ、他者の苦しみを「我がこと」として想像しうる状況にあったのである。

WeChat グループや SNS を通じて、病気で苦しむ人、家族と会えない人、生活に困窮する人の「つぶやき」が可視化されたとき、人々の間に強力な「共感」が起動した。王（2021）が指摘するように、普段は接点のない「共感困難な他者」であっても、災害という非常時において「同じ境遇にある（潜在的被災者である）」という認識が共有されることで、共感の回路が開かれる。本調査においても、特に高齢者、妊婦、持病のある人といった「災害弱者」に対する支援では、この共感に基づく情動的動機が強く働いていたことが確認された。「放っておけない」「何かしたい」という衝動は、合理的なコスト計算を超えて利他的行動を引き出す源泉となったのである。

さらに、こうした感情の交流は、単なる情報のやり取りを超えた「心の外部性（稲葉 2024）」をもたらした。心の外部性とは、自分の悩みや不安を他者に開示し、受け止められることで得られる安心感や解放感を指す。調査では、WeChat グループでの何気ない雑談や励まし合い、窓越しに「武漢頑張れ」と叫び合う行為が、孤立感を和らげる精神的支柱になったという語りが多く見られた（第五章 4.2 節を参照）。

このように、感情の共有は、物質的な互助関係を、より人間的で持続可能な関係へと深化させる触媒として機能した。感情は交換の「副産物」とであると同時に、交換を持続させ、関係を深めるための「接着剤」として、SC の生成を心理面から支え続けたと言える。

第七章 考察：SCの生成と社会関係の再編メカニズム

本章では、第五章で描写した互助行為の実態と、第六章で明らかにした社会的交換としての特徴をふまえ、「武漢ロックダウン」という危機状況のなかでSCがどのように生成され、そのことが社会関係の再編にいかなる影響を与えたのかを検討する。ここでいうSCとは、第二章で整理したように、信頼・規範・ネットワークという三要素からなる資源であり、一時的な「災害ユートピア」ではなく、その後の協力や連帯を支える基盤として捉えられる。

その際、本章の特徴は、個々の互助行為というミクロレベルと、制度や社会全体の変化というマクロレベルのあいだに位置するメゾレベルに焦点を当てる点にある。具体的には、WeChatグループや團購ネットワーク、ペット救助グループなどの中間集団のなかで形成された集団的信頼・創発的規範・多層的結合を「中間的構造」と呼び、互助行為の蓄積がまずこの中間的構造として現れ、そこからマクロなSCへとつながっていく過程を明らかにする。

本章の構成は次のとおりである。第1節では、本研究が用いるミクロ・メゾ・マクロの三層構造の視点を整理し、「中間的構造」という概念の意味と位置づけを明確にする。第2節では、第五章と第六章の知見をふまえ、互助行為の反復がどのようにしてメゾレベルの「中間的構造」を形づくっていったのかを検討する。第3節では、その中間的構造を手がかりに、集団的信頼の一般化、規範の制度化、ネットワークの拡張という三つの過程を通じて、マクロレベルのSCが醸成されるメカニズムを考察する。第4節では、ロックダウン解除後の関係の持続と解消に着目し、危機下で生成されたSCがどのように選別され、どのような形で地域社会に残ったのかを検討する。

1 ミクロ・メゾ・マクロと「中間的構造」

第六章では、「武漢ロックダウン」下の互助行為をSET理論の枠組みに沿って分析し、互助がどのような交換モード（生産的交換・一般交換・交渉的交換・相互交換）として現れ、どのような報酬・コストの計算や情動を伴っていたのかを検討した。そこでは、團購や物資リレー、情報共有といった具体的な交換が、参加者どうしの関係的信頼や連帯感を強める過程に注目した。

一方で、第二章で整理したSC論は、主として投票率や組織参加、地域活動への参加といったマクロな指標を通じて、社会全体の協力のしやすさやレジリエンスを説明する枠組みであった。そのため、ミクロな互助経験とマクロなSC水準の間に、「どのような中間過程を経て両者が結びついているのか」という問いが残されている。本章は、このギャップを埋めるために、ミクロとマクロのあいだに位置するメゾレベルの視点を導入し、そこで形成される「中間的構造」に焦点を当てる。

ここでいうメゾレベルとは、個人と社会全体の上に位置する、小区やWeChatグループ、互助ネットワークといった中間集団の次元を指す。本研究では、これらの中間集団のなかで形成される①「このグループなら助け合える」という集団的信頼、②「先に困っている人を優先する」「高齢者や妊婦には配慮する」といった創発的規範、③団長やキーパーソンを媒介とする多層的な結合をまとめて「中間的構造」と呼ぶ。第五章と第六章でみた互助行為の効果は、まずこの中間的構造として蓄積され、その蓄積がのちの互助行為やマクロなSCの形成に影響を与えていたと考えられる。

1.1 本章の課題

以上をふまえると、本章の課題は二点に整理できる。第一に、第五章・第六章で明らかにしたミクロレベルの互助行為が、どのようなプロセスを通じてメゾレベルの「中間的構造」が生み出されたのかである。第二に、その「中間的構造」が、一般化された信頼やソフトな制度、「橋渡し型」と「連結型」SCといったマクロレベルのSCへどのようにつながっていったのかである。

この二つの課題に取り組むために、第2節ではミクロな互助行為がどのようにして「中間的構造」を立ち上げたのかを検討し、第3節および第4節では、ロックダウン解除後の関係の持続と解消の分析も踏まえながら、「中間的構造」がマクロなSCや社会関係の再編にどのようなかたちに関わったのかを考察する。これにより、第二章で提示した「社会的交換とSCの循環モデル」を、「武漢ロックダウン」という事例にもとづいて具体化することを目指す。

1.2 分析の視点：階層別アプローチの必要性

SC 理論では、信頼・規範・ネットワークといった要素が、協力や集団行為を支える資源として強調されてきた。他方で、多くの研究は投票率や組織参加率といったマクロ指標を用いて SC 水準を測定し、それを社会や地域に蓄えられた「ストック」として扱ってきた。しかし、このような捉え方は、SC がどのような相互行為の積み重ねから立ち上がるのかという生成プロセスを十分に示すことができていない。

第二章第3節で述べたように、SC 研究では、分析単位をマイクロ（個人・家族）、メゾ（コミュニティ・組織）、マクロ（国家・社会）という三つのレベルに区分して検討する枠組みが広く用いられてきた。例えば Grootaert ほか（2002）は、SC が「個人からコミュニティ、さらには国家レベルにまで及ぶ」と述べ、それぞれのレベルごとに測定指標や概念装置を区別して用いるべきだと論じている。Claridge（2020）も論文「Social capital at different levels and dimensions」において、信頼・規範・ネットワークといったディメンションと、三つのレベル別からマトリクス状に整理している。

日本における議論でも、稲葉（2008）は、SC の「付加価値」として、それが個人レベルの行為と社会全体の成果とを媒介する「ミクローマクロ・リンク」の概念である点を挙げ、その媒介を担うのがメゾレベルの中間集団であると指摘している。特に本事例のような危機的状況では、既存の制度（マクロ）だけでなく、現場で創発的に立ち上がる関係性（メゾ）が重要な役割を果たす。本章で提示するマイクロ・メゾ・マクロの三層構造と「中間的構造」という発想は、こうした先行研究の議論を、「武漢ロックダウン」という具体的事例に即して適用しようとする試みである。

1.3 「中間的構造」の二重性：SC の生成プロセスと構造化理論

前節で定義したメゾレベルの「中間的構造」は、ミクロな互助行為の反復を通じて形成されるものが、後続の互助行為を可能にする条件としても機能する。この「結果」であり「条件」でもあるという二重の性格は、主要な SC 論者が指摘してきた生成プロセスとも整合性が取れている。

例えば Coleman（1988）は、義務と期待、情報チャネル、規範といった関係資源は、あらかじめ与えられているものではなく、特定の関係における反復的な相互行為を通じて生成されると述べ、SC を個人の行為とマクロな結果を結びつけるための「概念装置」として位置づけている。また、農村コミュニティを分析した研究の中には、SC を「マクロな社会秩序に埋め込まれたミクロな社会的相互作用の蓄積」と捉え、分析上「SC を生み出すプロセス」と「SC として把握される関係資源」とを区別する必要があると明示するものもある（Falk, I.ほか 2000）。パットナム（1993）もまた、SC を「信頼・規範・ネットワークといった社会組織の特性」と定義し、それらを市民の参加や互助行為の蓄積としてのストックと捉えている。

さらに、信頼の生成メカニズムに着目すれば、オストロム系譜の研究（Ostrom, E.1990、2000、Ostrom, E.ほか 2003）や Six, B.ほか（2015）の議論も同様の視座を提供している。彼らは、信頼を「A が B に対して特定の行為を期待する」というミクロな現象として捉えつつ、その反復が行為を規制する規範や制度として定着し、最終的にはマクロな秩序に影響を与えると論じている。つまり、團購や菓の買い出しといった具体的な交換の積み重ねが、メゾレベルの場において「この小区は助け合える」という共有期待を生み出し、それが厚くなるにつれてマクロな SC として知覚されるというプロセスが想定できるのである。

以上の SC 研究における「プロセスとストックの循環」という知見を、より包括的な社会理論として統合し、本事例のダイナミズムを説明するのが、ギデنزの構造化理論である。ギデنزに従えば、信頼・規範・ネットワークは、単なる静的な背景ではなく、行為者が危機的状況を乗り越えるために動員した「規則と資源」のセットとして理解できる（Giddens 1984=2015）。

ギデنزでは、構造を行為の外部に固定的に存在する枠組みとしてではなく、行為を通じて絶えず産出・再生産されるものとして捉え、これを「構造の二重性」と呼んだ。この視点に立つとき、小区内に形成された中間的構造は、二つの側面を持っている。第一に、それは「行為の媒体」としての側面である。住民たちは、ロックダウンという不確実な状況下で、既存の「近隣への信頼」という規範的規則や、「WeChat グループ」という権威的資源を、自らの生存戦略の手掛かりとして活用した。ゲートキーパーによるルール策定や物資の配分は、構造があったからこそ可能になった行為である。第二に、それは「行為の結果」としての側面である。住民たちが日々の團購や情報共有といった社会的実践を反復することで、当初は暫定的なものであった互助のルールは、小区固有の制度として強化されていった。

すなわち、「中間的構造」は、先行する互助行為の結果として小区のなかに定着した関係資源であると同時に、住民が「行為の反省的モニタリング」を通じて、後続の互助行為に踏み出す際の前提条件としても機能していたのである。

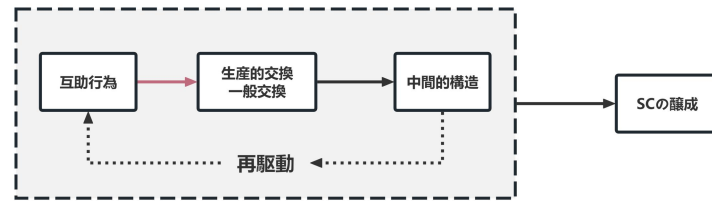


図 7-1 社会的交換と SC の循環モデル

2 ミクロな互助行為からメゾレベルの中間的構造へ

前節では、SC を静的なストックではなく、ミクロ・メゾ・マクロを循環しながら生成されるプロセスとして捉え、そのなかで小区というメゾレベルの「中間的構造」が重要な役割を果たすことを確認した。本節では、その中間的構造がどのようにしてミクロな互助行為から立ち上がってくるのかを、ロックダウン期の具体的な経験に即して検討する。

第六章第 3 節で詳述したように、ロックダウン期の互助行為は、単に物資や情報のやり取りにとどまらず、成功した交換に伴う安心感や感謝といった情動を出現させた。また、第五章 1.2 節で暗黙のルールの共有、団長やキーパーソンを中心とするネットワークの形成をともなっていたことも示唆されている。本節では、こうした要素を、SC の三要素である「信頼・規範・ネットワーク」と対応させながら、「中間的構造」を集团的信頼・創発的規範・多層的結合という三要素として捉える。そしてミクロな行為の反復がどのようにこのメゾレベルの「中間的構造」へとつながっていったのかという観点から整理していく。

具体的には、2.1 節で、成功した互助経験に支えられた集团的信頼の形成過程を検討する。2.2 節では、こうした経験の蓄積から創発された互酬性の規範や優先順位のルールに着目し、2.3 節では、団長やゲートキーパーの登場を通じてネットワークと役割がどのように構築されたのかを明らかにする。これら三つの側面を通じて、ミクロな互助行為がメゾレベルの「中間的構造」へと変換されるプロセスを描き出す。

2.1 集团的信頼

第六章第 3 節では、成功した互助経験がもたらすポジティブな情動が、グループへの凝集性やコミットメントを高め、そのことが交換の持続を支えたことを確認した。本章では、そうしたミクロレベルの経験がどのようにして小区というメゾレベルの「場」に蓄積し、「この小区（このグループ）なら助け合える」という集团的信頼として立ち現れていったのかに焦点を当てる。

ここでいう集团的信頼とは、特定の個人に対する信頼というよりも、「同じ小区に住む住民同士なら互いに協力してくれるだろう」「このグループに頼めば何とかできるだろう」といった、場や集団そのものに向けられた期待のことを指す。

本節では、まず 2.1.1 節で、團購や物資リレーの成功経験がどのようにして「この小区は頼りになる」という評価を生み出し、集团的信頼として定着していったのかを検討する。つづいて 2.1.2 節で、その集团的信頼が、不安や恐怖から互助への参加をためらっていた住民を再び互助の場へと引き戻す「安心感・期待」としてどのように働いたのかを明らかにする。

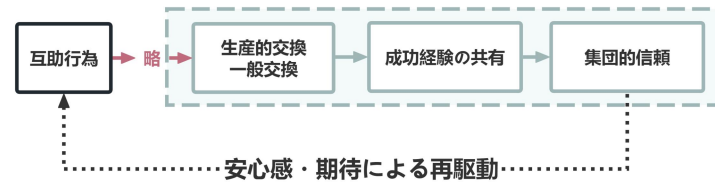


図 7-2 集団的信頼の形成と再駆動プロセス

2.1.1 成功経験による集団的信頼の形成

ロックダウン初期には、多くの住民が感染リスクへの恐怖や情報の不足から、他者との接触そのものに強い不安を抱いていた。第五章で見たように、当初は「誰が感染しているかわからない」「外に出るのが怖い」といった感覚が支配的であり、互助への参加は例外的であった。

しかし、団長が主導する最初の團購が無事に成功し、注文した物資が約束どおりに届いた経験は、多くの住民にとって大きな安心感をもたらした。特に、物資の欠乏が続くなかで、必要な食料や生活必需品を手にしたことへの安堵や、「自分たちはひとりではない」という感覚は強く印象に残っている。J3 さんによれば、多くの住民は最初のうち、「とりあえず試してみよう」という気持ちで注文しており、そもそも本当に届くのかもわからない状態であったという。彼女は、第 1 回目の注文は手続きの煩雑さや段取りに不慣れであったこともあり、物資が届くまでに約一か月を要したが、最終的にはきちんと小区に届けられたと振り返る。

最初は買う人もあまりいなかったんですけど、あのときはもうどうしようもなくて……社区が配ってくれるのを家でじっと待つわけにもいかなかったんです。

(J3 さん)

こうした成功経験は、単に「サービスの提供者」としての団長への評価にとどまらず、「この人の團購グループなら頼りにできる」といった関係レベルの評価へと結びついていく。逆に、交換がうまくいかなかった場合には、信頼の形成が抑制されることも確認された。たとえば、J3 さんは、小区内の別の棟で活動していた團購グループの例を挙げている。J3 さんによれば、そこの主催者は住民に対する態度で支持を失ったという。第五章 5.5.1 節でも触れたが、ここでもう一度 J3 さんの語りを以下に示す。

2 号棟にも團購をやっている人がいたんですが、その人は性格があまり良なくて……みんなを敵に回しちゃったんですよ。すぐ怒るし、言葉もきつくて。小区にはお年寄りもいて、「上の階まで運んでくれないか」って頼む人もいないじゃないですか。でも彼は手伝わなくて、「手足があるんだから自分で取りに來い」って言うような人で。結局、そういう噂は小区の中ですぐに「一から十へ、十から百へ」で広まるから、みんな彼のことを嫌うようになって、誰も頼まなくなりましたね。

(J3 さん)

このように、ロックダウン期における団長の振る舞いや住民との関わり方は、信頼関係の形成に大きく影響していたと言える。信頼関係が形成されれば、その結果として、「このグループで注文すれば何とかできるだろう」という期待（の共有）につながったと考えられる。

2.1.2 集団的信頼による再参加の誘発

こうした信頼の蓄積は、互助行為の反復とともに強まっていくと考えられる。最初の團購において多少の不安を抱えながらも参加した住民は、その成功を経験することで次第に躊躇が和らぎ、2 回目、3 回目の團購にも参加するようになる。ロックダウン期の團購や物資リレーにおいても、互助の成功がもたらす安心感や感謝は、個々の参加者にとどまらず、「この小区」「この団長のグループ」という単位に紐づけられていく。その結果、「このグループの人たちは信頼できる」「困ったときにはここで助けを求めればよい」という期待が広がり、集団的信頼がメゾレベルの「中間的構造」として小区の内部に徐々に定着していったと考えられる。

ここで重要なのは、この集団的信頼が、ロックダウン以前から存在していた親族関係や友人関係だけに基づくものではないという点である。第五章 5.1.1 節の事例で詳述したように、互いの顔も名前もよく知らなかった住民同士

であっても、團購や物資リレーの成功を繰り返し経験することで、「同じ小区に住む人々」としての信頼が形成されていった。

こうして形成された集団的信頼は、すでに互助に参加していた住民の安心感を高めただけでなく、当初は團購への参加をためらっていた住民の行動にも影響を与えた。ロックダウン初期には、「知らない人と接触するのが怖い」といった理由から、團購そのものを避けていた住民も少なくなかった。しかし、時間が経つにつれて、多くの隣人が團購を通じて物資を手に入れ、大きなトラブルもなく日常生活を維持している様子が、そうした住民にも伝わるようになる。第六章 1.2 節でも触れたが、X2 さんの語りは、このようなメカニズムが團購への参加を後押ししていたことを示している。

（團購には）最初のうちは私もあまり参加しなくて。下まで取りに行ったら感染するんじゃないかと思って、やっぱり怖かったですね。

（中略）グループの中では、みんなけっこう買っていましたよ。団長が「この時間は誰、その次何時からは誰」というふうに、時間をずらして野菜を取りに行くように段取りしてくれてね。そういう仕組みが回り始めてからは、だいぶましになりました。

（X2 さん）

ここでは、団長個人への評価だけでなく、「このグループのやり方なら安全に物資が手に入る」という場への信頼が、参加の意思決定を支えたと言える。これは呼びかけ型の交換にも見られる。例えば、G3 さんは以下のように語った。

当時、グループでみんなが家の余り物を譲り合ったりしてるのを見て、私も体温計を貸してもらったんです。そういえば、あれまだ返してないかも。すぐ下の階に住んでるのに。

（G3 さん）

このように、「自分もこのグループに参加しても大丈夫だろう」という期待を形成し、新たな参加者を互助の場へと引き寄せた。重要なのは、ここで働いているのが、詳細なルールや罰則といった硬い制度ではなく、「この場は信頼できる」という経験に裏打ちされた心理的な安心感であるという点である。言い換えれば、図 7-2 が示すように、集団的信頼は、恐怖と不確実性によって抑制されていた交換行為を再び立ち上げる「再駆動の動力」としても機能していたのである。

2.2 創発的規範

ロックダウン下の互助行為は、前節で見たように信頼を高めるだけでなく、「どのように助け合うべきか」「何が許され、何が許されないのか」といった行動のルールを生み出していた。こうしたルールは、行政があらかじめ定めたものではなく、團購や物資リレーといった生産的交換・一般交換を住民が繰り返すなかで、試行錯誤を通じて立ち上がってきたものである。本研究では、このように現場の実践から生じ、参加者の間で共有されるようになったルールの束を「創発的規範」と呼び、それをメゾレベルにおける「中間的構造」の重要な一部として位置づける。

図 7-3 は、その形成プロセスを示したものである。生産的交換・一般交換から、監視・罰則・紛争解決などの実践を通じ、参加の仕方や負担の分担、トラブルへの対処をめぐる暗黙の了解が生まれていく。こうして形づくられた創発的規範は、「中間的構造」として小区の内部に定着すると同時に、WeChat グループやマンションのエントランスといった「場」を通じて可視化される。その可視化された適用過程が、新たな参加者を引き寄せ、互助行為の次のサイクルを再び駆動していくのである。

本節では、図 7-3 に沿って、まず 2.2.1 節で創発的規範がどのように生成されたのかを検討し、ついで 2.2.2 節で、それらの規範がどのように可視化され、互助行為の再参加・再駆動を促したのかを明らかにする。

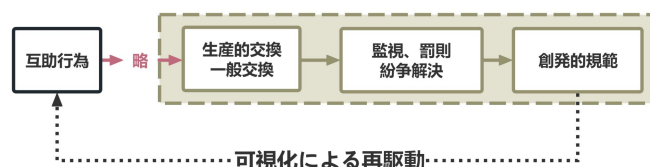


図 7-3 創発的規範の形成と再駆動プロセス

2.2.1 創発的規範の生成

ロックダウン直後、日常的な規範は事実上機能を失い、社会は一時的なアノミー状態に陥った。住民たちは「どう振る舞えばよいか分からない」という制度的空白に直面していた。このような極限状況下で観察されたのは、王（2021）が災害対応の現場で見出した「ブリコラージュ⁵⁵」の実践、すなわち「手元にある限られた資源を組み替え、当面の生存課題を解決する創造的即興」である。

具体的には、本来は私的なコミュニケーションツールに過ぎなかった WeChat が、物資調達のための公共的なプラットフォームや安否確認のライフラインへと転用されたことが挙げられる。さらに、生活空間にある物理的な設備も新たな用途を与えられた。たとえば、エレベーターを「無人の垂直搬送機」として利用する事例である。感染防止のために対面接触が避けられるなかで、住民たちは「物資をエレベーターに寄せ、行き先ボタンを押して送り出す」という即興的な工夫によって、物理的な距離を保ちながら社会的交換を成立させていた（第五章 3.2.2 節、第六章 1.2 節を参照）。

こうした即興的なやり取りが反復されるうちに、「この小区ではこうするのが上手くいく」といった暗黙の了解が形成され、それが次第に創発的規範として定着し、崩壊した日常の秩序をボトムアップから再構築していったと考えられる。先行研究でも触れたように、Turner と Killian（1957=1972）は、群衆行動や災害時の秩序は、あらかじめ決められているのではなく、人びとの相互作用を通じて事後的に定義されると指摘している（第二章 2.2.2 節を参照）。武漢の小区においても、「WeChat に接龍という機能があるなんて、以前は全く知りませんでした」と V2 さんが語ったように、「團購のルール」、「物資の優先配分の基準」といった微細な取り決めが、上からの指示ではなく、チャット上での相談や試行錯誤を通じたボトムアップの相互調整から創発された。

類似の創発的規範は、ペット救助の場面にも見られる。本研究のインタビュー対象者のなかに、実際にロックダウン中に他人の自宅へ訪問してペットを救助したボランティアは含まれていないが、澎湃新聞（2020）によれば、ボランティアはペットの世話に赴く活動を行う時、「事前に公安部門の同意を得る」「開錠費用のみ依頼者負担とし、救助自体は無償とする」「訪問前に飼い主からの授權動画を受け取り、許可が確認できた場合のみ救助を開始する」「2人1組で訪問し、一人が給餌・清掃を行い、もう一人が全行程を飼い主とビデオ通話で共有する」といった手順が採用されていたという。これらのルールは、あらかじめ施策として細かく定められていたわけではなく、ペットの死亡や財物の紛失をめぐるトラブルを避けつつ救助活動を継続するために、現場のボランティアが試行錯誤のなかで編み出した創発的規範であったと考えられる（澎湃新聞 2020）。

この点を小区レベルで具体的に示すのが、U2 さんの語りである。

グループ内でタバコを求める声があったが、タバコは團購でも手に入らなかった。ある人がグループ内でタバコを販売し始めたが、彼は価格を吊り上げ、平常時の 10 倍という高値で売っていた。これに対して、みんなが「国難につけ込むな」としてグループ内で非難してからは、彼は黙った。誰もしないよ、こんな時期にね。
(U2 さん)

ここでは、あらかじめ「便乗値上げ禁止」というルールが明文化されていたわけではないと想定できるだろう。それにもかかわらず、参加者による監視と集団的な非難を通じて、「ここではこういう振る舞いは許されない」という創発的規範が形成され、互助行為の枠組みを形づくっていったと考えられる。

このように、團購や物資リレー、ペット救助に至るまで、互助を円滑に進めるうえで必要とされる参加ルールや優先順位、紛争処理の仕方は、行政から与えられた公式の制度ではなく、住民やボランティア自身が時間と労力を投じてその場で作り上げ、試行錯誤しながら調整してきた「創発的規範」であった。それらは、崩れた日常の秩序を補う中間的構造の一部として、互助行為の持続を可能にしていたのである。こうした創発的規範が、オストロムのいうソフトな制度とどのように接続し、マクロな SC の構成要素として位置づけられるのかについては、本章第 3 節で改めて検討する。

⁵⁵ ブリコラージュとは、文化人類学者レヴィ＝ストロースが提唱した概念であり、本来は「ありあわせの道具や材料を用いて、何とかする」というブリコール（野生の思考）を指す（レヴィ＝ストロース 1962=1977）。

2.1.2 規範の可視化による再参加の誘発

次に、こうして生成された創発的規範が、どのように可視化され、互助行為の次のサイクルを誘発していったのかを検討する。図 7-3 に示したように、本研究が想定するプロセスでは、ミクロな生産的交換や一般交換の反復から創発的規範として「中間的構造」に組み込まれる。そのうえで、WeChat グループやマンションのエントランスといった「場」の可視性を通じて規範の適用過程が見えるかたちになり、新たな参加者が誘発され、互助行為の循環が再び動き出した。

まず、WeChat グループに着目すると、タバコの高値販売の事例では、ある住民の投稿に対して批判が集中するやり取りが、すべてのグループの利用者（小区の住民）が見えていた（少なくともトーク履歴として残される）と想定できる。同様に、團購のルールや「この時は互いに支え合うべきだ」といった規範も、団長のアナウンスや住民同士の相談のプロセスが共有され、シグナルとして作用したと考えられる。たとえば、誰かが「小学校一年生の教科書あるか」「新生児のミルクが足りない」と訴え、それに応じて「うちに余りがあるので分けます」といった申し出が次々と書き込まれる。こうしたやり取りがトーク履歴として残り、他の成員に共有されることで、「助けてもらったら、別の場面で誰かに返す」という遅延的互酬の規範が、抽象的な道德ではなく、日常的な実践として理解されるようになった。

また、第六章 2.2 節で検討した物々交換箱の事例は、「場の可視性」が贈与の連鎖をどのように誘発するかを端的に示している。マンションのエントランスに設置された段ボール箱に、住民が余った食料や生活用品を入れ、必要な人が自由に持ち帰るというシンプルな仕組みであるが、そこで重要なのは箱の中身が常に目に見える形で蓄積され、更新された点である。V2 さんが「誰が持っていったかは分からないけれど、それでいいんです」と語ったように、ここでは贈与の相手は特定されず、各人が自分の余剰を「箱」という公共プールに投じることで、コミュニティ全体への貢献として受け止められていた。

社会心理学の知見によれば、人々は他者の行動を手がかりに自らの行動の妥当性を判断する傾向がある（Deutsch, M. ほか 1955、Asch, S.E. 1955）。ある行動がすでに周囲で広く行われていると知ること、自分も同じ行動を選びやすくなるのである。これは、Leibenstein（1950）による「バンドワゴン効果」や、チャルディーニ（2009＝2014）が提唱した「社会的証明」の原理によって説明できる。物々交換箱の事例では、箱の中に置かれた品物そのものが、「自分が（他の人のために）何かを入れても不自然ではない」「むしろそうすべきだ」というポジティブな同調圧力として働いていたと考えられる。

さらに、Y2 さんの「コーラをめぐる連鎖」は、そのリレー性を象徴的に示す（詳細は第五章 3.2.1 節を参照）。ある住民がコーラ 1 箱をエントランスに「ご自由にどうぞ」と置き、それを受け取りに来た住民たちが、代わりに自宅にあるものを次々と置いていった結果、箱の中身が絶えず入れ替わりながら増え続けたというエピソードである。

このプロセスは、災害社会学で言われる「被災地のリレー」と同様、二者間で完結しない一般交換として理解できるが、その駆動メカニズムはやや異なる。阪神・淡路大震災から中越地震、東日本大震災へといった時間・空間をまたぐリレーが、過去の被援助経験に基づく内面的な動機づけによって支えられていた（渥美 2012、2014）とすれば、ロックダウン下の物々交換箱では、「目に見える他者の贈与」が「社会的証明」として働き、「ここではこう振る舞うのが普通だ」というポジティブな同調圧力を生み出していた。直接の対面がなくとも、箱の中に並ぶコーラや小ネギの鉢植えといったモノ自体が、「余剰と欠乏を交換する」という創発的規範を視覚的に提示するシンボルとなり、次の贈与を誘発する「呼び水」として機能していたと考えられる。

このように、WeChat グループやエントランスという「場」における可視性は、監視や制裁のプロセスだけでなく、利他的行動の連鎖をも可視化することで、互助行為の次のサイクルを誘発する役割を果たしていた。このように、創発的規範は「中間的構造」の一部として定着すると同時に、住民の行動選択を支えるシグナルとなっていたと言える。

2.3 多層的結合

これまで見てきたように、「武漢ロックダウン」下の互助行為は、集団的信頼（2.1 節）や創発的規範（2.2 節）といった「中間的構造」を生み出していた。SC 論が示すように、こうした信頼・規範と並ぶ第三の要素として、「住民同士のつながりそのもの＝ネットワーク」もまた重要である。ロックダウン期の互助ネットワークは、もともとの親族関係や近隣関係だけでなく、WeChat グループを介した新しいつながり、趣味や関心にもとづくグループ、ボランティア組織とのリンクなど、複数の層が重なり合う構造として立ち上がっていた。

この多層的結合は、一部の積極的な住民だけで閉じたサークルをつくるのではなく、デジタル機器に不慣れな高齢者などを内部に取り込みつつ、小区の外部へも橋をかけるという二つの役割を担っていたと言える。本節では、こうしたネットワーク形成のプロセスを、デジタル・ゲートキーパーによる内部への包摂と、弱い紐帯を介した外部への橋渡し（bridging）という二つの側面から検討し、ネットワークが信頼・規範と並んで互助行為を再駆動する基盤として機能していたことを明らかにする。

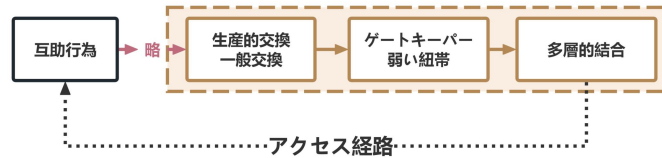


図 7-4 多層的結合の形成と再駆動プロセス

2.3.1 ゲートキーパーと多層的ネットワーク：包摂と橋渡し

小区内部のネットワークに目を向けると、高齢者などの「デジタル弱者」への支援は、単なる親切行為にとどまらず、若年層がデジタル・ゲートキーパーとして機能していたことを示している（第四章 4.3 節を参照）。スマートフォンやオンライン決済に慣れている若年層の住民は、自宅近くの高齢者から注文を預かって代わりに申し込むといった役割を担っていた。ネットワーク論の観点から見れば、こうした若年層は、オンライン空間で展開される互助ネットワークと、そこから排除されがちな高齢者世帯とのあいだに位置する「媒介ノード」であり、Lin (2001) のいう社会的資源へのアクセスを仲介するブローカーとして働いていたと言える。この包摂のプロセスは、信頼・規範・ネットワークという三つの要素のうち、ネットワークが持つ「アクセスの不平等を是正する機能」を浮かび上がらせる。もしデジタル・ゲートキーパーが存在しなければ、高齢者はロックダウン下で公的支援と民間の互助の双方から取り残されていた可能性が高い。

小区の外部との接続に目を向けると、第五章 5.2 節で検討したペット救助グループの事例は、趣味や関心にもとづくネットワークが地理的境界を超えて形成されていくプロセスを示している。例えば、A3 さんは、小区のペットショップ店主が立ち上げたペット用品専用グループに参加し、そこで得た情報を自分の友人や小区のほかの飼い主に伝え、グループに招き入れていた。また、そのグループでは、武漢市内の別の地区にあるペット救助グループのリンクが頻繁に転送され、A3 さん自身も洪山区や光谷の救助グループに参加していたと述べている。

Granovetter (1973) が指摘したように、「弱い紐帯」は、近しい家族や隣人といった強い紐帯とは異なる情報や機会をもたらす経路として機能する。A3 さんとペットショップ店主との関係、あるいは見知らぬ救助ボランティアとの関係は、日常的に密接な交流を伴う強い紐帯ではないが、それゆえに、小区の内部だけでは得られないキャットフードの入手ルートや救助情報をもたらす「橋」として働いていた。結果として、ペットをめぐる支援が小区という空間的境界を超えて展開されることを可能にしていたのである。つまり、ボランティアを探す市外の住民でも、市内の飼い主とも接続することで委ねるルートが確保されていたこともできる（詳細は第五章 5.2.2 を参照）。ゲートキーパーが複数のネットワーク層（家族・近隣・趣味グループ・ボランティア組織など）にまたがって位置していることは、選択可能なルートの多様性をもたらす。パットナム（2000＝2006）がいう橋渡し型の SC は、異なる集団をつなぐこうした紐帯の集合として理解できるが、本事例は橋渡し型 SC が、危機状況における「個別ニーズ」への対応を可能にするインフラとして機能していたことを示している。

以上を踏まえると、ロックダウン下の互助行為は、単に「近所づきあいの強化」や「情緒的な連帯」のみならず、デジタル・ゲートキーパーによる包摂と、弱い紐帯を介した橋渡しを通じて、異なるレベルのネットワークを多層的に結びつけるプロセスであったと言える。

2.3.2 ネットワークによる互助行為の再駆動

ここで改めて強調しておきたいのは、多層的な結合が一旦形成されると、それ自体が新たな互助行為を生み出す「再駆動の動力」として機能するという点である。Lin (2001) が述べるように、ネットワークは情報や支援といったソーシャル・リソースへのアクセス経路であり、誰がどの位置にいるのか、どのルートを通じてどのような資源に到達できるかが重要となる。本研究では、ゲートキーパーと弱い紐帯を軸にした多層的ネットワークが整備されたことにより、住民は新たな困難に直面したときでも「どこに頼ればよいか」をあらかじめ知っている状態になっ

ていた。結果として、互助行為は一過性のものではなく、問題が発生するたびに繰り返し起動されるようになる。例えば、A2さんは、小区のグループチャットでのようすについて、次のように振り返る。

小区のグループチャットにはお医者さんがいてね。前にうちの小区で、自発的に「医療関係者が何人いるか」を全部調べたことがあって、いざというときにみんなに医療のことで助けてもらえるようにって。それで、うちの小区にはたまたまお医者さんが何人かいるって分かって、そのときに何人かのお医者さんとは WeChat で友だちになっておいたんだ。あとで母の体調が悪くなったときには、母が自分からそのお医者さんに WeChat で相談したりもしてたみたい。

（中略）その頃、うちのマンションの 11 階におばさんが一人いて、娘と息子がいたんだけど、娘のほうは高校生でね。何年生かまでは覚えてないんだけど。私、そのときちょうど留学から帰ってきたばかりで、すごく環境に慣れなくてさ。うちの上の階に子どもが三人いて、すごくにぎやかだったから、母がグループチャットで一回、「うちの子が試験を受けるから、ちょっと静かにしてもらえませんか。娘は留学から帰ったばかりで、まだ慣れてないので」って書いたことがあったんだよね。それを 11 階のおばさんが見てて。封鎖の間は別にそんなに連絡とったりはしてなかったんだけど、コロナのあとでそのおばさんが何回か私のところに来て、「うちの子が留学したいって言ってて」って言いながら、いろいろ聞いてきたんだ。

（質問：それは、そのときのことをずっと覚えていてくれたということなんですか。）

うん、私も「けっこうよく覚えてるな」って思って（笑）。

（質問：そのあとも、さらにやり取りが続いたんですか。）

うんうん。そのあと、そのおばさんが娘さんを連れてうちに来て、何回も話したんだよね。で、その子、結局マカオに留学して、専攻も私と同じ分野にしたんだよ（笑）。そのあとも、試験のときにどう勉強したらいいかわからないって言うから、私が問題を一セット作ってあげたりして。

（じゃあ、その後もかなり交流が続いたわけですね。）

そうそう。向こうも女の子だし、そのおばさんもけっこういい人でさ。母もその話を知ってて、「できるだけ助けてあげなさい」って言ってただけ。

（A2 さん）

このように、ミクロな互助行為の累積から生まれた多層的ネットワークは、単なる「過去の記録」ではなく、「次に困ったときにどの経路を使えばよいか」という実践的な知識を内包する中間的構造として機能していた。住民は、すでに機能したルートに再びアクセスしようとする傾向を持つため、ネットワークは利用されるたびに強化され、同時に「ここに頼れば何とかなる」という期待も更新された。この意味で、ネットワークは SC の一要素であると同時に、SC を生み出すプロセスを再び駆動する基盤でもあり、図 7-4 に示した「中間的構造による再駆動」の中核的なメカニズムをなしていると言える。

3 メゾレベルの中間的構造からマクロな SC へ

前節までに見てきたように、ロックダウン下の互助行為は、単なる個別のやり取りの集積ではなく、團購や物々交換箱、ペット救助グループといった場を通じて、集団的信頼・創発的規範・多層的結合というメゾレベルの「中間的構造」を形成していた。

本節では、この「中間的構造」がいかにしてマクロレベルの SC へと接続されていったのかを検討する。すなわち、ミクロレベルの互助行為が繰り返されることで形成された中間的構造が、どのように一般信頼・制度・ネットワークという三つの要素へと変換され、結果として社会のレジリエンスを高めていったのかを明らかにする。

もっとも、本研究は質的研究であり、マクロレベルの SC を指標として直接測定することはできないため、本節でインタビューでの語りを手がかりに、その一端を間接的に捉えるものとして位置づけている。

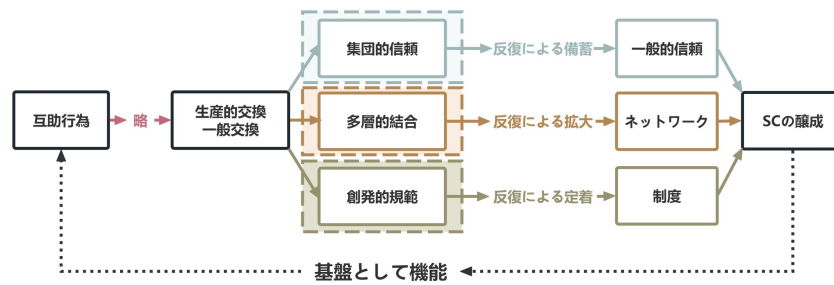


図 7-5 SC 醸成メカニズム

3.1 集团的信頼の一般化

第2節で論じた「集团的信頼」は、小区などの集団メンバー間に限定された安心感であったが、ロックダウンの長期化に伴い、この関係の信頼は、より抽象度の高い「一般的信頼（Generalized Trust）」へと質的な転換を遂げていったことが確認されたと言える。すなわち、「この隣人は信頼できる」という個別的な確信が、「武漢の人々は（あるいは人間社会は）危機において助け合うものだ」という、不特定多数の他者に対するポジティブな考え（信念）へと拡張されたのである。

この拡張のメカニズムは、心理的な「認知の再構成」として理解できる。ロックダウン初期のウイルスへの恐怖から、團購や物々交換箱を通じて、見知らぬ隣人からの善意に繰り返し触れることで、住民の中にあった他者への警戒心は、「他者は潜在的な支援者である」という認識へと上書きされていった。「武漢の人たちは前より団結した、って本気で思いました」という U2 さんの語りはこのプロセスをよく示している。ここでは、匿名の隣人同士が同じ時間に同じ行為を共有すること（「武漢頑張れ」の一斉合唱）を通じて、「この小区」だけでなく「武漢の人たち」が一体となっているという感覚が生まれていたと考えられる。こうした認知の変化は、一時的な高揚感にとどまらず、ロックダウン解除後にも持続し、小区の外へと広がっていった。たとえば G3 さんは、次のように振り返っている。

あれは封鎖の年の国慶節だったと思うけど、下に降りたら、どういうわけか多くの家のベランダに国旗が掛かっていて。それを見て私もすぐにネットで国旗を注文したんだ。

（G3 さん）

ここでは、小区の住民どうしの連帯感が、国旗というシンボルを通じて「国家」レベルの共同体への帰属意識と結びついていることがわかる。同様に、N2 さんは春節のテレビ番組で武漢を扱った小品⁵⁶を見たときの感情を、次のように語っている。

春晚の時に、「武漢ロックダウン」を題材にした）コントが放送されたじゃないですか。あれを見た時は、本当に誇らしかったです。当時は多くの人が武漢人を非難していましたが、私は本当に、多くの武漢人が自らを犠牲にしたのだと感じていましたし、大部分の人はおとなしく家に居たのですから（後略）。

（N2 さん）

パットナム（2000=2006）が指摘するように、マクロな社会の協調を支えるのは、特定の相手に依存しない「薄い信頼（thin trust）」、すなわち一般的信頼である。本事例において、小区という空間で育まれた信頼は、内部だけにとどまることなく、都市や国家レベルの共同体への誇りや、「見知らぬ他者にも誠実であるべきだ」という実践を通じて、外部世界への信頼を立て直す土台として機能したと言える。これは、危機下で形成された SC が、単なる身近な人だけの生存戦略にとどまらず、社会全体の分断を和らげ、再統合を支える「公共的資産」として働いたことを意味していると示唆される。

⁵⁶ 「春晚」は、中国中央テレビ（CCTV）が旧正月の前夜に放送する「中国中央電視台春節聯歡晚会」の略称。特に「小品（コント）」のコーナーでは、その年の社会的な出来事がテーマ化されることが多い。2021 年（ロックダウンの翌年）の放送に、武漢住民を励まし、ウイルスの封じ込めを「英雄的な犠牲」として称揚する演出や演目が盛り込まれた。

3.2 創発的規範の固定化とソフトな制度

本章 2.2 節では、「先に困っている人を優先する」「高齢者や妊婦には配慮する」「非常時だからお互い様だ」といった創発的規範が、團購や物々交換箱をめぐる実践を通じて立ち上がっていく過程を確認した。本節では、これらの規範がいかにして一時的な合意にとどまらず、住民の間で共有された「当たり前のルール」として定着し、オストロムのいうソフトな制度として機能していったのかを検討する。

オストロムらによれば、制度（institutions）とは、人びとの行為に対して「何が許され、何が禁止され、ルールに反した場合どのような制裁が認められるのか」を定める処方箋であり、日常的な相互行為のなかで作られ、維持される「ゲームのルール」であるとされる（Ostrom ほか 2009）。本調査で観察されたのは、まさにこのような現場レベルのルール形成であった。たとえば、第七章 2.2 節で見た U2 さんの事例において、高額転売を行った住民はチャット上で強い批判を受け、最終的にグループから排除された。この出来事は、単に一人の成員が嫌われたというよりも、「非常時に便乗して利益をむさぼってはならない」という暗黙のルールが共有されていたことを示している。

團購や物々交換箱をめぐるやりとりの中では、こうした制裁経験が繰り返されることで、「非常時にやってはならない行為」が次第に一般的な基準として形作られていった。中国国内の報道によれば、後の上海ロックダウンの事例ではあるが、百貨店で白菜が一玉 77.9 元という高値で販売され、市民の怒りを買った事件が象徴的である（新華社 2022）。このニュースは、「危機に乗じた値上げ」が広く道徳的に問題視されていることを端的に示している。

本調査でも、B3 さんがフェイクニュースやデマを流す人に「そういうのはやめて」って注意する人がいる（第五章 4.2.2 を参照）と語り、C3 さんは彼の小区では、もともと発熱していたにもかかわらず報告せず、別の小区から移動してきた住民の存在が知られると、チャットが一気に「炎上」したという話もした。

網格員から急に通知が来てね、うちの団地でまた一人、感染者が出たって言うんですよ。別の団地からこっちに来た時に、係の人がいくつか問い詰めたら、熱があるのが発覚したとかで。

グループチャットは一瞬で大騒ぎになりましたよ。だってその日はちょうど共同購入の野菜が届いた日で、大勢の人が下に取りに降りてましたからね。それに、みんな疑問や不満が爆発ですよ。今、団地は封鎖されているわけでしょう？ あの患者はどうやって前の団地を抜け出して、こっちに入り込めたんだって。もうその患者を通報した人もいるみたいで……なんでも、前の団地にいた時から熱があったのに、隠してたらしいんです。チャットの中はもう、その人への罵倒ですごいことになってましたよ。

(C3 さん)

ここでは、「高額転売」「感染の隠蔽」「不安を煽るデマ」といった異なる行為が、いずれも「非常時にやってはならないこと」として同じカテゴリーにまとめられている。このような制裁経験が重ねられることで、小区という小集団を超えて、「非常時には共通のルールを守るべきだ」という感覚が広い範囲で共有されていったと考えられる。

さらに、こうした創発的規範がロックダウン解除後もどのように持続されたのかを見ておきたい。團購の習慣をもとにロックダウン解除後に小売店を開いた J3 さんの事例は、その典型である。彼女はロックダウン期に団長として住民を組織し、物資の共同購入を行っていたが、その際に形成された「高齢者を優先する」「足腰の弱い人には玄関先まで届ける」といったやり方を、解除後の店舗運営にも引き継いでいた。また、現在の團購の流れについて、J3 さんは「今の團購も、流れは（ロックダウン期と）だいたい同じです。私がグループチャットで注文をとって、商品が届いたらグループで知らせる」と述べている（第五章 5.1.3 を参照）。

このように、ロックダウン期に創発された規範は、ロックダウン解除とともに完全に消えるのではなく、日常のサービス提供や商売のあり方の中に組み込まれ、ソフトな制度として残り続けている。これは、非常時に形成された「当たり前のルール」が、一つの危機場面を超えて、より広い社会生活の基準として働き始めていることを意味すると考えられる。

3.3 ネットワークの持続・拡張と SC の醸成

ネットワークの持続と拡張のプロセスは、橋渡し型・連結型・結束型という三つの異なる SC を同時に醸成する契機となっていたと考えられる。

3.3.1 橋渡し型 SC

本章 2.3 節で見たように、ロックダウン期には、親族・近隣・趣味グループ・ボランティア組織など、複数の層にまたがるネットワークが立ち上がったが、その一部はロックダウン解除後も形を変えながら存続し、さらに小区の外部へと広がっていった。例えば E2 さんを中心とするペット救助グループの事例では、ロックダウン期にキャットフードの團購や留守宅のペット世話を通じて形成されたつながりが、解除後もオンライン・オフラインを行き来しながら継続した。さらに、市外の飼い主や動物保護団体、他地域のボランティアといった新たなアクターを巻き込むことで、空間的な拡張を見せている（詳細は第五章 5.2.3 を参照）。小区の境界を越えてネットワークが広がることで、「見知らぬ他者」であっても互助を期待しうる「潜在的な仲間」として認識される余地が生まれたのである。

3.3.2 連結型 SC

一部の WeChat グループでは、網格員や販売者、医師などがメンバーとして参加しており、住民どうしの水平的なつながりに、行政・市場・専門職との縦のつながりが重層的に組み込まれていた。例えば、グループ内の医師に対して住民が症状の相談や服薬指導を求めたり、網格員が最新の施策や配給情報を伝えたりすることで、住民の不安や不信感が和らぐといった語りが確認された。これらは、ネットワークが単なる住民間の相互扶助にとどまらず、行政や専門職との信頼関係を媒介するインフラとして機能していたことを示している。こうしたネットワークの一部は、封鎖解除後もそのまま維持されている。実際、A2 さんの事例では、母の体調が悪化した際、ロックダウン時に連絡先を交換した医師に相談を行うことができたという（本章 3.3.2 を参照）。また、G3 さんは「今でも、そのときに入った薬局のグループが、スマホの中に少なくとも四つは残っている。今は薬局がセールやイベントをするときは、だいたいそのグループでお知らせが来る」と述べており、ロックダウン期に形成された薬局のグループが、現在は日常的なセール情報や健康関連情報の配信チャンネルとして機能していることがわかる。X2 さんも「今も小区のグループはそのまま残っている。そのあと何回かまた封鎖になったときもあったけど、そのときは『何時に下に降りて PCR 検査を受けてください』みたいな連絡は、全部そのグループで一括して来ていた」と語っており、小区のグループがその後の封鎖⁵⁷や PCR 検査の際にも、住民への一斉通知や調整の基盤として使われ続けていることが示される。このように、危機対応の中で形成された垂直的なチャネルや情報共有の枠組みは、「武漢ロックダウン」解除後も維持され、住民を支えるソフトな制度資源となっていることがうかがえる。

3.3.3 結束型 SC

J3 さんの事例において、團購グループが常設の売店へと移行したプロセスは、危機対応として立ち上がった互助ネットワークが、平常時の生活インフラとして制度化されていく一例である。また、小売店という場合は、日常的な買い物や立ち話を通じて拠点として機能し、ロックダウン期に生成された SC を「日常生活の中で使い続ける仕組み」となっていた（詳細は第五章 5.1.2 節を参照）。A3 さんが「以前はエレベーターで沈黙していたが、今は互いの名前や趣味を知り合い、野良猫の話まで共有するようになった」と述べ、さらに、A2 さんの事例に見られるように、子育て世帯間のつながりが日常化したことも重要である。A2 さんは、子どもを介したママ友関係を通じ、普段は希薄だった隣人間の接触を密にするようになったと語る。

今の社会はみんな警戒心がけっこう強いのではないかな。小区の中では、もともと知っている何人かの同級生以外とは、ほとんど接触がなかった。（中略）その時（ロックダウン）に友だち追加をしました。今でも時々一緒に遊ぶ約束をしている。

あの時はね、私たちここの棟、小さい子がすごく多かったの。若いご夫婦が多いからなんだけど、粉ミルクがものすごく不足しちゃってて。だから当時、家にたくさん買い置きしてた人が、近所の人にその粉ミルクを分けてあげたりしてて。（みんな）本当にいい人たちだったなあ。

（中略）もし今マンションに来たらわかると思うけど、うちって元々は入り口が二つに分かれてて別々だったのね。でも今は、子供たちはみんな一緒になって遊んでるの。親同士がすっかり顔なじみになったから。もともとは共働きで忙しい若い親御さんばかりで（以前はほとんど顔を合わせることもなかったんだけど）。

⁵⁷ ここでいう「その後の封鎖」とは、2020 年 4 月の「武漢ロックダウン」解除以降の状況を指す。中国政府が堅持した「ゼロコロナ（動態清零）」政策の下では、市中感染が確認されるたびに、当該地域や小区単位での厳格な封鎖措置が断続的に実施された。

今はもう子供たちがごちゃ混ぜになって遊んで、正直、たまにどの子がどこの家の子か、私にもわからなくなっちゃうくらい（笑）。

（A2 さん）

このように、危機を共有した経験は、一時的な「災害ユートピア」にとどまらず、将来の危機に対する潜在的なレジリエンスとして地域社会に残存している。

こうしたネットワークの持続・拡張は、特定の小区やグループに閉じた関係資源ではなく、「武漢の住民」あるいは「同じロックダウンを経験した人々」という、より大きな単位への帰属意識を育む基盤ともなっていた。ロックダウン下に形成され、その後も一定程度維持・拡張されたネットワークは、橋渡し型・連結型・結束型という三層の SC を通じて、マクロなレベルでの信頼と連帯を支える重要なステップであったと言える。

3.4 小括

ここまでの議論で明らかになったのは、ロックダウン下の互助行為が、ミクロな交換からメゾレベルの中間的構造を経て、マクロな SC へと接続していく重層的なプロセスであったということだ。その根拠として以下の三点が挙げられる。第一に、3.1 節では、隣人どうしの反復的なやりとりが集団的信頼を生み出し、それがより広い一般的信頼へと広がっていく過程を示した。第二に、3.2 節では、暗黙のルールが創発的規範として共有され、ソフトな制度として定着していくことを確認した。第三に、3.3 節では、互助を支えるネットワークが、小区内部の結びつきにとどまらず、他地域や行政・専門職とのつながりも含んだ多層的な構造として持続・拡張し、SC を形づくっていたことを示した。

以上の議論をまとめると、ロックダウン下の互助行為は、ミクロレベルの交換の反復を通じて、メゾレベルの中間的構造（集団的信頼・創発的規範・多層的な結合）を形成し、これが一般信頼・制度・ネットワークというマクロな SC の三要素へと接続されていったと整理できる。ここで導入した「中間的構造」という視点は、ギデンズのいう構造の二重性やオストロムの制度論と接続しつつ、SC を静態的な「ストック」ではなく、行為と構造の循環過程として捉え直すものであり、本研究の理論的貢献の核心をなすものである。

さらに、本章の分析は、信頼や規範というミクロな資源が、多層的なネットワーク構造のなかに織り込まれていくことで、小区レベルの中間的構造が立ち上がり、その一部が橋渡し型・連結型・結束型 SC としてマクロレベルの資源へと変換されていく具体的なプロセスを描き出したと言える。こうしたメゾレベルの媒介過程を明らかにすることによって、従来しばしばミクロとマクロが混在して語られてきた SC 論に対し、その間をつなぐ分析視角を提示した点に、本研究の意義がある。

4 社会関係の持続と解消

以上の分析からは、住民同士の互助行為を通じて、メゾ（小区）レベルの信頼や制度、ネットワークが強まり、SC が一定程度生成されたことを見てきた。多くの住民が、「以前よりも小区の人びとに親近感を覚えるようになった（A3 さん）」「顔を合わせれば挨拶をするようになった（V2 さん）」と語っており、ロックダウンが解除されたからといって、すべてが「何も起こらなかった以前の状態」に戻ったわけではない。危機下で形成された SC の一部は、その後の日常にも持ち越されている。

他方で、ロックダウン期に生まれたすべての紐帯が持続したわけではない。物資の受け渡しや情報共有をきっかけに一時的に接点をもった個人間の関係の中には、解除後まもなく途絶えたものも少なくない。一見すると、これは「SC が形成された」という前節の議論と矛盾するように見えるが、実際には、マクロ／メゾレベルの SC が一定程度残る一方で、ミクロレベルの紐帯には強い選別が働いていたと考えられる。本節では、このような関係の選別がいかにして生じたのかを明らかにするために、なぜある関係は消滅し、別の関係は持続・定着したのかという分岐点を、「資源の性質」と「属性の可視化」、そして「機能転換」という観点から検討する。

4.1 「普通物資」の代替可能性と匿名性の維持

解除後に多くの紐帯が急速に消失した背景には、一般交換に内在する匿名性と、対象となった水・米・野菜といった「普通物資」の代替可能性がある。ロックダウン下では、市場機能が麻痺するなかで、これら一般財をめぐる互助は生存のための不可欠な手段となっていた。しかし、供給が正常化すると、それらはスーパーやネットショッ

ピングで容易に入手できるようになり、コストのかかる近隣互助に依存する必然性は急速に薄れていった。

当時のやりとりの様子は、次の語りからもうかがえる。C3さんは、「本来、接触はできるだけ減らさなきゃいけないかったし、あの時はお返ししようなんて全然考えなかったよ」と振り返る。E2さんも「（相手が）返すことなど考えなかったのも、（WeChat上の）友達追加もしなかった」と述べている。いずれの語りにも共通するのは、やりとりの主眼が「誰とつながるか」ではなく、「どうやって必要な物資を確保するか」という点に置かれていたことである。

以上のような「普通物資」をめぐるやりとりは、ロックダウン下では一種の「一般交換」として機能し、見知らぬ住民どうしが相互に助け合うことで、短期的には強い連帯感を生み出した。しかし、その互酬性は「誰かが困ったときには、誰かが助ける」という不特定性をもっていたため、交換の相手はあくまで匿名的な「誰か」とどまりやすい。すなわち、不特定の成員を対象とする互酬性そのものが、交換の匿名性と非人格性を同時に強めていたのである。その結果、緊急事態のあいだには「小区としての一体感」が高まったとしても、個人同士の関係を維持し続ける必然性は、危機の収束とともに弱まっていった。

この点は、一般交換が成員間の信頼や社会的統合を高めると論じてきた先行研究（Ekeh, P. 1974、Uehara, E. 1990）との間に、重要な差異を示している。ただし、本研究はそれらの成果を否定するものではない。むしろ、先行研究が主として平時の比較的安定した社会関係を前提としているのに対し、本研究の事例は、パンデミックという極端な危機状況における「一般交換」であるという点で前提条件が大きく異なる。災害状況では、「生き延びること」そのものがきわめて強い報酬となり、人びとは物資の確保のために相互依存せざるをえない一方で、交換の目的は生存確保に集中し、関係形成は二次的なものとして後回しにされやすい。そのため、一般交換は短期的には集団レベルの連帯を強めても、ミクロなレベルの持続的な紐帯へと転化しにくいのである。

この結果は、信頼や協力を高める要因が「一般交換」という形式それ自体にあるのか、それとも交渉を伴わない不確実な状況で互酬性が働くという条件にあるのか、という近年の議論（Molm ほか 2007、大澤 ほか 2012）に対しても、一つの含意を与えていると言える。すなわち、本研究が扱ったような災害下の「一般交換」では、不特定性互酬性と強い匿名性が結びつくことで、平時の「一般交換」とは異なるかたちで信頼と紐帯の効果が現れる可能性が示唆されるのである。

4.2 持続への転換点：「特殊物資」による属性の開示

しかし、本研究の新たな知見として、個別ニーズに特化した「特殊物資」をめぐる交換に基づく関係は、一般財をめぐる匿名的な互助とは異なり、一定の持続性を示すことが明らかになった。薬品、乳児用品、ペット用品などの特殊物資は代替が効きにくく、その不足は当事者にとって切実な危機となる。そのため支援を求める過程で、人びとは「妊娠中である」「乳児がいる」「ペットを飼っている」といった自らの境遇を説明せざるをえず、結果として、従来はチャット画面上の記号にすぎなかった隣人の社会的属性（アイデンティティ）が可視化される。この属性の開示と共有が、小区グループの匿名性を乗り越え、関係を一時的な互助から、より持続的なつながりへと変化させるスイッチとして働いていた。

妊婦である住民同士の関係を描いた L2 さんの事例は、このプロセスをよく示している。彼女は、小区グループで「葉酸が欲しい」と書き込んだ投稿を目にした。葉酸は通常妊婦が摂取するサプリメントであるため、その投稿によって「妊娠中である」という属性が暗黙のうちに明らかになったのである。L2 さんはその投稿者を、単なる「物資不足の隣人」ではなく、自分と同じ境遇にある仲間（あるいは助けるべき対象）として認識し、個別に連絡を取って支援を行った。

同じ小区に住んでる人で、グループで葉酸が欲しいって書いてたんだよね。妊婦ならだいたい分かるけど、葉酸って普通は妊婦さんしか飲まないから、「あ、妊娠してるんだな」って思って。で、私がその人の WeChat 友達を追加して、「私持ってるからあげるよ、妊娠してるの？何か月？」って聞いたの。その後、その人が家でまんじゅう作ってて、「牛乳ある？」って聞かれたから、うちの旦那に持って行ってもらったの。そのあと、その人も自分で作ったエッグタルトをくれたりして。

（質問：関係は変わったと思いますか？）

今は会ったらお互い元気よく挨拶するし、何かあったら助け合う感じ。知らない人よりは全然仲良いけど、友達ほどめっちゃ親しいってほどでもなくて、その中間くらいかなって思う。で、もう子どもも産まれたから、時々一緒に小区で遊ばせたりして、お菓子を分け合ったりもしてるよ。

(L2 さん)

この事例では、妊婦特有の必需品である葉酸という「特殊物資」を介した交換が、単なる物質的支援にとどまらず、「妊娠中の住民同士」という共通の属性を象徴的に浮かび上がらせた。それによって、互いを「交換相手」ではなく「境遇を分かち合う相手」として認識するようになり、信頼に基づく日常的な交流が継続している。同様に、T2 さんや A2 さんからも、薬品や乳児用品などの特殊物資の共有を契機に、ロックダウン後も続く関係が形成された事例が報告されている。

また、A3 さんが立ち上げたペット救助グループでも、「ペット飼育者」という属性が可視化されたことで、もともとの小区グループから分化した、より凝集性の高いコミュニティが形成された。ここでは、フードや薬、預かり先といったペット関連の特殊物資やサービスのやり取りを通じて、「ペットの命を守りたい」という共通の不安や課題が共有され、単なるモノの交換が「人格的な交流」へと質的に転換していった。

このように、特殊物資をめぐる交換は、匿名的なグループ交流から個人レベルのつながりへの移行を促し、「属性の開示」と「属性の共有」を通じて、代替可能な市場的關係から、代替が難しい固有の信頼関係への移行をもたらした。そのため、危機が去り物資の不足が解消された後も、こうした関係は「共感」や「共有されたアイデンティティ」によって維持され続けたのである。特殊物資により形成された紐帯は、単なる一時的な支援を超えて、個人間の持続的なつながりを生み出す可能性を示していると言える。

4.3 機能転換と定着

しかし、属性が開示され人格的なつながりが生まれたとしても、それだけで関係が長期化するとは限らない。J3 さんは、「あとで気づいたんだけど、私、あの（オムツを届けてあげた人）に、（WeChat から）削除されちゃってたんですね」と語っている。J3 さんの息子はすでに小学生であり、当時届けたオムツは家に余っていたものであった。そのため、J3 さん自身にはオムツを必要とする乳児を育てる母親との継続的なやりとりの必要性は低く、受け手にとっても同じであろうと考えられる。このように、危機のなかで一時的に属性が可視化され、人格的な接点が生まれたとしても、平時の生活において共通の用件や利点がなければ、関係は短期的な支援で終わりやすいと言える。

その一方で、本研究からは、ロックダウンが「触媒」となって潜在的な生活ニーズが掘り起こされ、ネットワークの「機能転換」が起こったことで関係が持続したパターンも確認された。J3 さんは、ロックダウン中に團購を通じて小区の入口での小さな小売店を運営するようになった経験について、小区にはもともと足腰の弱い高齢者など外出しにくい住民が多く、近くで手頃な価格で商品をまとめて購入できる場への需要が以前から存在していたことを指摘している。ロックダウン期の團購を通じて、こうした「便利で安く買いたい」という需要と、それに応える小売店という資源提供者とが結びつき、その回路が解除後も維持された結果、小売店としての営業が継続していると考えられる（詳細は第五章 5.1.3 を参照）。

同様に、G3 さんの語りによれば、ロックダウン期に開設された薬局の WeChat グループの例は、解除後もクーポン情報やセール案内を流す場として維持されている（本章 3.3.2 を参照）。住民にとっては、割引情報や新商品の入荷状況をいち早く知ることができ、薬局側にとっても常連客に直接リーチできる宣伝チャネルとなっている。こうして、危機対応のために立ち上がったネットワークが、平時には日常的な利便性を提供するインフラへと役割を変えながら存続している。

このようなネットワークの持続は、他地域の事例でも見られている。たとえば、中国の地方都市における調査報道では、一部の生鮮店や「店倉一体型⁵⁸」の商店は、團購グループを常設の販売チャネルとして残し、産地直送品の販売や特売情報の発信に活用していることが報告されている（澎湃新聞 2022）。また、「2021 年度中国社区團購市場データ報告⁵⁹（網経社電子商務研究センター 2022）」によれば、各地で散発的に発生した新型コロナの流行により、より多くの人びとがオンラインでの團購に慣れたとされている。パンデミック期に追加されたこれらの團購グループについては、人びとは一般的に自ら積極的に削除することは少ないとされている（観研天下 2022）。

以上の分析から、ロックダウンは社会関係を一様に拡大させたのではなく、「選別装置」として機能したと結論

⁵⁸ 店舗（商品を陳列・販売するスペース）と倉庫（在庫を保管するスペース）が同じ建物内、あるいは隣接して一体的に設計・運用されている商業施設を指す。

⁵⁹ 2021 年の社区團購ユーザー規模は 8 億 4,600 万人に達し、2022 年には 8 億 7,600 万人に増加すると予測されている（網経社電子商務研究センター 2022）。

づけられる。圧倒的多数を占めた「普通物資（匿名）」の交換関係は、生存維持という役割を終えると同時に解消された。しかし、その大きな流れの中で、「属性の共有」や「潜在的ニーズの一致」を見出したごく一部の関係は、匿名性を脱ぎ捨て、平時の生活を支える紐帯（SC）として定着していったのである。

もっとも、こうした個人関係が持続するかどうかは、当事者の性格や社交性など、個人側の要因にも大きく左右されると考えられる。本研究のインタビュー対象者は数や属性ともに限られており、ここで示したメカニズムを普遍的傾向として断定することは難しい。危機下で生成された SC が、どのような条件のもとで持続的な社会関係へと転化するのかについては、今後さらに検討すべき課題として残されている。

第八章 おわりに

1 まとめ

1.1 各章の整理

本節では、本研究全体の議論をふりかえり、序章で提示したリサーチ・クエスションへの回答を整理する。本研究の問いは、(1)「武漢ロックダウン」下において住民間の互助行為はいかなる契機・メカニズムによって発生し、どのように展開したのか、(2)その互助行為が既存の社会関係や地域のネットワークの再編・再構築にどのような影響を及ぼしたのか、という二点であった。近隣住民36名への半構造化インタビューと文献調査をもとに、社会的交換理論（SET理論）とソーシャル・キャピタル理論（SC理論）を接続した枠組みから分析を行った結果、武漢ロックダウン下のSC生成プロセスは、ミクロレベルの互助行為がデジタル空間を介して集約・共有されることでメゾレベルの中間的構造を形成し、さらにその過程の反復と蓄積を通じてマクロレベルのSCへと広がっていく相互強化の循環過程として把握できることが明らかになった。

第四章では、ロックダウンにより住民が直面した困難を明らかにした。感染に関する情報不足や医療資源の逼迫に加え、生活物資の入手困難、移動制限による孤立感や不安が重なり合うなかで、行政による支援と市場の供給だけでは住民の日常生活を維持することが難しかったことを示した。第5章では、そのような状況における互助行為を、初期・中期・後期という三つの段階に分けて描き出した。特に、当初はほとんど見られなかった社会的交換が、時間の経過とともに徐々に立ち上がり、次第に活発になっていく過程を明らかにした。具体的には、生活必需品の共同購入（團購）、薬や乳児用品などの特殊物資の融通、ペットの一時預かりや高齢者への見守り、情報共有や精神的サポートといった多様な行為が、WeChat グループを通じて組織されていたことを示した。

第六章では、これらの互助行為を社会的交換として捉え直し、交渉的交換・生産的交換・一般交換・相互的交換という交換モードの観点から、その構造的特徴を検討した。とりわけ、見返りが明示されないまま支援が先行する一般交換（遅延的互酬性）が、WeChat グループを舞台に広がっていったことを示した。さらに第七章では、こうした交換の繰り返しのなかで、特定の相手に対する関係的信頼や、集団的信頼がどのように形成されたのかを検討し、小区という単位のなかに、「中間的構造」が立ち上がっていったプロセスを明らかにした。そして、これらの「中間的構造」は、ロックダウン解除後も近隣小売店や常設のオンライン・グループとして残り、日常の生活インフラや地域の生活基盤として機能し続けていることを指摘した。

1.2 結論

このような分析をまとめると、「武漢ロックダウン」下のSC生成プロセスは、「ミクロレベル（始動）→メゾレベル（増幅）→マクロレベル（蓄積・拡大）→フィードバック（強化）」という循環構造として描くことができる。すなわち、まず、生存にかかわる危機状況のもとで、個々の住民は「とりあえず誰かに頼らざるをえない」という切迫した状況に押し出され、身近な隣人やWeChat グループのメンバーに対して助けを求めたり、逆に手元の余剰資源を提供したりするという、単発のミクロな互助行為が始まる。このとき、物理的隔離と生活資源の不足という圧力（プッシュ要因）と、WeChat を中心とするデジタル・プラットフォームがもたらす接続の容易さという機会（プル要因）が重なり合い、住民を互助行為へと向かわせる「駆動場」が形成されていた。

次に、こうしたミクロな互助行為は、WeChat グループというメゾレベルの場で可視化され、共有されることで増幅していた。また、團購の成功や物資が無事に届いた経験がグループ内で報告され、安心感や感謝、誇りといったポジティブな感情が生まれた。Lawler（2001）の情動の社会的交換理論が示すように、交換が円滑に成立したという達成経験はポジティブな情動を生み、その感情が関係や集団に帰属されるとき、関係的信頼や集団的信頼が強まる。本研究の事例でも、初期には「誰が感染しているか分からない」「他者は脅威かもしれない」と感じていた住民が、團購や物資融通の成功体験を重ねるなかで、「このグループの人たちは信用できる」「困ったときはお互いさま」という認識に変化していったことが確認できた。

重要なのは、このプロセスが一度きりの直線的な流れではないという点である。ミクロレベルの互助行為がメゾレベルの場で共有され、ポジティブな感情と信頼を生み、そのことが次の互助への参加意欲を高める、という往復運動が何度も繰り返される。その反復のなかで、「先に困っている人を優先する」「情報はグループ内で共有する」

といった暗黙のルールが形づくられ、一般交換（遅延的互酬性）が成り立つ条件が整えられていく。こうして、ミクロとメゾの間の循環が積み重なることによって、「この小区は助け合える場所だ」「武漢の人々は危機に際しても互いを見捨てない」といった、より抽象度の高い一般的信頼が生まれ、マクロレベルのSCとして意識されるようになっていくのである（図8-1参照）。

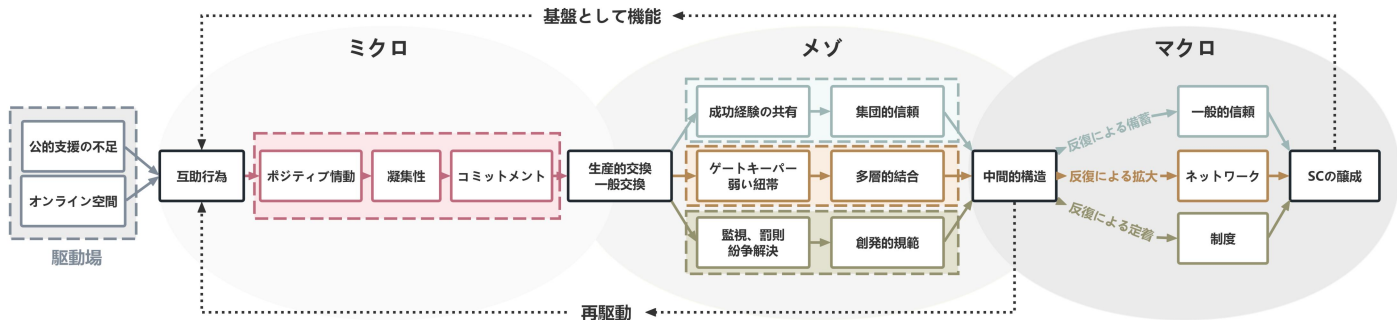


図8-1 武漢ロックダウンにおける循環モデル

以上を踏まえると、第1の問いに対して、本研究は、「武漢ロックダウン」下の互助行為が、公的支援の限界と生活資源の不足というプッシュ要因、およびWeChatを中心とするオンライン空間の存在というプル要因が重なり合う場で立ち上がったことを示した。すなわち、物理的に隔離された小区という空間と、オンラインで結びつけられた住民たちのネットワークのあいだに、互助を生み出す「駆動場」が形成されていた。第2の問いに対しては、こうした互助行為が、情動を伴う社会的交換、とりわけ見返りがすぐには保証されない一般交換（遅延的互酬性）を通じて、関係的信頼と一般的信頼を生み出し、その積み重ねが小区レベルの「中間的構造」を形成することで、一時的な「災害ユートピア」を越えて、地域社会のレジリエンスと社会関係の再編に大きな影響を与えたことを明らかにした。

2 本研究の理論的意義

本節では、本研究の理論的意義について整理する。

第一に、本研究は、SCを既存研究のように単なる「ストック」として測定するだけではなく、その生成過程そのものを社会的交換との循環として具体的に追跡しようとした点に特徴がある。SCはしばしば「副産物」として語られ、その形成メカニズムを実証的に捉えることは難しいと指摘されてきた（Sato 2013、1988=2006、佐藤 2019）。また、Portes（2000）が指摘するように、この種の議論はしばしば、SCを信頼や規範といった望ましい社会機能として定義したうえで、そのSCが再び望ましい機能を生むと説明してしまう。その結果、「社会的に望ましい働きが社会的に望ましい働きをもたらす」というトートロジーに陥りやすく、SCがいかに生成・再生産されるのかというメカニズムは十分に理論化されていないと言えるだろう。こうした問題意識をふまえ、本研究では、ロックダウン下の互助行為を初期・中期・後期という三つの段階に分けて追跡し、「一般交換」「生産的交換」といった交換モードがポジティブな情動と集团的信頼を生み、それが創発的規範や多層的結合として可視化されていくプロセスを描き出した。さらに、こうした「中間的構造」が再び互助行為を促し、マクロな一般的信頼や制度化されたルールとして定着していく循環を示すことで、SC研究における「プロセスとストックの循環」を、より具体的な社会関係の動きとして捉え直す一つの試みとなっている。

第二に、本研究は、「中間的構造」という視点を導入することで、ミクロな交換過程とマクロなSCのあいだを媒介するメゾレベルの働きを具体化した。第七章では、メゾレベルにおける集团的信頼・創発的規範・多層的結合の形成過程を分析した。これらの「中間的構造」は、住民の互助行為によって生み出された結果であると同時に、その後の互助や連帯を支える条件ともなっており、「行為の結果であり、同時に行為の媒介となる」という構造の二重性を具体的に示している。このように、本研究は「中間的構造」を通じてミクロとマクロを接続する分析枠組みを提示した点で、理論的意義を有すると考えられるだろう。

第三に、本研究は、社会的交換理論、とりわけLawlerの交換モード論と情動の社会的交換理論を、パンデミック

という状況に引きつけて検討した点に特色がある。第六章では、ロックダウン期の互助行為をいくつかの交換モードとして整理し、それぞれの違いが参加者の感情やコミットメントにどのような影響を与えるのかを検討した。とりわけ、交換の成功経験を共有するなかで生じたポジティブな情動が、「この人は信頼できる」という個別的な確信から、「このグループは信頼できる」という集団的信頼へと広がっていくプロセスに焦点を当てた点に、本研究の狙いがある。こうした分析を通じて、従来は抽象的に語られがちであった「情動—信頼—連帯」のつながりを、パンデミック下の具体的な語りに即して考える手がかりを示した。

第四に、本研究は、危機下におけるデジタル・プラットフォームの役割を、住民によるブリコラージュの実践を支えるオンラインの「キープレイス」として捉えた点に特徴がある。「武漢ロックダウン」期の小区 WeChat グループは、物資や情報、人のつながりといった手元の資源をやりくりしながら支援の回路を編み直す場であると同時に、王（2021）が熊本地震の事例で示したキーパーソン／キープレイスが、物理的空間からデジタル空間へと移された形で立ち現れる場でもあった。そこで展開したオンライン互助は、行政や市場の支援を全面的に代替するのではなく、その遅れや抜け落ちを部分的に埋めつつ両者のあいだをつなぐ細かな橋渡しの機能を担っていた。このような考察は、災害後の支援実践を論じる既存研究に対して、デジタル空間を組み込んで地域の「場」を捉え直すための、もう一つの視点を提供するものとなっている。

第五に、本研究は、情報共有や精神的サポート、災害弱者への配慮といった非物質的な交換を、物質的互助の周辺の付随現象ではなく、SC 生成を支える重要な要素として捉え直そうとした点に、一定の理論的意義があると考えられる。ロックダウン期の住民の語りからは、物資のやり取りだけでなく、「高齢者や持病のある住民が気にかけてもらえたこと」が、互助への参加意欲やコミュニティへの帰属感を強める重要な契機であったことがうかがえる。また、こうした非物質的な交換の繰り返しのなかで、「先に困っている人を優先する」といった暗黙のルールが形づくられ、互助を支える規範として共有されていった。本研究は、このように互助実践の内部から立ち上がるルールや慣行を通じて、SC の規範・制度要素が短期間のうちに形成されうること示し、なぜロックダウンのような短い期間であっても、一定の SC が生成され得たのかを説明する手がかりを与えている。

3 新たな知見

以上のような理論的貢献に加えて、本研究は、既存の社会的交換研究や SC 研究の枠組みを手がかりとしつつ、パンデミックという極端な危機状況における互助行為を具体的に調査した。その結果、従来の議論では十分に検討されてこなかった複数の点について、新たな知見を得ることができた。ここでは、特に交換モードとしての交渉的交換の再検討、災害下の一般交換の特徴、資源の性質と属性の可視化が関係の持続に与える影響、そして感情資源をめぐる「共感縁」という結びつきの四点を整理する。

第一に、交渉的交換についてである。実験研究では、交渉的交換や限定交換は信頼や連帯感を高めにくい交換形態として位置づけられてきた。しかし本研究で描かれたロックダウン期の売買行為は、その内部に大きな差異を含んでいた。例えば、物資不足につけ込んで高値で販売し、住民の不信と怒りを招いた事例があった。その一方で、感染リスクを引き受けつつ、仕入れ価格に近い水準で販売したり、配達の手間を無償で負担したりする事例が存在した。後者では、交換の場は単なる利潤追求の場ではなく、「同じ小区の住民をどうにか支えたい」という思いが前面に出ていた。その結果、支払いとしてのお金は、利益を得るための手段というより、互いの負担と努力を分かち合うための手段として受け止められ、強い感謝と信頼を生み出した。このことは、同じ「交渉的交換」であっても、参加者の動機やリスクの分担の仕方によって、感情的帰結が大きく異なりうることを示している。交換構造だけで効果を説明する従来の議論に対し、本研究は、危機状況における交渉的交換のなかにも利他的なバリエーションが存在し、それが生産的交換に近い連帯効果を持ちうることを具体的事例として示した。

第二に、一般交換をめぐる新たな知見である。従来の SET 研究では、一般交換は成員間の相互信頼や社会的統合を高める交換形式として高く評価されてきた。他方で、信頼を高める要因が一般交換という構造そのものにあるのか、それとも交渉を伴わない不確実な状況で互酬性が働くことにあるのか、という論点が残されていた。本研究で扱ったロックダウン期の互助は、この議論に対して重要な示唆を与える。水や米、野菜といった一般財をめぐる贈与や融通は、封鎖下では住民の生存を支える決定的な役割を果たし、「この小区では助け合える」という集団レベルの信頼を強めた。しかし、市場機能が回復し、同じ物資をスーパーなどで容易に入手できるようになると、こうした関係の多くは急速に消滅した。一般財は代替可能性が高く、互助を行った相手も匿名のままであることが多い

ため、危機が去った後まで個別の紐帯を維持する必要性が乏しいからである。ここから、災害下の一般交換は、短期的にはコミュニティ全体の結束を高めるが、強い匿名性と資源の代替可能性が結びつくと、持続的な人間関係へと転化しにくいという条件が明らかになった。これは、一般交換の統合効果には時間的・状況的な限界があることを示す知見である。

第三に、資源の性質と属性の可視化が関係の持続性に与える影響である。本研究では、薬品、乳児用品、ペット用品といった「特殊物資」をめぐる互助が、一般財とは異なる効果を持つことが示された。これらの資源は代替が効きにくく、不足は当事者にとって切実な危機となる。そのため支援を求める際には、「妊娠中である」「乳児がいる」「ペットを飼っている」といった個人的な状況を説明せざるをえない。このプロセスを通じて、チャット上では名も知らぬ存在であった隣人の属性が可視化され、「同じ境遇にある人」「自分が助けたい相手」として認識されるようになる。こうした属性の開示にもとづく出会いからは、妊婦同士の連帯やペット救助グループなど、ロックダウン解除後も継続するネットワークが生まれていた。特殊物資をめぐる交換は、資源の性質ゆえに当事者の物語を引き出し、それが匿名的な一般交換を、より持続的で関係性の濃い紐帯へと切り替える契機となっていたことが明らかになった。

第四に、感情資源の交換を通じて形成された「共感縁」という結びつきである。ロックダウン期には、感染への恐怖や将来への不安を共有し合うことで、「自分だけが不安なのではない」「同じ状況で頑張っている人がある」という感覚が広がった。情報提供や励ましの言葉、ちょっとした冗談のやり取りなど、直接の物質的利益を伴わないやり取りが積み重なるなかで、「会ったことはないが、気持ちを分かち合える相手」としての関係が生まれていた。このような共感にもとづく紐帯は、家族や友人といった既存の強い紐帯とも、単なる取引関係とも異なるものであり、災害という共通経験とオンライン空間を媒介に新たに形成されたものである。これは、感情資源の交換が、報酬とコストの計算だけでは捉えにくい形で、互助への参加を後押しし、コミュニティへの帰属感を高めていたことを示す知見である。

以上のように、本研究は、交渉的交換の内的多様性、災害下の一般交換の時間的限界、資源の性質と属性の可視化を通じた関係の選別と持続、「共感縁」という新しい結びつきに着目することで、既存の社会的交換論やSC論では十分に描かれてこなかった側面を明らかにした。これらの知見は、パンデミックという特殊な状況に限定される部分もあるが、今後の災害時の互助やオンラインを介した市民の連帯を理解するうえで、有用な視点を提供するものである。

4 残された課題

本研究には、いくつかの限界と今後に残された課題がある。以下では、特に①調査デザインとデータの限界、②互助の負の側面に対する検討不足、③デジタル・デバイドと持続性の問題、④地理的・文化的特殊性、⑤データと理論枠組みの拡張可能性、という五点から整理しておきたい。

第一に、調査デザインとデータの限界がある。本研究は、武漢市内の一部の小区に居住する36名への質的インタビューに依拠しており、サンプル数も地域的範囲も限定的である。そのため、得られた知見は武漢全体、ましてや中国の他都市に一般化できるものではなく、仮説生成的な示唆にとどまる。また、調査はロックダウン直後に行った聞き取りと、事象から時間が経過した第二回調査とが混在している。後者については、記憶の変容や美化といった回想バイアスの影響を完全に排除することはできない。さらに、本研究はマクロレベルの一般的信頼やSCを量的に測定したわけではなく、あくまでインタビューにおける語りからその一端を推測したにすぎない。これらの点をふまえると、今後は量的調査や他地域との比較調査を組み合わせることで、仮説の検証と精緻化を進める必要があると考えられる。

第二に、互助の負の側面に対する検討が十分とはいえない。本研究は、ロックダウン下で住民同士の支え合いがどのように成立したかを明らかにすることに重点を置いたため、排除や葛藤、負担の偏りといった側面については、断片的な記述にとどまった。特に、本研究の事例で中心的役割を担ったのは、小区のWeChatグループという可視性の高いオンライン空間であり、そこでは病状や経済的困難といったきわめて個人的な情報が近隣住民に共有される場面もあった。このようなプライバシーの露出は、当事者に心理的負担やスティグマをもたらす可能性がある。実際、筆者が「武漢ロックダウン」下の「災害弱者」を扱った先行研究では、基礎疾患や障害をもつ人びとが、病気の露見による評価の低下や同情のまなざしへの抵抗感から、ボランティアに薬の代購を頼まず、健康を損なうリ

スクを負ってまで沈黙を選んでいたことが示されている (Ziyun, C. 2024)。こうした知見をふまえると、小区のオンライン互助は支援へのアクセスを広げる一方で、不健康にまつわるスティグマやプライバシー侵害のリスクを高めうるという二面性をもつと言えるだろう。また、団長やボランティアに負担が集中し、支援を受ける側と支える側のあいだに見えない上下関係が生じていた可能性についても、権力関係の視点から改めて検討する余地が大きい。今後は、こうした SC の「ダークサイド」を、災害弱者の経験と結びつけながら、より丁寧に分析していく必要がある。

第三に、デジタル・デバイドと互助の持続性の問題がある。本研究で描かれた多くの互助は、スマートフォンと WeChat というプラットフォームを前提としていた。そのため、スマートフォンを使い慣れていない高齢者や障害のある人、通信環境が不安定な世帯など、オンライン互助からこぼれ落ちた人びとの経験は十分に掬い取れていない。さらに、ロックダウン期の多くの小区では、若年層や IT リテラシーの高い住民が、注文や決済、情報整理を一手に引き受ける「デジタル・ゲートキーパー」として機能していたが、その多くはあくまで偶発的な代理人にすぎなかったと想定できる。今後は、こうした役割に過度な負担が集中しないようにするためにも、デジタル・ゲートキーパーの役割をどのように支え、より持続的で制度化された仕組みへとつなげていけるのかを検討する必要がある。オンライン互助にアクセスできない人びとをどのように包摂するかも含め、デジタル・デバイドの観点からの分析が求められる。

第四に、本研究で扱った事例の地理的・文化的特殊性にも留意する必要がある。武漢の多くの小区は物理的に囲われた居住空間であり、厳格な封鎖措置や小区単位の実管理体制、社区や居委会の組織構造、さらには中国の都市に固有の住宅市場や政府と住民間の関係のあり方が、互助の立ち上がり方や広がり方に大きく影響していたと考えられる。本研究で示した循環モデルは、こうした都市構造や行政制度、物流インフラを前提として成り立っている側面が強く、他国・他地域にそのまま一般化することはできないだろう。今後は、封鎖の程度や住宅形態、行政の関与の度合いが異なる都市との比較研究を通じて、本研究で描いた循環過程のうち、他地域にも見られる一般的なメカニズムと、武漢の固有条件に強く依存した特徴とを丁寧に切り分けていくことが求められる。また、一般交換を支える遅延的互酬性については、三谷 (2015) が「被災地のリレー」現象を通じて示したように、「第三者への恩返し」をめぐる文化的規範との関連が指摘されており、東アジアに特徴的な恩返しの観念や宗教的・社会的価値観との接点も想定される。もっと踏み込んで論じることができれば有意義であったと思われるが、本論では十分に扱うことができず、今後の検討課題として残されている。

第五に、本研究のデータと理論枠組みには、今後の拡張に向けていくつかの課題が残されている。本研究の第 2 回調査では、居住地や年齢、性別に一定のばらつきが出るよう配慮してサンプリングを行ったものの、対象者数が限られているため、得られた知見は現時点では探索的な段階にとどまる。

たとえば、地域差についても、封鎖の厳しさや行政対応の違いが互助への参加を後押しする力に影響していたことを示すにとどまり、その背後にある社会経済的格差やガバナンスの違いまで十分に検討できていたとは言いがたい。また、誰が団長や物資のやり取りの役割を引き受けやすいのかという点については、先行研究が指摘するように、上海ロックダウンにおいて、日常的に家族の生活物資の調達を担ってきた女性が互助の組織化に前面に出やすいという傾向が報告されている (Cao ほか 2024)。本研究でも、団長やキーパーソンを女性、とりわけ家庭内で日常的な物資配給を担ってきた層が務める傾向がうかがえたが、個人の性格や職業経験といった要因を十分に統制できておらず、性別による傾向を一般化して論じることには慎重さが求められる。

今後は、誰がどのような条件のもとで互助の担い手になりやすいのかについて、性別・職業・所得・住宅所有形態といった社会経済的属性と、社区や居委会、小区管理会社、党組織など国家・市場・住民組織のあいだの力関係をあわせて検討していく必要がある。その際、インタビューに加えて、グループチャットのログ (やり取りの履歴) や團購の取引記録、ネットワーク分析などを組み合わせることで、本研究で示した循環過程をより多面的に検証し、枠組み自体を段階的に広げていくことが今後の課題となる。以上の点を踏まえつつ、最後に本研究の実践的含意と今後の展望について述べる。

5 今後の展望

本研究は、武漢ロックダウンというきわめて限定された状況から出発し、住民の互助行為がどのように立ち上がり、社会的交換と SC の相互強化として展開したのかを明らかにしてきた。その過程で見えてきたのは、危機に直

面した市民が、必ずしも受け身の存在ではなく、自らの判断と工夫によって生活を支え合う力を持っているという事実である。同時に、その力は、公的支援や制度的枠組みのあり方、デジタル技術へのアクセス、居住構造や行政システムといった条件に強く影響されることも確認された。本論文の議論は、互助を理想化するのではなく、その可能性と限界の両方を見据えながら、今後の社会づくりを考えるための一つの視点を提示したものと言える。

今後の実践的な課題としては、まず、ロックダウン期に自発的に生まれた中間的構造を、平時の地域づくりにどのようにつなげていくかが挙げられる。WeChat グループや團購で培われた信頼と経験を、一時的なものとして消費してしまうのではなく、住民同士が日常的に相談し合い、支え合える仕組みへと発展させることができれば、次の危機への備え、すなわちコミュニティ・レジリエンスの向上にもつながる。その際、行政は互助を上から管理するのではなく、市民が持つネットワークとルールづくりを尊重しながら、それを補完する役割を果たすことが求められる。

また、デジタル技術の活用とデジタル・デバイドの解消を、同時に考える必要がある。オンライン空間は、封鎖下のような状況で互助を支える重要な基盤となりうる一方で、アクセスできない人びとを排除する危険もはらんでいる。今後の政策や地域実践では、高齢者や障害のある人を含め、誰もが参加しやすい形で情報共有と支援要請が行える環境を整えることが重要である。本研究で描かれた「デジタル・ゲートキーパー」の役割を、個人の善意だけに頼るのではなく、地域全体の仕組みとしてどう支えていくのかが問われるだろう。

最後に、本研究は一つの都市、一つの災害経験をめぐる試みであり、その知見には多くの限界がある。しかし、パンデミックや大規模災害が今後も起こりうることを考えると、人びとがどのように支え合い、どのような条件のもとで信頼と SC を築き直していくのかを解明する作業は、引き続き重要である。本論文で描いたプロセスと課題が、今後の比較研究や現場での取り組みの出発点となり、異なる地域・社会における多様な互助のあり方を照らし出す一助となれば幸いである。

参考文献

日本語：

- アリストテレス著、高田 三郎譯（1938）『ニコマコス倫理學』河出書房
- アルドリッチ著、石田 祐、藤澤 由和訳（2015）『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か：地域再建とレジリエンスの構築』
- 渥美 公秀（2001）『ボランティアの知 実践としてのボランティア研究』大阪大学出版会
- 渥美 公秀（2012）被災地のリレーから広域ユイヘ。人間関係研究, (11), 1-12.
- 渥美 公秀（2014）『災害ボランティア：新しい社会へのグループ・ダイナミックス』弘文堂
- 渥美 公秀（2017）「災害ボランティア論の再構築に向けて」『災害と共生』1(1), 3-7.
- 飯島 勝矢（2021）5. フレイル健診 COVID-19 流行の影響と対策:「コロナフレイル」への警鐘. 日本老年医学会雑誌, 58(2), 228-234.
- 糸林 誉史.(2014). 互酬性と社会的交換理論. 文化学園大学紀要. 人文・社会科学研究, 22, 35-48.
- 伊藤 美登里.(2008) U. ベックの個人化論 再帰的近代における個人と社会. 社会学評論, 59(2), 316-330.
- 伊藤 淑子（2003）第 5 章 被災地における「災害弱者」の生活とケア：虻田町保健師らによる高齢者への援助を中心に（＜特集・総合研究＞自然災害に伴う地域変化と復興に関する研究：北海道・有珠山噴火災害地域を対象にして（I））.
- 稲場 圭信（2011）『利他主義と宗教』弘文堂。
- 稲葉 美里・高橋 伸幸（2012）「社会的交換の形態が社会的連帯に及ぼす影響の比較」『心理学研究』83(1), 27-34.
- 稲葉 陽二（2008）『ソーシャル・キャピタルの潜在力』東京：日本評論社
- 稲葉 陽二.（2011）『ソーシャル・キャピタル入門——孤立から絆へ』中央公論新社
- 稲葉 陽二.（2024）『ソーシャル・キャピタル新論 日本社会の「理不尽」を分析する』。東京大学出版会.
- 王 宝剛, & 梶浦 恒男.(1992). 中国における集合住宅の管理形態. 大阪市立大学生生活科学部紀要, 40.
- 王 文潔, & 稲場 圭信.(2019). 災害対応における創造的即興：熊本地震被災地の実践を事例に. 災害と共生, 3(1), 57-69.
- 王 文潔, & 稲場 圭信.(2020). 地域社会における震災復興イベントの創出と協働ネットワークに関する研究-熊本地震被災地宇城市豊野町での取り組みを事例に. 自然災害科学, 39(S07), 87-106.
- 王 文潔.(2021). ブリコラージュ概念からみる被災地の地域食堂の実践. International Studies of Management and Organization, 33(1), 34-57.
- 大久保 敏彦（2021）「COVID-19 と都市封鎖」札幌市医師会『札幌医通信』pp.24-25.
- 大澤 真幸・吉見 俊哉・鷲田 清一（2012）『現代社会学事典』東京：弘文堂 pp.57
- 大津山 堅介・齋藤 悠介・小松崎 暢彦・石井 沙知香・松本 慎一郎・竹中 大貴・廣井 悠（2020）「COVID-19 に対する都市封鎖の類型化と課題主要感染拡大国における暫定的事例研究」『都市計画論文集』55(3), 1350-1357.
- 小川 真世・オガワ マサトシ（2021）「アナキズムと主体の回復:「災害ユートピア」を恒常化するために」『人間学論究』（4）, 16-45.
- 翁 百合, & 宮川 絢子.(2020). スウェーデンはなぜロックダウンしなかったのか 憲法の規定や国民性も背景. NIRA オピニオンペーパー, 52, 1-14.
- 加藤 寛.(2020). COVID - 19 パンデミックがもたらす心理的影響. 日本トラウマティック・ストレス学会.
- 川喜田 二郎,（1970）『発想法<続>- KJ 法の展開と応用 - 』, 中公新書
- 清田 佳美（2023）「コロナ禍における高齢者介護施設入居者とのオンラインコミュニケーション」『東洋大学紀要 自然科学篇』67, 65-80.
- ギル・トム・浪岡 新太郎・ワトソン・マイケル（2020）「福島第一原発事故避難者の研究」『明治学院大学国際学部附属研究所研究年報』第 23 巻 79-95
- 熊坂 聡, & 足立 智昭.(2015). 東日本大震災における「災害弱者」と支援者の心理的・社会的状況について：支援者への聞き取り調査を通して. 宮城学院女子大学発達科学研究, (15), 19-31.
- 桑名 恵, & クワナ メグミ（2019）人道支援における「現地化」の潮流と課題：世界の動向と日本の NGO をめぐる状況からの考察. Journal of international studies, (4), 111-128.
- 桑名 恵, & クワナ メグミ（2020）新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によって「人道支援の現地化」は進むのか?—内部者と外部者のパートナーシップが拓く公共圏への示唆—. Journal of international studies, (5), 75-93.
- 斉藤 雅茂, 近藤 克則, 尾島 俊之, 近藤 尚己, & 平井 寛.(2013). 高齢者の生活に満足した社会的孤立と健康寿命喪失との関連——AGES プロジェクト 4 年間コホート研究より——. 老年社会科学, 35(3), 331-341.
- 佐藤 嘉倫.(2019). ソーシャル・キャピタル生成メカニズムの理論的分析 ミクロ・メゾ・マクロレベルの相互連関に着目して. 社会学年報, 48, 85-93.
- 佐藤 翔輔, 邑本 俊亮, 新国 佳祐, & 今村 文彦.(2019). 震災体験の「語り」が生理・心理・記憶に及ぼす影響：語り部本人・弟子・映像・音声・テキストの違いに着目した実験的研究. 地域安全学会論文集, 35, 115-124.
- 佐藤 千鶴子.(2021). コロナ禍の南アフリカにおけるロックダウンの生活への影響——アフリカ諸国出身者に注目して——. ア

- フリカレポート, 59, 42-48.
- 重村 淳, 高橋 晶, 大江 美佐里, & 黒澤 美枝. (2020) COVID - 19 (新型コロナウイルス感染症) が及ぼす心理社会的影響の理解に向けて. *トラウマティック・ストレス*, 18(1), 1-9.
- 関 嘉寛, & セキ, ヨシヒロ. (2006) 災害復興期における公共性と市民活動: 「中越復興市民会議」の分析に向けて. *大阪大学大学院人間科学研究科紀要*, 32, 211-229.
- 立石 昌広. (2002) 中国における都市住民サービスの構造. *中国経営管理学会『中国経営管理研究』*, (2).
- 武井 玲子・深谷 笑子・佐藤 典子・難波 めぐみ・遠藤 恵 (2013) 「東日本大震災を踏まえたリスク管理の考え方の提案」 *日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集* 56(0), 41,
- 武重 直人 (2006) 毛沢東時代の「単位」の形成過程--雇用形態と社会流動抑制機能に注目して. *アジア太平洋研究科論集= Journal of the Graduate School of Asia-Pacific Studies/早稲田大学アジア太平洋研究センター, 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科出版・編集委員会 編*, (11), 267-288.
- 中井 雄貴, 富岡 一俊, 谷口 善昭, 竹中 俊宏, & 牧迫 飛雄馬. (2021) COVID-19 対策に伴う外出自粛時期の地域在住高齢者における身体活動量変化—運動教室に参加していた高齢者を対象とした調査—. *理学療法科学*, 36(1), 35-40.
- 仲川 秀樹・塚越 孝著. (2011). *メディアとジャーナリズムの理論 基礎理論から実践的なジャーナリズム論へ*. 同友館出版
- 難波 義郎, & 古川 雄一. (2006). 「災害弱者」の現状把握と災害時の避難に関する研究—東広島市中心地域を対象としたケーススタディー—. *近畿大学工学部研究報告*, (40), 41-46.
- 野田 隆 (1990 「災害時における組織行動と組織変動」 『組織科学』 23(3), 34-42.
- 芳賀 康浩 (2014) 「戦略的ソーシャル・マーケティングの基礎概念としての交換概念の再検討」 『流通研究』 16(3), 3-24.
- 広瀬 環, 沢谷 洋平, & 浦野 友彦 (2023) 1. COVID-19 とフレイルの実際—栃木県北部でのコホートデータを例に—. *日本老年医学会雑誌*, 60(2), 113-118.
- 松本 麻希・太田 秀樹 (2021) 「新型コロナ禍 (COVID - 19) とメンタルヘルスに関する一考察-感染拡大に伴うストレスとパーソナリティ特性からの検」 『西九州大学子ども学部紀要』 (12), 12-23.
- 松山 雅洋, 川見 文紀, & 立木 茂雄 (2019) 災害時要配慮者の避難行動支援体制づくり に及ぼすソーシャルキャピタルの効果-神戸市の防災福祉コミュニティを事例として. *地域安全学会論文集*, 35, 125-133.
- 三谷 はるよ (2015) 「一般交換としての震災ボランティア「被災地のリレー」 現象に関する実証分析—」 『理論と方法』 30(1), 69-83.
- 吉田 竜司 (1996) < 論文> 群集行動研究の視角: 創発規範論の理論展開とその経験的研究についての意味. *京都社会学年報: KJS*, 4, 21-40.
- 吉田 孟史. (1999) 研究動向 組織理論における即興(improvisation)の意義. *経済科学 = The Economic science / 名古屋大学大学院経済学研究科 編*. 47(1)p.141~149. <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I4782957>
- 梁 卓慧. (2018). 中国都市部における 「社区養老」 方式の現状と展望.
- レベッカ・ソルニット (2010) 『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』 高月 園子訳、亜紀書房。
- ロバート・B・チャルディーニ (1991) 『なぜ、人は動かされるのか (影響力の武器)』 社会行動研究会訳、東京：誠信書房
- Ziyun, C. (2024) 「ロックダウンが災害弱者へ及ぼす影響に関する研究: 武漢市を事例に」 『共生学ジャーナル』 8, 117-143.

翻訳著：

- Aldrich, D. P. 2012, *Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery*, Chicago: University of Chicago Press. (=2015, 石田祐・藤澤由和訳『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か：地域再建とレジリエンスの構築』ミネルヴァ書房.)
- Allport, Gordon W., & Postman, Leo Joseph. 1952, *The Psychology of Rumor*. (=2008 南博訳『デマの心理学』東京：岩波書店)
- Beck, Ulrich. 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*. (=1998 東廉・伊藤美登里訳『危険社会：新しい近代への道』東京：法政大学出版局)
- Blau, P. M. 1964, *Exchange and Power in Social Life*. (=1974 間場寿一・居安正・塩原勉訳『交換と権力：社会過程の弁証法社会学』新曜社)
- Coleman, J. S. 1990, *Foundations of Social Theory*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press. (=2004 久慈利武監訳『社会理論の基礎』東京：青木書店)
- Ekeh, Peter P. 1974, *Social Exchange Theory: The Two Traditions*. Harvard University Press. (=1980 小川浩一訳『社会的交換理論』東京：新泉社)
- Frazer, James George, Sir. 1988 (第2版), *Folklore in the Old Testament*. (=1976 フレーザー著、江河徹ほか訳『旧約聖書のフォークロア』相模原：太陽社)
- Giddens, A. 1984, *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*. (=2015 門田健一訳『社会の構成』勁草書房)
- Habermas, Jürgen. 1962, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. (=1973 細谷貞雄訳『公共性の構造転換』東京：未来社)
- Homans, George C. 1961, *Social Behavior: Its Elementary Form*. London: Routledge & Kegan Paul. (=1978 橋本茂訳『社会行動—その

基本形態』誠信書房)

Kelley, Harold H., & Thibaut, John W. (1995) 黒川正流譯『対人関係論』東京：誠信書房

Lin, Nan. 2002, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*. (=2008 筒井淳也ほか訳『ソーシャル・キャピタル：社会構造と行為の理論』京都：ミネルヴァ書房)

Lévi-Strauss, Claude. 1949, *Les Structures élémentaires de la parenté*. New York: Mouton de Gruyter. (=1977-1978 馬淵東一・田島節夫監訳『親族の基本構造(上・下)』番町書房)

Lévi-Strauss, Claude. 1962, *La pensée sauvage*. Paris: Plon. (=1977 大橋保夫訳『野生の思考』東京：みすず書房)

Malinowski, B. 2013, *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea [1922/1994]*. Routledge.

Putnam, R. D. 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. (=2006 柴内康文訳『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房)

Sahlins, Marshall David. 1974, *Stone Age Economics*. New York: Aldine. (=1984 山内昶訳『石器時代の経済学』法政大学出版局)

中国語：

費孝通 2021『郷土中国』北京人民教育出版社。

曹志冬・曾大軍・張清鵬・王月嬌 (2020) 「新冠肺炎疫情的複雜性特征与分析研判」中国科学基金.第3 4 卷.第6 期

方英,余燦萍. (2020) .公共危机治理中政府与非正式志愿組織的合作研究--以武漢新冠肺炎疫情为例[J].中国志愿服务研究,1(02):80-105+210.

李春江 楊振宇 柴彦威「新冠肺炎疫情背景下居民時間利用变化及其差异——以北京市双井街道為例」1006—3862(2021)03—0043—07

李麗娜,張郢,宴麗娟,郭鑫,張姍姍 & 苑杰.(2011).社会支持对赴川救灾医護人員替代性創傷的影响. 中国全科医学(28),3282-3285. doi:

刘伝雷 (2020) 「重大疫情下“陌生人社会”的焦慮与秩序重建 ——以我国抗擊新型冠状病毒肺炎疫情为例」『信陽師範学院学报(哲学社会科学版)』第40 卷 第3 期

柳学華,馬莉,孟凡強,等. (2003) SARS 病房内护士心理应激狀況調查分析[J].中国心理衛生雜誌,17(8): 526-527.[7]丁樹榮

馬簫.(2021).重大伝染病疫情下公眾焦慮的成因及緩解对策研究—基于“非典”疫情与新冠肺炎疫情期間信息伝播比較視角. 重慶科技学院学报(社会科学版)(05),63-67+81. doi:10.19406/j.cnki.cqkxyxbskb.2021.05.012.

繆朴.(2004).城市生活的癌症—封闭式小区的问题及对策. 时代建筑(05),46-49.<https://doi.org/10.13717/j.cnki.ta.2004.05.011> ??.

王婷婷.(2020).癌症病人的疫区求生(碩士學位論文,南京大学).<http://h-s.kns.cnki.net/fafu.vpn358.com/KCMS/detail/detail.aspx?dbname=CMFD202101&filename=1021500583.nh>

王法碩,and 張桓朋."重大公共危机事件背景下爆发式政策扩散研究—基于健康码省际扩散的事件史分析." 电子政务.01(2021):21-31. doi:10.16582/j.cnki.dzzw.2021.01.003.

文軍 (2020) 「新型冠状病毒肺炎疫情的爆发及共同体防控—基于風險社会学視角的考察」DOI:10.14086/j.cnki.wujss.2020.03.001

趙楠, 王芸霖, 李思嘉, 刘晓倩, 吳佩環, & 朱廷劭. (2020). 武漢 “封城” 对民衆心理行為的影响与对策建議. 中国科学院院刊, 35(3), 264-272.

朱志偉 (2021) 「重大公共衛生事件中的空間隔離与社会心態研究」『延安大学学报(社会科学版)』 Apr. 2021 Vol. 43 No. 2

郑士源,徐輝,王浣尘."网格及网格化管理综述." 系统工程 .03(2005):1-7. doi:CNKI:SUN:GCXT.0.2005-03-001.

竺乾威."公共服务的流程再造:从“无缝隙政府”到“网格化管理”." 公共行政评论 5.02(2012):1-21+178. doi:CNKI:SUN:GGXZ.0.2012-02-004.

朱仁显,鄧文英."从网格管理到合作共治--转型期我国社区治理模式路径演进分析." 厦门大学学报(哲学社会科学版).01(2014):102-109. doi:CNKI:SUN:XMDS.0.2014-01-012.

英語：

Aldrich, D. P. (2012). *Building resilience: Social capital in post-disaster recovery*. University of Chicago Press.

Asch, S. E. (1955). “Opinions and Social Pressure”, *Scientific American*, 193(5), pp. 31-35.

Asch, S. E. (1956). A study of normative and informational social influences upon individual judgment. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51(3), 629.

Beck, Ulrich (1986). *Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne*.

Blau, P. M. (1964). *Exchange and Power in Social Life*.

Bourdieu, P. (1986). The Forms of Capital, in Richardson, J.G. *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Westport, Connecticut; Greenwood Press. (Original work published 1983) pp. 241-58.

Bourdieu, P. (2018). *Distinction a social critique of the judgement of taste*. In *Inequality* (pp. 125). Routledge. (Original work published 1979)

Cao, H., & Zhong, Y. (2024). Digitally mediated (dis) empowerment paradox in women-led group-buying during the Shanghai COVID

- lockdown. *Journal of Computer-Mediated Communication*, 29(3), zmae005.
- Claridge, T. (2020). Social capital at different levels and dimensions: a typology of social capital. *Social Capital Research*, 13, 88-107.
- Coleman, J. S. (1988). Social Capital in the Creation of Human Capital. *American Journal of Sociology*, 94, Supplement, pp. S95-S120.
- Coleman, J. S. (1990). *Foundations of Social Theory*. Cambridge, Massachusetts; Harvard University Press.
- Coulon, A. (1989). *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*.
- Ekeh, Peter P. (1974). *Social exchange theory : the two traditions*. London : Heinemann Educational.
- Emerson, Richard M. (1976). Social Exchange Theory. *Annual Review of Sociology*, 2, 335-362.
- Falk, I., & Kilpatrick, S. (2000). What is social capital? A study of interaction in a rural community. *Sociologia ruralis*, 40(1), 87-110.
- Figley, C. R. (2013). *Compassion fatigue: Coping with secondary traumatic stress disorder in those who treat the traumatized*. Routledge.
- Foa, Uriel G., & Foa, Edna B. (1974). *Societal structures of the mind*. Springfield, Ill. : C.C. Thomas.
- Gillmore, M. (1987). Implications of Generalized Versus Restricted Exchange. in *Social Exchange Theory*. edited by K. S. Cook. Newbury Park: Sage.
- Gouldner, A. W. (1960). The norm of reciprocity: A preliminary statement. *American sociological review*, 161-178.
- Granovetter, M. S. (1973). The strength of weak ties. *American journal of sociology*, 78(6), 1360-1380.
- Grootaert, C., & Van Bastelaer, T. (Eds.). (2002). *The role of social capital in development: An empirical assessment*. Cambridge university press.
- Habermas, Jürgen. (1962). *Strukturwandel der Öffentlichkeit : Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*.
- Hatchett, R. J., Mecher, C. E., & Lipsitch, M. (2007). Public health interventions and epidemic intensity during the 1918 influenza pandemic. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 104(18), 7582-7587.
- Hawkins, R. L., & Maurer, K. (2010). Bonding, Bridging and Linking : How Social Capital Operated in New Orleans following Hurricane Katrina. *The British Journal of Social Work*, 40(6).
- Horak, M., & Vanhooren, S. (2024). Somebody to Lean On: Community Ties, Social Exchange, and Practical Help during the COVID-19 Pandemic. *City & Community*, 23(1), 3-25. <https://doi.org/10.1177/15356841231159370>
- Ide, K., Asami, T., Suda, A., Yoshimi, A., Fujita, J., Nomoto, M., ... & Hishimoto, A. (2021). The psychological effects of COVID-19 on hospital workers at the beginning of the outbreak with a large disease cluster on the Diamond Princess cruise ship. *PLoS One*, 16(1), e0245294.
- Kupferschmidt, K. (2020). U. K. variant puts spotlight on immunocompromised patients' role in the COVID-19 pandemic. *Science (News)*.
- Lawler, E. J. (2001). An affect theory of social exchange. *American journal of sociology*, 107(2), 321-352.
- Lawler, E. J., Thye, S. R., & Yoon, J. (2008). Social exchange and micro social order. *American sociological review*, 73(4), SAGE Publications. <https://research.ebsco.com/c/mnko3h/viewer/pdf/i6fvmsnqf>
- Leibenstein, H. (1950). Bandwagon, snob, and Veblen effects in the theory of consumers' demand. *The quarterly journal of economics*, 64(2), 183-207.
- Li, Z., Ge, J., Yang, M., Feng, J., Qiao, M., Jiang, R., ... & Yang, C. (2020). Vicarious traumatization in the general public, members, and non-members of medical teams aiding in COVID-19 control. *Brain, behavior, and immunity*, 88, 916-919.
- Lin, N. (2002). *Social capital: A theory of social structure and action* (Vol. 19). Cambridge university press.
- Liu, L., Wu, F., Tong, H., Hao, C., & Xie, T. (2021). The digital divide and active aging in China. *International journal of environmental research and public health*, 18(23), 12675.
- Malinowski, Bronislaw. (2002) [1922]. *Argonauts of the Western Pacific: an Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. London: Routledge.
- Maunder, R., Hunter, J., Vincent, L., et al. (2003). The immediate psychological and occupational impact of the 2003 SARS outbreak in a teaching hospital. *Canadian Medical Association Journal*, 168(10), 1245-51.
- Mauss, Marcel (1954). *The gift : forms and functions of exchange in archaic societies*. London: Routledge. translated by Ian Cunnison ; with an introduction by E. E. Evans-Pritchard.
- McCann, I. L., & Pearlman, L. A. (1990). Vicarious traumatization: A framework for understanding the psychological effects of working with victims. *Journal of Traumatic Stress*, 3(1), 131-149.
- Mete, B., Tanır, F., Demirhindi, H., İnaltekin, A., & Kanat, C. (2022). Impact of the COVID-19 Pandemic on Frailty in Older Adults. *European Journal of Geriatrics and Gerontology*, 4(2), 79-84. <https://doi.org/10.4274/ejgg.galenos.2022.2021-11-1>
- Min, S., Zhang, X., & Li, G. (2020). A snapshot of food supply chain in Wuhan under the COVID-19 pandemic. *China Agricultural Economic Review*, 12(4), 689-704.
- Molm, L. D. (1997). *Coercive power in social exchange*. Cambridge, UK ; New York, NY, USA : Cambridge University Press.
- Molm, L. D., Takahashi, N., & Peterson, G. (2000). Risk and trust in social exchange: An experimental test of a classical proposition. *American journal of sociology*, 105(5), 1396-1427.
- Molm, L. D., Collett, J. L., & Schaefer, D. R. (2007). Building solidarity through generalized exchange: A theory of reciprocity. *American journal of sociology*, 113(1), 205-242.
- Ostrom, E., & Ahn, T. K. (2009). The meaning of social capital and its link to collective action. *Handbook of social capital: The troika of sociology, political science and economics*, 17-35. <http://ndl.ethernet.edu.et/bitstream/123456789/17556/1/12.pdf.pdf>
- Pan, A., Liu, L., Wang, C., Guo, H., Hao, X., Wang, Q., ... & Wu, T. (2020). Association of public health interventions with the epidemiology of the COVID-19 outbreak in Wuhan, China. *Jama*, 323(19), 1915-1923.
- Panigrahi, Mahima & Pattnaik, Jigyansa & Padhy, Susanta & Menon, Vikas & Patra, Suravi & Rina, Kumari & Padhy, Subhansu & Patro,

- Binod. (2021). COVID-19 and suicides in India: A pilot study of reports in the media and scientific literature. *Asian Journal of Psychiatry*, 57, 102560. 10.1016/j.ajp.2021.102560.
- Peary, B. D., Shaw, R., & Takeuchi, Y. (2012). Utilization of social media in the east Japan earthquake and tsunami and its effectiveness. *Journal of Natural Disaster Science*, 34(1), 3-18.
- Portes, A. (2000). Social Capital: Its Origins and Applications in Modern. *Knowledge and Social Capital: Foundations and Applications*, 43.
- Putnam, R. D. (1993). The prosperous community. *The american prospect*, 4(13), 35-42.
- Putnam, R. D., Nanetti, R. Y., & Leonardi, R. (1994). Making democracy work: Civic traditions in modern Italy.
- Putnam, R. D. (2000). Bowling alone : the collapse and revival of American community.
- Serenko, A., & Bontis, N. (2016). Negotiate, reciprocate, or cooperate? The impact of exchange modes on inter-employee knowledge sharing. *Journal of Knowledge Management*, 20(4), 687-712.
- Shibutani, T. (1986). *Social Processes. An Introduction to Sociology*. University of California Press.
- Shigemura, J., Ursano, R. J., Morganstein, J. C., Kurosawa, M., & Benedek, D. M. (2020). Public responses to the novel 2019 coronavirus (2019 - nCoV) in Japan: Mental health consequences and target populations. *Psychiatry and clinical neurosciences*, 74(4), 281.
- Sim, K., Chua, H. C. (2004). The psychological impact of SARS: A matter of heart and mind. *Canadian Medical Association Journal*, 170(5), 811-812.
- Simon, T., Goldberg, A., & Adini, B. (2015). Socializing in emergencies—A review of the use of social media in emergency situations. *International journal of information management*, 35(5), 609-619.
- Six, B., Van Zimmeren, E., Popa, F., & Frison, C. (2015). Trust and social capital in the design and evolution of institutions for collective action. *International Journal of the Commons*, 9(1).
- Solnit, R. (2009). *A paradise built in hell: The extraordinary communities that arise in disaster*. Penguin. New York : Viking.
- Tagliacozzo, S. (2018). Government agency communication during postdisaster reconstruction: Insights from the Christchurch earthquakes recovery. *Natural Hazards Review*, 19(2), 04018001.
- Takahashi, N. (2000). The emergence of generalized exchange. *American journal of sociology*, 105(4), 1105-1134.
- Thibaut, John W., & Kelley, Harold H. (1986). *The social psychology of groups*. New Brunswick, U.S.A. : Transaction Books, c1986.
- Tian, H., Liu, Y., Li, Y., Wu, C. H., Chen, B., Kraemer, M. U., ... & Dye, C. (2020). An investigation of transmission control measures during the first 50 days of the COVID-19 epidemic in China. *Science*, 368(6491), 638-642.
- Tierney, K. (2003). Disaster beliefs and institutional interests: Recycling disaster myths in the aftermath of 9-11. In *Terrorism and disaster: New threats, new ideas* (pp. 33-51). Emerald Group Publishing Limited.
- Titmuss, R. M. (2018). *The gift relationship: From human blood to social policy*. Policy Press.
- Tobias, A. (2020). Evaluation of the lockdowns for the SARS-CoV-2 epidemic in Italy and Spain after one month follow up. *Science of the Total Environment*, 725, 138539.
- Torre, D., & Xu, Q. (2020). Digital payments in China: adoption and interactions among applications. *Revue d'économie industrielle*, (172), 55-82.
- Turner, Jonathan H. (1978). *The structure of sociological theory*. Homewood, Ill. : Dorsey Press.
- Turner, Jonathan H. (1986). *The structure of sociological theory*. Chicago, Ill. : Dorsey Press.
- Uehara, E. (1990). Dual exchange theory, social networks, and informal social support. *American Journal of Sociology*, 96(3), 521-557.
- Wu, C. (2021). Social capital and COVID-19: a multidimensional and multilevel approach. *Chinese Sociological Review*, 53(1), 27-54.
- Yang, Z., Zeng, Z., Wang, K., Wong, S. S., Liang, W., Zanin, M., ... & He, J. (2020). Modified SEIR and AI prediction of the epidemics trend of COVID-19 in China under public health interventions. *Journal of thoracic disease*, 12(3), 165.
- Yates, D., & Paquette, S. (2011). Emergency knowledge management and social media technologies: A case study of the 2010 Haitian earthquake. *International journal of information management*, 31(1), 6-13.
- Zhang, S. X., Wang, Y., Rauch, A., & Wei, F. (2020). Unprecedented disruption of lives and work: Health, distress and life satisfaction of working adults in China one month into the COVID-19 outbreak. *Psychiatry research*, 288, 112958.
- Zhou, Y., & Dong, C. (2023). Nourishing social solidarity in exchanging gifts: a study on social exchange in Shanghai communities during COVID-19 lockdown. *Humanities and Social Sciences Communications*, 10(1), 1-11.

ウェブサイト：

- 中国政府網 衛生応急辦公室 http://www.nhc.gov.cn/yjb/pzhgli/new_list.shtml (2020年3月21日アクセス)
- 厚生労働省：新型コロナウイルス感染症について。 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html (2020年5月30日アクセス)
- 内閣府 (2003) 『平成15年版防災白書』 <https://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h15/bousai2003/html/honmon/hm130300.html> (2020年5月30日アクセス)
- 中国政府衛生辦法 http://www.nhc.gov.cn/yjb/pzhgli/new_list.shtml (2020年5月30日アクセス)
- 中国統計局 <https://data.stats.gov.cn/easyquery.htm?cn=E0105> (2020年7月6日アクセス)
- 武漢市衛生健康委員会ホームページ (2020) http://wjw.wuhan.gov.cn/ztzl_28/fk/flfg/ (2020年7月6日アクセス)
- Reuters COVID-19 Tracker <https://graphics.reuters.com/world-coronavirus-tracker-and-maps/ja/> (2020年7月26日アクセス)
- 新京報ホームページ <https://www.bjnews.com.cn/> (2021年1月26日アクセス)

- 腎臓疾病数据网络（中国）<https://www.chinakidney.net/index.php/data.html>（2021年10月23日アクセス）
- 国際連合児童基金ホームページ<https://www.unicef.org/press-releases/least-1-7-children-and-young-people-has-lived-under-stay-home-policies-most-last>（2021年11月9日アクセス）
- 『科技日報』新冠易感人群該如何有效防 http://digitalpaper.stdaily.com/http_www.kjrb.com/kjrb/html/2021-01/08/content_460674.htm?div=-1（2021年12月5日アクセス）
- Centers for Disease Control and Prevention <https://www.cdc.gov/>（2021年12月5日アクセス）
- 「平成の災害史を振り返って ～「災害弱者」の発見～」NHK 福祉情報サイトハートネット <https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/222/>（2021年12月6日アクセス）
- 人民網日本語版 <http://j.people.com.cn/n3/2020/0203/c94475-9653670.html>（2021年12月6日アクセス）
- 武漢市人民政府ホームページ『経歴 2020 年戦疫，市人大定的這 3 件事辨得怎麼樣了』http://www.wuhan.gov.cn/sy/whyw/202101/t20210128_1619448.shtml（2021年12月13日アクセス）
- 「感染症流行期にこころの健康を保つために」シリーズの紹介 https://www.jrc.or.jp/saigai/news/200327_006138.html（2021年12月15日アクセス）
- 総合-中国数据-中商産業研究院数据库-中商情報網 <https://s.askci.com/data/year/a0b/>（2021年12月16日アクセス）
- 日本貿易振興機構 <https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2021/5855fc114b3855f3.html>（2021年12月16日アクセス）
- 界面新聞 2020 关闭 58 天, 汉口火车站进行全面消杀 https://www.jiemian.com/article/4148661_qq.html（2021年12月16日アクセス）
- 湖北日報荆楚網 2020 武汉全城大消杀：每天消杀两次，不留一处死角 http://news.cnhubei.com/content/2020-04/14/content_12958492.html（2021年12月16日アクセス）
- BUSINESS LEADER SSQUARE wisdom <https://wisdom.nec.com/ja/series/tanaka/2021012701/index.html>（2021年12月26日アクセス）
- 湖北省統計局 http://tjj.hubei.gov.cn/tjsj/tjgb/pcgb/qrp/202105/t20210525_3559343.shtml（2021年12月26日アクセス）
- 東京都福祉保健局 <https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/iryo/kyuukyuu/saigai/triage.html>（2021年12月26日アクセス）
- Slb nsk (2019) CC BY-SA 4.0 <https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/>, ウィキメディア・コモンズ経由で（2022年1月2日アクセス）
- CRESO (2024) 「WeChat (微信) モーメンツの成功事例：プロモーション成功の秘密に迫る」<https://creson.jp/media/wechat-moment-success-case-use/>（2024年7月28日アクセス）
- 国家市场监督管理总局 (2020) 《新型冠状病毒感染肺炎疫情防控期间查处哄抬价格违法行为的指导意见》<https://faolex.fao.org/docs/pdf/chn194429.pdf>（2024年10月28日アクセス）
- 新華社 (2022) 「单棵白菜售价近 80 元？市场监管部门：罚款 50 万元」http://www.news.cn/fortune/2022-03/27/c_1128506833.htm（2024年10月28日アクセス）
- 武漢市政府 (2020) 「高铁上的武汉」向十方驰骋打通东西畅通南北 https://www.wuhan.gov.cn/sy/whyw/202007/t20200706_1390241.shtml（2025年8月12日アクセス）
- 武漢市政府 (2020) 2019 年武汉市国民经济和社会发展统计公报 https://www.wuhan.gov.cn/zwgk/tzgg/202004/t20200414_999340.shtml（2025年8月12日アクセス）
- i CROSS BORDER JAPAN (2020) GLOBAL MARKETING BLOG 中国「WeChat ミニプログラム(小程序)」とは？～基本的な使い方・機能をご紹介～<https://www.icrossborderjapan.com/blog/archives/4678/>（2025年9月23日アクセス）
- 日経ビジネス (2021) <https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00081/050600185/>（2025年9月29日アクセス）
- 国連防災機関 (2020) United Nations Office for Disaster Risk Reduction. Terminology. <https://www.undrr.org/drr-glossary/terminology>（2025年10月27日アクセス）
- 浙江工人日報 (2022) 「疫情下的天价菜，见证了某些商家的黑心」https://epaper.zjgrrb.com/html/2022-03/28/content_2787149.htm?div=0（2025年10月28日アクセス）
- 澎湃新聞 (2020) 点点微光亦能照亮黑暗 一场救助武汉市留守宠物的接力仍在进行 https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_5897122（2025年12月3日アクセス）
- 澎湃新聞 (2022) 疫情期间暴增的团购群，后来怎样了？https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_20129039（2025年12月4日アクセス）
- 觀研天下 (2022) 中国社区团购行业发展趋势研究与未来投资分析报告（2022-2029 年）<https://www.chinabaogao.com/baogao/202201/569103.html>（2025年12月4日アクセス）
- 網經社電子商務研究センター (2022) 網經社：『2021 年度中国社区团購市場データ報告』發布 <https://www.100ec.cn/detail--6608043.html>（2025年12月4日アクセス）
- 中国第 7 回国勢調査 (2020) 国家統計局 <https://www.stats.gov.cn/sj/pcsj/rkpc/7rp/indexch.htm>（2025年12月13日アクセス）
- 武漢市硤口区人民政府ホームページ (2022) https://www.qiaokou.gov.cn/qkxw/tzgg/202006/t20200617_1380089.shtml（2025年12月27日アクセス）

謝辞

本稿を閉じるにあたり、これまで支えてくださったすべての方々に、心より感謝を申し上げます。

まず、取材に応じ、ご自身の経験を言葉にしてくださった対象者の皆さまに深く御礼申し上げます。皆さまの一言一言が、外からは触れにくい暗い時間の輪郭を描き出し、その中に確かにあった人間の光を私に見せてくれた。

指導教員の稲場先生には、節目ごとに励ましをいただき、この研究の意義と残しうる価値を繰り返し教えていただいた。日々の誠実で粘り強い姿勢そのものが、私にとって静かな道しるべであった。また、稲場先生、渥美先生、宮本先生、福田先生には、拙稿を丁寧に読み込んでいただき、要所を正すご指摘を賜った。おかげで本稿は少しずつ磨かれ、ようやく論文としての形を得ることができた。さらに、稲場・福田研究室の先輩・後輩の皆さんにも感謝したい。同じ机に向かい、支え合い、ときに笑い合いながら、一歩ずつ歩んだ時間は、私の確かな支えになっている。

稲場先生がかつて「博士を出たら、これほど真剣に話を聞いてくれる人はそう多くない」と言われた。その言葉は、何度も私の背中を押した。だからこそ、私はこの災厄を、過ぎ去る雲のように消してしまいたくなかった。力は微かでも、記述として残し、記憶として手渡していきたいと思った。四年かけて転びながら書き上げたこの論文には、身体に刻まれた痕も伴っている。それでも今、心の内側は満たされている。ここに記された重みが、私一人のものに留まらず、どこかで世界とつながっていくことを信じている。

さらに、両親は、尽きることのない愛情と支援を注いでくれた。海外に出たことのない両親が、人生をかけて私により広い空を見せてくれたことを、私は忘れない。愛する産ちゃんにもありがとうと言いたい。出会ってから今日まで、離れずに寄り添ってくれた。日本での六年間、互いを大切にし、励まし合いながら、晴耕雨読の日々を重ねてきた。私にとって、それが愛の形である。さらに、二匹の猫—酷酷と耶子にも感謝する。猫でありながら、感情の扱い方や、息が詰まりそうなときの自分の置き方を、言葉ではなく存在で教えてくれた。

最後に、私自身へ。ひとりで遠くへ行くと決めた勇気と、途中で自分に言い聞かせ続けた「諦めない」という言葉に感謝したい。泣き虫で、日本語もうまく話せなかった私が、いまは自分の足で立てるようになった。余計な消耗に沈まず、向き合い、解決していける力を信じられるようになった。

出会ってくれたすべての人へ、そして今の自分へ。願わくば、私たちがこの世界にやさしく扱われることを。

2026年2月12日 大阪府豊中市

致谢

在本文落笔之际，谨向所有给予我支持的人表示诚挚的谢意。

首先，我向接受采访并愿意将自身经历诉诸言语的受访者们表示深切的感谢。你们的一言一语，勾勒出了外界难以触及的那段幽暗时光的轮廓，并让我看到了在那其中确实存在着的人性之光。

在学术之路上，感谢我的导师稻场老师，他在每个重要时刻都给予我鼓励，并反复教导我这项研究的意义所在。他日常严谨、坚韧的工作态度，本身就是学生最静默而有力的榜样。此外，感谢渥美老师、宫本老师和福田老师，认真细读拙稿，给出了鞭辟入里的意见。得益于此，本文才得以一点一滴地打磨，最终初具雏形。还要感谢稻场・福田研究室的前辈和后辈们，我们并肩伏案，相互扶持，时而欢笑，一步一个脚印地走过了这段虽显稚嫩却也坚实的时光。

稻场老师曾说过：“拿到博士学位后，能如此认真倾听你说话的人就不多了。”这句话无数次在我身后推动着我前行。正因如此，我不愿让这场灾难如过眼云烟般消散。尽管我的力量微薄，但至少希望通过记述，将其作为记忆留存下来。我是如此愚钝，花了四年时间才跌跌撞撞的写下这篇论文，还伴随着身体留下的痕迹。然而此刻，我的内心充满了前所未有的充实感。我相信，这里所铭刻的分量将不再仅属于我一人，也属于这个世界。

在生活上，感谢我的父母给予了我无尽的关爱与支持。从未出过国的他们，倾尽一生，让我看到了更广阔的天空。感谢我最最亲爱的产产，我们相遇相爱，片刻未曾分离。在这异国他乡的六年里，彼此珍惜、相互砥砺，走过了晴耕雨读的岁月，这就是我所信仰的爱。还要对我的两只猫一醋醋和耶子说声谢谢。虽是猫，却教会了我做人的道理，告诉我如何处理情绪，以及在几近窒息的压力下安放自我。

最后，感谢我自己。感谢那个决定独自远行的勇气，以及在读博期间的每一句“别放弃”。曾经那个爱哭、日语说的磕磕绊绊的我，如今也成为能独当一面的大人。我变得不再内耗，时刻相信自己有解决一切的能力、和面对一切的力量。

向所有相遇的人，也向现在的自己致意。愿我们都能被这个世界温柔以待。

2026年2月12日 大阪府豊中市